

蝶の影

リア03

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

顔を見せない影と、世話焼きな蝶の話

目次

| | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|----|----|---|
| 拾貳 | 拾壹 | 拾 | 玖 | 捌 | 柒 | 陸 | 伍 | 肆 | 參 | 貳 | 壹 |
| 488 | 450 | 393 | 339 | 304 | 255 | 213 | 166 | 126 | 90 | 44 | 1 |

拾參

壺

滝のような雨が降っている。

全身に水が染み込み服が重くなるが、そんなことを気にしている余裕はない。

「兄さんー！」

少年は目の前で倒れる青年に必死で呼びかける。青年の着物は黒いはずなのに今は赤く染まっている。

「姉さん！姉さん！」

傍らには詰襟の上から白衣を着た少女が、少年と同じように倒れている女性に呼びかける。

倒れ伏す青年は傍らに倒れている女性に向かって手を伸ばす。それに応じるように女性も青年に手を伸ばした。

「……………カ……………ナエ」

「……………ち……………が……………さ」

伸ばした手は互いの指先が触れると同時に、力なく地に落ちた。

少年と少女の慟哭が、曇天の空に響き渡り、それを嘲笑うかのように雲の隙間から光が漏れた。

鬼

それは人の姿をして人を喰らう怪物。

その肉体は強靱であり、あらゆる負傷がすぐに完治する。頭を潰そうが心臓を吹き飛ばそうが鬼は死なない。

しかし強力な生き物にはそれ相応の弱点がある。

鬼は、日光に弱い。日の光に当たるとたちまち消滅してしまう。

また、特殊な鋼でできた刀、日輪刀によって頸を落とすことでも消滅させることがで

きる。

そしてこの日輪刀を携え、鬼から人々を守る部隊を『鬼殺隊』と云う。

「遠夜」

凜とした声が響く。

声のした方向を振り返ると、蝶の髪飾りをした詰襟の女性が立っていた。遠夜と呼ばれた青年はその女性の『表情ではなく気配』からどこことなく不機嫌であることを読み取る。

「なんか用か？しのぶ」

しのぶと呼ばれた女性はその言葉を聴くと、眉間にしわを寄せた。青年の言葉が気に食わなかったのだろう。

そしてそれを青年は敏感に感じ取ったが、皮肉げに口元を歪めるだけだった。

「柱合会議が明日あるのよ。知ってるでしょ?」

「ああ」

「明日はちゃんと会議に出るんでしょうね」

「気が向いたらな」

その言葉にしのはさらにしわを深くする。

「いい遠夜、あなたは鬼殺隊最高戦力の『柱』なのよ? その柱が会議にも参加しないじゃ他の隊員に示しがつかないじゃない!」

「いや知らんわ。あの会議、毎回同じことしかないからつまらねーんだよ。御館様からなんか重要な知らせがあるならともかく、ないなら行く意味ねーだろ」

「あ・な・た・は本当に……!」

「くくつ……おいおいどうした? いつもこの口調がなくなってるぞ?」

煽るようなその言葉にしのは怒りが沸点に達し、全力の速度で目の部分に藍色の手拭いを巻いた青年の顔を殴りつける。

だが

「相変わらず血の気が多いな」

その拳は空を切った。

先ほどまで目の前にいたはずの青年は既にしのぶの背後を取っていた。そして手をしのぶの頭に置き、言った。

「やっぱその方がお前らしいぜ」

しのぶが振り返ると、そこに既に青年の姿は無かった。

「……………風来坊。たまには帰ってきなさいよ」

不機嫌そうなしのぶの声を聞く者は誰もいない。

「しのぶの奴、動き速くなったなあ」

屋根の上を走りながら青年はそう呟く。

「そろそろ会議でないと他の柱からめつちや言われそうだなあ。特に伊黒あたりがいい反応してくれそうだ」

そう言いながら青年は路地裏に着地する。

だがその瞬間走ってきた子供が青年にぶつかりそうになった。

「あつ」

子供は追いかけてつこをしていたため後ろから追つてきている子供の方に気を取られて前を見ていなかった。加えて青年が着地した時一切音がしなかったため、急に目の前に現れた青年に気づかなかつた。

ぶつかると子供は思ったが、青年はそれをふわりと受け止める。

「わつ」

「元気がいいな。だがここは物が多くて追いかけてつこするには向かねえぞ。やるならもっと広いところでやりな」

そう言いながら青年は子供を下ろす。追つてきた子供はその一連の動きを見てきらきらした瞳を青年に向ける。

「さ、続きはあつちでやんな」

そう言つて子供を床に下ろし、青年は歩きだした。

「ありがとう！手拭いのお兄ちゃん！」

「おー」

手を振つて走つていく子供達に軽く手を振つて青年は歩いて行つた。

「平和だねえ、全く」

子供達が走つていったのとは逆方向に歩きながら目元を藍色の手拭いで塞いだ無地

の紫の羽織を纏った青年——無道遠夜は一人そう呟いた。

無道遠夜はよく笑う少年だった。

元気で、よく笑い、時々悪戯をするような、視覚を覆った手拭い以外はどこにでもいるような男の子。それが私の最初の印象だった。

私が遠夜と初めて会ったのは、鬼殺隊に入隊して間もない頃だ。姉であるカナエと共に任務を行なった彼の兄の屋敷に招待された時に出会った。当時彼はまだ鬼殺隊に入隊しておらず、兄に修行をつけてもらっている段階であり、手拭いを四六時中眼に巻いて視覚を封じていた。詳しい修行内容は知らないが、どうも彼の兄が遠夜に継承しようとしている呼吸は他の呼吸とは違いだいぶ異質であるらしい。故に修行期間は長く、既に五年ほど修行を行なっているらしい。

遠夜はお世辞にも素直な子ではなく、よく勝手なことをしては怒られていたが、それでも毎日笑う快活な少年だった。二つほど年上だが、あまり年上らしくなく屋敷の人にはよく怒られていたし、私が注意してもほとんど話を聞かなかった。

だが頼まれた家事などはきつちり行うし、読み書きの勉強もちゃんとやっていたため嫌われてはいなかった。寧ろ好かれていたと思う。ただ計算の勉強の時だけは必ず逃げ出して、そしてその屋敷の当主である遠夜のお兄さんに捕まっていた。

姉は彼の兄と行動を共にすることが多くなり、それに比例して私も彼と彼の兄と共に過ごす時間が長くなった。そして遠夜と話すことも多くなり、同時に彼の兄ともよく話をした。

彼の兄は遠夜とは違い非常に落ち着いた人だった。穏やかで、とても優しく、そして温かい人だった。姉のカナエとどこか似たような雰囲気がある人で、私は彼のことを本当の兄のように慕っていた。

そして当然遠夜も兄のことを慕っていた。鬼殺隊に入ったら兄のような剣士になりたい。そう笑顔を見せながら語っていた。

そんな日々が続き、遠夜はどうとう鬼殺隊に入隊した。その年の最終選別で生き残ったのは、遠夜だけだったらしい。

私は既に入隊していたため階級はいくつか上がっていたが、遠夜は最終選別を終えた

時点で私よりも強かった。当然といえば当然かもしれない。私は膂力が無くて鬼の頸を切れない。だから私よりも強い。

最初は嫌だった。いくら私よりも長い時間修行したとはいえ、私だって血反吐を吐く思いで修行したのだ。それなのに私のことをあつさり追い抜いていく遠夜に嫉妬してしまったこともあった。まだ幼かった私にはその感情をうまく処理することができなかったため、遠夜にきつく当たつたてしまうこともあった。本当はそんなことしたくないのに。でもどうしても抑えられなくて、当たつたてしまう。そんな自分が嫌だったが、姉と彼の兄が私にこう言ってくれた。

「人は自分と他人を比べてしまうものだけど、それでもしのぶはしのぶだよ。どんな形でも、君なりの戦い方、接し方がある。どうしてもどうすればいいかわからない時は、お姉さんか僕を頼ってくれていいんだよ」

「そうよしのぶ。お姉ちゃんと日永さんはいつでもしのぶの味方だからね」
「だからしのぶちゃん、遠夜のことを見限らないでね」

そう言つて姉は私を抱きしめ、彼の兄——日永さんは頭を撫でてくれた。日永さんの言葉は、よくわからなかった。遠夜が私を見限ることがあつても私が遠夜に見限られる状況じゃないのに。そう思った。

疑問はあつたが、善は急げということその日のうちに私は遠夜に謝つた。一切の偽

りをせず、私の心を包み隠さずに。

遠夜は黙って聞いていた。夜空に浮かぶ三日月を眺めながら。

そして私が話し終わると、私に顔を向けた。

その時の遠夜の顔は、今でも忘れない。

「そっか。『僕』は嫌われたわけじゃなかったんだね」

その時初めて遠夜の眼を見た。

普段のような笑顔。珍しく手拭いがないため目があらわになっっているから普段とは違うが、それでも普通の人がするような笑顔……普通の笑顔なのだが、なにかが違った。

決定的な『なにか』が。

前に眼は心を映す鏡だと日永さんが教えてくれた。だが、遠夜の眼は表情に対して酷く濁っていたように思えた。

その眼が私は少し怖かった。

普段の態度からは考えられないような眼をしていたから。

仲直りはできたが、その日から私は少しだけ遠夜が怖くなった。なんであんな眼を私に向けて来たのか、わからなかったから。

自分で考えてもわからないし、本人に聞くわけにもいかなかったから私は兄である日永さんに聞いた。なぜ遠夜の眼はあんなに濁っているのか。

日永さんは灰色の瞳を私に向けて話し始めた。

「カナエさんには言ったんだけど、実は遠夜は僕の本当の弟じゃないんだ。縄に縛り付けられて捨てられていた孤児の遠夜を僕が保護したんだ。それに遠夜という名前も本当の名前じゃなくてね。本名は頑なに名乗ろうとしなかったから僕の父さんが名付けた」

「日永さんの……お父さん？」

「うん。僕の父さんは鬼殺隊とはあまり関係ない一般人だけど、僕が事情を話したら快く受け入れてくれた」

「そのお父さんはどちらに？」

「元々父さんは藤の紋の家だね。今はそっちにいる。時々会ってるよ」

「そうなんですネ」

「どういう経緯で遠夜が捨てられたのかはわからない。話そうとしないんだ。でも『絶対に帰りたくない』って言うから受け入れたんだ」

そう語る日永さんの眼は悲しそうな光を宿していた。

「遠夜は、賢い子だよ。計算だけはてんでダメだけど、他の事は理解力が高くて頭の回転が早いから教えたらずくに理解する。でも心はとても冷たい。人を信じることができないうんだと思う。そしてそれが世間的には異質であることを多分理解しているんじゃない」

ないかな。だから普段は万人受けするような快活な少年を演じている。その方が、きつと遠夜にとつても楽なのかもしれないね」

日永さんはそこで言葉を切ると空を見上げた。

「遠夜が僕のことを慕ってくれて、『僕みたいな剣士になりたい』っていう言葉は嘘じゃないと思う。でも、本心でもない。誰にも本心を見せないんだ」

「……………」

「多分、それに気付いているのは僕くらいだろうね。今後気付く人がいるかもしれないけど、それでも見限らない人が遠夜には必要だと思っんだ」

あの時の言葉はそういう意味だったのか、とこの時納得した。だが同時に疑問も生まれたため、それを口にした。

「でもそれは……………私に言うことなのですか？」

私のような怒りっぽい人では、遠夜の心を解かすことはできないのではないだろうか。私は怒りっぽくて、まだまだ未熟な子供だ。閉ざされた心を開くことができるかは、思えなかった。

しかしそれを聞いた日永さんは笑いながら私に灰色の瞳を向けた。盲人であるこの人に私の姿は見えていないはずなのに、心の奥まで見られたような気がした。

「しのぶちゃんみたいにしつこく色々言ってくれて、優しい子が遠夜には必要だと僕は

思うな」

そう言つて日永はしのぶの頭を撫でた。

「……僕たち鬼殺隊は、いつ死んでもおかしくない。そういう環境下にいる。だから僕が死んだ時に遠夜のことを見てくれていている人がいないと、遠夜は独りぼっちになつてしまふ。カナエさんにも頼んであるけど、もしもの時があつたら……」

遠夜をよろしくね

そう言う日永さんの目は、酷く悲しげだった。

そして時が経ち、姉さんは柱へと至つた。その頃には蝶屋敷で住む子も増えていた。日永さんは既に柱であり、柱の中でも悲鳴嶼さんを越すほどの実力を持つていた。盲人であつたが、剣術、体術どちらにおいても天才だったのだろう。そんな兄を追うように遠夜も実力をつけていき、とうとう私と同じ階級にまで登り詰めた。悔しかつたが、

遠夜なりに努力した結果だ。素直に認めることにしたが、負けたくないで私もさらに努力と実績を重ねた。

私と遠夜の階級が『甲』……上から二番目になったあたりだろうか。姉さんと日永さんは付き合うようになった。私としては素直に嬉しかった。前から日永さんのことを目で追っていたし、日永さんと共に任務に行く時は見られることが無いのにいつもより身なりに気を使っていた。加えて日永さんのことを話している時の姉の顔はすごく輝いていたからだ。いつから想いを寄せていたかは覚えていないが、それでもそれなりの期間伝えずにいたようだから姉さんからの報告を聞いた時は本当に心の底から祝福できた。

対して日永さんはそういうことには疎くて、自己評価が低い。だから姉さんのような美人が自分のことを好きになるはずがないと考えていたらしい。感情の機微に鋭い日永さんだが、自分の周囲にそのような感情を抱く人が居なかったため、それがどういう感情なのかわからなかったと恥ずかしそうに頭をかきながら言っていた。

そんな日永さんがおかしくて笑ってしまった。だって、私の中では日永さんは完璧超人だったから。目が見えないのに料理もできるしごく物知りだし、読み書きや計算だってできる。加えて剣術は天才。完璧としか言えないようなところしか知らなかった。でも日永さんにも苦手なものがあつて、わからないこともある。姉さんの話だと裁

縫だけはダメで一度やってみたら手を包帯だらけにしてしまったらしい。その話を聞いて私は姉さんの思い人の意外な一面を知ることができて嬉しかった。

遠夜も祝福していた……と思う。あれ以来遠夜の目を見ていないから本心かはわからない。手拭いで塞いでるから見えないというのもあるが、そもそも遠夜の目を見たところで本心かはわからない。

それからというもの、日永さんはよく蝶屋敷に遊びにきてくれた。無論姉さんに会いに来ているのだが、私ともよく話してくれた。さらにはこの前姉さんと助けた子、カナヲとも話してくれた。カナヲは感情が壊れているため自分からはなにも話さないが、それでも日永さんは一切不快な顔もせず楽しそうに話していた。

遠夜も蝶屋敷に来るようになった。任務の帰りは一人できていたが、休日は日永さんと共にきてくれた。相変わらずなにを考えているのかよくわからないけど、それでも嫌な態度はしない。顔に出やすい日永さんや姉さんとは真逆で全く表情に出ない。笑顔を作っているが、それもやはりいつもの貼り付けた笑顔。目を塞いでるのも相まって本当になに考えてるのかわからない。

遠夜をよろしくね

そう言われたけど、私がいなくてもきつと姉さんと日永さんが遠夜の心も解かしてくれるのだろう。なんならカナヲのことも日永さんがどうにかしてしまえばいい。そんな風に思っていた。

でも私は今の楽しい時間に身を置きすぎて忘れていた。

人というのは、いつかなくなるのだということ。

そして私達のいる環境は、本当にそれがなんの前触れもなくあつさりと訪れてしまうことを。

ある日屋敷に日永さんがやってきた。なにやら落ち着かない様子でいたが、姉さんの顔を見てなんとなく察した。

そして日永さんと姉さんが婚約したことが日永さんの口から私と遠夜、そしてカナヲに伝えられた。私達は手放して祝福した。みんなそうなることを望んでいた……とうかさつさと結婚しろとまで思っていた。それくらい二人でいる時の空間は新婚そのものと言っていていくらい桃色な空間だったのだから。遠夜はなにも感じてない……と

いがかわかってない様子だったが、私は五分もしないうちに砂糖を吐き出しそうな気持ちになった。でも姉さんが幸せそうだから良しとした。

……それでも「私がないとこでやって」くらい言ってもバチは当たらないわよね？

でもそんな幸せな時間は長く続かなかった。

姉さんと日永さんの婚約の知らせから一週間後

二人は上弦の式の鬼に殺された。

その日から遠夜は変わった。今までの快活な性格ではなくなり、皮肉屋で現実主義な

性格になった。以前のような快活さは一切ない。もしかしたらこれが遠夜の元々の性格なのかもしれない。

私は私で変わったと言われる。当たり前だと思う。基本的に私は怒りっぽくてほとんど笑顔を見せない……らしい。でもその日から私は姉さんが好きだと言っていた笑顔を貼りつけて過ごすようになり、口調も姉さんの真似をするようになった。姉さんの……姉さんと曰永さんが抱いていた『鬼と仲良く』という願いを胸に抱いて。

そんな私を見て遠夜はこう言った。

「なんだ、カナエの真似か？『俺』と逆だな。それに……随分とつまらない『顔』になった」

そう言って今までの遠夜では考えられないほど歪んだ笑みを私に向けた。

そして今、私達は柱へと至ったが、未だに二人の喪失から抜け出せずにいる。

私は仮面を被り続け、遠夜は一人彷徨い歩く。

産屋敷亭

中庭

「おい胡蝶、今回はあいつ来るんだろなあ」

「傷だらけで目を血走らせた白髪の男が庭の落ち着いた雰囲気とは合わないほどの殺気を放つ。」

「私に言われましても……来るように釘は刺しました。実際に来るかどうかは本人次第かと」

華やかな羽織を着た小柄な女性……胡蝶しのぶがそう答える。

「あいつの手綱握れるのはお前くらいだろうが」

「……………本当に握れてたら毎回連れてきてますよ」

しのぶはそう言って遠い目をした。

「……………そうだな」

不服ながらも男……風柱・不死川実弥はその言葉に納得した。

「うむ！自由なのはいいことだが、些か無道は勝手が過ぎるな！それが奴の強みとも言えるが！」

炎のような髪をした男……炎柱・煉獄杏寿郎が無駄に声を大にして言う。

「実力はあるんだがなあ。この前も下弦の鬼と派手に斬り結んで無傷で帰ってきたくらいだ」

非常に派手な風貌に身を包んだ男……音柱・宇髄天元が腕を組みながらそうこぼす。

「先代影柱とは真逆な性格……だが、彼もまた紛う事なき柱である。南無阿弥陀仏」

岩のような肉体をした巨漢……岩柱・悲鳴嶼行冥が手を合わせながら念仏を唱える。

「いいや、俺は認めない。あいつには柱としての自覚が無さすぎる。義務である柱合会議にすら来ないような奴はさっさと降格処分にもしてしまえばいい」

松の上に座った男……蛇柱・伊黒小芭内が蛇のようにネチネチとした口調で毒を吐く。

「……僕は別にどうでもいいかな。たまに剣の相手してくれればそれで」

色白で長髪、さらに周囲と比べたらだいぶ若い少年……霞柱・時透無一郎は興味なげに空を見上げる。

（無道さん……自由奔放ね！素敵！）

桃色の髪をした女性……甘露寺蜜璃はあまりにも場違いな思考を巡らせる。

「……………」

そして珍しいデザインの羽織を着た青年……水柱・富岡義勇はなにも言わない。

各々が遠夜への印象をこぼしている中、一つの影が屋敷の庭に入ってくる。

「おや皆さん、早いね。まだ会議が始まるまで時間あるのに」

入ってきたのは影柱・無道遠夜だった。

「うむ！今回は来たようだな無道！今回も来ないのかと思って心配していたところだ
！」

「へえ、そいつはありがたい。こんな形ばかりの柱でも心配してくれるつてのか」

「誰がお前のような奴を心配するか。お前、御館様に柱に認められたからって何をして
もいいと思つているようだが、そんなことはない。柱に認められたからにはそれ相応の
責任を持つことになる。お前が勝手なことをして俺たちまで同類だと思われるのは耐
えられん」

「まー皆さんが俺を認める認めないは自由ですよ。俺としても柱になるような器でもな
いし、なつたらなつたで勝手にやるよつて御館様に言ったのに柱にさせられちゃつたん
だから」

「お前がどう言おうが関係ねえよ。御館様が柱として認めた以上、お前はその荣誉に恥

じない動きをするのは当たり前だろうが」

「皆さんがどうかは知りませんが、俺は別にそこまで大きな恩はないですよねえ。鬼殺隊に入れてもらって、そこでそれなりの恩はありますけど、そこら辺は実践で帳消しにならないかなあって」

「てめえ……」

不死川は遠夜の言葉に本気の殺気を放ちながら腰にある日輪刀に手をかける。不死川だけでなく柱は皆御館様……産屋敷輝哉を心から尊敬している。そのため産屋敷のことを悪く言う、または不躰な態度を取る人間を許さない。故に遠夜のこの態度は柱全員の逆鱗に触れかねない言動だった。

「いやいや、落ち着いてよ不死川さん。今の言い方だと俺が全く御館様のことでもいいみたいない方に聞こえるかも知れないけど、ちゃんと俺だって御館様のこと尊敬してるんだよ？ただ貴方達と比べたら尊敬の度合いが低いつてだけだよ。実際御館様のしてきたことはすごい。鬼殺隊という政府非公認の組織これまでずっと維持してきたんだ。廃刀令が出ているのに刀を携えている組織なんて政府に潰されてもおかしくないのに、それをうまく隠して運営してきたんだ。誰にでもできることじゃない。あの人だからできることだ」

「それが分かっているなら……」

「でも俺は貴方達と違って個人的に御館様に救われたことはない。だから貴方達と比べて尊敬の度合いが低いのは仕方ないでしょう。貴方達がどう思うのかは自由ですけど、それを俺に押し付けないでいただきたいです」

手拭いで目が塞がれているため感情は読めないが、その言葉が不死川の理性を飛ばし日輪刀を引き抜き遠夜に切り掛かった。

「やれやれ……」

そう呟くと遠夜はゆったりとした動きで不死川の動きをかわす。この程度の速度で回避は本来なら無意味。なぜなら柱は全員腕が立つ。この程度の速度の標的を斬れないうようなら鬼を倒すなど夢のまた夢であるからだ。

だが不死川の日輪刀は遠夜の目の前を素通りする。

(こいつー)

不死川は構わず日輪刀を振り続ける。だがそれらを全て遠夜は回避し続ける。不死川の剣は遅くない。むしろ柱に上り詰めるほどなのでかなり早い方だろう。それを剣も抜かずに回避し続けるのがどれほどのことなのかは、言うまでもない。

無論不死川も本気ではない。鬼相手ならともかく、人間相手であるため無意識ながら手加減はしている。だからこそ遠夜がここまで回避できている。本気の数度ならば刀無しで回避できるほど甘いものではない。

「こんのっ」

苛つきでほんの僅かに甘くなった斬撃を回避するとカウンターを放つ要領で拳を傷だらけの顔に放とうとするが

その拳と不死川の刀は止められた。

遠夜の拳は宇髄に、不死川は悲鳴嶼に止められていた。

「そこまでだ。柱合会議前にやるには些か派手すぎるぜ」

「もうすぐ御館様がいらっしやる。そこまでにしておけ」

「おおっと、こいつは失礼」

「……チツ」

不死川はいかにも不服といった様子だが、最年長である悲鳴嶼に言われて素直に刀を収める。遠夜も特別戦いたいわけではないため拳を収める。

「もう、もう少し協調性というものをつけようとは思わないのですか？ それについては幼い頃の貴方の方ができていましたよ」

「かもな」

「……………」

しのぶの善意からくる言葉も聞いてはいるが、聞き入れてはいない様子だった。そんな遠夜の態度にしのは笑顔のまま額に青筋を立てる。

「やあ、私のかわいい剣士達^{子供}。今日はいいい天気だね。空は青いのかな」

険悪になりそうな雰囲気の中、非常に落ち着いていて、さらにこちらも落ち着くような声が響く。その声が聞こえた瞬間、全員が跳き頭を下げる。その男は顔の上半分が痣のようなもので覆われており、傍らには少女が付き添っている。

産屋敷輝哉。鬼殺隊のトップであり、屋敷の主人でもある男だ。

「半年に一度の柱合会議で人員が変わらないのは嬉しいことだ。そして遠夜、今回は参加してくれて嬉しいよ」

「どーも」

「御館様、些かこの男の行動は目に余ります。鬼は最低限殺しているようですが、それは通常の隊員でできることです。柱としての義務である柱合会議に出席しないどころか、担当警備区域を巡回もせずただぼんやりしているだけ。どうかこの男に然るべき処

罰を」

不死川が遠夜に向かつて殺気を放ちながら産屋敷にそう懇願する。だが殺気を向けられた遠夜は涼しげだった。

「実弥、君の言いたいことはわかる。確かに遠夜は柱合会議の参加率は良くない。警備区域を巡回していないのも確かだ」

「ならばー」

「でもね実弥、遠夜は会議に参加しなくてもちゃんと会議の内容は把握してるし、会議に参加しない時は必ず私に事情を説明して許可を取っている。警備区域については巡回はしていないが、遠夜の警備区域で犠牲者は出たことがない。巡回はしなくとも、遠夜は遠夜のやり方で住民を守っている。だからそんなに責めないであげてほしい」

「……………はーい」

「遠夜、仲良くしろとは言わないけど、最低限ちゃんと意思伝達はしようね。君はいつも意図的に大事なことを言わない癖がある。それはみんなの誤解を招いてしまうからね」

「善処しましょう」

正直、あまり反省の色は見られない。

頭を下げながらこれはまたやるな、としのぶは内心で顔をしかめわずかに額に青筋を立てる。

全員を見渡し、全員が今の話を理解したと感じた産屋敷は手を叩き

「じゃあ、今回の柱合会議を始めよう」

そう宣言して縁側に腰を下ろした。

*

「ああ、嫌な夜だなこれは」

遠夜は深夜に高台に一人座りながらそう呟く。遠夜の感じ取る気配の中に一つ、確実に人ではない気配がある。

人ではないが、気配の大きさは人と同じようなものだ。そうなると、もう選択肢は一

つかない。

「出て欲しくは、なかったな。なんか気分乗らないし」

そう言つて遠夜は高台から姿を消した。

「はあつ、はあつ、あうつ！」

走り続けた結果か、女性はずがもつれて転んでしまう。起き上がつて逃げようとしたが、目の前には川が流れていて逃げられない。普通なら川を泳いででも逃げようとするだろうが、生憎女性は泳いだことなど一度もない。加えて着物を着た状態では着物が邪魔をしてうまく泳ぐことなどできないだろう。

「あ……あ……」

後ろから迫る異形の存在。それに背中を切られて全力で逃げてきた。どういふものはわからないが、それが『人』ではないこと、そしてこのままでは自分は殺されるといふのがわかった。だからこそ彼女は逃げたのだ。

「おお？ 鬼ごっこは終わりか？ 本物の鬼である俺との鬼ごっこは楽しかったか？」

下卑た笑みを浮かべながら鬼は女性に近づくと。

「こいつは稀血かもなあ。匂いがどうも普通の奴とは違い。これを食べば……俺も晴れて十二鬼月になれるかもなあ」

鬼の言葉を何一つ理解できず、女性はさらに混乱する。もともと逃げられるような状態ではなかったが、完全に腰が抜けてしまい立つことすらできない。

もう終わりだ。

そう思ったところで鬼の背後から足音が聞こえてきた。

「随分と楽しそうだな。俺も混ぜてくれよ」

「ああ?」

鬼が振り返ると、そこには藍色の手拭いで目元を覆った黒髪短髪の青年がいた。

「なんだてめえ。邪魔すんじゃない。いまから俺はこの女を食うんだからよ」

「おおっと、いきなり犯罪宣言されちゃったよ。いたいけな婦女を食うだなんて強姦もいいところだ。お巡りさんこいつです」

そんな戯けたような言葉を言いながら浮かべる笑みは、どこか歪んでいる。そう、笑顔というよりは嘲笑に近い笑み。そう思えるようなものだった。

「ふざけてるのか? お前のその格好、鬼狩りだろう」

「なんだちゃんと話できるやつじゃん。てことはそれなりに人食ってるなお前」

(なんなんだ……?)

目の前の男からは殺気も感じないし腰に携えた刀を抜こうともしない。この鬼が今まで見てきた鬼殺隊の隊士は皆鬼を見ると刀を即座に抜いて切り掛かってきた。

なのにこの男はなにもしようとしないう。戦う意思すら見せようとしないうのだ。

(……まあいい。さっさと女を殺してついでにこいつも食ってしまおう)

そう考えたところで女性の方に顔を向けた。

するとそこに既に女性はいなかった。

「なに☒」

「お探したのはこの女性かな?」

声が出した方を見ると、そこには先ほどの手拭いの青年が襲っていた女性を抱き抱えている姿があった。

「せつかくの獲物をこんなに簡単に取られるなんて……おたく本当に鬼か? 感覚は人よりも鋭いんじゃないか? え?」

(早い! しかも一切動いたのを気取らせないと☒こいつ、今までの隊士とは違うのか☒それにいちいち煽るような言動がカンに触る!)

「じゃあお姉さん、ちよいと下がっててもらえる？巻き添えになりたくないでしょ？」
「は、はい」

怯えながらも女性はそう答え、青年と鬼から距離を取る。

「ナメやがって……殺す！」

血鬼術・金剛血装

血鬼術を発動させ、鬼は腕、足、胴体、首に鎧のようなものを纏う。その鎧は血のような赤色でありながら、金剛石のような光沢と見た目をしていた。

「へえ、纏う形の血鬼術か。こいつは……硬そうだな。一般隊士じゃ斬れなさそう」

「俺の鎧はお前ら鬼狩りの刀も通さない！頸が斬れなきや鬼は殺せない！お前ごときに俺の鎧は斬れねえよ！」

そう言つて鬼は青年に殴りかかる。その拳を回避すると、鬼は勢い余つて地面を殴りつけることになった。そしてその殴りつけた地面は大きくえぐられ、消したんだ。

「へえ、その鎧……肉体強化もしてるのか」

「わかつたところでどうしよもねえよ！盲人のお前になにができる！」

そういつて体勢を立て直した鬼は青年の顔に殴りかかる。

だがその拳は流れるような所作で受け流された。

「なに☒」

「全く、血の気が多いな」

「クソがあー!」

鬼はやけになつて連続で拳を出し続ける。それらを青年は悉く受け流していくが、鬼と人間では肉体の格が違う。肉体の格比べなら確実に人間である青年が先に限界になる。

青年の受け流しが、鬼の拳に間に合わなくなつてきた。少しずつ鬼の拳が青年を上回つてきており、拳が顔の横を通り過ぎたことにより頬が浅く斬れたりしてきた。

「ハッ!」だー!

どうあがいても受け流しが間に合わないタイミングで拳を突き出す。咄嗟に青年は腕で防御を図るが、この拳は人がまともに受ければ胴体が吹き飛ぶほどの威力がある。防御した腕は粉々に砕け、それを貫通して青年の命を奪うこともできる。それほどの威力がある拳を防ごうとするなど本来なら愚の骨頂だろう。

だが青年は嗤つた。

『凝』

そう呟くとほぼ同時に鬼の拳と右腕が接触した。接触した瞬間青年は後ろに飛ばされたが、何事も無かつたかのように着地した。

「おーいて。ヒビは……入つてないな。いやーいい攻撃だったよ。腕が痺れるほどだつ

たわ」

(……馬鹿な。馬鹿な馬鹿な馬鹿な！なぜ俺の本気の拳を受けて無傷でいられる！攻撃の瞬間、後ろに飛んで衝撃を緩和したとはいえ、本来なら人間なんぞ吹き飛ばせる威力だぞ！無傷でいられるはずがない！)

「困惑してるな」

「っ！」

鬼の心中を感じ取った青年は嘲るように口元を歪める。

「ネタバラシをする気はない。お前の実力はもう底が知れた。敢えて隙を作って全力の攻撃をさせたのにな。どうやら十二鬼月の下弦ですらないようだし、さくつと殺して寝るわ」

そう言つて青年は刀を抜いた。刀は月明かりに照らされて深い藍色に輝いた。

「っっ!!!」

その瞬間、鬼は言い表せない悪寒に襲われた。

(な、なんだこれ……殺気？これほど強い殺気をあの全くなにも感じない状態から一気に?)

「ああ、全く。今日は嫌な日だ」

(……この感じは……恐怖？俺が恐怖を感じているのか☒そんなことあるのか☒今まで

そんなこと無かったのに☒)

「はぁーあ、今日はお前だけだと願うわ」

そういうと青年は息を深く吸い込み、集中力を最大まで持っていく。

(いや！錯覚だ！俺の鎧は硬い！今まで鬼狩りの刀を何本もへし折ってきた！大丈夫だ……大丈夫だ！)

手拭いで塞がれた顔が鬼に向けられる。

その顔は、影に塗りつぶされていてなにも見えなかった。

「っ!!!」

全身から冷や汗が噴き出す。鬼になってから冷や汗などかいたことなかった。

「全集中・影の呼吸、壺ノ型」

無間舞踊

「……………」

圧倒的威圧感はあるのに、なにもしてこない。ただゆつくりと歩いてきているだけ。なのに、なのに近づくと死ぬということが本能でわかる。

「ぐっ……………」

凄まじい圧。

足がすくむ。

勝てない。本能でわかる。

だが逃げることもできない。

「さあ、どうする？…逃げてもいいんだぞ？」

「こん……………のおー！」

血鬼術・金剛血装『最大硬化』

ばきばきと音を立てながら頸の周りの鎧が分厚くなり、さらには両腕の鎧を鋭く尖った形に変換させた。

「あああー！」

鬼はそのまま突っ込んできた。恐怖を振り払うように大声を出しながら走り出す。そして青年に飛びかかろうとしたところで、鬼は確かに聞いた。

「しかしつくづく運がないな。なりたくもない鬼にされて、今ここでよくわかんねー奴に斬られるんだから」

その言葉に鬼は目を見開く。

「次生まれてくる時は、こんな化け物にされないといいな」

鬼は鋭く尖った拳を振り下ろす。

それを青年は緩やかな動きで回避し、手に持つ刀で鬼の頸を落とそうとする。非常に緩慢な動きであるため鬼の視力でなくともその程度の動きは見える。見えているのに、それをみていることしかできない。

（なぜ……見えているのに……回避できない。だが！鬼狩りの刀でも俺の鎧は斬れない！）

数瞬後、その考えは間違いだったと気づく。

青年……遠夜の刀は鬼の頸を鎧ごと斬り裂いていた。

「な……あ……」

「確かにお前の鎧は硬いんだろうな。一般隊士じゃこれは斬れないわ。でもね、仮にも俺柱なんよ。その程度の硬度じゃ話にならんよ」

「お、俺の鎧の……最大硬度を……こないともたやすく？」

「もう少し人を食ってさらに硬度上げてたらこうはいかなかったかもなー。十二鬼月の上弦レベルだったら……って、もう聞こえてないか」

そう口にした時には鬼は消えていた。

藍色に輝く刀を収めると、襲われていた女性に顔を向ける。

「もう大丈夫すよ、鬼は始末したんで」

「あ、助けていただき、ありがとうございます……つう……」

お礼を述べるとともに女性は顔をしかめた。肩から背中にかけて爪で引つ搔かれたような傷がついている。恐らく先程の鬼にやられたのだろう。

「ちよつと見せてな……あー、思ったより傷深いな。手持ちの道具じゃ応急処置が限界だな。歩けますか？」

「えっ……と」

「んー、じゃあちよつと我慢してもらえますか？おぶりますんで」

そう言つて遠夜が連れてきたのは蝶屋敷だった。先に鏝鳥を飛ばしていたため話は通っている。遠夜は躊躇なく門の戸を叩く。

「へーい、さつき連絡した影柱です。怪我人いるんで開けてもらえますかー」
気の抜けた声でそう呼びかけると、門が開き中からしのぶが顔をだした。

「話は聞いています。そちらが怪我人の方ですね？」

「は、はい」

「応急処置はしてあるので、本格的な治療をします。遠夜、中の治療室に運んで」

「はいはい」

「お疲れ様」

怪我人の女性を治療室まで運んだ後、遠夜は一人縁側で空を眺めていた。

そして遠夜に声をかけながら人影が腰を下ろす。人影はしのぶだった。

「しのぶが治療しなくていいのか？」

「ええ。傷は深かったけど、命に別状はないし、それほど酷いものでもなかったのでアオイに任せました」

「そうかい」

「遠夜は負傷していませんか？」

「してねえよ」

「ならいいんですけど」

「なんだ、負傷した方がよかったか？」

「そんなわけないでしょう。負傷なんて、しない方がいいに決まっていますから」

「じゃあなんでそんな不満げなんだ」

「貴方は昔からよほど大きな傷でないとここで治療を受けようとしなないじゃないですか」

「そう言いながらしのぶはわずかに頬を膨らめます。

「自分でできる程度なら自分でどうにかするさ」

「あのね遠夜、できてないから言ってるのですよ？確かに貴方は日永さんや姉さんに治療の指導を受けていたから応急処置や大きくない傷の治療ならできています。ですが日永さんや姉さんと違って貴方の治療は全体的に荒いです。特に自身に施す施術は雑の一言に尽きるのですよ」

「別に今こうして回復しているからいいじゃねえか」

「確かに回復はしました。でもね、雑な治療は後に後遺症や傷跡が残ったりするのでですよ。その程度もわからないような甘い指導は受けていないはずですが」

「傷跡はともかく、後遺症が残らない程度にはやってる。無駄に時間かかるよりマシだ」

その言葉にしのぶは完全にキレてしまい、手拭いで覆われた遠夜の顔を小さい手で驚かす。所謂アイアンクローである。

「治療が無駄とは言ってくれますねえ。雑に治療して後遺症が残って戦線復帰できなくなってしまうようにするために心身共に費やしている私達がやっていることが無駄だって言いたいんですかそんなんですか？」

口調はいつもよりも怒りが込められており、手はさらに力が込められていく。恐らく表情はいつもどおり貼り付けた笑顔だろうが、額に浮かぶ青筋はいつも以上の数になっているだろう。

「私達が施している治療は全て必要なことだからやっているんですよ意味もなくやっている治療があるとでも思ったんですか計算以外では頭いい癖にこういうところでその頭は役に立たないんですかそれともこれは飾りなんですかならこんな頭いらぬんですよね今すぐ潰しましょうか」

「いや息継ぎしろよ。どうでもいいところで全集中・常中で鍛えた肺活量使うなやとかかそろそろ本気で痛いんだが」

未だに頭をギリギリとしのぶの手は締め上げており、頭蓋骨がミシ、ミシと嫌な音を立て始めている。

小柄とはいえ、しのぶも柱である。血の滲むような訓練を積んできたため、握力も同

年代の女性と比べるまでもなく強い。その握力が全て遠夜の頭蓋骨に向けられているのだ。痛くないはずがない。

「間違った知識を持つ大事なことには何も気づかないような頭いらないですよね」

「わかった、全面的に俺が悪いこともしらのぶ達がやっていることが無駄なことではないのも俺がポンコツだつてことも理解した。反省した。もう二度と無駄なんてことは言わないからこの手を離してくれ本気で頭蓋骨が嫌な音立て始めた」

「本当に理解しましたね」

「理解しました」

「……………次言ったら試作の毒飲んでもらいますからね」

そりや怖い、と眩きながら遠夜は肩を竦める。

暫し二人の間では沈黙が流れ、ふとしのぶは遠夜の横顔を見た。相変わらず手拭いで目を覆っているためいまいち表情が読めない。纏う雰囲気は変わらないが、昔と比べて身長は伸びたからか少し印象が変わったようにも思える。男性としては平均程度の身長だが、鬼の頸を切るだけの膂力のないしのぶは少し羨ましく思った。

と、そこで遠夜の頬に切り傷があるのを見つける。

「遠夜、頬に切り傷がありますよ」

「ん、ああ。このくらいならほつとも治る」

「雑菌が入ると化膿しますよ。軟膏を持ってくるのでここにいて下さい」

「いや、だから」

「いいですね」

「アツハイ」

膨れ上がった怒りの気配を察した遠夜は大人しく引き下がる。

「よろしい」

そういうとしのぶは自室に置いてある軟膏を取りに歩いて行った。

一人になった遠夜は朝日が登り始めた夜空の方に顔を向けた。

「やっぱお前そっちの方があつてるよ」

遠夜の眩きは朝日にかき消された。

早朝、人気のない道場に空を切る音が響く。

「はっ、はっ」

青年、遠夜は汗を流しながらひたすら素振りを繰り返す。木刀を振るたびに流れる汗が飛び散るのがわかる。

『たかが素振りと馬鹿にしてはいけない。素振りの一回一回で型を確認してちゃんと最後まで力が込められているかを確認するんだ。そうすればどんな時でも刀身全体に満遍なく力が込められる』

義兄である日永がそう言っていたのを思い出しながらひたすら素振りを繰り返す。

「ふっ」

最後に一層鋭い素振りをしたところで手を止め、木刀を見る。木刀は使い込まれており、柄の部分に彫り込まれた名前を眺める。

無道日永

義兄の名前が彫り込まれた木刀は傷だらけであり、厳しい訓練をしてきたことが容易に想像できるほどだった。

『僕自身は大したことないよ。確かに努力は積んだけど、だからつてすごいわけじゃない』

普段と違い手拭いに塞がれていない目でそう言っていた義兄の姿を思い出す。盲人でありながら柱にまで至り、さらには歴代の柱でも数少ない鬼の始祖である鬼舞辻無惨に接触できた男である義兄、無道日永。決して自らの実力におごることなくひたすら鍛錬を続けていた姿を見て遠夜は育った。

憧れはあった。だが同時に自らの内から聞こえる声が聞こえてくる。

『あれは天才だ。凡庸である自分ではどれだけ足掻いても辿り着くことはできない』

歴史の浅い影の呼吸の陸の型を作り上げただけあり、日永は天才であった。そんな日永ですら倒せなかった上弦の鬼。そんなものに自分は勝てるのだろうか。

「……………」

しのぶも同じように上弦の鬼への復讐心を募らせている。だが自分はしのぶほど深くその仇に怒ることはできるのだろうか。あそこまで身を粉にして没頭することはできるだろうか。

『僕自身は大したことないよ』

「……あんたがそれ言うんじゃねえよ」

目元に手拭いを巻きながら遠夜は道場を去っていった。

誰もいなくなつた道場に使い古した木刀が道場に転がっていた。

賑わう街中を遠夜は一人歩いていた。

街では多数の人が思い思いの時を過ごしている。客を呼び込もうと声を張る店員、子供の笑顔に顔を綻ばせる両親、意中の相手と幸せなひと時を過ごす若者と人それぞれだが、どの人も明るい感情が感じ取れる。昼間故に活気もあり、加えて鬼が出る心配もないため遠夜は気を抜きながら適当に歩みを進める。

「お」

なにかないかと歩いていると、大判焼きの出店があるのを見つめる。食べ歩きが趣味である遠夜はこれはいいと出店に近づいた。

出店の売り子をしていたのは恰幅の良い男だった。遠夜が近づくと豪快な笑いを向けながら話し始める。

「おう兄さん、一つどうだい」

「なかなか良い匂いだ。一つと言わずに……そうだな、五つもらおうじやねえか」

「そんなに買ってくれんのかい？ いいねえ、一つおまけしてやろうじやねえか」

「へえ、気前がいいな」

「そんなに買うってこたあ誰かに分けてやんだろ？ まさか兄さん一人で食う気じやあるめえ」

「察しがいいな。どうも近くに知り合いがいるみたいでな。そいつに分けてやろうかと」

「おおそうかい。しかし兄さん、見たところ目が見えねえんだろ？ お知り合いみつけれんのかい？」

「問題ねーよ」

「ふーん、そうかい。まあ大丈夫っていうならいいけどよ。氣いつけるよ？ こんな人通りの多い街中だ。スリやらひったくりも時々あるし、近頃は行方不明になる奴もいたりするらしいから」

大判焼きを紙袋に詰めながら店主はそう言う。最後の言葉に遠夜は僅かに眉を潜め

る。

「そいつは物騒だな。どのあたりで起こってんだ？」

もし鬼の仕業ならば早急に排除しなければならぬ。それが鬼殺隊の役割なのだから。

「なんでも隣町にいくまでの道で起こってらうかい？ こつちから向こうにいくまでの道で夜中に隣町まで行こうとした奴が次々と消えてんだと」

「逆もまたあるのか」

「おうよ。その道は今では気味悪がつてだーれも通ろうとしねえ。ちよつと面倒でも回り道していく奴ばつかだよ」

「へえ、怖いねえ。その道はどこだ？」

「この大通りを南に進めばあるよ。行くのは勧めねえぞ。街の外側、特にその道あたりはゴロツキも多いからな。ほれ、大判焼き」

「気をつけるよ。そつちには行かないようにしとく」

そう言いながら代金を店主に渡して遠夜は出店を去った。

先ほどの話を頭の中で整理しながら紙袋から大判焼きを一つ取り出して頬張った。

「へえ、こいつはうまいな」

生地と餡子の味が口に広がり、遠夜は素直な感想を口にする。もぐもぐと口を動か

ながら街中を歩く。そして遠夜の気配感知の中に知ってる気配が感知された。

「おう無道、派手に食べ歩きしてんな」

音柱、宇髓天元だった。後ろに続く気配は三つ。気配からは一般人ではないことがわかる。

「ビーも派手柱さん、後ろのは嫁さんですかい？」

「音柱な。おう、うちの嫁だ。まきを、雛鶴、須磨だ」

「へえ」

「天元さん、こちらの方は？」

「同僚の無道遠夜だ。俺と同じ柱だよ」

「へえ！天元さんと同じ柱なんですね！」

「この子……前に話してた影柱ですか？」

「そーそー。生意気なんだが、腕は立つしノリがいいんだ」

「はは、酷いな宇髓さん、俺生意気つすか。こんな従順な後輩なのにな？」

「そーいうとこだ無道。で、こんなとこでなにしてんだ？」

「食べ歩きつす」

「自由だな。任務で近くに来たとかじゃねえのか？」

「いえ別に。うちの屋敷が比較的ここ近いんで時々来るんすよ」

「へえ、近いのか。たしか蝶屋敷もここから近いよな」

「元々蝶屋敷もうちもカナエさんと兄さんのものですからね。お互い近い方が良かったんでしょね。色々と」

「あー……なるほど」

そこで宇髄は日永とカナエが恋仲であつたことを思い出した。

「あ、そうだ。大判焼き一つどすか？」

「そんなに買ったの？」

「ええ、皆さんの気配を感じたんでお裾分けしようかと」

「ええー！めっちゃいい子ー！」

「……………」

志摩が感嘆している中、宇髄は目を細めて遠夜を見た。

「……………なにが目的だ？」

「なーんだよ天元さん。なんにも企んでいないって」

そう言いながら遠夜は大判焼きの入った紙袋を宇髄に手渡した。その紙袋の中を見て宇髄は目を見開き苦笑いを浮かべた。

「ほい、これ。なかなかいけますよ？食べ過ぎる奴もいるくらいですから」

「……………ケツ、仕方ねえ。派手に乗ってやるよ、お前の策に」

「なんのことだか。 んじゃまた」

そう言つて遠夜は雑踏の中に消えていった。

「……天元さん、なんだつたんですか今の会話」

「ん？ ああいや……」

渡された紙袋の中から紙を取り出した。

「え、なんでですかこれ」

「あのやろう、この辺りが俺の担当警邏地区だからつて俺の仕事をわざわざ見つけてきてきやがつたんだよ」

その紙には簡易的な地図がかかれており、隣町への道の場所にバツ印がつけられていた。先ほど遠夜が店主に聞いた情報を簡単に書き記したのだ。

「……これ、鬼の情報ですか？」

「見たところ鬼かどうかの確認はねえみたいだな。だがまあなにかしらあるつてんなら鬼殺隊として行かない手はねえ」

そう言つて宇髄は紙を懐にしまった。

「お、この大判焼きうまいな」

「わあ、大判焼きなんて久々に食べましたよ。おいしい！」

「この餡子いいですね。私こし餡派なんで」

「わ、これくりいむって奴ですよ！最近話題のハイカラな食べ物屋で見ました！」

宇髓と別れた後、遠夜は食べ歩きを続けながら街を徘徊していた。

そうしていると日は完全に落ち、街は昼間ほどの賑やかさは無くなっていた。人通り

はまだまだあるが、昼と比べるとやはり少ない。

「……さて、夜になったしそろそろ動くか」

街中で最も高い建物の屋根に座り街中を眺めていた遠夜は一人そう呟くと立ち上がり、意識を集中させる。

「円」

自らに宿る『氣』を練り上げ、遠夜を中心に球体状に広げていく。遠夜の円の効果範囲に入ったものは須く遠夜に存在を認知される。

だが遠夜の目的となる『氣配』は感じられなかった。

「あれーいねえな。この街にいるのは確かなんだがなあ。うまく目眩してんのか？それとも郊外の方か？……これ以上範囲広げるとかあ、しんどいなあ」

そうぼやきながらさらに円の範囲を広げていく。

すると円で感知した中に二つほど人ではない気配を感じ取った。

「おっと、やつと見つけた。この人が……えーつと、そうそう珠世さんか。んで、隣が……名前なんだっけ。まーいつか」

そう呟くと遠夜は姿を消した。

「ふう」

洋館の二階の窓を開け、空気を入れ替える。日中は締め切っていたため少し空気が淀んでいた。息を吸い込むと新鮮な空気が肺を満たした。

「珠世様、お風呂の用意ができました」

そう言いながら少年が声をかけてくる。

「ありがとう愈史郎、私は少し風に当たってから入りますので先に入っていていいですよ」

「いえ、俺が先に入るわけにはいきませんので。お湯の温度を保っておきますのでいつでも好きな時にお入りください」

こういう時の愈史郎は頑なに言うことを聞こうとしないことを知っていたため、女性……珠世は小さくため息を吐きながら答える。

「わかりました。できるだけ早く入ります。ありがとう」

「いいえ」

そう言うと愈史郎は去っていった。

愈史郎が去るのを確認すると、珠世は再び空を見上げる。街の灯り故かあまり星は見

えないが、月はよく見えた。まだ満ちている途中であるためあまり綺麗な形とは言い
たいが、その光は見るものの目を惹きつけるものだった。

わずかに風が吹き、カーテンを揺らした。

「いやあ、いい夜ですねえ珠世さん」

唐突に知らない男の声が背後から聞こえ、勢いよく振り返るとそこには手拭いで目元
を覆った一人の青年が窓際に座っていた。

「換気は大事だが、あまり無防備に開け放しておくのは感心しませんなあ」

「……あなた、鬼殺隊？」

「お、やっぱ隊服着てるからわかりますよね。ご明察」

飄々として掴みどころのないような話し方をする青年に珠世は警戒を強める。

「……私を、殺しにきたのですか？」

鬼殺隊は鬼を殺すのが使命。故に鬼殺隊である青年がここに来た理由として考えら
れるのは他になかった。

「いいえ？本当に殺すつもりなら声なんかかけないで後ろから斬つてますよ。それにわ
ざわざ殺すやつの名前なんか普通知らんでしょう」

「……………それもそうですね」

男の言葉に納得すると珠世は少し警戒段階を下げる。なにより男からは殺気や悪意、害意といったものが感じられない。

「おっと、申し遅れました。俺は無道遠夜。影柱やってます」

遠夜の言葉に珠世は少し目を見開く。

「無道……………影柱……………まさか日永さんの？」

「あ、やっぱ知ってますか兄さんのこと。御館様からも聞いてましたけど兄さんと交流あつたんですね」

「ええ……………産屋敷様の計らいで。つまり貴方は日永さんのご子息……………ではなさそうですね。弟さんですか」

「義弟ですけどね。まあそこまでわかってるなら話は早いです。俺は無道日永の後釜です。以後よろしく」

「ええ、よろしくお願ひします」

「基本は鎧烏での連絡となりますが、重要なことは産屋敷輝哉の代理として伝えに来ますよ……………それで、ここに来たのはまあ話があるからなんですけど、その前にうるさそうなのが来たようなので」

どたどたという音が聞こえたと思ったら扉が勢いよく開き、愈史郎と呼ばれた少年

(?) が現れた。

「珠世様！ いかがなさいました……なんだお前！ なぜ鬼狩りがここにいる！」

「おーおー煩いのが来たな」

「珠世様！ 下がって！」

「よしなさい愈史郎、この人は私たちを狩りに来たものではありません」

「狩りに来たわけではない？ ならばなぜ……まさか、あの男の後釜か？」

「そーそー。無道遠夜。よろしく」

「お前らのような胡散臭い男なんぞ信用なるか！ 貴様のような無能の力なんぞ必要ない

！」

「えー、なんもしてないのにいきなり無能扱い？ ここ隠してるの多分お前の血鬼術だろ

？ それ見破ったのに無能扱いかよ」

「愈史郎、やめなさい。この方は話をしに来たのです。事を荒立てようとしないで」

「……はい」

どう考えても納得していない様子だが、とりあえず話はできそうだと判断して遠夜は

話を始める。

「……まあ、ちよつと今の状態だとその煩い奴の警戒が解けなさそうなんで」

そういうと遠夜は腰に携えた日輪刀を鞘ごと床に投げ捨てた。

「なに？」

「これで俺があんたらを殺す術は無くなった。少しは信用したか？」

「……………」

実際、遠夜の場合から日輪刀の場所まで少し距離ができた。日輪刀を持たない遠夜は二人を殺す術はない。日輪刀を拾うにしてもこの距離から刀を拾って斬りかかるには一瞬時間が必要だ。釈然とはしないが、これで遠夜が手出しをしないという確約はできた。

「これで話できそうですね。まあ今回は大した話はないんですが」

「ならば今すぐ帰れ！」

「愈史郎」

「冗談です」

「まず初めはもう話しました。無道日永の後釜として俺、四代目影柱・無道遠夜が就きました。あなた方の安全のために大体の連絡は烏を通して行いますが、重要な連絡やちよつとしたお届け物がある時は俺が来ますんで」

「はい、よろしく願いますね」

「次に鬼舞辻についてです。大まかな居場所は掴みました」

「！」

「詳細はどう調べてもわかりませんでした。うまく気配を隠している」

「……そうでしょうね。でなければもっと容易く見つけることができるでしょうから。それで、今奴はどこに？」

「東京です。人の多い都市部ならば気配も誤魔化しやすいのでしょいうね」

「……………」

「それで、御館様からの提案です。鬼舞辻のいる東京に居を移してはどうでしょう。すでに御館様がいくつか候補となりそうな場所を見繕っております。それで、こちらがその候補になります」

「そう言つて遠夜は懐から手紙を取り出し、珠世に投げてよこす。直接渡してもよかつたが、愈史郎から

『近づいたら殺す』

という並々ならぬ殺気を感じたため不躰とわかつていながら投げたのだった。無用な争いは面倒だったため、穏便に済ませる方法として遠夜は手紙を投げてよこした。

「御館様からは以上です。拠点の件については鳥を通してやってください」

「はい、ありがとうございます」

「話は終わりか？ならさっさと帰れ！」

「御館様からの話は終わりですね。で、次の話なんですがこれは俺個人の話です。ちよ

いと珠世さんにお願いが」

「……私に？」

——

「以上が俺の頼みです。どうです、受けてもらえますか？」

「ええ、それは構いませんが……」

「無論俺個人の頼みなので強制はできませんし、無償というのも悪いんで珠世さんから頼みも受けますよ。いつでもなんでもできる訳じゃないですけどね。使いつ走り程度ならいくらでも」

「しかし、なぜそれを初対面の私に頼むのですか？」

「……言いたいことはわかりますよ。でもそれは」

言葉にした途端、遠夜の雰囲気が変わった。

「必要な情報ですか？」

「どこことなく威圧的な雰囲気。威圧するというより、拒絶すると言った方が的確だろうか。」

「……いいえ」

「そうですか。なら、お願いしてもいいですかね？なんなら今なにか頼んでくれてもいいですよ」

「今現在では特にはないです。なにかあれば、産屋敷様を通して依頼しますので」

「承知しました。んじや、これ以上長居してその煩い奴になんか言われるのも嫌なん
で俺はこれで。またいつか」

「……ええ、またいつか」

珠世の返事を聞くと、遠夜は日輪刀を拾って姿を消した。

「……珠世様、あの男を信用していいのですか？前の無道日永はまだ信用できませんでした。
しかし、あの男は……」

「……そうね、遠夜さんは本心を見せない。唯一見せた本心はあの拒絶だけ。でもそうい
う人は仕事は確実に熟すのですよ。無論私の経験則なので絶対ではありませんが」

「……あの男、なんのために珠世様にあのようなことを依頼したのでしょうか」

「わからない。でも、彼には彼の目的があるのでしょう。そのために私を利用する。そ
れだけよ」

「珠世様を利用するなんて……なんて無礼な」

愈史郎が遠夜への反感を募らせているが、どうも珠世は遠夜のことを憎みきれなかつ
た。実際、遠夜の見えたと話し方だけを見たら胡散臭いことこの上ない。だが珠世は遠
夜がただの胡散臭い人間には見えなかった。鬼となり、数々の人間を見てきたが、遠夜
のような人間は少ない。本心をここまでうまく隠すことは並大抵ではできないのだ。

しぐさ、雰囲気、目線、表情などでなんとなく察することができる。遠夜は目線については手拭いで覆っているため目線ではわからないとはいえ、それでもうますぎる。だが、まだ齡二十程度の青年がこれほどまでうまく本心を隠す術を身につけたのは（才能もあつたかもしれないが）それ相応の理由があつたのだろう。その理由が何なのかはわからないが、なににしても悲しいことだ。恐らく珠世が遠夜を疑いだけの感情で見れないのはそういうことなのだろう。

「……本当に、貴方の弟さんなの？ 日永さん」

そう呟いたところで掛け時計が音を鳴らす。思つたよりも時間が経っていたらしい。

「もうこんな時間。ごめんなさいね愈史郎、すぐにお風呂を済ませます」

「いえーお気になさらず！ 悪いのは全てあの」

「愈史郎」

「……すいません」

圧を感じる声にピシヤリと言われ愈史郎は押し黙つた。余程遠夜のこと気が入らないのだろう。仕方ないといえれば仕方ないが。

そんな愈史郎の様子を見て困つたような笑みを浮かべながら珠世は小さくため息をついた。

産屋敷亭

「こんばんは遠夜、月は隠れているけど過ごしやすいいい夜だね」

「こんばんは御館様」

珠世と接触した後、遠夜は産屋敷亭を訪れた。報告は鳥を通して行つたが、輝哉に会いたいと言われて産屋敷亭に呼ばれたのだった。

「珠世さんへのお使い、ご苦勞様。どうだった？」

「普通の鬼とは気配がかなり違いますね。鬼ではあるが、どこか大きく違う。そんな気配でした」

「そうだろうね。彼女はもう人を食べなくて済む鬼だから」

「へえ。となると、あの側近……名前……あれ、なんだっけ」

「愈史郎さんだね」

「あーそうそうそれです。それも人を食べなくて済む鬼なんですか？」

「そうだね、そう聞いている。でもそんなことは遠夜でもわかるんじゃないかい？」

「あー、まあ、そうですね。わからなくはないです」

でも確証はないから、といつて遠夜は短く切りそろえられた髪の毛をかく。

「日永も珠世さんへの使いとしてごくたまにだけど会っていたよ」

「聞いてますよ。まあ影の呼吸はそういうの得意ですから適任かもしれませんね」

そう言つて遠夜は肩を竦める。

「……遠夜の頼みは引き受けてもらえたかい？」

「なーんだ、やつぱお見通しか。そんなあからさまでしたか？」

「いいや、そんなことはないよ」

「……御館様に隠し事はできないですねえ全く。先見の明つてやつですか？怖い怖い」

「そんな大したものじゃないよ」

そう言つて輝哉は笑つた。声もそうだが、この人は笑顔でも落ち着くんだな、と遠夜は場違いなことを考えていた。無論、視覚は塞いでいるため見えないのだが。

「君がやりたいこと、やり遂げられることを祈っているよ」

「テキストに祈つておいてください。仕事の合間にもやるんで」

「ふふ、頑張つてね。応援してるよ。じゃあそろそろ下がっていいよ」

「どーも。んじゃ、おやすみなさい」

「おやすみ、遠夜」

そう言つて遠夜は産屋敷亭を去つた。

「遠夜、君は本当に優しい子だね」

残された輝哉は一人そう呟いた。

産屋敷亭からの帰路に着きながら、軽く見回りをしていると、提灯を持った人が立っていた。

「こんばんは遠夜」

「よう、しのぶ。仕事帰りか？」

立っていたのは胡蝶しのぶだった。しのぶの顔は提灯の灯りに照らされて普段とは異なる雰囲気放っていたが、それを遠夜は見ることはできない。

「ええ。今日は平和な夜だったので早めに切り上げました」

「なんで提灯なんか持つてるんだ？邪魔だろ」

「先程おばあさんに待たされたのですよ。『夜更けに女の子一人で出歩くのに灯りも持たないなんて危ない』って。人の良い方だったので無下にするのも憚られてしまつて」
「へえ」

「せっかくだし、屋敷に持つて帰つてなほ達に見せようと思うの」
「いいじゃねえか。喜ぶと思うぜ」

遠夜が軽く笑うとしのぶは僅かに目を細める。そしてそれを気配で遠夜は敏感に感じ取つた。なにか氣に触ることもしただろうか、と内心で首を傾げる。

「なんだよ」

「なにも。ただ、貴方が笑うと少し煽っているように聴こえてしまうのはなぜでしょうね」

「はは、そいつは被害妄想だろ。そんなこと思つてねーよ」

「……そうね、貴方はそういうことはなにも思わないものね」

しのぶの言葉に遠夜は答えない。

「しかし、しのぶも当主……というよりお姉さんやつてんのな」

「……なにか、文句でも?」

「なーんにも? ただ」

「ただ?」

「似合ってねーぞ」

その言葉にしのは額は青筋を浮かべる。

「あら、言ってくれるじゃない。貴方みたいに無道家の当主の癖にいつもどこかでふらふらしてる風来坊よりはまともな仕事をしてると思うのだけれど？」

「おおっと、こいつは耳が痛い話だな。まあ今は俺が当主になってるけど兄さんが死んだ時点で無道家は終わってるんだがな」

「耳が痛いって自覚があるなら少しは帰ってきたらどう？」

「その資格はねえだろ、俺に」

「え？」

「話はこちらまでだ、どうやら客のようだぜ」

そう言つて遠夜が顔を向けた方を見ると、そこには人『らしきもの』が立っていた。

「鬼……」

「こいつはすげえ。この距離になるまで全く気配がしなかった」

「……………」

「おしゃべりは嫌いなタイプか？」

「遠夜、わかつてると思うけど」

「ああ」

刀を抜きながら遠夜は言った。

「こいつ、十二鬼月だな」

――

「まさかこんなところで十二鬼月に会うなんて」

「今日についてねーな」

「そうね」

そう言いながらしのぶも刀を抜く。筋力のないしのぶは鋒と錨付近以外刃がない特殊な刀になっているが、これは彼女の欠点であると同時に長所にもなっている。

鬼は動かない。

「しのぶ、援護する。好きに動け」

「逆の方がいいんじゃない？私の攻撃が効くかはわからないのだし」

「なんだ、お前の新作は下弦にも全く効かないほど効果がないのか？」

煽るようにそういうとしのぶは再び額に青筋を浮かべた。

「……ええわかりました。なら前衛はお願いしますね？」

そういうとしのぶは目にも留まらぬ速さで鬼に向かっていった。

前衛任せた、と言っておきながら真つ先に飛び出していくのは速さで煽り返すつもりなのだろう。

「やっぱその方がいいよ」

遠夜もしのぶに負けないほどの速さで鬼に向かっていく。

鬼は動かない。

「動かない?」

「怯むなよ」

「ええ」

動かない鬼に迫りながら訝しげに目を細める。鬼狩りが向かって来ているのに動かないのはおかしい。この鬼の血鬼術に関係しているのかもしれない。

あつという間に距離を詰めたしのぶは神速とも言える速度で鬼の頸に刀を突き刺す。

「これは……遠夜」

「やはりか」

その直後に遠夜は鬼の頸を飛ばす。

その瞬間、鬼の頸が黒い塊に変化し、無数の触手を放って来た。

影の呼吸・壺ノ型、無間舞踊

遠夜はしのぶの前に立ち塞がり迫り来る触手を全て斬り落とした。すると鬼の頸と

身体はどろりと溶けて消えた。

「ありがとう」

「任されたからな」

「……これはやはり血鬼術でしょうね」

「だろうな。そして俺の予想が正しければ」

その言葉とほぼ同時に闇の中から無数の触手が生えてくる。

そしてそのうちの一つに目と口が生えてくる。目には『下弦』と『参』の文字が刻まれている。

『ほう、鬼狩りじゃあないですか。しかも柱。獲物としては上等ですね』

「お、喋るのかこれ」

「気色悪いですね」

『今日はいいい夜だ。月も出ていないし柱という上等な肉が食えるだなんて』

「こいつ鬼の癖に月嫌いなのかよ」

「別に鬼だからといって月が好きだというわけではないでしょう」

「それもそうか」

どこか緊張感の無い会話をする二人（主に遠夜）に鬼は僅かながらイラツとした。今までこの影を見せただけで鬼狩りを含め多数の人間が恐怖したというのにその様子が

全く無いからだ。

『私の名は法陰。殺す前に貴方方の名前を聞きたい』

「え？これから殺す奴の名前知ってなにがいいの？どうでもよくね？」

「生憎、私には鬼に名乗るような名前は持ち合わせていません」

『……………』

なぜか今までで一番カんに触る二人（主に遠夜）だと法陰は思った。

『残念です。なら、せめて一息に殺してあげましょう。名も知らぬ柱達よ』

その言葉と同時に無数の触手が襲い掛かってくる。

「遠夜！」

「はいよー！」

それらを一息のうちに全て斬り落とす。さらに追加で襲ってくる触手はしのぶが突きと鋒の斬撃で対処する。

「これ本体やらないと永遠に斬り落とす遊びになりそうだな」

「そうね、遊びではないけれど。相手もまだ本気じゃないでしょう。早めに本体を見て叩きたいところね」

「本体みつけるのは……」

「貴方が適任でしょうね」

「ええー、今日二回目の円かよ」

「いつもやってるでしよう?」

「そうだけどきー。じゃあほんの一瞬任せるぞ」

「ええ」

そういうと遠夜としのぶは前衛後衛を入れ替える。入れ替わった瞬間、遠夜は『氣』を練り上げ球体状に広げていく。

「見つけた」

「相変わらず早い」

「そういうものだ。これだけ大規模な血鬼術だ。そう遠くにはいない」

「それもそうですね。それで敵はどこに?」

「真後ろの方角だな」

「あら」

てつきり影の触手が生えてくる方向に思うていたが、どうやら真逆の方向にいたらしい。遠夜のような気配を探る方法はしのぶにはない。無い、は言い過ぎかもしれないが遠夜ほど正確に広範囲にできはしない。

「一度呼吸で一掃する。その隙に本体に向かえ」

「承知しました」

しのぶの返答を聞くと同時に遠夜は深く息を吸い込む。

「全集中」

影の呼吸、参ノ型 無辺

一呼吸のうちに繰り出される無数の斬撃によって影の触手は全て切り裂かれ跡形も無くなる。先ほど無数の触手を一掃した時よりもはるかに鋭く、斬撃数が多い。

「いけ」

その言葉と同時に刀を納めしのぶは走り始める。

遠夜に言われた方向を辿ると、確かに鬼と気配が強くなってくる。

(近い)

そう感じ取ると特殊な日輪刀を抜く。

「おや、貴女だけか。一人で私を倒せるとお思いで?」

「……貴方方は、何人殺しましたか?」

「そんなことが気になるのですか? そうですね、もう何人殺したかなんて数えてませんね。印象に残っている数名なら覚えてますよ。貴女のこと覚えられるかもしれないね」

そういつて闇から出てきたのは紳士風の服装に身を包んだ初老の鬼だった。

「うーん、せっかく話の通じる仲良くできそうなのでしたのに」

「おや、仲良くしようという気概があるのですか？」

「ええ、鬼も人も仲良くすればいいのにも思っているので」

姉がよく口にしていた言葉を言うが、しのぶの内心はそんなことかけらも思っていない。人を殺しておいて仲良く？なにをふぎけたことを、と思っているのだから。

「具体的にはどのようにするのですか？」

「そうですねえ、まずは両眼をえぐります」

「おや」

「次に全ての指を斬り落とし、舌を引き抜き、全ての内臓を引き摺り出します。本当はもつとしたいところですが、それで仲良くできるかなあつて」

「仲良くする気が全く感じられないのですが」

「ええ、でもそれくらいしないとあなた方の罪は赦されませんよ？」

「はっはっは！これはいい！貴女の名前が聞けないことだけが心残りですがこれで私も貴女のような華奢な少女を殺す覚悟ができましたよ」

そういうと法陰は手をあげる。

「血鬼術・黒腕」

法陰の背後にある闇から無数の腕が生えてくる。

「私の血鬼術の真髄は『影』。影がある場所ならば無限に身体を作り出せます。触れてい

る影は私の身体そのものとなるのですよ」

「わざわざ教えていただけるなんて。親切ですね。それとも舐めてるんですか？」

「これくらいの手加減は必要でしょう？ 貴女はどうやら頸を切れないようなので」

「ご親切にありがとうございます。じゃあ」

死んでください。

そういうとしのぶは目にも留まらぬ速度で法陰の頸に日輪刀を突き刺した。

「ごっく」

「先程の速度が最高速度だと思いましたが？ あの程度の速度が全力だと思われるのは心外ですね」

そういうとしのぶは刀を頸から引き抜き間髪入れずに呼吸によってトドメを刺しにかかる。

蟲の呼吸・蝶の舞 戯れ

放たれた刺突により法陰は仰反る。

「……素晴らしい速度です。私では反応することすらできない。ですが刺突の攻撃では鬼は倒せませんよ？」

「それは釈迦に説法ですよ？ 貴方に言われなくともそんなことわかっています」

ではなぜ？ と思つたところで法陰は肉体に異変を感じる。突き刺された部分が熱い。それは徐々に広がり痛みを伴い始めた。

「これは、毒か☒」

「ご明察です。藤の花から抽出した毒を改良したものです。並の鬼なら大体即死になるような調査にしたつもりでしたが、やはり十二鬼月ともなると即死には至りませんね」
「ぐっおおおー！」

即死はしないが、確実に効いているのはわかる。体内で分解される可能性もあるためもう何発か打ち込んでおこうと思つた瞬間、違和感を感じる。

法陰が苦しまなくなった。

死んだわけではない。ということは毒を分解したのだろうか。だがあまりにも早すぎる。上弦の鬼ならばわかる。ここ百年以上変わっていない上弦の鬼ならば試作の毒程度すぐに分解してもおかしくない。だが下弦の鬼がこれほど早く分解できるとは思えない。

「は、はは……いやはや、素晴らしい毒でした」

「もう分解したのですか？」

「いいえ？ 私は鬼の中でも肉体は弱い方でしてね。肉体の再生速度などは十二鬼月の中

では最低辺です。ですが私は血鬼術で十二鬼月まで登り詰めたの者なのですよ。先程言ったでしょう？影は私の身体そのものだ。貴女が私に打ち込んだ毒を身体である影に流したのです。影に毒を流し込んだところで影響はないので。尤も、この血鬼術がなければ貴女の毒で私は死んでいたでしょうけどね」

なるほど、と納得する。影は法陰にとって身体であり、身代わりとなるものなのだ。恐らく、影に隠れることもできるだろう。

その代わり肉体はやはり弱いようだった。先程しのぶが突き刺した場所はまだ塞がっていない。十二鬼月にしては肉体はかなり弱いのだろう。

「毒は効かない、頸も切れない。将棋ならば貴女はもう詰みですね」

「……………」

反論はできない。この手の鬼は今まで会ったことなかった。過去に色々な血鬼術を使う鬼を見てきたが、その中でも血鬼術だけならしのぶと最も相性が悪い鬼だ。

「仕方ありませんね」

「諦めて投降しますか？それならば痛みを感じさせずに殺してあげますが」

「私が殺すのは諦めます。あとは任せますよ」

「遠夜」

その瞬間、背後の闇から遠夜が飛び出した。

「！」

驚愕はしたものの、法陰は無数の腕を遠夜に向けた。

「またかよ」

空中で回転しながらその腕を斬り落としていき、しのぶの横に着地する。

「遅かったわね」

「ちよつと距離おいて観察してたからな」

「……………」

「必要なことだ。むくれんな。援護頼むぜ」

そういうと遠夜は法陰に向かっていく。

「些か真つ直ぐすぎでは？」

闇から無数の腕を出し、遠夜を捕らえにかかると。しかしそれらのくる場所がわかっていくかのように遠夜は回避しながら法陰に向かう。

「ほう……ならば」

その声とともに法陰は遠夜の足元の影に力を集中させる。

「…下か」

遠夜は気配を下から感じ取り、高く飛び上がる。それと同時に地面から剣山のような影が飛び出してきた。

「おー怖」

「これを回避するだ」と

どうやらこれは法陰にとつてかなり必殺率の高い技だったらしい。

「ですが、空中ではこれは回避できないのでは？」

そう言つて法陰は闇を刃のように変形させ遠夜に刺突を繰り出す。実際空中では満足に回避することはできない。

「しのぶ」

「ええ」

だがその刃はしのぶの鋒によつて斬り裂かれた。

「なんと！」

「さすが」

遠夜が滞空しながら繰り出される刃はしのぶの援護もあつて一つも遠夜には届かない。

横からなぎ払うように振り回される刃が遠夜に迫るが、それを遠夜は空中で身を捻り、刃の側面に手をつけて回避する。

「っ！」

「身軽さなら自信あるんだなこれが」

しのぶほどではないが、と内心で付け加えながら刃の側面を走る。

「なんと！」

「驚いてる場合か？」

「しまっ」

一閃

法陰の頸は空高く舞い上がった。

「……？」

感触に違和感を覚える。鬼の頸にしては柔らかすぎる。いくら身体が弱いとはいっても、これほど柔らかいことはないだろう。

「遠夜？」

「気を抜くなしのぶ。まだ終わってない」

「え？」

「こいつは偽物だ」

その言葉と同時に身体が影に溶ける。

「いやはや、今のは実に危なかった。もう少し判断が遅ければ私の頸は落とされていた」

声と共に背後からぬるりと法陰が影から生えてくる。

「へえ」

「あなた方が如何に強くても私の血鬼術の前では無力。月の出ていないこの夜に私を倒すなど無理なのですよ」

月が出ていないということとは辺りは完全に夜闇に包まれているということ。それはすなわち法陰にとつて身体となる場所がほぼ無限であるということ他ならない。

どこからでも攻撃をしかけられ、しのぶの毒を肩代わりする影も無限故に毒も効きづらい。

「……なんだ、簡単じゃん」

「えっ？」

どうするかしのぶが考えていると唐突に遠夜は納得する。当然しのぶは遠夜の考えがわかるわけない。故にしのぶは遠夜の真意を聞かねばなにがわかったのかわからない。

「なにがわかったのですか？」

「ん？殺し方」

「え」

「しのぶ、殺す毒じゃなくて、『身体を自由を奪う』毒はあるか？」

「え、まあありますけど」

「それ使つてあいつを攻撃しろ」

「で、でも、それじゃあ」

「よろしく」

そう言つて遠夜は法陰に向かつていった。

「……ほんと、言葉が足りないんだから」

しのぶは額に青筋を浮かべながら鞆の中で調査を変えて痺れ薬の方にシフトさせる。

遠夜が法陰に向かつていくことにより法陰の意識は今完全に遠夜に向いている。加えてしのぶの毒は法陰に効果は薄い。つまり法陰の中ではしのぶはいてもいなくても変わらない存在となりつつあるのだ。

そしてしのぶもそれを理解している。認めるのは癪ではあるが、事実である以上仕方ない。ならばそれを利用するまでと思考を切り替えると思を潜める。

必殺のタイミングで確実に仕留めにいく。それにのみ集中するために。

「無尽蔵すぎんだろ」

「言つたでしよう？この影は全て私の身体なのです」

「ならこれはどうだ」

影の呼吸・式ノ型 影法師

遠夜の姿が消えた、と思つたらあたりに影法師のような影が無数に立っていた。

「これは……」

「どこ見てんだ？」

「なっ」

背後から聞こえた瞬間に法陰の腕が飛ばされる。

「なに☒」

「遅いねえ」

「いっ」

続け様に蹴りを顔面に突き刺す。

その瞬間無数の刃が遠夜に襲いかかるが、致命傷となり得るものだけを空中で回転しながら切り裂き、他のものはかする程度に受ける。

「はっー」

「なんのー」

振り下ろされた日輪刀を法陰は刃の影で受け止める。

そのまま影の刃と日輪刀の剣劇が続く。だがやはり手数差から徐々に遠夜は押し

込まれていく。

「ぐっ」

刀が影に弾かれて身体を無防備に晒す。その瞬間を十二鬼月が逃すはずもない。

「トドメです」

影の刃を突き刺さそうとするが、その瞬間の遠夜の表情に法陰は固まる。

笑っていたのだ。

なぜ？そう考える間もなく肉体を貫かれる感触がする。

背後を見ると、蝶の髪飾りをつけた小柄な少女が微笑んでいた。

「しまった！」

「私のこと、途中から忘れていましたでしよう？」

「おのれ！」

「そんなに私は影が薄いですか？」

だが毒は影に受け流せばいい。そう考えていたがその瞬間身体が固まる。毒ならば受け流せばいいのにそれすらもできない。簡単な話動けないのだ。

「痺れ毒か！」

「その通りです」

「考えましたね。ですが痺れ毒程度なら私でもすぐに分解できますよ」

「でしようね」

そういうとしのぶはまるで蝶のように軽やかに舞うと夜闇に紛れた。

なにをしている、と考えていると痺れ毒が分解されてきた。動きづらいが、動くことはできる。殺せてはいないのに退くのに理由はあるのだろうか。

「足元がお留守じゃないか？」

考えていると足元から声が聞こえる。同時に顎に衝撃。

「ぐっー」

空中に蹴り上げられさらに追撃でさらに持ち上げられる。

影舞踊と言われる影の呼吸に伝わる武術の一つであり、空中に投げ出された相手の影のような動きからそのように名付けられた。

「くう」

「お前の強みは血鬼術の特異性。だがタネが割れば大したことない」

「なん、ですと？」

「お前は言つたろ。『触れている影は全て私の身体』だと。なら、影に触れていなければお前の血鬼術はなにも意味がないものなるんじゃないのか？」

「っ！」

「終わりだ。全集中」

投げ出された法陰の頸にむけて空間が斬り裂かれたと錯覚するほど鋭い一撃を放つ。空中で身動きの取れない法陰はなす術もなく頸をはねられた。

「ま、さか……私、が……」

「お前の敗因はあれだな、多対一に慣れてなかったことだな」

それに尽きる。片方に意識が集中してしまいもう片方への警戒が疎かになった。その隙を突いたに過ぎない。

法陰は音もなく消えていった。

「下弦にしては厄介な能力だったかもな。他の隊士が対応できなくても仕方ないわ」

「いつ影に触れていなかったら身体を影に逃せないって気がついたの?」

「ん?あの鬼が最初に自分の能力について話した時」

その言葉にしのぶは絶句する。そんな早くから気がついてたというのか。

「どんな能力にも欠点や制約がある。上弦ならぶつ壊れ能力も大いにあり得る、というか上弦はどいつもこいつもぶつ壊れた能力してんだろ。でなけりや歴代の柱が死ぬはずがない」

「そうね、その通りだと思っわ」

「だが下弦ならどうだ。下弦はしょっちゅう柱に倒されて入れ替わっている。つまり能力的にはまだ発展途上で強くなっていない。そんな奴らなら能力に制約がない方が不自然だ。本気で俺たちを殺す気ならずと影に引きこもって影の人形出して倒された振りして騙し討ちなりすればよかつたのにそうしようとはしない。つまり奴にも影にずっと潜っていられない理由があつたのだから。」

そういう予測を立てた上で敵の話をよく聞く。なぜか鬼は無駄に自尊心が高いから、自分の能力をやたら話したがる。無論全員とは言わないがな。だから敵の話を聞いていると時々自分の能力の欠点をぼろつと話すこともあんのよこれが」

「……そんな馬鹿なことをするとは」

「今回はそれがうまく行つただけだがな。確証もなかったが、まあ妥当な制約だと思つたから試しただけだ」

その言葉を聞いてしのぶは感心した。昔から頭はよく回ると思っていたが、ここまで推論を瞬時に立てられるとは思っていなかった。

だがそれはそれでしのぶは文句があつた。

「遠夜、そういう大事なことはちゃんと口に出して言いなさい。御館様にも言われたでしょう？ 大事なことを敢えて口に出さない悪癖があるって」

「この程度、ちよつと考えりやわかるだろ？」

「誰でもあなたのように常に頭を回せる訳じゃないの。まったく……」

呆れながらも内心で感謝を述べる。なぜなら、この鬼はしのぶただけでは倒せなかったからだ。毒が効かない以上、しのぶは鬼を殺す術がない。助けられたのは紛れもない事実だが、素直に言う気にはなれなかった。

「……遠夜」

「なに？」

「傷をみせて。治療するわ」

普段と比べてしおらしい態度に遠夜は少し驚いた。しのぶとしても礼を言わないのは嫌だったため、せめてもと思いの行動だった。

遠夜は普段なら断るところだったが、この前怒らせたことを思い出した。

「……んじゃ頼むわ」

満足そうに笑うしのぶを見て今回は間違えなかったと内心安堵しながらも今の笑顔は貼り付けたものではないことを遠夜は理解した。昔のように、ころころと表情が変わる頃のしのぶの顔の、非常に珍しい笑顔。

遠夜から視線を外すしのぶは歩き始め、そゆなしのぶの後に遠夜は続いた。

そこでふと遠夜は思い出した。

「そーいやあの提灯は？」

法陰と闘う前はあつたしのぶが待たされたという提灯。戦闘に気を取られて忘れていたが、あれはどこにいったのだろう。

「闘う前に物陰に隠してきました。みんなに見せたいですからね」

そう言いながら振り返り笑う顔はいつもの貼り付けたものに戻っていた。

「……そうか」

それだけ言うのと遠夜は口を閉じた。

しのぶの持つ提灯の灯りのみが夜闇から二人を照らした。

月を隠す雲は、まだ晴れない。

雨と水の音が聞こえる。

昨日の夜から降り続ける雨は止む様子は見せず絶えず降り続けている。雨が多く、蒸し暑い季節ではあるが、ずっと降り続けていると徐々に気温も下がりひんやりとした空気が肌に纏わり付く。

「……………」

羽織と詰襟を脱ぎ、雨に濡れない岩陰に畳むと、目の前に落ちる多量の水の中に頭を突っ込み、滝に打たれる。滝の下にある岩に腰を下ろして座禅を組み、息を整えて円を行う。

手拭いで塞がれた視界にはなにも映らないが、周囲になにかがあるかは完全に把握できている。円の効果範囲内である以上、雨粒が円の効果範囲内にいくつあるかも把握できる。滝の水では円を妨げることはできない。

滝に打たれながら意識を集中させる。手にした日輪刀を抜き、座禅を組んだまま構える。

深く呼吸をし、全身に力を漲らせる。

円で一際大きな水の塊が落ちてくるのを察知すると、全身の氣を練り上げ刀にまで浸透させる。

「全集中」

影の呼吸・参ノ型 無辺

一呼吸の間に凄まじい量の斬撃を放ち、落ちてきた水の塊を消しとばす。一瞬周囲は静寂に包まれ、滝の水は一瞬途切れた。

しかし次の瞬間には再び滝は流れ始め遠夜の身体に水を打ち付ける。

そのような修行を延々と二時間ほど続けていた。

——

「……ふう」

「修行か。精がでるな」

そう声をかけて来たのは、岩柱・悲鳴嶼行冥だった。盲目である目から涙を流しながら遠夜に近づいてくる。

「どーも悲鳴嶼さん。修行場所借りてます」

「構わない。私がよくここで修行しているというだけで別段私の所有する土地というわけではない」

「それもそうか。それで？なにかご用意ですかい？」

滝から出て刀を納めながら遠夜は悲鳴嶼に近づいていく。別段、悲鳴嶼と仲が良かったりよく話したりはしない。そのためわざわざ声をかけて来たあたりなにか用があるのだと遠夜は予想した。

「ああ。御館様から伝令があった」

「伝令？なら烏使えばいいんじゃない」

「お前の場合、烏での指令だと無視する可能性を示唆された。そして柱であるお前に直接言つて聞かせられるのは、私か胡蝶だけだと判断され場所の近い私が頼まれた」

「言つて聞かせるつて、俺は幼子かなにかですかい？」

「時々指令を無視することについては、自覚が無いわけでもあるまい」

「否定はしません」

というかできない。実際、遠夜は時々指令を無視する。鬼を殺したり民間人を助けるといふ指令を無視することはないが、休暇や柱合会議の指令などは無視することがある。また、助けようとした人間の態度が明らかにこちらを見下したり横暴なタイプだとわかると平気で見捨てることもあった。柱合会議は必ず御館様に理由を嘘偽りなく言い欠席するが、休暇や指揮の指令は基本的に全部無視する。柱といえど人間。休暇は必要なのだが、遠夜はそれを頑なに取ろうとしない。休暇を取らない主な理由は『そんな暇ない』ということだが、実際遠夜が自分で仕事を増やしているだけである。加えて隊

士の指揮も柱としての重要な役目であるが、面倒という理由だけでそれを全うしない。その度にしのぶの雷が落とされるのだが、話は基本右から左。反省の色は全くない。

「……柱合会議は前にやったから、今回は休暇の指令ですか？それともまた指揮指令？」

「休暇だ。柱たる者体調管理も重要な役目である。休めるうちはきちんと休んでおけ」

「……ふう、仕方ないっすね。今日は大人しくしてます」

最年長であり、最強でもある悲鳴嶼に言われては遠夜も従わざるを得ない。なお、遠夜がいうことを聞くのは主に産屋敷か悲鳴嶼、または静かに激昂するしのぶくらいである。

「御館様の計らいで今いる柱は交代で休暇をいただいた。その期間は一週間」

「え、長くないですか？」

「今は鬼の出没情報がほとんどない。無論ゼロではないが、強力な鬼は出てきていない。

嵐の前の静けさかもしれないが、柱は今のうちに休んでおくように言われた」

「……わかりましたよ。つまり仕事は来週からってことですね」

「そうだ」

「承知しました。でも身体が鈍らない程度に鍛錬するのはいいでしょう？」

「そのくらいは良いだろう。適度な運動は健康にも繋がる」

「同じことをどっかの世話焼きに言われたなあ」

その言葉に悲鳴嶼は頭の中で小柄な少女の姿を思い浮かべる。いや、盲目である彼は胡蝶しのぶの姿をしらない。『胡蝶しのぶ』という存在を頭に浮かべたというべきだろう。

「わかりましたよ。御館様がそこまで気にかけているとは思わなかったな」

「御館様は我々だけでなく全ての隊員のことを気にかけてくださる。無道も先代影柱のように御館様のご寵愛を素直に受ければ良い」

「どうも捻くれ者だね。無償の寵愛つてのは、気持ち悪くて受け付けないんすわ」

「……………」

その言葉に悲鳴嶼は、内心で遠夜のことを憐む。無償の愛を受け付けないというのは、人を信じられない証拠である。必ず人と人の間で成り立つのは等価交換。または一方的に搾取されるだけの環境で生きてきたのだろう。その予想が合っていたとしたら、どれほどの苦悩がこの青年の過去にあったのか。それを想像するだけで悲鳴嶼は涙が溢れてきた。

「はあくあ、稽古もできないならどつか食べ歩きでも行くかなあ。いや、そろそろ継子の様子見にいくか」

その言葉に悲鳴嶼は固まる。

「無道」

「はい？」

「今、継子といつたか？」

「ええ」

「継子がいたのか」

「ええまあ。去年くらいですかね、できたのは」

「……………」

「今、多分俺みたいな根無草が継子の面倒なんか見れるのかって思ったでしょう？」

「…………正直思ったぞ」

その言葉に遠夜は苦笑する。実際そう思われても仕方ないし、そもそも普段の修行は他人に丸投げしている。

「まあ、そう思われても仕方ないですね。実際普段面倒見てるのは先代影柱の父親ですから」

「ほう、日永の」

「ええ。俺がやってるのは全集中の鍛錬と、影の呼吸の指導、あとは氣の指導ですかね」

「そうか、お前にも弟子が……」

「いやそれでまた泣かないでくださいよ……親かなにかですか」

「それでも、私は嬉しい」

「はいはいさいですか。ま、そういうことなんでこれで」

「待て、まだ話は終わっていない」

「ええ、まだなんかあるんですか？」

「この一週間の休暇のうち、最後の三日は空けておけ」

「なんでです？」

「御館様が温泉宿を用意してくださっている」

御影山

そう呼ばれる山の中腹あたりに遠夜の目指す藤の紋の家はあった。

「いめん下さーい」

遠夜がそう声をかけると、門が内側からひらいた。そして顔を覗かせたのは優しそう

な顔をした中年の男性だった。

「やあ、遠夜くん。待っていたよ」

「ご無沙汰、つてほどでもないですかね。お久しぶりです、雲海さん」

無道雲海。日永の父親であり、遠夜の育て親でもある男性である。柔らかな雰囲気は日永そっくりだ。

「元氣そうでよかった。しかしびっくりしたよ。急に來るって言うんだから」

「急遽休暇の指令が來ましてね。普段は仕事で寄る暇はないので、せっかく暇ならこちらに來ようかと。継子の稽古もつけてやらねばなりませんしね」

「夕霧くんも喜ぶよ。さ、あがってあがって」

そういつて雲海は遠夜を中に招き入れた。

「……先に、兄さんに挨拶してきます」

「うん、そうして欲しい。そのあとはみんなでご飯を食べよう。鳴海が腕に寄りかけ作ってくれたよ」

「ありがとうございます」

そういつて遠夜は仏間へと足を進めた。

——

「……久しぶり、兄さん」

線香を上げて手を合わせる。仏壇には『無道日永』と書かれた札があるだけで、それ以外はなんの変哲もない普通の仏壇だった。供物として生前胡蝶カナエに贈られた耳飾りが添えられている。

「……休めつて上から叱られちったわ。ちゃんと毎日寝てるから休んでは思うんだけどなあ。どーも他から見たら休んでないように思えたらしい」

返事は当然ないが、遠夜は話続ける。

「……まだ、兄さんみたいにはできないわ、色々。これでも頑張ってるんだけどねえ」

そう呟くと皮肉げに遠夜は口元を歪める。

暫し無言になると、遠夜は立ち上がった。

「……また来るよ」

そう言つて仏間から出て行つた。

仏壇に添えられた耳飾りが悲しげに太陽の光を反射した。

「師匠！」

仏間を後にし、食堂へと足を進めていると背後から元気な声がかけられた。

「おう夕霧、元氣そうだな」

「はい！師匠も元氣そうですね！」

遠夜に声をかけたのは、夕霧と呼ばれる少年だった。

夕霧は一年ほど前に鬼に襲われていたところを遠夜が助けた少年だった。両親はいないらしく行く宛がないということで遠夜は少年を日永の生家である雲海の家に預けた。自分の本当の名前も知らなかったが、少年の周囲の人間はあまり関わろうとしなかったため名前を少年は知ることができなかった。そこで預けられた雲海は、遠夜が少年を預けに来た日は非常に綺麗な夕霧が立ち込めていたという理由で少年を『夕霧』と名付けた。少年も気に入らしく、その名を名乗るようになった。

「先程鳴海様からこちらに師匠が来るとい話を伺いました」

「まあ急な話だったかな。暇になったから、っていう理由だけだ」

「あまりにも急だったらので鳴海様怒ってましたよ！」

「あー……まあ、うん。急に決まったことだし許してくれるだろう」

『『どんな理由であっても報連相できない遠夜は一発殴る』って息を巻いてました！』

「おいおい……勘弁してくれよ……」

そう言いながら遠夜はげんなりした表情を見せる。帰ってくるんじゃないかかと思ひ始めるほどこの後の展開が怖いのだろう。

内心で諦めながら、身体中の氣を練り上げる。これで鳴海の拳を受けても致命傷は避けられるだろう。

「致命傷負わせるほどの拳ってなに」

「すごい……静かだけど、力強い氣だ」

「お前もこのくらいできるようにはなってもらうからな」

「はい！」

そう言つて遠夜は食堂の扉を開ける。

すると目の前に芋が飛んできた。

「こんの、馬鹿息子！」

「おうっ☒」

飛んできた芋は回避したが、直後に放たれた拳は避けきれず腕で受け止めた。

「いきなり、ですかい」

「帰ってくる時は前もって連絡しろっていつもいつとるだろ！」

「急に休暇出されたんだから仕方ないでしょう」

「はい言いい訳はいいから！」

「ぬう！」

凝で氣を集中させた腕で防いだにも関わらず、鳴海の放った拳は遠夜の腕を痺れさせ

た。

無道鳴海。日永の実母であり、雲海の嫁。さらには遠夜の育て親でもある。ご覧の通りすぐに手が出て非常に短気である。

「全く……日永は律儀に毎週文を出してきたつてのに、あんたは手紙の一つもよこさない。たまには手紙でもよこしなさいよ」

「気が向いたら書きますよ」

「鳴海は遠夜のことか心配なんだよ」

「どーも」

「はあ……もういいわ。ほら、すわんなさい。ご飯食べましょ。夕霧、手伝ってくれろ？」

「はいー」

そう言つて鳴海は遠夜を食卓に座らせ、夕霧は大皿を運び始めた。

遠夜が座ると、正面に雲海が座つた。

「休暇は、どれくらいなんだい？」

「一週間です。最後の三日は予定が入つたので四日ほど世話になります」

「そうか、短いね。でも僕達はいつでも遠夜が帰ってくるのを待っているよ」

「でも帰ってくるときは必ず早めに言いなさいよ！今日だつて慌てて食材買い足したん

だから」

「それは申し訳ない。で、あの人は？」

「今日の夜は帰ってくるみたいよ。あなたが風来坊になったのはあの人の影響？」

「さあ」

「やれやれ……まあいいわ。じゃ、食べましょ。夕霧、ありがと」

「いえ。いただきます！」

「いただきます」

手を合わせて箸を持ち、食事を始める。

どこにでもあるような家族団欒の風景だったが、遠夜は終始手拭いを取らなかつた。

——

「ふう……」

檜の風呂に浸かりながら天井を見上げる。

「こんな気楽に風呂につかったのは久々だな」

手拭いを外したため露わになった目で浴室を眺めながらそう呟く。柱である以上、遠夜は常にやることに追われていた。当然といえば当然であるが、柱はあまり休む暇はな

い。加えて遠夜はその休みも『鬼を殺すために必要なこと』に費やしている。実質無休と変わらないため風呂にゆっくり浸かることなどほほなかつた。なんなら湯船には浸からず身体を清めるだけで終わらせることの方が多いまであつた。故にこれほどゆっくり湯船に浸かるのは久々だつた。

「師匠、湯加減はどうですか」

浴室の外から夕霧の声が聞こえてくる。ここまでもてなされるのはあまり慣れていないが、遠慮するような場所でもないため素直にもてなされる。珍しく素直である。

「ちようどいい。もうちよいしたら出る」

「隊服は鳴海様が洗つてくださるようなので、着物をこちらに出しておきますね」

「へーい。あ、夕霧」

「はい?」

「俺が風呂出たら少し稽古つけてやる」

「え、せっかく風呂入つたのに?」

「お前に稽古つける程度で汗ばむほど落ちてねーよ」

「お、俺だつて精進してるんですからね!」

「はは、円も識もできねーひよっこがなに大口叩いてんだ」

「ぐっ……」

「ほれ、もう少しで出るからそれまで自分で鍛錬してろ」

「はー」

夕霧はそう言つて去つていった。

「……………」

湯船に浸かりながら夕霧のことを思い出す。

夕霧と初めて出会つた時、夕霧は酷くやつれ、みすばらしい格好をしていた。孤児がそうなることは、残念ながらそう珍しいことではない。年号が大正になつて多少は改善されたのかもしれないが、都心部である東京以外はまだまだ明治の時と大差ない。

街の片隅の、金を持たない人の溜まり場に夕霧はいた。鬼の情報があり、情報収集のためにそこに遠夜が赴いた時に出会つた。出会つた時の夕霧は髪は伸び放題で全身垢だらけ。僅かに悪臭もしていた。そういう子供は他にもいたが、夕霧はその中で一番年上の少年だった。一番年上故に他の子供の面倒も見たりしていたおかげか、夕霧以外の子供はそこまで痩せ細つたりはしていなかった。なんなら夕霧が一番痩せていたまであつたが、そのおかげか夕霧は子供達に慕われていた。

その時遠夜は夕霧に鬼の情報がいか聞いた。しかしその時夕霧はなににも知らなかつたため情報はなかつた。その付近にはいないと判断した遠夜はそのままその場を後にした。

しかしその次の夜、夕霧以外の子供は皆鬼に喰われて死んだ。

その鬼の血鬼術は『気配を消す』ことに特化しており、遠夜の円でも見つけることができなかつた。血鬼術は殺傷能力は皆無なものであつたが厄介なものであり、どうにか隙をついて殺すことはできたが遠夜が戦つた鬼の中で厄介さだけなら五本指に入るものだつた。

そしてなぜ夕霧だけ生き残つたかというところ、夕霧は夕方に川に水を汲みにいつていたが、桶の重さにバランスを崩し足を捻つてしまつた。そのため帰るのが遅くなり、鬼と鉢合わせにならずに済んだ。正確にいうと夕霧が帰つて来た時には子供達は皆殺されており、事態を読めなかつた夕霧は『気配を殺して』茂みの中に潜んでいたのだ。

全てが終わると、遠夜によつて保護された。足腰が立たなくなつていたため担いで付近の藤の紋の家に預けた。

翌日遠夜が様子を見に行くと、夕霧は弟子にして欲しいと懇願してきた。弟子を志願した理由を遠夜が聞くと、夕霧はこう答えた。

「貴方みたいに剣を自在に操れるようになりたいんです！それに、面白そうじゃないですか！」

その言葉を聞いて遠夜は理解した。

この少年も、自分同様な心が壊れていると。

普通こういう時、『殺された子供の復讐』や『自分と同じような目に合わせたくない』という理由が思いつくが、この少年はそんなこと知るかと言わんばかりに目を輝かせながら『自分のためだ』と言い切った。この少年はまだ幼い身でありながら、自分はほとんど食わずに他の子供に食べさせたりと身を粉にして尽くしてきたのだ。そんなこと大人でもそうできない。なのにやってのける精神をこの若さで持つ以上、どこか歪んでいるもおかしくはない。

遠夜としても弟子……継子を作ること自体はいい。自分も柱へと至った以上、影の呼吸を誰かに繋いでいく必要がある。無論全ての柱が継子を持つわけではないし、独自の呼吸は作り上げた人物にのみ適正があるものもあるため継子を作りたくても作れない可能性も大いにある。だが影の呼吸は歴史は浅いが数代に及んで受け継がれてきたものだ。遠夜としても、繋いでいく義務があると考えている。

それに遠夜は夕霧の才能を見抜いていた。夕霧は遠夜が鬼と戦っている間、鬼に一度も見つかることなく長時間隠れ抜いた。鬼は夜しか活動できないため夜目が効く。いくら茂みの中とはいえ、鬼の目ならば見つけることは容易い。加えて鬼は感覚も鋭いものがある。故に茂みの中に隠れた程度では普通に見つかる。だが夕霧は隠れ抜いた。

それは夕霧が『自らの気配を完全に絶つ方法』を無意識のうちに習得しているということだ。日常生活では基本目覚めることのない才能だが、鬼殺隊でその才能は役に立つ。とりわけ、影の呼吸とは相性のいい才能だ。影の呼吸は自らの気配、呼吸を自在に操れるようになる必要がある。故に自らの気配を完全に絶つことができるのは、影の呼吸を習得するための第一歩をすでに習得していることになる。

だがいくら才能があるとはいえ、鬼殺隊への修行は非常に苦しく、厳しいもの。修行で根を上げるような者では到底鬼殺隊にはなり得ない。だから遠夜は聞いた。

「修行は一切手を抜かない。お前が限界だと言つてもできるまでやらせる。気合と根性だけで乗り切れるほど甘いものじゃない。死ぬ可能性だつてある。それでもやるか」

そして夕霧はこう答えた。

「死んだら俺はその程度だつたつてことでしょ？ やりますよ！ どうせここにいっても遅かれ早かれ死ぬんだし」

そう言つて笑つた。生半可な覚悟ではないことと歪みきつた思考を感じ取つた遠夜は諦めて夕霧を継子として扱ふことにした。

しかし遠夜の屋敷には遠夜しかない。結局頼れるのは雲海のみだつたため雲海の家に夕霧を預けることにした。

修行はやるべきことを伝え、あとの面倒は雲海や鳴海に見てもらつていた。遠夜は柱

故に常にその修行を見てやれるわけではない。そこで雲海と鳴海に育手の代理をやつてもらっている。修行内容は遠夜が細かいところまで文章に残しているため雲海と鳴海にもできるし、二人は氣の使い手であるため氣の指導もできる。

「……實際丸投げに等しいな、これ」

時々指導しにきてはいるがほとんど二人に丸投げしている状態に遠夜は苦笑し、湯船から上がった。

「まず、練を見せてもらおう」

着物に着替え、道場で鍛錬をしていた夕霧に最初に言った言葉はそれだった。

「はいー」

夕霧は構え、自らの体を巡る力に集中する。

呼吸を整え、練り上げた氣を一気に放出した。

「練！」

放出された氣は周囲の空氣を揺らす。

「次、凝」

「はい！凝！」

ゆつくりではあるが、放出された氣が構えた手に集中していく。

「ぬっ、ぐっ……」

「……ん、とりあえず及第点か。よし、纏」

「……はあ！はっ、はっ……ひい……」

「まだ凝の維持は難しそうだな。氣の修行は練の長時間維持、凝を滑らかに行うこと、あと常時纏だな」

「練の長時間維持かあ……」

「まあ見た感じ言われたことはちゃんとやってみるみたいだな。毎日纏と練はやってるのがわかる」

「ありがとうございます……」

「全集中の呼吸はまだみたいだな。とにかく肺だ、肺を強くしろ。呼吸は肺で行うから肺が貧弱だと話にならんぞ」

「毎日山下り山登り素振りしてるんですけど……」

「足りねえ。その程度で習得できるほど甘いもんじゃねえよ、全集中の呼吸は。あと一年は同じ修行だ。できるようになる頃には円くらい使えるだろ」

「はい……」

「じゃあ次組み手だ。好きに打ち込んでこい」

「はい！」

「あ、練維持したままな」

「ええええ！」

——

「よし、ここまで」

「あ……ありがとう、ございました……」

数分後にはボコボコにされて道場に転がる夕霧と汗一つかかずに涼しげな遠夜がいた。

「流が遅すぎる。円がまだできてないから識ができないのも仕方ないが、回避が下手で話にならない。訓練項目に回避も加えておく。鬼の攻撃は基本強力だ。防御より回避の方が体力を減らさずに済む」

「承知しました……」

「こっちは足しか使ってねーのに擦りもしなかったぞ。体術もまだまだだな」

「……はい。ていうか師匠本当に見えてないんですよね？」

あまりにも見えてるかのように攻撃を回避され続けてはそう感じてしまうのも無理はない。

「見ての通り視覚は手拭いで塞いでる。だが円の効果範囲なら見えてるのと大差ない。それに識が使えるようになれば回避など造作もない。攻撃には必ず意思がある。それを識で読み取る。それができなきや影の呼吸を習得なんてできねーよ」

「はい……」

「ほれ、最後に纏と練だ。そのあとは纏したまま日常生活」

「はいー！」

その後、夕霧の修行に少し付き合っていると、遠夜の円に知っている気配が二つ追加された。

「……あの人はわかるけど、なーんであの人はいるのかねえ」

そう呟きながら遠夜は道場を後にし、気配の方へ足を進めた。

「うまい！もう一杯！」

「おーいいですねえ煉獄さん、わかってらっしゃる」

「……………なにやってんすか、煉獄さん、陽明さん」

「おお、無道！この前の柱合会議以来だな！」

「どーも遠夜サン、元氣そうっすね」

居間に行くとなりの炎のような髪をした男、煉獄ともう一人帽子を目深に被った甚平姿の男が酒を飲み交わしていた。

「……………なんでここにいます？」

「いやなに、昨日任務でたまたま会えたのでな！この後この藤の紋の家に行くというので同行させてもらったのだ！」

「鬼の情報を探っていたら付近に煉獄サンがいらっしゃったのでねえ。元よりここに戻ってくる予定だったんすけど、煉獄サン今日の宿がないようだったので一緒にどうかと。……藤の紋の家だしなにもおかしくはないっすよ」

「……………なるほど」

煉獄の無駄にでかい声と陽明の胡散臭い話し方に遠夜は頭痛がしてくるような錯覚に陥る。遠夜にとつて数少ない苦手に分類される人間が二人同時に来れば頭痛もしてくる。

「しかし陽明殿！この酒はうまいな！どこの酒だ☒」

「これはこの前越後の方に行つた時に酒蔵の蔵主にもらつたんすよ。辛口ですつきりしてて飲みやすいでしょ？」

「うむ！あまり酒は嗜まないが、この酒はうまいのはわかるぞ！」

「でしょ。ほら、無道サンも一杯どうです？今休暇でしょう？」

「……まあそうですけど」

「共に飲もう！俺は無道のことをあまり知らないからこの機会にお前のことを知りたい！」

そう言つて煉獄は遠夜に杯を渡す。

もともと煉獄は熱い精神を持っており、時折人の話を聞かない。非常に面倒見はいいし、実力も申し分ない。だが遠夜は真つ直ぐすぎるほどの精神を見るたびに眩しくて直視できない。

だがこれは逃げられそうにないため大人しく杯を受け取る。

「……………ん、これはうまいな」

「そうだろう！随分といい酒みたいだからな！酒をあまり嗜まない俺や無道でも飲めると陽明殿が言っていた！」

「あつしは酒よく飲みますけどねえ。まあ柱の皆さんは酒を飲む暇なんてそうありはせんでしよう。基本柱は常にやるべきことに追われていますからねえ」

そういつて陽明は酒を一気に煽り、ちやぶ台に置かれていた佃煮を口に放り込む。

「ん、この佃煮もいいすねえ。酒のつまみに佃煮ってどうかと思つたんすけど、結構合うもんですな」

「よもやこれほどいい酒とつまみを意外な所でいただけるとは！小さな幸運に感謝だ！」

「……で、陽明さん。あんたが戻ってきたってことはとりあえずひと段落ついたんだろ？状況はどうなつてんだ？」

遠夜がそう指摘すると陽明は先程までの飄々とした態度は崩さず、声に真剣さを混ぜながら話し始めた。

「……御館様にはもうお伝えしましたが、鬼舞辻の大まかな居場所は掴みました」
「なんと！それが本当ならすぐにでも」

「正確な場所ではありません。奴も移動している可能性がありますし、どうやら奴は日常では人間に紛れて生活しているようです」

「なぜそれがわかった」

「別に実際に見たわけじゃありませんが、こうも正確な居場所が掴めないとすると、やはり人に紛れているからとしか言えないでしょう。奴の性格からして、人気のないところにひっそりと隠れるなんてことはしないでしょうし」

「陽明殿！まるで鬼舞辻の性格を知っているかのような口ぶりに聞こえますぞー！」

煉獄がそう聞くと陽明は残っている右目で煉獄を見据える。

「そりやそうですよ。あつしは鬼舞辻に接触したこのある数少ない柱の一人ですから。まあ、元ですけどね」

――

「元柱なのは知っていたが、よもや鬼舞辻に接触したことがあるとは！よもやよもやだ！この短い世代に二人も鬼舞辻と接触した者がいるとは！」

「あつしは運の良いことに上弦の鬼にも鬼舞辻にも接触できた。おかげで左目と左耳、頭皮の左半分持つてかれたんすけど。……あれ、運が良いって言っていていいんすかねこれ」

「どつちにも接触したのにまだ生きてるってすげえ強運でしょ。歴代の柱は上弦に接触

して死ぬ者がほとんどだ」

「それもそつすね。まああつしは逃げ足と隠れ身なら現役の柱にも負けませんよ」

「さすがは情報屋！我々も見習う必要があるな、無道！」

「え、見習うのそこ？」

陽明黒雨。元雨柱であり、現在は産屋敷一族に個人的に仕える情報屋である。基本鬼の情報屋は隠が探つたりするが、十二鬼月等の強力な鬼の情報を探るだけでも命がけとなる。鬼舞辻の情報ともなれば正直、鬼に対して對抗手段のない隠は情報を得られず死ぬ場合の方が多い。そのため鬼舞辻や上弦の情報を探るにはそれ相応の実力がいる。そのため元柱であり、隠密行動が得意であつた陽明黒雨は産屋敷に個人的に仕える情報屋となつた。胡散臭い見た目と話し方ではあるが、話術は相当なものであり、相手から信頼を得ることも警戒されることも自由自在。さらに鑑識眼は一級品であり、弟子も多く存在する。単純な戦闘能力は現役の柱には劣るが、下弦の鬼には引けを取らない。

「鬼舞辻は非常に自尊心が強い奴つす。なのでわざわざ自分が人目を避けて暮らすなんて考えは出てこないでしょう。目立つようなことはしてないでしょうけど、人前には平然と出てくるような生活してると思えます。奴は気配の消し方がうまい。完全に消すのではなく、人と遜色ない程度の気配を放つことで周囲に溶け込む。だからなかなか見つけれない。見た目も人そのものでしょうからねえ」

「……………だからこの前俺にあんな依頼持ってきたんですか？」

「ええ。鬼舞辻らしき匂いを探れなくなってしまうと各地を巡って円で気配を探ってもらいました。あつしの鼻も昔ほど効きませんから」

「あれもうしんどいんでやりたくないです」

「必要になればやってもらうんで」

「ええ……」

「うむ！ 鬼舞辻の痕跡を辿れるのならばそうすることはもはや義務とも言えるだろう！
それが我ら鬼殺隊の役目なのだから！」

煉獄と陽明の言葉に遠夜はげんなりした表情をしながら酒を煽った。あまり飲みなれていない遠夜にも飲みやすい味であり、あまり酒らしさを感じない酒であるため飲み過ぎてしまわないかという考えが脳裏をよぎった。

「しかし、遠夜サンはお酒飲めるんすねえ。日永サンは全く飲まなかったのに」

「そういえばそうだな！ 日永とは何度か食事を共にしたが、酒を飲む場面には一度も出会さなかった！」

「俺は当時飲める歳じゃなかったんで詳しくはなんとも。ただ女性のカナエさんと比べても全然飲めなかったらしいです」

「ほえー、そらまた難儀ですなあ。遠夜サンはそうじゃないみたいなんで一緒に飲み明

かしまししょう！」

「うむ！実に楽しそうだ！柱である我らといえど休息は楽しんでこそだろう！それに俺は無道のことをもつとよく知りたい！」

「やっぱこうなるよねえ……」

胡散臭いのと暑苦しいのに挟まれて普段の飄々とした態度が崩れ、苦笑いする遠夜は少年時代の遠夜に少し似ていた。

そして彼等は深夜遅くまで酒を飲み、遠夜は翌日見事に二日酔いで頭を痛めていた。

――

「ふう」

夜、皆が寝静まった頃に遠夜は一人で縁側にいた。昨日は陽明と煉獄に付き合つて遅くまで飲んでいたが、昨日飲んだ分今日は全く飲まなかつたため酔いは完全に抜けていた。

縁側に座りながら手拭いを取る。開放された遠夜の瞳には無数の星と三日月が映された。

「……………」

虫の声が聞こえ、わずかにそよぐ風が心地いい。日中はかなり暑かったが、夜になって気温も下がり過ごしやすい気候となった。

「無道」

声が聞こえたためそちらを向くと、煉獄がいた。普段の隊服ではなく、雲海が用意したであろう着物を着ていた。

「どーも、煉獄さん」

「敬語でなくていいと、何度も言っているはずだが。我らは同い年であろう」

「柱としては先輩ですからね。それに煉獄さんは柱でも指折りの実力ですから」

「胡蝶はどうなる。彼女の実力も大したものだし、鬼殺隊への貢献度は俺とは違う方向で大きいだろう」

「あいつは古い馴染みなんで。今更敬語なんて使えませんよ」

「それもそうか。ところでこんな夜更けになにをしている」

「ちよいと寝付けなくて。黄昏でただけですよ」

「奇遇だな、俺もだ。やはり最低限の鍛錬しかしていないだろう。体力が有り余って

る」

夜ということもあり煉獄の声は普段と比べてかなり小さい。普段からこうしてくれないかなと内心で遠夜は思った。

「隣いいか？少し話そう」

「構いませんよ。茶でもいれてきましましょうか？」

「頼む」

「緑茶じゃ寝つきがさらに悪くなりそうなので、ほうじ茶いれてきます」

そう言つて遠夜は一度席を立った。

――

「無道」

茶を一口飲んだ煉獄は遠夜に問いかけた。

「普段なぜ目に手拭いを巻いているのだ？お前は日永殿とは違い盲目ではないのだから。傷があるようにも見えない」

「ああ、これですか」

そう言つて遠夜は傍らにある藍色の手拭いを撫でる。

「これで視覚を封じて、他の感覚を鋭くする訓練をしているんですよ」

「ほう？」

「氣の技術の中に『識』つてのがあります、それを習得するには五感全ての発達が必要不可欠です。ああ、味覚はいらなないけど。日常生活において最も頼られている感覚は『視覚』。それに俺はどうも目が良くて戦闘が目に頼りがちになってました。だから他を伸ばすために視覚を普段は閉じています」

「なるほど、日常を修行としているわけか！」

「そうですね」

「だが、他にも理由がありそうだな」

「あれ、わかりますか」

「うむ、なんとなくだがな。日永殿が言っていたのだが、なんでも影の呼吸は特殊な呼吸らしい。それが関係しているのではないか？」

「あー、まあそうですね」

「特殊とはどういういったものなのだ？俺の炎の呼吸とはどう違うのだ？」

「珍しく質問が多いっすね」

「君は自分のことを全く話さないからな」

「……そうですねえ、そうかもしれませぬ」

影の呼吸はもともと盲目の人が作った呼吸なんですよ。その人は水の呼吸の使い手だったらしいんですけど、鬼との戦いで視力を失ってしまったんです。それでその人が

盲目でも戦えるような型を作った呼吸、それが影の呼吸です」

「なるほど、水の呼吸からの派生した呼吸だったのだな」

「ええ。まあ珍しいのはその影の呼吸を最初に作った人は柱になれなかったのに継承が
続いていることですかね」

「なに？」

「派生してできた呼吸は全てが継承されるわけじゃない。基礎となる炎、水、岩、風、雷
の呼吸とは違ってそれらを基礎とした独自の型ですからね。その作った本人にしか使
えないことが多い。今だと俺が知ってるのは花の呼吸くらいですかね、派生型が継承さ
れてるの」

柱は基本継子を作り自らの型を継承させる。育手が継承させることも多々あるが、育
手は基本となる炎、水、岩、風、雷のどれかを教えて継承させる。しかし人によつては
その教えられた型が合わない場合がある。柱は継子を取り、その継子がどういう型が合
うのかを試行錯誤しながら修行をつける。基礎の呼吸をそのまま極めるか、それとも独
自の型を作るかも柱がある程度面倒を見ることもある。

「柱にも独自の型を使う者は多い。だがそれを継承できるかはわからないからな。我が
煉獄家は代々炎の呼吸を継承しているが、基礎となる呼吸だ。そう考えると、派生型を
家系で継承するのは珍しいな」

「煉獄さんのところはちゃんと家系で継承してるんでしょうけど、うちは違いますよ」
「そうなのか？」

「ええ。だって、雲海さんは影の呼吸の使い手ではないでしょう」

「……確かにそうだな」

「影の呼吸はその素質がある奴ならば誰でもいいんですよ。無論炎の呼吸も煉獄家のみに伝えているわけではないでしょうけど、影の呼吸はもつとゆるい。素質があれば孤児だろうと犯罪者だろうと誰でも継承します。でも伝える相手は一人だけ。どんなに素質がある者がいてもその原則だけは破らない。その結果、いつか途絶えるものだとしても、ね」

そう言って遠夜は空を見上げる。その瞳には月や星が映されているはずなのに、なにも見えていないように煉獄は感じられた。

「影の呼吸は初代の使い手が壱ノ型の原型となるものと壱ノ型を作り、伍ノ型までを二代目の使い手が作り上げました。その二代目が、初代影柱です」

「無道は確か、四代目影柱だったな」

「ええ。影の呼吸はもともと『無明の舞』と呼ばれるあらゆる奇襲や攻撃に対応できる舞が原型になってます。そして影の呼吸は相手の呼吸を知り、自分の呼吸を相手の呼吸に合わせて、そして相手の呼吸を乱すことを真髄にしています。だから影の呼吸は壱ノ型が

基礎であり、奥義なんです」

「炎の呼吸とは随分違うのだな」

「歴史も浅いですからね。だから身体能力を発揮していくタイプの鬼にはめっぽう強いですけど、強力な血鬼術を使う鬼には相性が悪いです。だからそれを補うために、式から陸ノ型がある」

「……うむ、よくわからないな」

「まあ実際に見ないとあんまり想像つかないかもしれませんがね」

「そういえば俺は、無道と共に任務に赴いたことはないな」

「そうでしたっけ？」

「ああ。だから影の呼吸がどのようなものなのか見たことないのだろう。そうだ！いいことを思いついたぞー！」

これは嫌な予感がするぞ、と遠夜は内心で冷や汗をかき始める。向上心が高く、好奇心旺盛な煉獄のことだ。この後なにを言い出すか何となくわかってしまう。

「明日、俺と手合わせしよう！」

ほらやっぱりと遠夜は天を仰ぐ。そして即答した。

「嫌です」

「そう言うだろうと思ったが、鳴海殿の協力を仰げば従わざるを得ないだろう！」

「それは卑怯なんじゃないですか？」

「なんと言われようが俺はお前と手合わせをするぞ！そして終わったら共に食事をしよう！俺がいい飯屋を知っている！心配するな、俺の奢りだ！」

「話聞いてます？」

知らぬ間にどんだん話を進めていく煉獄に顔を引きつらせながらため息をつく。

「これは逃げられんか……」

やれやれと思いつつ頭をかく。隣では煉獄の笑い声が夜空に吸い込まれていった。

そして翌日、遠夜は一日中煉獄の相手をさせられたのだった。

肆

「はあ……」

普段とは打って変わって気の抜けたような声を遠夜は上げる。

「いやあ、随分気の抜けた声ですなあ、遠夜さん」

顔の左半分が火傷のような跡で覆われた男、陽明黒雨はただれた頭を撫でる。

「……こんな風に気を抜いてられるのも、久々なんで」

「それもそうっすねえ。先日は先日で鳴海サンが凄かったですから。母は強しってことですかねえ」

「あんな怖い母親がそんなごろいてたまりますか」

「あつはつは！それもそうっすね！ちなみに、貴方の母君はどうでしたか？富岡サン」

そう言つて隣にいる長髪の男、富岡義勇に目をむけた。

「……………俺の母も、強い人だった。姉がよく似ていた」

富岡は少し考えるような素振りを見せながらそう答えた。

「へえ、お姉さんはお母様似だったんすねえ」

「あまり、記憶にはない。両親は物心ついて少ししたら亡くなった」

「おっと、そいつは失礼」

「……………」

「知ってることを言うのは意地悪いんじゃないんすか？」

「そうとも言いますね」

そう言いながらくつくつと陽明は笑った。

「あんたは、昔から変わらないな」

「そつすか？」

「そう見える。少なくとも、初めて会った時とは変わっていない」

「くく……………そういう富岡サンは、昔よりも無口になりましたね。なにかあったんですか

いっ。」

そう言われた富岡はなにも言わない。ただ心なしか、その瞳には哀しい光が宿っていた。

「ま、鬼殺隊に居て何もない方が珍しいですか。さて、あつしはそろそろのぼせそうなんでお先に上がらせてもらいますわ」

言いたいことだけ言って陽明は温泉から出て行った。

風呂場には富岡と遠夜だけが残された。

「富岡さんは、あの人と知り合いだったんですね」

「……………あれは、8年前のことか」

「長。そんな前なんですか」

「俺の師である鱗滝さんの、後輩らしくてな。俺が修行時代に一度会った」

「へえ、それはそれは。確か、あの人ももと水の呼吸の使い手でしたね」

「初めて会った時既に柱は引退して、情報屋になっていたがな。その後何度か顔を合わせている」

「あんな食えない人とよく長く付き合い続けられますねえ」

「好き好んで続けているわけではない」

「でしようね」

義勇はもともと人との距離の取り方が上手くない。いや、もはや下手であると断言できるとは思えない。そんな義勇に陽明のように飄々としてなにを考えているのかよくわからないような人間の相手は苦でしかないはずだ。

尤も、それは義勇だけでなく遠夜にも言えることだ。遠夜は自らの心を表に出さないようにしている。自らの内心を悟られたくないからだ。だがあの陽明という男はまるで内心どころかそのさらに奥まで見透かすような態度と言動をほのめかすことがある。遠夜からすれば恐怖でしかない存在でもあるためあまり関わりたくはないのだが、向こうがやたら絡んでくるし、そもそもあの男の持つてくる情報は信憑性が非常に高い。柱

という立場上関わらざるを得ないような状況が多い。

「あの人は御館様よりも怖えですわ」

「……………」

産屋敷は根拠のない直感や先見の明といったような常人ならざる勘の良さがあるが、陽明はそれとは違い根拠や理屈に基づいた勘の良さがある。人のふとした仕草や言動等から相手の心理を探り当てる。質の悪いことにそれらは非常に良く当たるし、加えてあえて人の触れられたくないところを突いてくることもある。遠夜も相手を煽るためによくそういうことをするが、陽明は煽りではなく合理的に物事を判断した上でそういうことを行うため反論ができないことが多々ある。先ほどのどのような心理なのかは不明だが。

「……………ほんと、厄介な人だよ」

「大いに同意する。鬼殺隊にあればほど厄介な人物は他にいないだろう」

「なんだ富岡さん、今日は珍しく饒舌じゃないですか」

「……………そうかもな」

義勇は温泉の湯で顔を洗うところ言った。

「温泉など、随分久しぶりだからかもしかかもしれない」

「基本、柱は休みらしい休みなんてないですからね」

「……だからそこ、御館様の配慮なのだろう」

「ほーんとできた上司ですわ。でき過ぎてて人間味がないけど」

「……………」

義勇は遠夜を見る。普段と違い手拭いを外しているため、遠夜の瞳が顕になっている。見たところ、盲人というわけでも無さそうだが、どこか特殊に見える。根拠はないが、『なにか』が違うように思えた。

「無道は」

「ん？」

「目が、変なんだな」

「ははっ、なんすかいきなり」

「そう感じたただけだ」

「そうですか。否定はしませんけど、それかなり失礼なこと言ってるって自覚あります？」

心外！とでも言いたいような表情を向けられるが、実際その部分だけならば少し失礼なことを言っている。口下手な義勇のことを知っている遠夜だから流せるが、全く知らない人からしたら喧嘩を売っているようにしか聞こえない。

「普段視覚を塞いでいる主な理由は修行なんですけど、ちよいと俺の目が特殊だったん

で師である兄に塞ぐように言われたんですよ」

「……………日永か」

「同時期に柱でしたもんね、富岡さん」

「…………お前たち兄弟と任務に出た時は、だいたい何か起こる」

「疫病神扱いするのやめてもらえますか？」

「いや…………」

「わかってますよ、そういうつもりで言ったわけじゃないことくらい」

義勇は、陽明は陽明で相当地悪で皮肉屋で掴み所のない性格だと考えているが、遠夜は遠夜で相当なものだと思った。

「兄さんの時はなにかあったんですか？」

「日永との任務は、ほぼ必ず十二鬼月の下弦が出た。元より数回しか共に任務をこなしたこともないのに、だ」

「それは災難ですねえ」

柱の任務は十二鬼月の殲滅など難易度の高いものが多いが、必ずしもそうとは限らない。厄介な鬼や、多数の鬼を相手にするような任務も無論存在している。毎回十二鬼月に遭遇するなど、運が良いのか悪いのか。

「お前とは、違う」

これも聞く人次第では誤解を招きそうだと遠夜は思った。

「でしようね。富岡さんが言ってるのって、あの二年半前のことでしょ」

「ああ」

「冬、でしたね。一家全員惨殺されて、たまたま外にいた長男だけ生き残った。そして妹は鬼になった」

「……………」

二年以上前

雪が積もっている山道を走る。全集中の呼吸で強化された身体能力ならば雪が積もっていようが普段の速度と大差ない速度で走ることができるが、それでも走りにくいことに変わりはない。少し煩わしく思いながらも目的となる場所まで全力で駆けた。

鋌鳥の伝令で付近に鬼舞辻無惨がいる可能性が伝えられて駆けつけたが、雪で足止めをくらってしまい到着が1日ほど遅れた。

鬼舞辻無惨はすぐに行方をくらませる。だから早急に到着したかったのだが、これほど遅れてはもう現地にはいないだろうと義勇は考えていた。

そしてこの任務は少し前に柱へと至った義勇より一つ下の青年との合同だった。合同の理由として、青年が近くにいたことと相手になるのが鬼舞辻である可能性があることが挙げられる。

青年の名は、無道遠夜。先代影柱の無道日永の義弟らしい。

遠夜は身軽さが売りらしいため雪が積もっていない木々を飛ぶように伝いながら現地向かかっていった。これほど遅れては、残念ながら現地にいる人間は殺されているか、鬼にされているかの二択だろう。望み薄だが、速く動ける遠夜を先行させた。

視覚を塞いだままあれほど速く、軽やかに動ける遠夜に感心しながらも義勇は現地へと急いだ。

――

義勇が現地に着くと、遠夜は木の枝に腰かけていた。

「無道、状況は」

そう義勇が聞くと、遠夜はあごをしゃくつて義勇に視線を促す。そこには少女を担ぐようにして引き摺る少年の姿があった。少女の服は所々血がついている。

どうやら間に合わなかったらしい。

このような光景は何度も見てきた。いつまで経っても慣れはしないが、それでも同じような悲壮な光景への耐性は残念ながら多少なりとも付いてしまった。

「……………」

「あの娘、多分鬼になると思いますがどうしますか？」

まるでどちらでもいいような口調で言う遠夜の言葉に返す言葉はない。いや、返す必要はない。

自分達は鬼殺隊。ならば、その役割を全うするまでである。

「あ」

素つ頓狂な声がしたと思ったら、背負われた少女は突然暴れ出し、少年もろとも崖の下に落ちていった。

「……………」

義勇が自らの過去の傷が呼び起こされ、胸の奥に鋭い痛みが走ったように感じたがそれを無視する。

「ぐぐぐ」

それだけ言って義勇は再び走り出した。

「……………」

絶を解いて、纏に切り替えると遠夜は義勇の背中を追った。

義勇が少女と少年に追いつくと、少女は少年に覆いかぶさっていた。よく見ると先程よりも少女は大きくなっているようだった。

「あー、鬼になっちったか」

「……………」

なにも言わずに富岡は飛び上がる。そしてそのまま鬼と化してしまった少女の頸を落とそうと振りかぶる。

「っー！」

それに気づいた少年は、少女の頸を掴んで横に転がる。束ねていた髪は切られたが、義勇の刀が少女の頸を落とすことはなかった。

「ほう」

素人の咄嗟の判断としては上々なものだろう。

義勇は感情のこもらない瞳を少年に向けた。

「…なぜ、庇う」

「妹だ…俺の…妹なんだ！」

義勇はなにも言わない。

少年に抱えられた少女はうめき声を上げると、少年の腕の中で暴れ始めた。

「くくつ、こいつはあ面白れえ。そんなろくに話すこともできない獣のような奴が妹とは」

少年の真上にある木の枝の上で胡座をかきながら遠夜は皮肉げにそう告げた。

「それでも！俺の妹だ！つ！禰豆子！」

「……それが、か」

なおも暴れ続ける少女に少年はまともに身動きが取れない。

そして義勇がそれほど大きな隙を見逃すはずがない。高速で少年に迫る。

「つー！」

咄嗟に少年は少女に覆いかぶさった。

そして次の瞬間には少女は義勇に拘束されていた。

「そいつは悪手だろ、少年」

そう呟く遠夜の声は少年には聞こえない。ただ困惑し、妹の少女を探した。すぐに少女は見つかったが、その時には既に義勇に拘束されていた。

「禰豆子！」

「動くな」

「つー！」

「……俺の仕事は、鬼を斬ることだ。当然、お前の妹の頸もはねる」

「待ってくれ！禰豆子は誰も殺してない！」

「はは、今し方殺されそうになってた奴がよく言う」

「それでも！まだ誰も殺してない！家には嗅いだことのない匂いがあつた！なにがあつたかはわからないけど、でも！皆を殺したのはそいつだ！禰豆子も……なんでそうなったかはわからないけど！」

「簡単な話だ。傷口に鬼の血を浴びたからだ。人喰い鬼はそうやって増える」

「禰豆子は誰も殺さない！」

「……………先程殺されそうになっておきながらよく言う」

それさつき俺が言ったんだけどなあ、と考えたがそれは口にしなかった。

「禰豆子は！俺のことはちゃんとわかるはずだ！俺が誰も傷つけさせない！俺が禰豆子を人間に戻す！俺が治します！」

「治らない。鬼になつたら人間に戻ることはない」

「探す！必ず探し出す！家族を殺した奴も見つけ出すから！だから！家族を殺さないでくれ！俺が全部ちゃんとするから！だから！」

まるで血を吐くようだ和别人事のように遠夜は思った。

鬼殺隊に入ってからこのような場面は残念なことにごまんと見てきた。仕方のない

ことだが、彼らにできることはない。鬼殺隊の歴史の中でもこのような状況から鬼殺隊の隊士になったという隊士も多いことだろう。

この少年も、これが原因で鬼殺隊に入るのだろうか。そんな関係のないことを遠夜は考えながら義勇の行動を待つ。

「やめてくれえええ！」

その叫びを聞こうともせず、義勇は刀を少女に向けた。

そしてその刀が少女を貫く前に、少年は頭を地面に擦り付けた。

「……お願いします。やめてください……どうか、どうか妹を殺さないでください……お願いします」

嗚咽が混ざった声だった。

見たところ、この少年はまだ12か13といったところだろう。家族をわけもわからず一瞬で失い、そして残された妹も人ならざるものに変化してしまい、殺されそうになっている。この歳の少年には、あまりにも辛すぎる経験だ。茫然自失になってもおかしくないものだというのに、まだそう懇願することができるだけこの少年は強いのかもれない。

だが、その言葉と行動は義勇には届かない。

義勇の気配が一気に怒りのものに変化する。

「生殺与奪の権を、他人に握らせるな！」

「はっ！」

「惨めつたらしく蹲るのはやめろ！そんなことが通用するなら、お前の家族は殺されて
いない！奪うか奪われるかの時に、主導権を握れない弱者が、妹を治す☒仇を見つける
☒笑止千万！弱者には、なんの権利もない！悉く、強者に捻じ伏せられるのみ！」

義勇がこれほどこしやべるところを初めてみた遠夜は小さくほう、と声を上げる。今回
の合同任務で初めて組むが、義勇は基本言葉を発しない。最低限の言葉しか発するところ
を見たことがなかったため少し新鮮だった。加えて感情を露わにしないためここま
で感情的になるのは初めて見たのだ。

「鬼を人に戻す方法は、鬼なら知っているかもしれない！だが！鬼共がお前の意思や願
いを尊重してくれると思うな！当然、俺もお前を尊重しない！なぜお前はさつき、妹に
覆いかぶさった！あんなことで守ったつもりか！なぜ俺に斧を振らなかつた！そのし
くじりで、妹を取られている！お前ごと、妹を串刺しにしても良かったんだぞ！」

少年の表情は絶望に染まる。義勇がなにを言っても、妹を救う気がないことがわかっ
てしまったからだ。

そして少年は、さすがのように遠夜の方に視線を向けるが、当然遠夜も妹を救う気はな
い。塞がれた目を向けて皮肉げに嗤った。

「泣いて乞えば聞き入れてくれるとでも？ 悪いね、そんな気は全くない。今お前がするのは、泣いて絶望することか？ まだ妹は殺されてねーぞ？ ほれ、頑張れ」

煽るように嗤う遠夜の言葉とほぼ同時に、義勇は少女に刀を突き刺す。悲鳴が雪の森に響き渡った。

「やめろおお！」

少年は雪に埋もれた石を拾い上げ、義勇に向かって投げた。

だが義勇は鬼殺隊最強の柱の一人。その程度は簡単に弾き飛ばす。

少年は斧を拾い上げ、義勇に向かってもう一つ石を投げ飛ばし、さらに遠夜にも石を投げる。

義勇に投げた石は義勇の顔面に真っ直ぐ飛んでいったが、遠夜の方に投げられた石は遠夜の顔の横を飛んでいき、遠夜の真上の枝に当たった。

「……へえ、やるじゃん」

上から迫る気配を感じながら遠夜は刀を抜く。そして少年の投げた石によって落ちてきた雪の塊を刀で弾き飛ばし、同時に少年が投げて枝に当たり落ちてきた石を掴む。

「咄嗟の行動であそこまで精度の高い投擲と判断ができるとは。素質はあるかもな」

義勇に突っ込んでいった少年は、義勇に刀の柄で殴られ、失神する。そして突っ込む直前に上に投げた斧が回転しながら義勇に向かっていく。必要はないだろうと思いな

がらも掴んだ石を空中で回転しながら義勇目掛けて落ちていく斧に投げつけて、斧を弾き飛ばした。

少年のその斧を投げる行動に驚愕した義勇は、少し固まる。まさか普通の少年が、これほどの行動ができるとは思わなかったのだろう。

そしてその硬直が隙となり、少女は義勇の拘束を蹴りで脱出した。

「しまっ！」

「あ」

まさか義勇の拘束から抜け出すとは思ってなかった遠夜は少年に迫る少女を見ていることしかできなかつた。

ああ、あの少年、死んだな。と他人事のように見ていたが、次の行動に義勇も遠夜も言葉を失うことになる。

少女は、少年を庇うように立ち塞がったのだ。

鬼は飢餓状態になると人を食おうとする。栄養価が高いからだ。そして捕食対象は親でも家族でも変わらず食い殺す。

この少女は義勇によって傷を負わされ、しかも鬼に変化したばかりだ。鬼になるには

かなりの体力を使うため今の少女は相当深刻な飢餓状態であるだろう。なのに、この少女は少年を殺そうとはせず義勇と遠夜から守るように立ち塞がり、義勇に襲いかかっている。

「……へえ、こんなことあるのか」

義勇は少女の攻撃を悉く回避すると、少女の首に手刀を当てて気絶させ少年の横に下ろした。

「……どーするんですか？」

「……………」

「まさか考えてないとは言いませんよね」

「……………こいつらは、なにか違うのかも知れない」

「普通でないことは確かですね。でもこれ一応隊務規程違反ですよ」

「わかっている」

「……ま、義勇さんがそう判断したなら任せますよ。どーせ御館様にはすぐバレるだろうし、ここまで来たらもう共犯者ですから」

「……………感謝する。無道、竹の猿轡を用意しろ。念のため、妹につける」

「はいはいわかりましたよつと」

——

「んっ……」

「起きたか」

「はっ！」

少年は起き上がると、傍に眠る少女を抱き寄せる。当然だろう。先程まで妹を殺そうとしていた男がいるのだから。

「狭霧山の麓に住む鱗滝左近次という老人を訪ねろ。富岡義勇に言われてきたと言え。今は日が差していないから大丈夫なようだが、妹を太陽の下に連れ出すなよ」

それだけ言うと言義勇は姿を消した。

「やれやれ、さつきはあんなに饒舌だったのに肝心なところで言葉が足りない」

残された遠夜はそうぼやきながら頭を搔く。そして少年に近寄り、見下ろした。

「少年、さつきの人の言われた通りにしな。まず狭霧山に向かえ。道中で妹を日に当てないで運ぶ方法を確保しろ。それだけでいい」

「あ、あの！なんで、日に当てちゃいけないんですか？」

「鬼は日光に弱い。日光に当たると鬼は死ぬからだ」

「……………」

「家族の埋葬を済ませたら、すぐに旅立て。ここにいつまでもいる意味はもうねーよ」
先程までの煽るような口調ではなく、ただ淡々と事実のみを突きつけていく。少年の視線が悲しみに打ち拉がれ、俯く。

「……どうするかは君が決める。このままここでひっそりと過ごすのも一つの道だ」
「……………」

「んじゃ、俺行くわ」

妹を抱きしめる少年に背を向けて遠夜は歩き出す。

だが数歩歩いたところで足を止める。

「あ、そうだ。これだけは聞いておかねーと」

「え?」

「少年、君は妹が人を喰った時どうする」

「え……………」

少年は困惑に顔を歪める。考えたくもないようなことなのだろう。だが、少年が歩もうとしている道は茨の道だ。それを自覚させる必要がある。その道に行くように不本意とはいえ促したのは遠夜と義勇なのだから。

「……それは、ちゃんと考えておけよ。それがお前の選んだ道だ」
それだけ言うのと遠夜は手をヒラヒラ振って歩いていった。

少年はその後ろ姿が見えなくなると妹を背負ってもう誰もいない冷たくなった家に帰っていった。

「そんなこともありましたね」

「……………」

「その後、あいつらどーなったんです？」

「俺の師である鱗滝さんの下で修行をしていると聞いた。だがそれも二年前の話で、今は知らん」

「二年ね。俺は影の呼吸なんで修行期間他と比べてかなり長いんですけど、水の呼吸ってどれくらい修行するんです？」

「……俺は、二年弱と行ったところか」

「ならもう最終選別まで行ってるかもしんないっすね。前回の藤襲山にいたんじゃない

んですか?」

「……………」

「陽明さんなら知ってるかもしれないですね」

「……………さあな」

(……………これ、多分富岡さんあの少年がどうなってるか知ってるな)

識による判別であるが、遠夜はあの少年の現在を義勇が認知しているであろうことを察知した。

本人は興味無さげにしているが、気になるような雰囲気はなんとなく察知できた。思いの外義勇はわかりやすいのかもしれないと内心で苦笑する。

「そろそろ上がります。富岡さんはどうします?」

「……………俺はもう少しいる」

「そうですね。んじやごゆっくり〜」

遠夜は湯船から立ち上がる、そのまま風呂場から去っていった。

残された義勇は水面に写る自分の姿を暫し見つめてから言った。

「……………また、間違えてはいないだろうか。錆兎」

その問いに答える人はいない。

| | |

雲海の家で三日ほど過ごした遠夜は、産屋敷によって用意された温泉宿に訪れた。現在、交代で休暇を柱は取っているが、その交代時期が人によっては重なる。主に任務の兼ね合いによってその時期が変化する。

そして遠夜と義勇は休暇の時期が重なったのだった。(陽明はそれにくつついてきただけ)

温泉を上がると、遠夜は用意されていた着流しを着て一人宿周辺を散策していた。宿周辺は川が流れており、川のせせらぎが聞こえどこか涼しげな雰囲気がある。

川のすぐそばを歩きながら川を眺める。清らかな水が止めどなく流れており、その水面が遠夜の顔を映し出す。尤も、手拭いで視覚を塞いでいるためそれを見ることは叶わないが。

昨日の夜に宿を訪れたため周辺がどのようになっていたのかを知らなかった遠夜はなんとなく散策に出たが、意外と英断だったかもしれないと考えながら岸边を歩く。無論日輪刀を携えた状態であるが。

なんとなく足を止めて目の前にある大きな岩に飛び乗り、腰を下ろす。神経を集中さ

せると、付近の自然の大いなる気配が伝わってきた。

川の水

生茂る木々

野生の動物や虫

それら全ての気配を感じながらも、その中に唯一人の気配を感じ取った。

「いいところね」

そう背後から声がかけられる。聞き慣れた声や気配を間違えるはずもなく、遠夜はその人物が誰かを言い当てる。

「よう、しのぶ。休暇は今日からか」

「ええ」

「蝶屋敷の方はいいのか」

「今は鬼も少ないし、重傷の人もいないから大丈夫。アオイと隠の方に任せてきました」

「そうかい」

「遠夜はいつから？」

「ここは昨日から」

「そう。ならもう温泉も入ったの？」

「そりやな。なかなかいいぞ、ここ。飯もうまい」

「あら、さすが御館様がご用意してくださっただけあるわね」

「珍しく楽しそうじゃねえか」

「あら、私が楽しそうじゃない時があるとも?」

「はっ!いつも内心で怒り浸透の奴が言う言葉じゃねえな」

普段のしのぶからはいつも怒りの気配がする。もともとあまり笑う質の人間ではなかったが、カナエが死んでからはいつも怒りの気配がするようになった。そのくせ顔は笑顔で口調は丁寧なためその怒りに気づく者は残念ながらほとんどいない。

だがそのしのぶから珍しく楽しそうな気配が伝わってくるため内心で少しだけ遠夜は驚いた。

「そうね、温泉なんて随分久々だからかしらね」

「まあ、そうだろうな」

「それに、もう少ししたら甘露寺さんも来てくださるから。甘露寺さんとは柱合会議以外では、久しくお会いしてませんでしたから」

「そういや、二人は仲良かったな」

「ええ、貴方のように皮肉なことばかり言うような方ではありませんから。私も甘露寺さんも」

「言うじゃねえか、鉄仮面」

「黙りなさい、問題児」

遠夜の皮肉に笑顔のまましのぶは額に青筋を浮かべた。

怒りの気配が膨れ上がるのを感じ取るとともに、遠夜はしのぶの身体から今まであまり感じなかった気配を感じ取った。

「……………」

「あら、なんででしょうか」

唐突に口を閉じてしのぶの方に顔を向ける遠夜に疑問符を浮かべながらしのぶは首を傾げる。

遠夜の円で感じ取った気配は、今までどこかで感じ取ったことのある気配なのはわかる。しかしいつ、どこで感じ取ったのかはわからない、思い出せない。

「……………」

「なんなんですか？富岡さんじゃあるまいし、ちゃんと口に出してくださいますか？」
なにも言葉を発しない遠夜に少しずつ苛ついてきたのか、しのぶの口調がキツくなってくる。だがそれでも遠夜は言葉を発しない。

「……………ああ、そういう」

「やつと言葉を発したと思ったたらそれですかなんなんですか富岡さんですか貴方は」

「そこで富岡さんを引き合いに出すのな、お前」

「だって、富岡さんは口下手天然ドジっ子なのだから引き合いに出されても仕方ないでしょう」

「いやボロクソに言うのな。一応歳上だぞあの人」

相当鬱憤溜まつてるのかな、とか思いながら遠夜はしのぶの身体から感じた気配をさらに読み進める。

そして先程の推測は確信へと変わった。

「しのぶ」

「なんですか」

「随分、楽しそうなことを始めたみたいだな」

「……………は？なんのことですか？」

「ま、そう言うだろうな」

まあいいや、と言うと遠夜は立ち上がる。

「なんなんですか？」

「ん？んーにや、なんでもねー」

「気になるようなこといっただけ言っただけ帰ろうとするのやめてもらえますか？」

「ああそうだ。言い忘れてた」

「…………無視ですかそうですか」

「あの宿、今陽明さんいるから気いつけろよ」

「え」

「じゃな」

それだけ言つて遠夜は姿を消した。

「……どうもこいつもですよ、まったく！」

しのぶの拳が近くにあつた枝を真つ二つにした。

その夜、甘露寺と共に食事をしている最中、間違えてしのぶがお酒を飲んでしまい酔つ払つて愚痴を垂れ流し、挙げ句の果てには泣き上戸になって、次の日甘露寺に土下座する勢いで謝つたのはまた別の話。

*

翌日

早朝

宿付近の森の中で剣劇の音が響く。

木刀と木刀がぶつかり合い、周囲の空気を揺らす。

「ふっ！」

片方の振った木刀を長髪の男の木刀が受け止める。

「さすがに、強いですね」

「……………」

手合わせをしているのは、遠夜と義勇だった。早朝に遠夜が森の中で修行しているのを見かけ、その光景を少し見ていたら義勇は遠夜に見つかつた。そこでどうせならということで手合わせを義勇に申し出た。遠夜は義勇が誰彼構わず手合わせするのが好きではないことを知っていたため多分断られるだろうなと思っていたが

『わかつた』

意外な返答が得られたためその瞬間内心で目を丸くした。

だが柱の中でも上位の実力を持つ義勇と手合わせできる機会はあまりないためその申し出はありがたかつた。実力のある者との手合わせは自らの実力を格段に伸ばすことができる。

「つと。これは思ったより実力差があるなあ」

「……………」

手合わせは一本先取で行っているが、想像以上に義勇の実力は高く遠夜は攻めきるこ

とができない。影の呼吸の真髄である『相手の呼吸を乱す』ということができないでいるからだ。

義勇は水の呼吸の使い手であるため、あらゆる呼吸に適應することができる。故に、影の呼吸との相性は最悪であった。もともと影の呼吸は水の呼吸の派生であるため、原点には敵わないということなのかもしれない。

「これは、呼吸使うしかないかなあ」

現時点では全集中の呼吸で底上げした身体能力による剣術の手合わせになっていたため型を使用していなかった。

故に、本気の手合わせをされるとお互い呼吸の型を使うことになる。

「んじゃ、いきいますか」

全集中・影の呼吸 壱ノ型 無間舞踊

円と識を全開にし、相手の動きを先読みし、完璧なタイミングで相手を無力化する。それが影の呼吸の基礎であり、奥義となる壱ノ型 無間舞踊。

威圧感が増加したとわかった義勇は自ら仕掛けに行く。

水の呼吸 壱ノ型 水面斬り

水平に振られた木刀は遠夜に向かって鋭く迫る。しかし遠夜はその木刀を滑るように受け流しながら返し技を放つ。本来なら完璧なタイミングで放たれたこの返し技を

防ぐ術はないが、義勇は手練れ。例えカウンターを完璧に放たれたとしてもそれを回避することができる。

「想定内」

間髪入れずに遠夜は次の型を放つ。

影の呼吸 肆ノ型 絶影

先程の義勇の水面斬りよりも鋭く、空間が斬られたかのように錯覚するほどの一撃が義勇を襲う。

しかし義勇はこれにも対応した。

水の呼吸 漆ノ型 雫波紋突き

遠夜の木刀の刃の面に的確に突きを放ち、その斬撃を止める。完璧なタイミングで受けたことにより、威力的には負けている義勇の技が遠夜の技と相殺になった。

「まだまだ」

影の呼吸 貳ノ型 影法師

絶と練を交互に行いながら高速で移動することにより周囲に影法師が義勇の目には乱立しているように見えるようになる。そして絶えず気配は移動しており、気配のみで遠夜を追うことはできないと義勇は判断した。

だから遠夜のことを待つことにした。

水の呼吸 捨壺ノ型 凧

遠夜には義勇が構えを解いたように見えるが、それだけではないことを本能で察知した。間合いに入るとやられる。そう思わせる何かがあった。

「ならいくしかないよなあ」

影の呼吸 参ノ型 無辺

無数の斬撃が義勇に襲いかかる。

だが義勇はそれらを全て叩き落とした。

「あー、そういう」

無間舞踊と似たような感じか、と遠夜は理解した。恐らく義勇が行ったのは間合いに入った攻撃を全て落とす防御系統の型だろう。

(あれ崩すのは今の俺じゃ無理だな)

現時点での実力では遠夜は義勇には敵わない。純粋な実力で敵わない上にあんな鉄壁の守りを見せられては、遠夜に勝ち目は無いに等しかった。

「なら、あれやってみるか」

深く息を吸い込み、足に気を集中させる。

そしてためた力を一気に解放させ、義勇に凄まじい速度で迫った。

「影の呼吸 陸ノ型……！」

目の前まで迫った遠夜は木刀による刺突を放つ。その突きの数、三。

「甘い」

しかし義勇はそれすらも叩き落とし、遠夜の木刀をへし折った。折られた木刀は碎けて鋒が地面に転がった。

「はあく……俺の負けですね」

「……………」

「こんだけ修行してもまだできないかあ。これもうできる気がしなくなってきたんだけど」

「……日永が創り出した型か」

「ええ。影の呼吸 陸ノ型です。何度も見たし、自分でもかなり練習してるんですけど、これだけはなかなかできないんですよ。言われた通りにやってもできないから、俺が弱いのか、兄さんが強すぎるのか、それともどちらもなのかわかんないっすわ」

「……お前と日永は違う。あいつと同じ感覚でやっても、お前ではできない」

「ははっ、その通りかもですねえ。全く、才能の違いを見せてくれる」

義勇はそういうつもりで言ったのではないのだが、うまく伝えられず遠夜は曲解して解釈してしまった。それを義勇は理解したが、どう伝えればいいかわからず黙り込む。

「相手してくれてありがとうございました。富岡さんこれから任務でしょう?」

「……ああ」

「じゃあ頑張ってくださいね、死なない程度に」

「……善処しよう」

義勇が去るのを見届けて遠夜は日輪刀を抜く。

「いやあ、追いつける気がしねえなあ」

日輪刀に刻まれた『悪鬼滅殺』の文字を撫でながら遠夜は一人呟いた。

――

「あ!無道さーん!」

明るい声が聞こえてそちらを向くと、恋柱・甘露寺蜜璃の姿があった。

「おう甘露寺、一人か」

「今は一人です」

「しのぶと一緒じゃねーのか」

「あー……えつと……」

「……まさか、しのぶに酒飲ませたりしてねーだろうな」

「ぎくつー！」

「おいおい、しのぶまだ未成年だぞ？」

「あ！で、でも！その！私が飲ませたんじゃなくて！しのぶちゃんが間違えて飲んじゃって……それで……」

「いやわかるよ。甘露寺は宇髓さんみたいに無理に酒飲ませたりしないだろうから」

宇髓は派手な性格故に飲み場でも派手な振る舞いをする。故に他人に酒を飲ませるような振る舞いもすることがある。無論限度は弁えているが、それでも酒が弱い人からしたらたまったものではないだろう。

だが甘露寺はそのような振る舞いはしない。そもそもまだ未成年故にあまり酒は飲まない。19という年齢故ほぼ成人と変わらない扱いを受けるため時々付き合いで飲むことはあっても他人に飲ませるようなことはしない。

「よかつた〜わかつてくれた〜」

「んで、宿の食材はちゃんと枯らしたか？」

「枯らしてないです!!!」

「ええ、本当かあ？」

「ほ、本当です！……多分」

最後に多分と付け加えた甘露寺の様子が面白くてくつくつと遠夜は笑う。そんな遠夜を見て甘露寺は風船のように頬を膨らませた。

「むうー！酷いです無道さん！」

「お前ほんつと面白えわ」

「むうー！」

「はいはい悪かった悪かった。んで、しのぶは大丈夫なのか？」

「あ、はい。お酒飲んだ直後は、こう、ぐあぁー！ってなっていましたけど今は気持ちよさそうに寝てます」

「二日酔いにならねーといいがな」

「それと」

「ん？」

「しのぶちゃんが怒ってた理由の半分以上は無道さんのことでした！」

「……………」

その言葉を聞いて遠夜はバツが悪そうに額に手を当てる。

「今度はなにしましたんですか？」

「心当たりが多すぎてわからん」

「それはもう大人しく怒られた方がいいですね！」

「絶対に断る」

「捕まえてしのぶちゃんの前に放りだしてしまえばいいんですよね！なら私にも勝機がありますね！」

「やってみろやあ！」

その後、柱二人による本気の追いかっこが森の中で繰り広げられ、二人揃ってしのぶのお説教を食らうことになってしまったのだった。

*

「あーあ、休暇だったのになーんでしのぶの説教まみれにならにやなんねーのかねえ」

「それは貴方が悪いでしょう、遠夜」

「違いねえ」

「自覚あるんですか」

休暇最終日、遠夜としのぶは宿の食堂で食事をしていた。

「やれやれ、今日で休暇も最後か」

「早いものですね」

「こんなゆっくりとできるのは、次はいつになることやら」

「当分は無理でしょうね、お互い」

「そうだな。次の休暇が永遠の暇にならねーといいが」

皮肉げに嗤う遠夜の言葉にしのは返さなかつた。

遠夜が言っている言葉は、残念ながら現実味を帯びている。鬼殺隊にいる以上いつ死ぬかはわからない。そういう場所に常に身を置いている以上、遠夜の言葉をばかかしいと一蹴することはできない。

「しのは明日までか？」

「いいえ、今日までです。蝶屋敷の運営の都合上休暇の日程を二つに分けてもらっていいから」

「そうか」

「いい気分転換になりました。明日からまた任務に励めそうです」

そう言つて笑うしのはの顔はカナエとものとよく似ていた。やはり姉妹だけあり、顔立ちはよく似ている。しかし遠夜の知るしのはの笑った顔とは違うものだった。

「……………人のこと言えないか」

「え？」

「いや、なんでも」

不思議そうに首を傾げるしのぶを他所に視覚を塞いだままの目で外を見る。月の明かりがえ遠夜の顔を照らした。

そして同時に鏖鳥が飛んでくる。

『伝令ー！伝令ー！無道遠夜！胡蝶しのぶ！スグニ那田蜘蛛山へ向カエー！隊士多数ガ犠牲ニナツテイルー！』

「……やれやれ、こうなるか」

「そんなに遠くないわね。すぐに向かいますよ」

「ああ」

しのぶの言葉を肯定するとすぐに部屋へ向かい身支度を整える。
準備が整い外に出ると、そこには陽明がいた。

「出動ツスカ」

「ええ」

「次是那田蜘蛛山らしいつすね」

「さすが、耳が早い」

「一応あつしが持つ情報を伝えておこうと思ひましてね」

「なんすか」

「那田蜘蛛山、あそこには複数の鬼がいますね。その中で一番強い鬼は、十二鬼月です」

「……上弦ですか？」

「いいえ。下弦です」

「……まあ一般隊士なら仕方ないか」

「そういうことつす。それに十二鬼月以外の鬼もそこそこ強いみたいなんでお気をつけて」

「どーも」

それだけ言うと陽明は宿へと戻っていった。

そしてそれといれ違うようにしのぶが遠夜の横に着地する。

「お待たせしました」

「いくか」

「ええ」

「那田蜘蛛山、十二鬼月いるつてさ」

「……なるほど、承知しました」

短い会話を済ませると、二人の姿が消える。

その後ろ姿を陽明は一人眺めていた。

「お気をつけて」

その言葉は二人には届かない。

伍

「なあ」

しのぶと共に走りながら遠夜は声をかける。

「なんです?」

「これからいく那田蜘蛛山ってしのぶは行ったことあんのか?俺行ったことねーんだよ」

「いえ、私も行くのは初めてです。ですが近辺の言い伝えのようなものは聞いたことがあります」

「言い伝え?なんか曰く付きの山なんか?」

「はい。言い伝えだと、『巨大な蜘蛛の神が住む』とかなんとか」

「へえ」

「……聞いておいてすごく興味無さそうですね」

「実際ねーよ」

「あら、那田蜘蛛山について聞いてきたのは遠夜の方ではありませんか」

「俺が知りたかったのは、山の雰囲気や外観、内部構造についてだ。言い伝えなんか知っ

ても役にたたねーよ」

「それもそうですね」

それから二人はしばらく無言で走り続けた。

鳥の案内に沿って走ること数十分、遠夜の円がいくつか気配を感じ取った。

「近いな」

「鬼は？」

「いる。複数なのはわかるが詳しい数はもう少し近づかないとな」

「そうですか。あ、山が見えてきましたよ」

そう言うしのぶの視線の先には、大きく聳え立つ山があった。

「あー、五体くらいいいそうだな。隊員らしき気配もある」

「そうですか。でも、鬼も人も仲良くすれば良いのに。そうすればこんな山の中で殺し

合う必要も無いんだから。遠夜もそう思いませんか？」

「はっ、思ってもねーことに同意を求めんな。そいつはお前じゃなくてカナエさんの思
いだろうが。カナエさんどこまで本気だったかは知らねーがな」

「……………」

「行くぞ」

「はい」

しのぶは遠夜の言葉に首肯すると、暗い山に躊躇なく入っていく遠夜の背中を追った。

――

「ん〜思ったよりも面倒なことになってるねえ」

遠夜は山の中を進みながらそう呟く。

「面倒とは？」

「死んだ隊員が操られてる。人形を吊して操るみたいな感じで。今んところ操作系血鬼術の鬼が猛威奮ってるな。他は気配はするけど場所までは」

「あら」

「それも結構数いるな。全部死んで……あ、生きてるのも操られてるのか？」

「本当に便利な能力ですね。実は遠夜も鬼なのでは？」

「氣と血鬼術一緒にすんな。んで、動き方だが、手分けした方が早いな」

「といたしますと？」

「まず数が多い。一つ一つ潰してたら無駄に死者が出る。十二鬼月らしき奴の気配もあるから下手に時間かけたくなえ。鬼を潰しながら隊員の救助つてとこか」

「わかりました」

「俺は東、しのぶは西な。西の方にはカナヲの気配もあるからしのぶはカナヲと合流しろ」

「遠夜は？」

「俺は一人で構わん。それに、富岡さんの気配が近づいてきてる。多分富岡さんも来るから合流するならそつちだな」

「わざわざ私とカナヲを一緒にしてくれるのですね」

「これ以上、継子を亡くしたくねーだろ」

その言葉にししのぶは返事をしない。僅かに気配が動いたが、すぐに普段のしのぶの気配に戻った。

「じゃ、そういうことで」

「はい」

二人は同時に姿を消した。

「くそ！あいつ絶対ぶん殴ってやる！」

「そういうこと言うのやめろ！」

「だって！あいつ俺のことクソ猪とか言いやがったんだぞ紋次郎！」

「炭治郎だ！」

村田が死んだ隊員の相手をしている間に操作している本体の鬼を倒すということ
炭治郎は伊之助と共にその鬼の元へ向かっていった。

だが全く緊張感のない会話が夜の森に響いていた。

「つか！なんだこの糸鬱陶しい！」

「それだけ鬼に近づいているんだ！」

移動が困難なほどではないが、進めば進むほど絡まる糸に伊之助は苛々を募らせる。

そして進むうちに少し先で足音が聞こえた。

「伊之助！」

「ああ！」

伊之助も足音が聞こえたらしく足を止める。

「だめ……」

さらに聞こえてきたのは、女性の声。非常に苦しそうな声を上げている。

「こつちに、こないで……」

「またでやがったぜ」

女性は背中から糸がでており、片手には刀、そしてもう片手には仲間であったろう人間の首を持っていた。

「だれか、階級が上の人を連れてきて……でないと！みんな殺してしまう！」

「っ！」

「ぐっ、うう！ああ！」

炭治郎が動揺している隙に女性は斬りかかってくる。

（速い！）

「わ、私……こんなに、強く、ない！鬼に……操られて、動きが制御できない！」

限界以上の動きをさせられているせいで女性の身体は全身悲鳴を上げていた。関節も本来動かないような角度まで動きを強制され、もはや悲鳴すらあげることができなくなるほどだった。

（鬼が無理矢理身体を動かしているから、骨が折れてもお構い無しだ！）

動きそのものはめちやくちやであるが、速度があるため反撃ができない。

（酷い……！）

炭治郎が怒りを募らせるとほぼ同時に攻撃が止まる。何かかと思うと背後で音が聞こえる。

振り向くと、そこには数人の隊員が起き上がってめちやくちやになった腕で刀を構え

ていた。

「たす……けて、くれ……。折れた骨が、内臓に刺さって……動く、激痛が……耐えられない……殺して、くれ！頼む！」

「なっ……」

「よしわかった！」

動揺する炭治郎を他所に伊之助は隊員に向かって走り出す。

「まっ……くっ！待ってくれ！」

伊之助を止めようとしたが、女性の刀でそれを妨げられる。

「はあ□うるっ……煩えぞお前！」

「まだ生きてる！なにか助ける方法があるはずだ！」

「本人が！殺せって言ってるんだから！殺せばいいだろ！」

「だから待ってくれ！考える、考えるから！」

そう言つて女性を弾いた炭治郎は数瞬、思考の海に潜る。助ける方法があるはずだと言つたはいいが、残念ながらまだ詳しいことはなにも考えていないため考える必要がある。

そして危機的状況故に思考が冴えたのか、その結論はすぐに導き出せた。

そしてそんな炭治郎の姿を、遠夜は暗闇の中から見ている。

――

炭治郎の導き出した結論は、糸を切るのではなく絡まらせて身体操作ができないようにする、といったものだった。

結果として炭治郎の目論見はうまくいき、引き付けて、操られている身体を木の枝目掛けて投げ飛ばし、背中の糸をうまく絡まらせて操作不能にした。

「よしー！」

「なんじゃそりゃあ！俺もやりてえー！」

炭治郎の行動を見て感化された伊之助も目の前の隊員を投げ飛ばし、動けないようにした。

「よっしゃー！あと一人もやってやるぜえー！」

伊之助がもう一人も投げ飛ばそうとしたところで、声が響く。

「おーおーいい判断だが、詰めが甘いなあ」

突然聞こえた声に炭治郎も伊之助も固まるが、すぐにその声の主を見つける。

その声の主は先程炭治郎が投げた女性が絡まっている枝の上にいる。

「えっ？」

「発想は良かったが、これじゃ甘い。無力化はしたけど、助けたとは言えんなあ」

「なんだてめえ！どっから湧いてきやがった！」

「さつきからずつといたのに気づかなかったじゃん」

ずつといた。

この事実には伊之助は驚愕を隠せない。伊之助は人一倍肌の感覚が敏感だ。故に僅かな気配、視線、殺気ですら感じ取ることができる。なのにこの男はずつといたというのに全くいることを認知できなかった。嘘をついている様子はない。どれほどの気配遮断能力なのかと内心で伊之助は戦慄する。

一方炭治郎は、伊之助の言葉に飄々と返すこの手拭いで視界を覆った男に見覚えがあった。

そう、禰豆子が鬼になった日に出会った男だ。

「貴方は……」

「か、影柱様……」

「指令があったから来てみたら、なんだこのザマは。どいつもこいつも簡単に操られ

ちやつて」

深いため息をつきながら男……遠夜は刀を抜いて糸を一本切る。

「おいおっさん！糸は切つても意味ねーんだよ！すぐに糸つけられちまうんだよ！せつかく俺様が動けねーようにしてやったのを無駄にする気か！」

「おー威勢のいい奴だな癸の割に。それにまさかこの歳でおっさん扱いされるとは」

そこまで言うのと遠夜は一度言葉を切る。

「思わなかつたな」

そして次の瞬間には伊之助の背後にいた。

先程まで立っていた場所から移動したのを炭治郎も伊之助も見えていない。瞬きした次の瞬間には背後にいたのだ。

「なっ！てめ、いつの間に！」

「猪頭、お前の言ってる事くらい俺も理解している」

「じゃあ」

「操る中で重要なのは主に四肢の動き。首につけてる糸はそこまで重要じゃねえ。だから糸をそこら辺にくつつけておいた」

「だから！それになんの意味があんだよ！」

「ん？ぶら下がってる奴らが死なないようにするため」

「はあ☒」

伊之助が遠夜に詰め寄ろうとした瞬間、再び遠夜の姿が消える。

そして次は炭治郎の真上の枝に姿を現した。

「わざわざ解説してやらねーと理解できないみたいだな。じゃあ教えてやる。首に糸がついたまんまだつたら」

そう言いながらぶら下がってる隊員の首に手をかける。そして軽く回した。隊員の首は横を向いたただけだが、それをみた炭治郎は全てを理解した。

「まさか……」

「お、気づいた？」

「どういふことだ紋次郎！」

「炭治郎だ！えっと、あのまま首に糸がついた状態だったら……首を捻って殺されていたらかもしれないってことだ」

結局生きてるまま操ろうが死んでるのを操ろうが全ての主導権は操作している鬼の方にある。だから生かすも殺すも鬼次第であるため、痲癩を起こした操作側の鬼が操られている隊員を殺さないとも限らない。だから遠夜は首の糸のみを切り、別の場所につけることにより少しでも首の糸が斬られたことを気づかれるまでの時間を稼ごうとした。

「……なるほどな」

「そゆこと。よくできました。でもさつき猪頭が言ったように糸はまだつけられる。だからそれを阻止するにはどうすれば良い？」

「……大元を叩く！」

「やればできるな。んじゃ、よろしく」

「あ、あの！」

炭治郎に声をかけられて遠夜はそちらに顔を向ける。

「どうした、少年」

「貴方は……二年前、俺と禰豆子を……」

どうやらこの少年は二年前に妹を鬼にされ、家族を皆殺しにされた少年で間違い無いようだ。知っている気配だとは思ったが、まさかこのような場面で再会するとは思わなかった。

「さあ、なんのことかねえ」

「な、名前を聞いてもいいですか☒」

「じゃあ先に名乗れ」

「え、あ！お、俺は竈門炭治郎です！」

「竈門炭治郎、か。俺は無道遠夜。ほれ、猪頭はいっちまったぞ。さつさと大元倒してき

な。あいつ一人だと無駄に突っ走って死ぬぞ」

「あ！伊之助！あの、ありがとうございまして！」

そう言つて炭治郎は伊之助を追つて行つた。

「またな少年、生きていたらまた今度」

そういうと遠夜は隊員がぶら下がつてゐる杖に腰を下ろす。遠夜の真下にいるのは炭治郎に投げ飛ばされた女性の隊員だった。

「さて、十二鬼月はどこかな」

「か、影柱様……」

「ん、なに」

円を広げようとしたところで女性隊員から声がかけられる。

「助けていただいて、ありがとうございます」

「そう思うならもう少し実力つけてくれ。殆ど使えねーじゃねーか。お前らの育手の目は節穴か。実力的にはさっきの癸の奴らにも劣るぞ」

「……………」

自覚があるのか、女性隊士……尾崎は黙り込む。

「ま、ここで文句言つても仕方ないか」

それだけ言つと遠夜は立ち上がり刀を抜く。そして月に向かつてこう言つた。

「出てこいよ。見てんだろ」

女性隊士にはなにがなんだかわからなかった。痛みで頭が回らないのもあるが、いきなり虚空に向かって声を発する意図を読み取ることができなかった。

だが次の瞬間、その意味を理解する。

遠夜の視線の先に一人の小さな男の子が降り立った。そしてそれが鬼であることを理解するのに時間はいらなかった。

(浮いて……いるの? いや、これは……糸の上に立っているのね)

「よお」

「……僕達家族の静かな暮らしを、お前も邪魔するのか?」

静かで、それでいて冷たい声だった。言葉には明確な殺意が込められている。それだけ女性隊士は全身が凍りつくような思いだった。他の鬼とは比べ物にならない程の殺意が今の言葉には込められていた。

「家族?」

「お前らも、すぐに母さんが殺すよ」

「母さん? 鬼に? 鬼舞辻のことか?」

「違うよ、母さんは母さんだ」

「……あー、なるほどね。この山にいる鬼はお前の家族か」

「そうだよ。僕達は家族だ」

「あー、そういう。くく……こいつは面白い。今まで色んな鬼を見てきたが、まさか家族ごっこをする鬼がいるとはな」

皮肉げに嗤う遠夜の言葉に鬼の少年は眉を動かす。

「家族ごっこ？」

「だってそうだろう？ 別にお前ら血が繋がってるってわけでもないんだろうし。もし仮に一家全員鬼にされて、そいつらがみんなここにいてんなら話は別だが、鬼舞辻あの根暗はそんな手の込んだことしねーだろ」

鬼の少年の手が血のように紅く染まる。そしてそこから出る糸も紅くなり、禍々しさを増していく。

「……………お前、そんなに死にたいのか？」

「どう捉えるかは自由だ。面倒くせーから相手すんのはできれば御免被りたいがな」

「じゃあまず是他から片付けてやるよ」

血鬼術 刻糸牢

蜘蛛の巣状の赤い糸が檻のようにぶら下がる全ての隊員を捉え、そして斬り裂こうと迫る。遠夜の真下にいる女性隊士も遠夜と共にその檻が迫っていた。

「やれやれ、血の気が多い」

全集中・影の呼吸 参ノ型・改 無辺・乱

無数の斬撃を移動しながら放つことで周囲に展開された糸を全て断ち切った。

「……………」

「おいおい、こんなもんで殺せると思ったのか？随分舐めてんなあ。あ、でもここに来た隊士の実力みたら舐められても仕方ねーか」

「ちよつとはやるみたいだね。でも…………糸の硬度は今のが限界だと思った？」

「まさか。最初から最高硬度で来るなんて思ってたねーよ。お前、こんなもんじゃねーだろう？なあ、十二鬼月」

その言葉と同時に背後から静かに迫って来ていた鋭い糸をそちらを見もせず遠夜は切る。

「…………僕のことか十二鬼月だってわかるんだね。お前、ほかの奴とは違うんだな。だいぶ強そうだな。僕でも勝てないかもね。だから…………お前はちゃんと準備をしてから殺してあげるよ」

それだけ言つて鬼の少年は姿を消した。

刀を収めると、遠夜は頭をかく。まさか自分でも勝てないかもと言う鬼がいるとは思わなかったのだ。

鬼は得てして大体自尊心が高く勝てない相手にも自棄になって挑む傾向がある。も

とも人間だったはずなのに鬼は大体人間は下等な生物だと考えている。故に自らでは勝てないかもしれないと冷静に分析できる鬼はそういうくない。

だからこそ面倒だ。冷静に分析できる頭があるということは自身に足りないものがあるのかがわかる。それは放置しておくとな手のつけられないものになりかねない。

「あー、面倒なのに目をつけられたかもな。ったくやってらんねーよ」

遠夜がそうぼやくと同時に吊るされていた隊士が全員床に落ちる。骨がやられているため、皆落ちると非常に苦しげなうめき声を上げた。

「つと、向こうは終わったみたいだな。こいつら手当てしてやりたいとこだが……ちよーつと道具が足りんな。この辺りはもう鬼いなさげだし、隠の人に来てもらうか」

その旨を伝えてもらうために遠夜は自らの鳥を飛ばした。

「これでよし、と。あの少年大丈夫かねえ。たしか……そうそう、炭治郎だったな。あいつ見た感じ優しすぎる雰囲気あるからなあ」

倒れている隊士を陰に運び最低限の処置をして遠夜は立ち上がる。

「あと四体か、今夜は長くなりそうだ」

そう呟いて遠夜は姿を消した。

伊之助は焦っていた。

炭治郎は自分を助けたことにより彼方へと吹き飛ばされ、刃を無理やり通す方法を思いついたと思つたらその鬼は脱皮してさらに大きく、硬くなった。

今の伊之助にはこの鬼の頸を落とす手段はない。

それどころか先程戦つた鬼との戦闘で負つた傷の出血により普段通りの動きができない。

「くそ……やべえー！」

「オレノオ……カゾクニイ！チカヅクナア！」

咆哮と共に振るわれた拳を避けることはできたが、背後にあつた木が粉々に粉碎される。

（やべえー！こんなもんまともに受けたら身体がぐちゃぐちゃになる！）

「オアア！」

振り回される丸太のような拳をギリギリ回避できているが、既に限界の身体ではどこまで避け続けられるかわからない。

（なら……ここで決めてやる！）

振り下ろされる拳を飛んで回避する。回避したその先には、攻撃後で隙だらけの頸。

「獣の呼吸 参ノ牙！喰い裂き！」

それが伊之助の今出せる全身全霊の一撃だった。今まで倒してきた鬼ならばこの一撃にほとんどが沈んだ。

しかし今回はそうはならなかった。

刃こぼれだらけの二本の刀は、鬼の頸に当たると同時に折れた。

「折れっ」

「ガアア！」

「ぼっ！」

呼吸による隙と、刀が折れたことによる動揺により次の一撃の受け身を取ることができずに吹き飛ばされ、木に叩きつけられる。

「しまっ……た……受け身……が……」

もとより身体は限界。今の一撃によって身体は完全に動かなくなった。

立ち上がることにすらできぬうちに伊之助は頭を掴まれる。

「オオオオ」

「俺は……死なねえ！獣の呼吸 壱ノ牙……穿ち抜き！」

折れた二本の刀を鬼の頸に突き刺す。しかし鬼は反応しない。この程度、なんともないとも言おうように伊之助の頭を握りつぶさんと締め付ける。

(「いっ……びくともしねえ!」)

そうしているうちにも締め付ける力は増していく。

刀は手を離れ、締め付けによつてロクに力も入らない。伊之助にできることは、もうなにもない。喉から何かが上つてくる感覚がする。

(「……まで、か」)

そう思った時に、無数の記憶が脳裏を過る。

炭治郎、善逸の顔。

山での記憶

藤の紋の家の老婆

そして、仕切りに謝る見知らぬ女性の顔

「だ……だれ、だ」

そう呟くと同時に喉から迫り上がってきた血を吐く。

意識が遠くなつてきて、いよいよ死を自覚し始めたとき

「あんだけ威勢よく突つ込んでいった割には、あつさりやられてんな猪頭」

煽るような飄々とした声と、そしてなにかが切り裂かれ頭を締め付けていた力が一気に無くなる。

「グギャアア！」

「ぼっ！」

床に叩きつけられ、助かった事への安堵感と同時に疑問が生じる。

（なにが、起こつた……？）

「お、まだ生きてんな」

先程聞いた声が再び響く。相変わらず小馬鹿にしたようなことなくカンに触る声だが、それに突つかかるほどの体力は今の伊之助にはない。

「この、声……手拭いの……」

「よ、さつきぶり」

（こいつが……斬つたのか？）

伊之助では斬るどころか傷をつけることすらできなかった鬼の身体をいとも簡単に切り裂いたという事実にあまり動かない頭で驚愕する。

「あの少年……えーつと、そう炭治郎はどうした。死んだわけじゃ無さそうだが」

「あいつは……とば、ざれ……だ」

「死んでは無いのな」

まるで日常的な場面での会話のように気楽に話す遠夜の背後に鬼が迫る。

「オオオ！」

蹲み込んで伊之助に話しかける遠夜に向けて豪腕が振り下ろされる。まともに受ければ遠夜とてただでは済まない。

「煩え」

遠夜は一言さういうと、視線を伊之助に向けたまま刀を後方に振るった。そして振り下ろされるはずだったその拳は宙を舞った。

「ギイイアア！」

「あー煩え」

欠伸をしながら頭をかくというあまりにも気の抜けた態度を取る遠夜に伊之助は疑問を持った。

「お……お前……」

「なに」

「……怖ぐ……ねえ、のが？」

伊之助は凄まじい圧により動けなくなるほどだったというのに、遠夜はその圧をまる

で感じないとも言うような立ち振る舞いをする。経験には確かに天地程の差があるだろうがそれでも戦場においてこれほど気の抜けた態度を取る者などいないだろう。

「……なあ猪頭、人を恐怖させる条件って三つあるんだ。知ってるか？」

「条件……？」

「一つ、怪物は言葉を発してはいけない。二つ、怪物は正体不明でなければならぬ。そして三つ目」

「グオオオオ！」

腕を再生した鬼が背後からとてつもない速度で遠夜に迫る。だが遠夜は余裕な態度を崩さない。振り返ったその顔は、嘲笑に歪んでいた。

「怪物は、不死身でなければ意味がない」

影の呼吸 肆ノ型 絶影

すれ違い様に空間が切り裂かれたと思えるほどの一閃が鬼の頸を襲う。斬られた鬼は動きを止め、数秒後に頸は静かに落ちた。

「言葉を発して、正体はただの鬼。加えて不死身じゃない奴なんぞ恐怖する対象にならんよ」

消滅していく鬼を背後に刀を収めながら遠夜は伊之助に近づいていく。

「おう猪頭、まだ生きてる？それとも死に損なっただけか？」

気軽に安否を確認する遠夜の言葉など伊之助の耳には入っていないかった。

（す……凄え！なんだこいつ！凄えぞ！俺では刃を通すことすらできなかったあの硬い化け物を豆腐みたいに斬つちまつたぞ！凄え凄え凄え！こんな凄え奴はじめてだ！ワクワクが止まらねえぞ！）

「ちよつと、聞いてるか？」

全く反応しない伊之助に少し苛立ちながら問い返す遠夜に伊之助はピシツと指を指す。

「おい手拭い！俺と勝負しろ！」

「……………は？」

伊之助の意図が全く読めず遠夜は素っ頓狂な声をあげる。

（なにいつてんだこいつ）

「俺と戦え！」

「え、嫌だけど」

「お前の意見なんぞ知るか！お前はあの十二鬼月に勝った！そのお前に俺が勝てば！一番強いのは俺っていう寸法だ！」

「修行し直せ馬鹿が」

自慢げに言う伊之助の言葉を遠夜は呆れながら一刀両断する。その言葉に一瞬衝撃を受けた伊之助だが、すぐに遠夜に突っかった。

「なにー」

「今のが十二鬼月？んなわけねーだろ。そんなこともわかんねーのかこのポンコツが」

「わかってるわそんなこと！俺だってそんな雑魚、十二鬼月だとは思ってねーよ！」

「くく……雑魚ねえ。その雑魚にやられかけたお前はそれ以上の雑魚ってことになるなあ、ええ？」

完全に煽りにきている遠夜の言葉に煽り耐性のない伊之助は真に受けて完全にキレた。

「あああんだとこのクソ手拭いが！ぶっ殺すぞ！」

「なんか間違えたか？お前がさっきのを雑魚呼ばわりしたんだぞ？だからそれにやられかけたお前はそれ以上の雑魚だって自分で言ったようなもんだぜ」

「煩ええええ！黙って俺と戦えやあ！」

そう叫びながら伊之助は遠夜に飛びかかった。

「やれやれ……怪我也軽くねーのに。ちよつと煽りすぎたか」

「死ねやああああ！」

そう言いながら振り下ろされた伊之助の拳は確かに遠夜の顔を捉えた……はずだった。

確かに遠夜の顔面に拳が突き刺さったと思ったのに、その遠夜の姿は次の瞬間には消えていた。そしてなにより拳に手応えがなかった。

「なっ」

「影の呼ば 式ノ型 影法師だ」

背後から聞こえた声に反応した瞬間、伊之助の身体は動かなくなる。薄れゆく視界に映ったのは、手刀を構える遠夜の姿だった。

「己の怪我の具合もわからねーような馬鹿は戦場に立つな。迷惑でしかない。お前のような奴が部隊を全滅させることもあんだからな」

「あ……お……」

「てめーみたいなみそつかすを真面目に相手する程暇でも寛容でもねーんだわ、俺」
その言葉を聞きながら伊之助の意識は闇に落ちた。

——

「ほんとなんだったのこいつ」

氣を失った伊之助を縛り上げ、吊るし上げて胸のあたりに隠の人に見つけたら助けてやる旨を記した文を貼り付けた。なお、縛り上げた理由は下手に放置すると動き回って死ぬ可能性を考慮しただけであり、決して嫌がらせではない。決して。決して。

「宝の持ち腐れだな」

遠夜はそう思った。せつかく優れた肌感覚があるというのにそれを十全に活かさきれていないことや、めちやくちやではあるが剣の筋はいいこと等に対してそう感じた。ちやんと磨けば必ず上達して、ゆくゆくは柱と同じくらいの実力にも届き得る程の素質があるのにもかかわらずそれを磨く以前の問題である伊之助に少しだけ遠夜は同情した。

「……さて、次はどこに行くか」

山の半分以上の面積に円を広げる。これほど広い円は集中力が必要であるため移動しながら行うことはできない。だがそうすることで次にどう動くべきかを考えることができるため効率良く動くことができる。

円で感じられた鬼の気配は、二つ。

「あれ……一個減ってる。誰かやったか」

先程の鬼を殺す以前に感じた気配は、殺した鬼を除けば三つだった。しかしそのうちの一つの気配が完全に消えている。

(……微かに聞こえた雷鳴みたいな音……あれか？雷鳴、となるとやっぱ雷の呼吸かね。こんな満月が出ている夜に雷なんぞ鳴らんだらうし。どこでやったかは知らんが結構な使い手かもな)

そう予想を立てて遠夜は円の範囲を狭める。熟練度はかなりあげたが、それでも広範囲の円はかなり神経を使う。義兄である日永ならば広範囲の円を展開しながらでも移動や戦闘もできただろうが、天才であった日永とは違い遠夜はせいぜい秀才止まり。日永のようにはいかない。優秀ではあるが、天才程効率良く上達はしない。

円で感知した中で一際強い気配の鬼……十二鬼月の気配の近くに感じた気配は炭治郎のものだった。つまり現在炭治郎は十二鬼月と対峙している可能性が高い。炭治郎の実力の底は見えていないが、まだ鬼殺隊に入隊してそう時間は経っていない。故に炭治郎はまだ実戦経験が乏しく、総合的な実力では十二鬼月の下弦にも届かないだろう。

もしかしたらなにか秘策のようなものが炭治郎にもあるかもしれないが、それがあるとも限らないし、あつたとしてもそれが十二鬼月に届く保証はない。

「……成り行きとはいえ、助けた奴が死ぬのは寝覚め悪いか」

もう一体残っている鬼の気配の方にはしのぶが近い。そちらはしのぶに任せてもいいだろうという判断のもと、遠夜は十二鬼月の方へ向かうことにした。

「……とはいっても、あつちにも行く必要ないと思うんだよなあ」

そう遠夜が考えるのにも根拠……のようなものがあつた。

まず、炭治郎が簡単にやられるとは思えないこと。遠夜が感じ取つた気配の中で炭治郎は異色な気配だつた。根拠……というには些か弱いかもしれないが、炭治郎は十二鬼月の下弦ならば勝てるとは言えなくとも簡単に負けるとはどうしても思えないのだ。先程までの戦いぶりを見るに頭を使うことはできるし、基礎的な剣技や体力はある。だがそれだけではない。炭治郎にはなにかある。そう思わせる何かがあつた。

もう一つの根拠は、炭治郎の方に向かう気配だ。それは先日手合わせをした柱の中でも上位の実力を持つ寡黙な剣士だ。距離と向かつている方向を考えれば、遠夜は行く必要はない。加えて遠夜に目をつけた十二鬼月が彼によつて倒されるならば遠夜としても楽になる。それに、遠夜が到着する頃には、恐らく全て終わつている。だがそれはしのぶがいる方向も同じこと。

しのぶが向かつている方向にいるのは恐らく十二鬼月ではない鬼。さらにしのぶは小柄故に身軽で素早い。十二鬼月がある方に念のため加勢に行くのが無難だろう。

「……富岡さんの方行くか。多分、例の妹もいるだろうし」
そう判断して遠夜は姿を消した。

予想通り、とでも言うべきか遠夜が到着した時には富岡が到着しており、十二鬼月と対面していた。ただ予想とは違い、まだ終わっていなかった。

そして先程まで相対していたであろう炭治郎は刀が折れ、顔や身体に切り傷をつけて倒れ伏していた。恐らく限界まで体力を使ったツケだろう。まともに動ける様子は無い。そして傍らには竹でできた猿轡をつけた少女……妹の禰豆子が倒れていた。

到着した時の着地音で十二鬼月と富岡、ひいては炭治郎も遠夜の存在に気付いた。

「お前っ！」

「……無道か」

「どーも富岡さん、この前ぶり。必要無いとは思いますがど加勢に来ました」

「……………」

遠夜の言葉に富岡は言葉を発しない。

「しかし、意外ですね。もう終わってるかと思ってきました」

遠夜が心配を感じた時、この場所と富岡の距離はそう遠くはなかった。遠夜やしのぶと比べて素早くは動けないが、それでもあの程度の距離と富岡の実力ならば終わっていてもおかしくはないと遠夜は考えていた。

しかし実際はどうだろう。富岡はたった今到着したであろう様子だ。道中でなにか

があつた。そう考えて間違いないだろう。

「……色々あつた」

「色々、ね」

言葉足らずの富岡の言葉を理解しきることは難しい。しかし遠夜は展開した円から感じ取った気配から富岡の言葉の真意を予測した。

恐らく富岡の言う色々とは、この十二鬼月の周囲に展開された糸が関連しているのだろうと遠夜は考えた。遠夜に遭遇した際、準備をして殺すとこの鬼は言っていた。ならばその準備がこの周囲の糸だと考えるのが妥当だろう。そして富岡の到着が遅れたのもこの糸による妨害があつたと考えるのが自然である。

「……僕の邪魔ばかりする屑共が」

そう結論付けた遠夜の耳に聞こえた次の言葉は殺意と苛立ちに満ちた言葉だった。

「その妹も、お前達も、纏めて殺してやる」

「お前程度にやられるほどやわじやないんだが」

「そうだね、確かに素の能力なら僕はお前達に負けるかもしれない。でも、ここは既に僕の血鬼術の中なんだよ」

そう言つて鬼は嗤う。

周囲に展開されていた糸が蠢き、太さと禍々しさが増していく。

「もう逃げられない。この糸は最高硬度の糸を撚り合わせて作った糸だ。お前達でも簡単に切れない」

「準備つて、これのことか」

「そうだよ。じゃあ、死ね」

血鬼術・殺目籠 辺獄

禍々しく紅く光る太い糸が籠のように遠夜達を取り囲む。その籠は徐々に網目を細かくしていき、範囲を狭めていく。

「ぐっ、ううー！」

「動くな少年、お前もう身体ガタガタなんだから」

「動こうが動かなかろうが無駄だよ。最高硬度の糸を撚り合わせて作った糸だ。お前達の刀でも切れないよ」

「よほど自信があるんだな。まあ、でもこいつは驚きだ。なあ富岡さん」

「……………」

「死ね！」

迫り来る糸に炭治郎は死を覚悟し目を閉じる。

だがそんな炭治郎とは裏腹に聞こえてきた声は余裕で満ちていた。

「この程度で俺らを殺せると思ってるんですかね」

「……全くだ」

「舐められたもんですねえ」

水の呼吸 肆ノ型 打ち潮

影の呼吸 参ノ型 無辺

淀みなく繋げられた斬撃と、一呼吸のうちに放たれた無数の斬撃が迫り来る糸を斬り裂き、ばらけさせた。

「な……あ……」

「で？次は？まだあんなら早く来い」

「舐めるな！」

血鬼術 刻糸牢

蜘蛛の巣状に展開された糸が義勇を取り囲む。その糸の鋭さは、人体をあつという間にバラバラにできるほどのもので義勇といえど受ければただでは済まない。

だが、先程の糸と比べて強度はない。故に、恐るるに足らない。

水の呼吸 捨壺ノ型 風

迫り来る糸は義勇の刀の間合いに入った瞬間切り刻まれ、夜の闇に散った。紅く光る糸は月光を浴びてまるで血のようにあたりに散らばる。

「さっすが」

「油断したな！」

義勇の剣技に感嘆すると同時に背後から殺意の籠った声が聞こえてくる。遠夜の背後に移動していた鬼の存在に炭治郎は気がついた。

先程義勇を取り囲んだ血鬼術は陽動であり、一瞬でも義勇をその場に留めるためのものであった。

鬼……累の目的は遠夜を先に処分すること。遠夜と義勇では義勇の方が強いことが理解できたが、二対一では勝ち目は無い。だから弱い方を先に殺すことにした。

「死ね！」

血鬼術 刻糸輪転 紅刃こうじん

禍々しく紅く光る糸が竜巻のように束ねられ、遠夜に襲い掛かる。

「無道さん!」

炭治郎の焦った声に対して、遠夜は余裕な姿勢を崩さない。

「全集中」

影の呼吸 伍ノ型 月影・初太刀

ほぼ同時に放たれた三連の斬撃は刃のように鋭い糸を遠夜に届く前に斬り裂いた。

「なっ!」

「甘い甘い。この程度じゃ不意打ちにすらならんよ」

「くっ……」

「ほれ、後ろ」

遠夜の言葉に累は正気を取り戻し、背後から迫る殺気を感じ取った。

「しまっ……」

「遅い」

水の呼吸 壺ノ型 水面斬り

義勇の鋭い一撃は、確実に累の頸を切り飛ばした。

「……………」

斬つた鬼には目もくれず義勇は刀を振つて血を飛ばすと、刀を鞘に収めた。

頸を無くした鬼の身体は、なにかを求めめるかのように弱々しく歩き出した。落ちた頸は、炭治郎と禰豆子に向けられたまま動かない。頸無しで動く身体はまるで親を見失い彷徨う幼子のようにも見えた。

鬼はその鬼になった時の年齢で成長が止まる。故に幼子の時に鬼になった者は幼子の姿のまま、また老人で鬼になった者は老人の姿のまま鬼として生きていくことになる。

(この鬼は、ガキの時に鬼になったんだらうな)

目の前で彷徨う鬼の身体は幼子そのもの。いつ鬼になったかは知らないが、家族に対してあそこまで執着していたことを考えるときつと人であつた時家族に何かしら思うところがあつたのだらう。

鬼の身体が灰になり始め、炭治郎の目の前まで来たところで倒れる。頸は既に半分近く灰になっていた。

倒れた身体に炭治郎は優しく手を添える。恐らく目の前の鬼のことを思い、慈しみ、

憐んでいるのだろう。

まるで太陽のような優しさだ。

例え鬼であろうと、分け隔てなく優しく接する。無論人を喰ったことに対しては怒り、憎み、容赦無く頸を切る。しかし決して辱めることはせず最後には礼節と慈しみを持って鬼となる前の人間のことを慮った。

とても常人にはできない。少なくとも遠夜には不可能だ。というか鬼殺隊の殆どの人間にはできないだろう。故に炭治郎の在り方は理解されないこともあるだろう。それが隊士との軋轢にならないとは限らない。

その優しさを、危ういと感じた。

優しすぎる人間は得てして自らを顧みない。炭治郎がそう決まったわけではないが、そういう人間はいつか自らを犠牲にして他人を助ける。そしてその結果、憎しみが生まれる。そういう連鎖がずっと続いている。その連鎖の果てに、鬼殺隊は生まれた。

炭治郎からはなにか得体の知れないものを感じるが、それがなんなのか、または遠夜の気のせいなのかはわからない。

その得体の知れないものがこの連鎖を断ち切ってくれることを遠夜は願いながら、消えていく鬼と炭治郎を眺めていた。

「人を喰った鬼に慈悲をかけるな。子供の姿をしていようと、何十年もの間人を喰い続

「けている」

そんな遠夜の思いとは裏腹に義勇は消えた鬼の着物を踏みつけて炭治郎に近づく。

「違う……確かに、鬼は人を喰った。喰われた人の無念を晴らすために、俺は容赦無く鬼の頸に刃を振ります。でも、それでも、鬼であることに苦しみ、最後はそれを悔いている者を、踏みつけにはしない！鬼は、人間だったんだ。過去の話でも……それでも！俺と同じ人間だったんだ！」

「……………」

「醜い化物なんかじゃない。鬼は虚しい生き物だ、悲しい生き物だ。だから、足をどけてください！」

そう言って炭治郎は義勇を睨む。その瞳には、優しさと憤りの二つの感情が渦巻いていた。

一方義勇はこの少年とその下にいる少女に見覚えがあった。そう、二年前に遠夜と共に見逃した兄妹だ。

「富岡さん、気づいた？」

「……………ああ」

その問いの真意は二つあったが、どちらも義勇は理解していた。だからこそ、腰の刀に手を添える。

妹を抱き抱えながらそう訴える炭治郎の背後から一つの気配が寄ってくるのが感じられる。

素早く義勇が炭治郎の前に立ち塞がると、迫ってきていた刃を弾く。

「あら？」

弾かれた刃の主はふわりと舞って着地すると義勇と遠夜に目を向けた。

「なんのつもりですか？富岡さん。そこにいるのは鬼ですよ」

そう言って少女は異形の刀を構える。

「鬼とは仲良くできない、と言っておきながら邪魔をするんですか？そんなだから……みんなに嫌われるんですよ」

微笑を浮かべながら義勇にそう毒を吐きかけるのは、蟲柱・胡蝶しのぶだった。

――

「鬼殺の妨害は立派な隊律違反です。富岡さんだつてわかっているでしょう？」

「……………」

「さあ富岡さん、どいてくださいね。遠夜も邪魔しないでくださいね。なんなら私に加勢してくれてもいいんですよ」

優しく、だが静かにしのぶは義勇にそう告げる。その言葉にはうまく隠しているが確かに怒りの気配があった。

遠夜は自分に向けられたしのぶの言葉が『お前も共犯者か』と問うていることを感じ取り、内心で苦笑した。事実、共犯者であるが、この後のことを考えると義勇の敵に回ってしまいたい欲が出てきてしまう。

無論そんなことはしない。二年前、この兄妹を見逃した時点でいつかはこうなることが予想できていたし、自らで救った命を自らで断つわけにはいかない。

そう考え内心でため息を吐きながら刀に手を添える。しのぶの動き次第ではすぐに抜刀できる状態にするためだ。義勇もしのぶがどう動くかを伺っているのだろう。

だが遠夜でも次の義勇の言葉は予想できなかつた。

「……俺は」

「ん？」

「俺は嫌われていない」

「いやそ、？」

思わず突つ込んでしまった。

「ああ、その言葉……嫌われている自覚が無いんですね。余計なことを言ってしまう申し訳ありません。ああそれと、嫌われているのは遠夜もですよ」

「知ってる知ってる」

そんな三人のやり取りを見て炭治郎は戦慄していた。そして顔色を伺うように義勇と遠夜に視線を向けた。無論その視線に二人がが返すことは無いのだが。

「坊や」

気まずそうにする炭治郎にしのぶは優しく声をかけた。

「は、はい！」

「坊やが庇っているのは鬼ですよ。危ないですから離れてください」

「ち、違います！いや、違わないけど……俺の妹なんです！それで……」

「まあ……そうなのですか気の毒に。なら……苦しまないように優しい毒で殺してあげます」

（くっ……話が通じない！どうすれば……）

「無道」

「はい」

焦る炭治郎を他所に義勇は遠夜に目配せをする。遠夜がそれを見ることはできないが、気配でやるべきことを感じ取った。

「動けるか」

「は、はい」

「……無道、頼んだ」

「はいはいわかりましたよったく。ほら少年、行け。護衛はしてやる」

「富岡さん、無道さん……ありがとうございます！」

そう言つて炭治郎は走り出し、遠夜もそれに続いた。

「……これ、隊律違反ですよね？」

しのぶの額に青筋が立った。

――

「やれやれ、面倒なことになった」

炭治郎を先導するように走りながら遠夜はそう呟いた。この後確実に義勇と共に緊急柱合会議で吊し上げにされることを考えると気が重くなる。今回の件は相当揉めるだろう。遠夜の意志では無かつたとはいえ、それを素直に聞き入れるような集団ではない。場合によっては切腹させられる可能性だつてあるのだ。不本意で死ぬなんてことになる可能性を考えるとなをやつてるのだろうと考えたくもなる。

加えて背後から一つ心配が迫っている。最後に会つた時よりもさらに実力をつけているため、面倒になることは間違いない。

そしてその気配が飛んだ瞬間、一気に速度を上げた。

「やっべ」

急な速度上昇に対応しきれず、走るので精一杯だった炭治郎は背後から迫ってきた気配に蹴られてしまった。

「ちっ」

想像以上に炭治郎の身体が動かず軽く走ってるつもりでも意図せず距離が開いてしまっていたことが原因だった。遠夜も遠夜でそう遠くない距離にあるしのぶの気配が動いてこちらに迫ってきていることに僅かながら動揺してしまった。

炭治郎を蹴り飛ばしたのは、しのぶの継子であるカナヲだった。カナヲは放り出されてしまった禰豆子の頸を斬ろうとしたが、炭治郎に羽織りを引っ張られて邪魔されてしまった。

「走れ禰豆子！絶対に捕まっ！」

禰豆子に逃げるように呼びかけた瞬間、炭治郎の頭にかかと落としを放って炭治郎を気絶させる。

炭治郎が完全に伸びたことを確認するとカナヲは禰豆子に斬りかかる。

「！」

だがカナヲの薄桃色の刃は鞘から僅かに抜いた深い藍色の刃に止められた。

「よう、元氣そうだな。カナヲ」

「……無道さん」

「ほれ嬢ちゃん、逃げろ逃げろ」

「！」

遠夜がその声をかけると彌豆子は走り出した。

それを見てカナヲは遠夜を弾き飛ばして彌豆子を追おうとするが、実力差故に弾くことができず、とすらすらできない。

「悪いね、ちよいとここで足止めさせてもらおうよ」

「……………なぜ、邪魔をするのですか」

「久々に聞いたなお前の声。さあ？なんでだと思おう？」

「……無道さんがどういう考えて動いているかわかりませんが、私は言われた通り頸を切るだけです」

そう言つて刀を構えるカナヲに遠夜はくつくつと喉を鳴らしながら笑つた。

「たまにはためーで考えて行動してみたらどうだ？」

「鬼殺隊の役割は鬼を殺すことです」

「ま、そう言うだろうしその通りなんだけど……あーあ、これ俺が悪者みてーじゃん。やだねー」

「……………」

「まーあれだ、あの鬼殺したかったら俺を倒してからいくんだな」

「わかりました」

花の呼吸 肆ノ型 紅花衣

躊躇なく放たれた攻撃に遠夜は少しギョツとしたものの、その攻撃を回避する。

「おいおい、躊躇無しか」

「峰打ちにはしておきます」

「そういう問題かよ」

苦笑しながら遠夜は姿を消した。

そして直後、カナヲの周囲に無数の影法師が出現した。

「……………」

「影の呼吸 貳ノ型 影法師ってな」

カナヲが呼吸を整え、周囲に乱立する影法師を無視して気配から遠夜を探そうとした

時、背後から声が聞こえた。

急いで振り返ったが、そこには誰もいなかった。

「まだまだだな」

再び声が聞こえた時、違和感を感じる。すぐにその正体はわかった。腕にあった重み

が消えている。

「目に頼りすぎだな」

次に聞こえた声は上からだつた。声がした方を見ると遠夜が枝の上で胡座をかいており、その傍らにはカナヲの刀が刺さつていた。

「刀取られちまつたぞ。ほれ、次はどーする?」

煽るように言う遠夜に向けてカナヲが飛びかかろうとした時、

「カアー! 伝令! 伝令! 本部ヨリ伝令アリ! カアー! 炭治郎、鬼ノ禰豆子! 両名ヲ拘束シ本部に連レ帰ルベシ! カアー!」

けたましく鳴く鳥の声が夜闇に響いた。本部……つまりお館様である産屋敷輝哉からの指令であるということだ。事実上、鬼殺隊の最高位からの勅令である。

「思ったより早かつたな。ほれ、カナヲ」

まるで予想通りとでも言うように遠夜は言うど刀をカナヲに返した。無言でカナヲは受け取ると刀を鞘に収めた。

「さーて、と。炭治郎と禰豆子を連行すればいいんだつたな」

「……はい」

「んじゃカナヲ、お前少年……炭治郎の拘束よろしく。俺は鬼の禰豆子捕まえてくつから」

「……………」

「一応これ上官命令な」

「……………承知しました」

炭治郎の元へと歩みを進めるカナヲを見届けると遠夜は少し離れたところにある禰豆子の気配を追うべく走り出した。上空で鳥が遠夜に張り付くように飛んでいるのを見える。

「ちやーんと監視してるねえ。ここで命令破るほど破天荒じゃないって」

苦笑しながら遠夜は飛んだ。

この後に来る事態を予想して気を重くしながら遠夜は禰豆子を追って夜闇に消えた。

陸

遠夜が炭治郎の妹、禰豆子を捕獲し、炭治郎の持っていた箱に入れて産屋敷亭まで運び終える頃には日は登っていた。

禰豆子を隠の隊士に預けると産屋敷輝哉の妻である産屋敷あまねに中庭へと通された。そこには既に柱のほとんどの面々が集まっていたが、風柱である不死川実弥はまだいなかった。

「無道、こいつはどういうことだ」

遠夜が到着してすぐ遠夜に声を発したのは音柱・宇髄天元だった。

普段と比べてかなり緊張感のある声からは殺気すらも感じる。だがそんな宇髄の声を聞いても遠夜は飄々とした態度を崩さなかった。

「伝令、聞いてないんですか？」

「俺がそんな地味な聞き逃しするとも思ってるのか？面白くもない地味な冗談はやめろ。今回の件、お前が一枚噛んでると聞いたぞ」

「一枚噛んでる程度の俺じゃなくて当事者の富岡さんには聞かないんですか？」

「富岡は派手に言葉が足りない。だからわざわざわざわざお前に聞いてるんだ」

呆れたような視線を天元は義勇に向けた。どうやらしのぶだけではなく他の柱からも義勇は言葉足らずであると認識されているようだ。た。

視線を向けられた義勇本人は少し離れた場所で一人で立っており、言葉は発さない。普段通りの鉄仮面の無表情であり、表情からはなにを考えているのかはわからない。

「伝令の通りですよ。鬼をつれた隊士がいる。そのことについての緊急会議がある。それだけです」

「それだけ？ならなぜお前と富岡はその鬼を斬らなかつた。聞いた話では胡蝶の鬼殺の妨害も行ったそうじゃないか。それは立派な隊律違反だ。なぜお前らは拘束もされていない」

庭に植えてある松の木のの上に寝そべるようにしてネチネチとした毒を吐くのは蛇柱・伊黒小芭内。余程今回の事態が気に入らないのか言葉からは毒気だけでなくかなりの刺が感じられる。

「別に事を荒立てる気はありませんけど、拘束して気が済むならしてくれて構いませんよ」

「……………」

「でもしませんよね、伊黒さんは。だって伝令の中に『俺と富岡さんを拘束しろ』なんて伝令は無かつたですからね。伝令になかつたことは、御館様が『必要無い』と判断

したということ。独断でそれを行うのは御館様の意志に反しますねえ」

「……お前は本当に俺を苛立たせるな」

「ならわかりきつてることを下手に言わないことですね」

言いくるめられた伊黒は鼻を鳴らしてそれ以上なにも言わなかった。

「だが！なににしてもこの事態を引き起こした富岡と無道には説明の義務がある！なぜそういう行動に出たのかは説明してもらわねば困る！」

煉獄の言葉に首肯するかのように柱の面々は遠夜に視線を向けた。実際柱という立場にいながら鬼を庇うなどという行為は普通ならあり得ない。元々鬼と仲良く、という思想をかがげていたしのぶの姉、カナエならばわからなくもないが、そんなことかけらも思っていない二人がそういう行動に出たのだ。理由があると思うのは自明の理だろう。

「ちよいと思うところがありましたね」

「おいおいおいおい、それだけで鬼を助けたってのか？正気とは思えんぞ」

「せつかちだなあ。すぐにわかりますよ」

そう言つて遠夜が肩を竦めると、隠の隊士が一人の少年を担いで中庭に入ってきた。

担がれていたのは炭治郎だった。隠の隊士はすぐにでも話を始めるために（というかこの場から一刻も早く離れるために）炭治郎を起こそうとするが、炭治郎は先の戦いで

限界以上に身体を酷使し、加えて最後にカナヲに一撃を加えられてしまったためすぐに起きる様子はない。

「やれやれ」

見かねた遠夜は懐から瓢箪をだしてそこに入っている水を顔にかけた。

「つーう、あ？」

「おう少年、起きたか」

「………」

起きた炭治郎は状況が読めずに周囲を見渡す。当然だろう。起きたら知らない場所
で知らない人間に囲まれているのだから。

（だ、誰だこの人達……無道さんも富岡さんもいるけど……それにここはどこだ？ つ！
そうだ、禰豆子は）

勢いよく周囲を見渡すが禰豆子も禰豆子が入っている箱もない。

「禰豆子、禰豆子は!？」

「落ち着け少年、まだ妹は生きてる」

「禰豆子に！今すぐ禰豆子に会わせて下さい！」

「うるさい」

騒ぎ立てる炭治郎を遠夜は蹴りで黙らせた。

「ごっ、ごっほっ！ごっほっ」

「少年、妹が心配なのはわかった。だがな、今少年は罪に問われてんのよ。だから下手な発言と行動は控えるべきだな」

「ね、彌豆……子……は……」

「それはこれからの少年と妹の行動次第だな」

「他人事のように言ってるじゃねえぞ無道」

「はいはい」

わかってているのかいないのかよくわからない態度に天元はため息をついた。

その中でしのぶは一步前に出て炭治郎に視線をむけて、言った。

「竈門炭治郎くん、これから君の裁判がはじまります」

（さ……裁判？）

「隊士でありながら、鬼を連れていること。これは隊律違反になります。それはお分かりですか？」

「……………」

「一応裁判を始める前に、君の犯した罪について説明しておきますね」

「裁判の必要など無いだろう！」

しのぶの言葉を炎柱・煉獄杏寿郎が遮る。

「鬼を庇うなど、明らかな隊律違反！我々だけで十分対処可能！鬼諸共斬首する！」

「なら俺が頸を切つてやろう。派手な血飛沫を上げてやるぜ」

音柱・宇髓天元がそう派手に名乗りを上げた。

「ああ……なんてみすばらしい子供なのだろう。可哀想に……生まれてきたこと自体が可哀想だ」

岩柱・悲鳴嶼行冥が数珠を鳴らしながら涙を流す。

（ええ……こんな可愛い子を殺してしまうなんて……悲しいわ、胸が苦しいわ）

恋柱・甘露寺蜜璃は炭治郎の境遇に胸を痛めた。

「……なんだっけ、あの雲の形」

霞柱・時透無一郎は炭治郎に気付いていないのではと思うほど興味なさげであり、空を眺めていた。

「まあまあ、今はとりあえず坊やから話を伺いましょう」

そう言つて蟲柱・胡蝶しのぶは周囲を宥めた。

炭治郎は未だに事態が飲み込めず困惑するばかりで口を開こうとしない。ただただ周囲を見渡してばかりで、時々咳き込んでいる。

「竈門炭治郎くん、君がなぜ鬼殺隊士でありながら鬼を連れていたのか当人から説明して欲しいのです。なにかしら事情があるでしょうからね。もちろんこれは隊律違反で

す。そのことは知っていますよね」

「つ……は、はい」 っげほ、げほっ」

「……見たところ、かなり疲労や怪我があるようですね。顎を痛めているようなので、こちらを飲んで下さい。鎮痛薬の入った水です。ゆっくりでいいですよ」

そう言つてしのぶは懐から瓢箪を取り出すと炭治郎の口に当てがい、少しずつ飲ませた。

「怪我が治つたわけではないので、無理はしないようにして下さいね」

飲み終わると炭治郎は息を荒くしていたため、しのぶは炭治郎の息が整うのを待った。

そして息が整つた炭治郎はしのぶ達に向けて話し始めた。

炭治郎が外に出ている間に家族が全員殺されていたこと。

生き残つた禰豆子は鬼になったが、人を食っていないこと。

禰豆子が人を守るために闘つたこと。

「妹は鬼になつたけど、人を食っていないんです。今までも、そしてこれからも！」

「下らない妄言を吐き散らすな。そもそも身内なら庇つて当然だろう。言うこと全て信

用できない、俺は信用しない」

「ああ……鬼に取り憑かれてしまったのだろう。この哀れな子を殺して解き放つてやろう」

「聞いて下さい！俺は禰豆子を治すために剣士になったんです！禰豆子が鬼になったのは二年以上前だ！その間禰豆子は人を食っていない！」

「阿保が、飯に今まで食つてなかつたとしてもそれがこれからも続く保証はねえだろ。これから食わないと言うなら、それをド派手に証明してみせろ」

柱の面々は炭治郎の話を聞いてはいるが、信用している様子は全くない。すぐにでも殺してしまおうという雰囲気は漂っていた。

「妹は！俺と一緒に戦えます！鬼殺隊として、人を守るために戦えるんです！だから！」

「おいおい、なんだか面白いことになってるな」

突如、殺意に満ちた声が響いた。

炭治郎が必死に訴えるのを遮るようにして一つの声が中庭に響いた。

その声に今まで一度も視線を動かさなかつた義勇は、初めて視線を動かし声の主を見据えた。

「鬼を連れたバカ隊士つてのはそいつかい？」

その声は、風柱・不死川実弥のものだった。そして実弥の手には、炭治郎にとつては馴染み深い箱があつた。

「っ！」

「一体全体どういうつもりだア」

「不死川さん、いいもの持ってますね。どこで拾つたんすか？」

遠夜は手拭いで覆われた目を実弥に向ける。その声は、普段の飄々としたものではなく、明確な怒気が溢れていた。

「その道端で拾つたんだア。なんだ？お前の物かア？」

「いや別に」

「なら口出しすんな。で、坊主。鬼がなんだつて？鬼殺隊として人を守る為に戦える？」

実弥は白い歯を剥き出しにして嗤うと空いてる手で刀に手をかける。

「そんなことはなア！ありえねえんだよバカがア！」

実弥はそういうと刀を抜き放ち、箱に突き刺した。すると中から赤い血が吹き出し、

苦しそうな呻き声が聞こえてきた。

そしてそれを見た炭治郎は激昂し、手を拘束されたまま立ち上がった。

「俺の妹に手を出す奴は！ 柱だろうがなんだろうが許さない！」

「へへ、そうか良かったなア！」

実弥が刀を箱から抜くと炭治郎は叫びながら走り出した。

「やめろ！ もうすぐ御館様がいらつしやるぞ！」

「っ」

義勇のその言葉に一瞬実弥は怯んだが、迫りくる炭治郎にすぐに意識を戻し刀を振った。

しかし炭治郎はその刀を飛んで躲すと実弥の頭に自らの堅い頭を打ち付けた。

「ぶっ」

頭突きを受けた不死川は鼻血を出して倒れ、炭治郎は禰豆子のいる箱の前に立ち塞がった。

「……富岡が横槍をいれたとはいえ、あの不死川に一撃を入れた」

その事実には僅かながら柱の面々は驚愕する。実弥は柱故に実力は折り紙付きである。

そのためその不死川に癸の隊士が一撃を入れることなど階級的にはほぼ有り得ない。だからその場にいる全員が僅かながらも驚愕した。

「善良な鬼と悪い鬼の区別もつかないのなら、柱なんて辞めてしまえ！」
「て、めえ！ぶつ殺してや」

「はいちよつと失礼するよ」

実弥の殺意の籠った声を遮るようにして遠夜は前に出て、そして炭治郎の腹を思いつきり蹴飛ばした。

吹き飛ばされた炭治郎は伊黒が寝そべる松の木に当たって止まり、咳き込んだ。

「無道オ……なんのつもりだア」

「別に。ちよいと説教をね」

遠夜は箱を回収すると、炭治郎に向けて歩いていく。

「む……無道さん」

「少年、君がどういう人生を歩み、そしてどんな鬼に会ってきたかは知らない。だがな、少なくとも俺達は皆善良な鬼に遭遇したことは無い、一度もな。見分けなんてつくわけがない。それにな少年、ここにいる彼等は君よりもはるかに色んな鬼と遭遇し、そして人々を守ってきた。だからこそ柱足り得る。だからな、お前程度が簡単に辞めてしまえなんて言う権利は、無い」

「……………」

遠夜の言葉と威圧感に屈したのか、炭治郎は実弥を睨みつけたまま黙った。そんな炭

治郎の様子を見て遠夜は箱を縁側付近に置いた。

「無道オ、てめエ」

「あのまま放置してたら、貴方あの少年のこと殺してたでしょ」

「殺してなにか問題があんのかア？」

「それを決めるのは俺達じゃないでしょう。富岡さんが言つてたようにもうすぐ御館様がいらつしやいますから、決めるのはその時でいいでしょう」

遠夜は先程のような怒気の籠つた声ではなく、普段の飄々とした声に戻っていた。

座敷から二人の人影が現れる。当主、産屋敷輝哉の長女と次女だった。

「御館様の、御成です」

その言葉と同時に座敷の奥から一人の人影が現れる。鬼殺隊の当主、産屋敷輝哉だった。

「よく来たね、私のかわいい剣士達」

輝哉は二人の娘に手を引かれながら縁側まで歩いた。そして日が当たるところまで来ると、見えない目を空に向け、穏やかな笑みを浮かべた。

「おはよう皆、今日はいい天気だね。空は青いのかな？半年に一度の柱合会議で顔ぶれが変わらないのは嬉しいね。ああ、でも今回は緊急の会議だから前の会議からは半年経つてないね」

そう輝哉が言うのと柱の面々は全員、輝哉の前に跪いた。遠夜は炭治郎に頭を下げるように手で示して炭治郎にも頭を下げさせる。

「御館様におかれましても御壮健でなによりです。ますますの五徳を切にお祈り申し上げます」

「ありがとう、実弥」

「畏れながら、柱合会議の前にこの鬼を連れた竈門炭治郎なる隊士について、ご説明いただきましたいと存じますが宜しいでしょうか」

「そうだね、驚かせてしまつてすまない。炭治郎と禰豆子のことは私が容認していた。そして、皆にも認めてほしいと思つていてね」

「……………ああ、例え御館様の願いであっても、私は承知しかねる」

「俺も派手に反対する。鬼を連れた鬼殺隊士など認められない」

「私は！全て御館様に委ねます！」

「僕は……………別にどちらでも。すぐに忘れるので」

「……………」

「……………」

「信用しない信用しない。そもそも鬼は大嫌いだ」

「心より尊敬する御館様だが、理解できないお考えだ！全力で反対する！」

「鬼を滅殺してこそその鬼殺隊！ 竈門、富岡、無道の処罰を願います」

「……まあ、御館様に命じられたようにしますよ俺は」

過半数の柱が反対の意を申し出をし、数名は無言や中立といった立場の意思を示した。

そんな柱の面々を見て、輝哉は口を開いた。

「黒雨」

「はいはい、あつしの出番ですね」

陽明が突如として柱達の背後に現れる。相変わらず帽子に甚平、下駄に杖といった出立だった。

「なに」

「いつの間に」

「どもども、お久しぶりっす皆さん」

「黒雨、手紙を」

「は、」

陽明は懐から手紙を取り出し、そして読み上げた。

手紙は義勇と炭治郎の師である、鱗滝からのものだった。

その内容は、炭治郎と禰豆子が共に在ることを容認してもらおうよう懇願するものだった。

た。

彌豆子は、にわかには信じ難いほどの強靱な精神力で飢餓状態であつても人を襲うことはなく、そのまま二年以上の月日が経過した。

そしてもし、彌豆子が人に襲い掛かった場合、鱗滝、義勇、炭治郎の三名は腹を切つて詫びるという内容だった。

「……切腹するからなんだというのです。死にたいのなら勝手に死に腐れよオ！なんの保証にもなりはしません！」

「不死川の言う通りです！人を喰い殺せば、取り返しがつかない！殺された人は戻らない！」

だが反対派の柱は認めない。人が死ねば取り返しがつかないことをよく知っているし、その思いを、痛みを体感したことがあるから。

「……確かにそうだね」

「では！」

「御館様！」

「人を襲わないという、証明はできない。保証もできない。だが、人を襲うという証明もまた、できない」

「っ！」

輝哉の言葉に、実弥は息を詰まらせる。

「禰豆子が二年以上も人を食わないでいて、なおかつ禰豆子のために三人の命がかけられている。これを否定したければ否定する側は、それ以上のものを差し出さねばならない」

「そもそもそれが事実として信じられない！二年以上も人を食わないで生きていける鬼が、いるとは到底思えない！」

「そこについてはあつしが保証しますよ。これは、あつし個人としてではなく情報屋という職に則つての発言ツス。なにか異論はありますか？」

「ぐ……」

「むうー！」

柱の面々は皆、陽明の情報屋としての腕を知っている。情報屋として陽明が嘘や曖昧なことを言ったことは、これまで一度もない。故にこの言葉が事実であることを否が応でも突きつけられることになった。

「それに、皆には伝えそびれていたけど……炭治郎は鬼舞辻と遭遇している」

その言葉に全員が騒然とする。

「なに☒この小僧が☒鬼舞辻はどんな能力を持っていた☒姿はどんなだった☒根城は突き止めたのか☒」

「……戦ったの？」

「おい、奴はどんな能力を使った。根城は突き止めたのか。おい答えろ！」

「黙れ！俺が先に質問している！まずは奴の能力をだな……」

一気に騒がしくなった現場を、輝哉は口に指を当てるだけで沈めた。

「……鬼舞辻はね、炭治郎個人にむけて追手を放っている。それは単なる口封じなのかもしれないが、私は初めて見せた鬼舞辻の尻尾を掴んで離したくない。わかってくれかな？」

輝哉の言葉に場は静まり返る。輝哉の意思が、強い思いが理解できたからだ。

しかし、実弥だけは違った。無論輝哉の言葉は理解できる。それでも鬼への憎悪はそれを超えていた。

「わかりません御館様。人間は生かしていてもいいが鬼は駄目です。今まで俺達鬼殺隊がどんな想いで戦いどれだけの者が犠牲になったか。承知できない！」

そういうと実弥は日輪刀で自らの腕を切り、血を流した。それを見て陽明は呆れたようにため息を吐く。

「あーあーお庭汚しちやつて。あとで掃除して下さいよ」

「陽明さんは黙って下さい。今から俺が証明しますよ！鬼という生き物の醜さを！」

実弥はその血を先程突き刺してきた穴に向けて流す。中からは苦しそうに呻く声と、

箱を引つ掻くような音が聞こえてきた。

「禰豆子！」

「無理することはねえ、お前の本性を見せればいい」

「不死川サン、そのやり方自体は反対しませんが、日向では鬼は出てきませんよ」

「……………御館様、失礼仕る」

そういうと実弥は禰豆子の箱を持って座敷の日陰の方は飛んだ。

箱を転がすと、実弥は再び刀を箱に突き刺す。

「っ！禰豆子！」

「ほうら出てこい鬼イ。お前の本性を見せてみるオ！」

「やめろお！」

頭を下げていた炭治郎は起き上がり、そして実弥に向かっていこうとした。

「んっ！」

しかしそれは伊黒の技によって阻止された。凄まじい力がかかっているわけではないが、それにより炭治郎は息をすることすらままならなくなつて。

(息が、できない！)

実弥はそんな炭治郎の様子を気に留めることなどせず、刀の鋒で箱の扉を開ける。

中から姿を現したのは、少女の鬼。竹の猿轡をつけて、怪我を負わされたことと目の

前に人の血があることによる極度の飢餓状態故に口からは絶えず涎が出ている。
「どうした鬼イ、欲しいだろう？来いよオ」

鬼……禰豆子は極度の飢餓状態であるにも関わらず実弥の血を目の前にしてもまだ襲いかかる様子は見せない。普通の鬼ならば既に襲いかかって、そして実弥に斬られているだろう。それを屈強な精神で抑え込んでいることに遠夜は関心した。

(……)まで精神力が強いとは、な)

実弥は稀血だ。いや、稀血を遥かに超える鬼を酩酊させるほどの希少な血故に飢餓状態で、至近距離で実弥の血を前にして耐えることなど、どれほどの精神力がいるのかは想像を絶する。

感心する遠夜の横では炭治郎が伊黒に抑えられており、それをどうにか抜け出そうと炭治郎はもがいていた。

「伊黒さん、強く抑えすぎです」

「動こうとするから強くなるだけだ。こいつが動こうとしなければ、もう少し緩めるさ」
「……竈門くん、肺を圧迫されている状態で無理に呼吸を使おうとすれば血管が破裂しますよ」

「血管が破裂！いいな派手な響きで！いいぞ破裂させろ！」

「脳みそまで派手に筋肉になってんすかねえ」

「おい無道！地味に聞こえてるぞ！」

「ああ……なんとという弱く衰れな子供……南無阿弥陀」

柱がそんなやり取りをしている中、まだ禰豆子は耐えていた。

「ふうー、ふうー！」

息を荒くし、手は強く握りすぎて血を流しながらも本能に抗い続ける。身体はどうしよもなく血を求めるが、それを全ての精神力を費やして抑え込む。

「ああああ！」

「なに？」

そんな禰豆子を見た炭治郎は無理矢理腕に力を込めて拘束していた縄を引きちぎり、縁側へと近寄る。

「禰豆子！」

炭治郎の呼びかけに禰豆子は目を見開く。

そして脳裏に映るのは、家族の光景。

忘れてはいけない。人は、守り、慈しむものであると。

忘れてはいけない。自分のために、命を掛けてくれている人たちがいることを。忘れてはいけない。自らが、『人』として生きていくために。

理性を完全に取り戻した禰豆子は実弥の腕から目を逸らす。まるでそんなものはいらないとも言うように。

「なっ」

程度に違いはあれど、少なからず柱達は皆驚愕した。実弥という稀血を完全に拒否することができる鬼ならば、今後人を襲うことは無いに等しいと言える。そんな鬼が、実在するとは思えなかったが、目の前に現実として突きつけられれば認めざるを得ない。

「どうやら、結論は出たようだね」

二人の娘に事態がどうなったかを聞くと、輝哉はそう言つて柱達に向き直る。

これで、禰豆子が人を襲わない証明ができたね」

「……はああ」

禰豆子が無事に耐え切ったことに炭治郎は安堵の息を吐いた。

「炭治郎」

「は、は、は」

「それでも、禰豆子のことをよく思わない者は必ずいる。だから証明しなければならな

い。二人が鬼殺隊として戦えることを、役に立てることをね」

「っ！」

「炭治郎、十二鬼月を倒しておいで。そうしたらみんなに認められる。炭治郎の言葉の重みが変わってくる」

「……俺は、俺と禰豆子は、鬼舞辻無惨を倒します！俺と禰豆子が、悲しみの連鎖を断ち切る刃になります！そのため、刃を振ります！」

「いい心がけだね。でも今の炭治郎には無理だから、まず十二鬼月を倒そうね」

「はっ、はい……」

「鬼殺隊の柱は、当然抜きん出た才能がある。血を吐くような訓練で自分を叩き上げ、十二鬼月をも倒している。だから柱は尊敬され、優遇される。炭治郎も口の利き方には気をつけようね」

「は、はい」

「それから実弥、小芭内、あまり下の子に意地悪をしないこと」

「御意」

「……御意」

「それと遠夜」

「はっ」

「会議の後、話がある。私の部屋に来ておくれ」

「……御意」

「じゃあ炭治郎の話はこれでおしまい。下がっていいよ」

輝哉の言葉にしのは一つ申し出をした。

「でしたら竈門くんは私の屋敷でお預かりしましょう。はい、連れて行ってくださいー
い」

そう言つてしのは手が叩くと隠の隊士が現れ、凄まじい勢いで炭治郎と禰豆子を回収してその場から去つていった。見たところ、相当柱に対して畏怖の感情が強いらしい。

「じゃあ、柱合会議を……」

「ちよつと待つて下さい！」

輝哉の言葉を遮つて連れて行かれたはずの炭治郎の声が響く。何かとそちらを見ると、炭治郎が走つてきていた。

「……なんだあれ」

「さあ」

「その、傷だらけの人に頭突きをさせて下さい！」

「……本当になんだあれ」

「……さあ」

事態を飲み込めず天元は小さくツツコミをいれるが、なんなのかわかっていない傍らにいる遠夜はただただ呆れるしかできなかった。

「禰豆子を刺した分だけ！絶対に頭突きをしたいです！頭突きなら、隊律違反にならないでじょっ！」

騒ぎ立てる炭治郎は無一郎の飛ばした小石を当てられて炭治郎は崩れ落ちる。

「……御館様の話を遮ったら駄目だよ」

「も、申し訳ありません時透様！」

「申し訳ありません御館様！」

勢いよく謝ると隠の隊士は炭治郎を担いで走っていった。

「炭治郎、珠世さんよろしく」

最後の輝哉の言葉に炭治郎は目を見開き、他の柱（遠夜と陽明を除く）は首を傾げたが、輝哉は説明することはしなかった。当たり前といえど当たり前ではあるが。

「じゃあ、柱合会議をはじめよう」

輝哉は柱達の中に入るよう促し、柱達はそれに従った。

「以上が報告だね。皆の報告にあるように、今まで以上に鬼の被害は増えている。鬼殺隊士も増やさないといけないが、皆の意見を聞きたい」

輝哉が全員の報告を聞き、そう結論づけて柱に意見を促す。

「……今回の那田蜘蛛山の件ではつきりした。隊士の質が信じられないくらい落ちていく。ほとんど使えない。なにより育手の目が節穴だ。使えるやつと使えないやつの見分けくらいつくかと思っただが……」

「さっきの奴はなかなか使えそうだがなあ。不死川に一撃を入れていたし、見込みがある」

「ケツ……」

「人が増えるほど、組織における制御統制は難しくなっていく。今は随分、時代も様変わりしていますし」

「愛する者を惨殺され入隊した者、代々鬼狩りをしている優れた血統の者以外に、それらと同等の結果を求めるのは残酷だ」

「それにしても、先程の少年は入隊して間もなく十二鬼月と接触しているとは！引く力が強いように感じる！あまり合い見えない我らからしても、羨ましいものだ！」

「……そうだね。しかし、これだけ下弦の伍が動いたということは、那田蜘蛛山近辺に無

惨はいないのだろうね。無惨は隠したいものがあると騒ぎを起こして巧妙にそちらに注意を逸らすからね。もどかしいものだ」

そこで輝哉は一度言葉を切る。

「しかし、鬼共は今ものうのうと人を喰らい、力をつけ、生きながらえている。死んでいった者達のために、我々がやることは一つ。

……今、ここにいる柱は、始まりの呼吸の使い手の剣士達以来の精鋭が集まったと確信している」

「宇髓天元」

「煉獄杏寿朗」

「胡蝶しのぶ」

「甘露寺蜜璃」

「時透無一郎」

「悲鳴嶼行冥」

「不死川実弥」

「伊黒小芭内」

「富岡義勇」

「無道遠夜」

「私のかわいい剣士達、皆の活躍を期待している」

輝哉のその言葉で、緊急柱合会議は締め括られた。

――

柱合会議後、遠夜は輝哉の妻、あまねに連れられ輝哉の自室に訪れた。

「御館様、無道様がお見えです」

「入っていいよ」

「失礼します」

輝哉は変わらず穏やかな雰囲気を纏ったまま、遠夜を待っていた。

「よってきたね」

「いえ。して、私になんのご用が？」

「そうだね、まずは任務に関することから。遠夜には、少し調べてほしい場所があったね」

「……潜入、ですか」

「そうなる。隠の隊士にも潜入をさせているんだけど、隠では手掛かりが掴めない。だから遠夜に調べてほしい」

「そうするだけの価値のある場所、というわけですか」

「そうだね。ここには、多分十二鬼月がいる。もしかしたら……」

「上弦、ですか」

「上弦、または下弦の上位がいると私は思っている」

「承知しました。潜入任務、必ずや成し遂げてみせます」

「頼んだよ。それで、潜入する場所なんだけど」

「そういつて輝哉はあまねに目配せをすると、あまねは隠しの調査資料を遠夜に手渡した。」

それを受け取った遠夜は手拭いを少しずらしてそれを見た。

「っ……」

それを見た遠夜の目は大きく見開かれ、動揺が輝哉に伝わってくる。動揺を感じ取った輝哉は悲しげに目を伏せた。

「できることなら他の者に頼みたかった。でも鬼の手掛かりが全く掴めないのに他の者をいかにさせるのは少し時間がかかりすぎてしまう。だから索敵が得意な遠夜にお願いし

ようと思った」

「……へえ」

「すまない、他意は無かったんだ」

輝哉はそう言つて遠夜に頭を下げる。

「わかつてます。ここ、そんなにきな臭いんですか?」

そう言う遠夜の気配は既に普段の掴み所のないものに戻っていた。

「うん。色々と不可解な点が多くてね。人が消えたり、遺体が返つてこなかったりと黒い噂は絶えない。でも隠が調査した範囲では中ではなにも起こつてないんだ。それに噂は噂でしかないのか、実際に被害に遭つたつて人はいない。表面上はただの病院に見える。でも、それだけではないと思うんだ。だから遠夜に調べてほしい」

「……わかりました。実際、ここ調べるなら俺以上に適任はいないでしょう」

「実際に潜入するのは色々と準備がいる。こちらも支援するための体制をつくるために少し時間がほしい」

「構いませんよ。俺も、少し時間が必要ですから」

「ありがとう。詳細は決まり次第連絡するね」

「御意」

「会議の後にすまないね。あともう一つ」

「はっ」

「彌豆子のことだ」

その言葉にわずかに遠夜は眉を動かす。

「成り行きかもしれないけど、君も義勇と共に彌豆子を助けた。だから彌豆子に関して、君もちゃんと責任を取る必要がある」

「……………」

「でも、彌豆子のことに關して君は命を賭ける必要はないと思うんだ。君が命を賭けるべき場所は、他にあるだろう？」

「……………」

「だからね、もし彌豆子が人を襲うような事態になってしまったら、遠夜は黒雨の後釜についてもらうことにしたよ」

「はあ。そんなのでいいんですか？」

「うん。鬼殺隊を一時的にでも混乱させたんだ。残りの人生を全て鬼殺隊のために使ってもらう。いいね」

その言葉には優しさとともに明確な強さが込められていた。輝哉にとってこれが落とし所だと判断した結果であり、代案を遠夜が出せない以上、遠夜はこれを拒否することはできない。事実成り行きであつたが、自らが行った行為に対して何かしらの形で責

任を取る必要はあつたため遠夜にこれを拒否する権利は無い。尤も、あつたとしても拒否しなかつたであらうが。

「異論があるなら聞こう」

「異論はありません」

「なら下がつていいよ」

「御意」

頭を下げて遠夜は輝哉の自室を後にした。

――

「遠夜」

輝哉の自室を後にし、産屋敷邸を歩いてみると背後からしのぶが声をかけてきた。考え事をしていたためか遠夜はしのぶの気配に全く気づくことができなかつた。

「おっと、しのぶか」

「あら、随分なご挨拶ですね？ どうせ気配で気づいていたのでしょうか？」

「いや、今は全く気づかなかつた」

「あら珍しい。なにか考え事でも？」

「ちよいとな」

肩を竦める遠夜に普段とは違う気配を感じたしのぶは、先程まで遠夜が輝哉に呼ばれていたことを思い出した。

「御館様になにか言われたのですか？」

「次の任務について言われただけだ」

「御館様から直接任命される任務、ですか」

遠夜の言葉に少しだけしのぶは表情を曇らせた。輝哉から直接任命される任務は総じて難易度が高い。柱故にそのように難易度の高い任務を任されることも多々あるのだが、それでも直接任命される任務は別格に難易度が高い。無論しのぶもそのような任務に就いたことがあるが、非常に苦労した記憶がある。

「どのような任務なのですか？」

「潜入だとき。ただ誰かになりすましたりするんじゃないやなくて、夜とかに忍び込むのがいだらうな」

「どこに潜入を？」

「病院」

「病院？」

「ああ。房総の方にあるでつかい病院よ。そこがきな臭いが、なかなか尻尾を出さない

らしいから俺が直接いつて確かめて欲しいとき」

普段通り飄々とした態度に言葉。いつもと変わらないと他の柱なら判断するだろう。しかし昔から馴染みのあるしのぶはどこか違うことを察した。このわずかな変化に気づけるのはしのぶと輝哉くらいだろう。生きていれば、日永やカナエも気づいただろうが。

「……遠夜」

「ん？」

「その任務の資料って、私が見ても大丈夫？」

「……ああ、極秘とかは言われてないし、大丈夫だろ。なんか心当たりでもあんのか？」

「いいえ、ちよつと気になって。潜入先が病院なら医療関係者として助言くらいはできるかもしれないし」

「そいつはありがたいねえ。ほい」

遠夜は懐から取り出した資料をしのぶに渡した。

渡された資料に目を通すと、潜入先は房総半島の中央部付近にある『黒条総合病院』という日本の中でもかなり大きな病院らしい。

隠の隊士が潜入しているが、有効な手掛かりは無く、院長や医師、看護師全員と接触してみたが鬼らしき気配は無かったとのこと。

「資料を見る限り、柱が行くほどの案件とは思えませんね」

「そうだな。でもまあ、御館様が行かせるんだからつまりそういうことなんだろう」

「院長は……黒条月慈さんという方ですね」

「……へえ」

「……遠夜、なにか隠してますね？」

幼い頃から付き合いのあるしのぶは遠夜の僅かな変化に気がつくことができた。他の人が見たら確実に気がつけないほどの、ほんの小さな変化。それを見抜くことができる人は、恐らくしのぶの他には輝哉か日永、そして陽明くらいだろう。

「さあ？なんのことやら」

「貴方がそう言う時は大体なにかある時です。昔からそうなんですから」

「へえ？俺のことよく見てるんだな」

「なっ！」

遠夜の言葉にしのぶの顔は一気に熱くなる。そういうつもりで言ったわけではないのかもしれないが、今の言い方ではまるでしのぶが遠夜のことをよく目で追っているように聞こえる。間違っただけではないが、それはあくまで監視としてだ。基本問題児の遠夜はなにをいってかすかわかったものではない。だから監視しておく必要があるため、しのぶはよく遠夜のことを見ていた。

だが聞く人が聞けばそれは遠夜を異性として意識しているから目で追っているように聞こえる。恐らくこの場に甘露寺がいた場合、そのように解釈するだろう。

決してそういう意図はない。自らにそう言い聞かせながらしのぶは遠夜を睨む。

「貴方は問題ばかり起こすから監視しているだけです！」

「見てることは否定しないのかよ」

実際見ているため否定することはできないが、これだと本当にしのぶが遠夜のことを異性として意識しているように聞こえるためそういう経験のないしのぶは更に顔を赤くする。

「くっ！貴方がもう少し素直ならわざわざ見たりしないわよ！」

「くく、おいおい。口調が戻ってるぜ？」

「うるさいわね！遠夜が変な言い方するからでしょ！」

「んく？なんのことだく？どんな解釈したんだく？わからねくなあ〜」

完全に煽りに来ている遠夜にどんどん怒りが溜まっていくが、ここで下手に口を出すと余計羞恥が重なるだけであると冷静な思考は判断し、深呼吸することで怒りを抑えようとした。

「ふうー、ふうー」

「感情を制御できないのは未熟者ってな」

その言葉にしのぶは完全に我を忘れた。

「誰のせいよー！」

「ぐぶ」

しのぶの全力の飛び蹴りが遠夜の顔に突き刺さった。怒りのあまりに普段人にやるような威力以上の、それこそ鬼相手にするのと同等の力でやってしまった。

「あつ」

冷静になった時にはもう遅く、遠夜は鼻血を流して倒れていた。

――

「……………」

気がつくくと蝶屋敷の病室だった。

ズキズキと痛む鼻にはガーゼが詰められており、そのガーゼは血に染まっていた。さらには後頭部も痛む。触ってみると傷はないが、僅かに腫れているのがわかる。たんこぶができていたようだった。

いくらしのぶの飛び蹴りが強いとはいっても、遠夜とて柱。人間の飛び蹴りで意識が飛ぶようなことはないが、どうやらしのぶの飛び蹴りで仰け反り勢いよく後ろへ倒れた

時に頭を強く打ち付けてしまったため意識が飛んでしまったのだろう。

「いって……」

「あ、起きましたか」

起き上がると、近くにいた蝶屋敷の看護師として働く神崎アオイが声を掛けてきた。

「おう、アオイか」

「無事に目が覚めたようだなによりです」

「無事って言っているのかこれ」

「一応検査はしますが、こぶができた程度で他は異常なさそうなので無事でしょう」

「だといいいねえ。おー、痛」

「しのぶ様を煽るからですよ。元々あまり煽り耐性のある方ではないことくらい、無道様ならわかるでしょう」

「反応いいからねえ。つい煽りたくなっちゃう」

「ただ煽るならともかく、あの煽り方は駄目です。その手の話にしんのぶ様は恐らくあまり耐性が無いでしょうから」

「くく……あの歳で初心つてのも面白い。ま、鬼殺隊にいる以上仕方ないかもしれんがな」

反省の色が全く見えない遠夜にアオイは呆れたようにため息をつきながら額に手を

当てる。この男はわかっているが、やらせていると、なんとなく察しがついた。

「そんな馬鹿みたいなことでベッドを占領しないでほしいんですけど」

「ならその辺に転がしておけばよかったのによ」

「仮にも患者なのでそんなことはしません。そんな理由で患者にならないで下さいね」
「へーい」

「本当にわかっているのですか？」

「はいはい。ところで俺の手拭いどこ？」

起きた時から手拭いがなかったため、今は気配ではなく視覚を使ってアオイと会話をしている。

「しのぶ様が預かっています。無道様が倒れた際に少し汚れてしまったようなので」

「そうかい」

遠夜はベッドから降りて近くにたたんであった紫の羽織りを着て、首を鳴らした。

「行かれるのですね」

「まーね。この程度の傷なら絶対安静とか言わねーだろ？」

「はい。ですが軽い脳震盪を起こしていたので今日は激しい運動はしない方がいいと思います」

「ま、そのくらいは仕方ないか」

「ではまた」

「ん」

そう言つて遠夜は病室を後にし、その後ろ姿を見送つてからアオイは作業に戻つた。

――

気配を辿つていくと、しのぶは自室にいるのがわかつたため遠夜は自室を訪れた。

「しのぶ」

「入つて大丈夫ですよ」

「失礼」

仮にも女性であるため最低限気を使って声をかけると普段の口調に戻っているしのぶの声が聞こえた。

入室許可が得られたため襖を開くとしのぶは普段の隊服、羽織りの姿だったが、髪は下ろしていた。

「起きたんですね」

「おかげさまでよく眠れたよ。いい蹴りだった」

思いっきり皮肉を言う遠夜から目を逸らしてバツが悪そうにしのぶは口を開く。

「……その、かつとなつてしまったとはいえ……やり過ぎてしまいました。ご、ごめんなさい」

「いい。面白かつたから」

「……はあ、本当に昔からそういうところは変わりませんね」

「お前も生真面目なのは変わらん」

「そんなことを話に來たわけではないのでしょうか？」

「ああ。手拭い、しのぶが持つてゐるって聞いたから」

「綺麗に洗いました。今は乾かしているところですので、もう少し時間を下さい」

「そうか。んじやそれまでしのぶの研究資料でも見せてもらおうかねえ」

「はいはい、どうぞ……つて、え？」

遠夜の言葉にしのぶはキョトンとした顔をした。

「ん、なに」

「え、いや……結構専門知識盛り沢山の資料なんで、専門知識のない方が読んでもわからないと思うのですが」

「薬学の知識なら、それなりにある。昔勉強したからな」

「え」

「さすがにかなり前だから抜けてる知識もあるだろうけど」

そういいながら遠夜は既にしのぶの研究資料を開いて読み始めていた。

「どこで習ったのですか？」

「昔、兄貴と一緒に勉強した」

「ああ……日永さんと勉強したのですね」

遠夜はその言葉に返すことなく資料を読み進める。

その様子を見てしのぶはふと、遠夜の素顔を久しぶりに見たことを思い出した。

（最後に見たのは……いつだったでしょう）

初めて見た時の印象が強く、まだあの日の『恐怖のような』感情は残っていたためあまり素顔を見ようとしてこなかったが、こうして見ると比較的整っているのがわかるが、所謂平凡な顔だといえる。

髪は短く整えられており、義勇とは違い多少気は使っているのがわかるが、それでも女性のしのぶから見ればまだ雑の域はでないものだった。

瞳の色は青味がかった漆黒であり、どこことなく不思議な色だ。

やはりあの日と同じようにどこか濁っており、感情は読み取れない目をしていた。

（……あの日から、貴方は変わらないのね）

本心を見せることなく、誰も信じることをしない。日永に遠夜のことを託されたのに遠夜のことを未だに変えることができない事実には僅かながらしのぶは無力感を感じて

遠夜の顔をじっと見つめた。

「……なんだよ」

遠夜はその視線に気がついてしのぶのことをジト目で見た。

「なーんにも」

「なんだそりゃ」

「貴方の真似ですよ」

「おっと」

「……なにか、気がつく点はあった？」

「もうちよい読まないときすがにわからん」

「それもそうね。少し席を外すわ。竈門くん達の薬の時間なので」

「そうか。もう少し読ませてもらうわ」

遠夜はそう言つて資料を読み漁ることに戻る。

それを横目にしのぶは立ち上がり、自室を後にする。

最後に襖を閉じる時に見えた遠夜の瞳は、変わらずなんの感情も宿していなかった。

漆

「ぎゃああああー！」

頸を斬られ、断末魔を上げながら斬られた頸が地面に落ちる。

「いつて……ちよーつとてこずったな」

血が流れる傷口に軟膏を塗って止血を施す。傷の数は多いが一つ一つの傷は浅く、致命的なものはない。しかし傷の量が多いため失血量は少し多い。

「く、くそが！もう少しで、もう少しで俺は十二鬼月になれたかもしれないのに！」

「……………」

「お前さえ！鬼狩りさえ来なければ！」

「煩えよ」

消えかけてなお喚き散らす鬼の言葉を聞くことが億劫になった男は刀で鬼の頸を斬る。斬られた鬼はなにも言葉を発することなく、完全に消え行く最後まで男のことを睨み続け、そして最後にはその鬼がいた痕跡は跡形もなく消えた。

男は刀を振って血切りをすると、刀を鞘に収めた。

刀を収めるのとほぼ同時に山の隙間から光が漏れる。

「……朝か」

夜の闇は太陽の光によって消え、日輪に照らされた空は青く染まっていく。太陽が登りはじめてなお、未だに沈まない月が空には浮かんでいた。

目を覆う手拭いを少しずらしてその月と太陽を見る。男にはその二つの存在がとても大きく思えた。

「……遠いな」

男……遠夜の瞳には、顔を出した日輪が映された。

その光があまりにも眩しくて、遠夜は目を細めた。

*

彌豆子達の処遇が決まってから二週間以上が過ぎた。

遠夜は任務を終えて蝶屋敷への道を歩く。

今回の任務では鬼の数が多く、遠夜は僅かながら負傷した。そのため普段から持ち歩

いている軟膏を塗って治療したが、それを最後に軟膏を使い果たした。無くなった軟膏を補充するために、遠夜は蝶屋敷へと訪れた。

「……なんか、騒がしいな」

しかし遠夜が蝶屋敷に到着すると、屋敷から感じる気配は多く、それによく耳を澄ますと騒がしい声が聞こえる。

事前に鳥による連絡を入れたからしのぶを怒らせるような事はしたつもりはないと考えた遠夜は思考を巡らせる。

「……ああ、そういえばあの少年いるのか」

そこで遠夜は負傷した炭治郎が蝶屋敷にいないことを思い出す。気配から感じる限り、どうやら炭治郎だけではないようで、猪の頭を被った少年の他にもう一つ気配がするためもう一人いるようだ。

「動いてるってことは、機能回復訓練か」

任務が終わったばかりであるため時間に余裕のある遠夜は後で訓練風景でも覗きに行こうと考えながら蝶屋敷の門をくぐった。

「遠夜」

「よ」

玄関から入るとしのぶが遠夜を待っていた。

「用件は伝えた通りだ。前と同じ軟膏が欲しい」

「ええ、聴いてます。少し調査に時間をいただけたらすぐに補充しますよ」

「助かる。任務明けだから時間あるし、テキトーに頼むわ」

「はい。じゃあ好きに待っていてください」

そういうとしのぶは軟膏入れを持って調査室へと向かっていった。

手持ち無沙汰になった遠夜はやることもやれることもないため縁側でぼんやりして
いようかと考えた。

だがそこで先程感じた気配のことを思い出した。

「ちよつと見に行くか。冷やかし程度に」

そう言つて遠夜は足を道場の方に向けた。

――

道場に着くと、ちょうど炭治郎がカナヲに転ばされたところだった。

「いたた……」

「おう少年、やってるな」

「あ、無道さん……」

「どうやらカナヲにしてやられたみたいだな」

「ええ……全然捕まえられなくて……」

今炭治郎がやっているのは機能回復訓練の一つである単純な鬼ごっこの全身運動だ。追いかける側と追いかける側を交互に行い全身を動かす感覚を思い出させるための訓練である。

一般人相手なら炭治郎が負ける道理はないが、相手はしのぶの元で数年訓練を積んだカナヲである。既に全集中『常中』ができるため炭治郎よりも遥かに身体能力が高い。加えてカナヲは目が良いため炭治郎の安直な動きを見切ることなど造作もない。

故に炭治郎がカナヲに勝つためにはまず全集中『常中』を習得しないとお話にならない。習得してからも少し訓練を積んで呼吸を上手く扱えるようにならねばならない。炭治郎が機能回復訓練を終えるには少し時間が必要だろう。どんな天才でも一朝一夕で全集中『常中』は身につかない。二ヶ月足らずで柱に至った無一郎ですら『常中』の習得には少し時間がかかった。

「うう……どうやったら勝てるんだ……」

「残念ながら少年はまだ頭を使う前の段階だ」

「無道様、いらしてたのですね」

「よ、アオイ。ちよいとしのぶに用があつたんでな」

軽く手を上げてアオイに挨拶をする。カナヲは相変わらず無口で遠夜に視線を向けるだけだったため遠夜も声はかけずに手を軽く振るだけにした。

「頭を使う前の段階って……」

床に座り込んだまま炭治郎が遠夜に聞いてくる。

そんな炭治郎相手にくつくつと笑いながら遠夜は皮肉げに答えた。

「まだカナヲと競う前の段階だつて言つてんの」

「そんなあ……」

「そう凹むな。とりあえず、少年はあの三人娘から少し話を聞け。あいつら、蝶屋敷来てからそこそこ時間経つてるから色々知ってるぜ。知識だけならお前よりもあるかもな」

「そうなんですか?」

「ああ。後で聞いてみ。カナヲ」

「……………」

遠夜はカナヲを呼ぶが視線を合わせるだけで返事はしない。

「今暇なんだ。ちよいと付き合え」

そう言つて遠夜はカナヲに木刀を投げた。カナヲはそれを難なく掴むと木刀を不思議そうに眺めた。

「ほれどうした？ 打ち込んでこい。暇つぶしがてらに稽古つけてやらあ」

「……………」

カナヲは答えることはしなかつたが、無言で木刀を構えた。

「え、でも無道さんの木刀は……………」

「いらん」

「えええ×危ないですよ！」

「凡人とはいえ、一応柱だぜ俺。まだまだ負けんよ。お前にも、カナヲにもな」

「……………」

「来い」

カナヲは返事をすることなく木刀を持つて遠夜に向かつていった。

迷いなく振り切られた木刀を難なく頭を下げて回避。続け様に振り下ろされてきた木刀も横に回避する。止まることなく連続で振られる木刀を無駄のない最小限の動きで回避し続ける。

「す、すげーい」

炭治郎は目で木刀を追うことはできるが、あそこまで綺麗に回避することはできな

い。遠夜は羽織を掠らせることすらさせずに回避し続けている。だが炭治郎では防ぐ工程を入れないとここまで耐えることはできないだろう。

「おーおー速くなったなあ。さすがしのぶ、教えるのが上手い」

「……………」

「でもまだまだだなあ。お前……いや、お前達ほど素質があれば俺なんぞあつという間に抜かせるのに、まだこの程度か」

「……………」

「さすがに、まだ経験不足か」

そういうと遠夜は振り下ろしてきた木刀を蹴りで上に弾き飛ばし、さらにその勢いをそのまま利用してカナヲを蹴り飛ばす。その蹴りを腕で防いだカナヲは距離を取って体勢を立て直す。打ち上げられた木刀は遠夜の手にとまった。

「悪くねーな。だが身体の使い方がまだまだできてない。上半身と下半身で動きにズレがある。呼吸も、発展途上ってとこだな」

「……………」

「次手え抜いてきたら吹っ飛ばすからその気でいろ。いいな」

そう言つて遠夜は木刀をカナヲに投げた返した。

「……………」

「返事くらいできないもんかねえ。まーいいや、来い」

再びカナヲは遠夜に迫る。先ほどよりも数段速い攻撃が遠夜を襲うが、それを回避する。

花の呼吸 伍ノ型 徒の芍薬

淀みなく放たれた九連撃は確実に遠夜を捉えにかかる。

「つとー」

しかし花の呼吸の全ての型を知っている遠夜は連撃の隙間を縫ってカナヲの横を通り過ぎて回避する。

「……！」

目のいいカナヲはそれを見切り、回避後隙のある遠夜に追い打ちをかける。

花の呼吸 弐ノ型 御影梅

続け様に放たれた波状攻撃も木刀の側面を撫でるようにして受け流す。

「いいね、今のは避けきれなかった」

「……………」

花の呼吸 陸ノ型 渦桃

「そいつは悪手だ」

迫ってきた木刀を完璧なタイミングで遠夜は掴んだ。

「！」

「もう一回、徒の芍薬なら腕で防がせることもできた。今は攻撃の鋭さよりも厚みを大切にすべき状態だったな」

そう話す遠夜の顔面に向けてカナヲの蹴りが放たれるが、それを木刀を掴んでいない方の手で防ぐ。

「いい追撃だ」

足を掴んだまま遠夜はカナヲを道場の壁に向かって放り投げるが、空中で体勢を立て直したカナヲは激突することなく着地する。

「よし、じゃあもういつ」

「なに勝手に遊んでいるのですか」

「へばっ」

突如、背後から現れたしのぶの投げた瓢箪が遠夜の頭に直撃した。瓢箪は遠夜の頭に当たった後、綺麗に炭治郎に飛んでいき、炭治郎の手に収まった。

「人に仕事を頼んでおいて貴方自身は好きに遊んでいるとは、いい度胸ですね」

笑顔のまま底冷えするような声を発するしのぶに炭治郎は怯えを隠すことができない。

「竈門くん」

そんな状態でしのぶに話しかけられた炭治郎は濡れた子犬のように身体を震わせた。

「は、はい!」

「そんなに怯えないで下さい……遠夜この馬鹿になにかされましたか?」

「い、いえ! なにも!」

「そうですか、なら良かったです。カナヲもなにもされてはいないわね?」

「……………」

返事はしないが、カナヲはしのぶの目を見て頷いた。

「じゃあ私はこれを借りていきます。竈門くん、訓練頑張ってくださいね」

「は、はい……………」

遠夜はしのぶに首根っこを掴まれ、引き摺られながら消えていった。

「……………アオイさん」

「……続けましようか」

いたたまれないような気持ちになった炭治郎はアオイに目を向けたが、アオイは何事もなかったように訓練を続けるように言った。その目が虚だったことを炭治郎は見ないことにした。

――

「よつと」

「へぶ」

引き摺られてきた遠夜はしのぶに放り投げられて顔面から撃墜した。

「おい、医者が増やそうとすんな」

「遠夜にはちょうどいいでしょう？頭が良すぎるのも考えものなので少し馬鹿になるくらいが丁度いいです」

「褒めるのか貶すのかどつちかにしろやヤブ医者」

「お黙りなさい問題児」

遠夜は肩を竦めてしのぶに向き直る。

「で？どーしたんだよ。調合するところからやるならもう少しかかると思ったんだけど」

「ええ、そうですね。実は調査に必要な分の薬草が不足してしまっていて、軟膏が調査できないんです」

その言葉に遠夜は目を丸くする。しのぶは昔から几帳面であったため補充のし忘れなどそう無い。片手で数えられる程度のものだったから遠夜は珍しいこともあるものだと考えた。

「へえ、珍しい。いつもある程度在庫確保しておくのに」

「いつも仕入れている薬屋の方であまり薬草が取れなかったようでした」

「あー、そういう」

「他の所から仕入れますので、軟膏の補充は少し待ってもらってもいいですか？いつになるかはまだわからないのですが……」

「構わんよ。しばらく大きな任務もねーし」

「助かります」

「で、お前はなに企んでんだ？」

遠夜の言葉にしのは笑顔で首を傾げる。

「なんのことでしょう」

「あの少年匿つてなにするんだって聞いてんの。継子の杵を増やすとか言ってたけど、そういうわけでもあるまいて」

「別に取って食べたりはしませんよ？」

「そりやそーだ。んなわかり切ったこと聞いてんじゃねーんだよ」

羽織についた埃をはたきながら遠夜は立ち上がり、近くに置いてあつた薬品の入った瓶を手を取って眺めた。

「同じ話を、少し前に煉獄さんとお話ししました」

「へえ？で？」

「彼らは癸の隊士でありながら、あの山を生き抜きました。きつと才能と素質がありません。なので、ここで治療すると共に常中の習得をさせようと思ひまして」

「ほー」

「才能のある隊士を育てるのも柱の役目。せつかくの才能を、伸ばしてあげようと思つただけです」

「そうかい」

聞いておいてすぐ興味が無さそうな反応にしるぶは内心で青筋を立てる。このまま帰られるのも少し癪なので遠夜が嫌がりそうなことを提案することにした。

「……そういえば遠夜、しばらく大きな任務は無いのでしたよね」

「今度の潜入までは担当の地区の警備以外は任務ねーよ」

「なら、炭治郎くん達に稽古をつけてあげてはどうですか？」

「はあ？」

「今はお暇なのでしょう？なら断る理由は無いですね」

「……まあ、無いな。というか達？」

「ええ。善逸さんと伊之助さんの二人もよろしくお願いしますね」

「その二人、俺は見てねーんだが？」

「どちらもカナヲに負け続けて訓練を放棄してしまったのですよ」

その言葉を聞いて遠夜は天を仰いだ。

遠夜はやる気のある隊士の稽古をつけるのは吝かではない。寧ろ普段の性格の割に積極的だ。しのぶから見ても教えるのはそこそこうまい。継子がいるため当然といえば当然かもしれないが。

無論、遠夜の性格上煽りがちにはなるが、必要なことはきっちり伝える。継子である夕霧にも必要なことは全て伝えてある。

しかしやる気のない人間に対してはとことん無関心になる。そのため訓練を放棄している二人の面倒も見ろと言われるのは、遠夜にとつてかなり面倒くさいことだった。

「……あの少年ならともかく、他の二人は訓練放棄してんなら俺からそいつらに行動することはねーよ」

「善逸くんは私がかします。なので伊之助くんの方はよろしくお願いしますね」

「え〜」

心底嫌そうな表情をする遠夜にしのは少しだけ鬱憤が晴れる。

「いいですね？」

「最低限、あいづらが道場に顔を自分から出しにくる。でなきやさすがにやらんぞ」
「……ま、それくらいは仕方ないですかね。わかりました」

しのはぶの言葉に小さく溜息をついて、手に持っていた薬瓶をしのはぶに投げつける。

「試薬は丁重に扱ってくれませんか？」

「それ、今試作してる毒に混ぜて見ろよ。少なくとも人には有効な毒になるぞ」
大したことは言っていないように言う遠夜をしのはぶは驚愕の目で見た。

「んじゃ、軟膏頼むわ」

「ちよ、遠夜！試作の毒のことなんて私一度も……」

「この前お前の実験記録簿見た。そんだけ」

「そ、それだけで……」

「大したことねーよ」

「あ！ま、まって……」

引き止めようとしたがその時には既に遠夜の姿は無かった。

腹立たしい気持ちになりながら大きくため息をつき、しのはぶは手元の薬瓶を眺める。

葉瓶は日光を反射して鈍く光った。

翌日

「というわけだ少年。次の任務が来るまでお前の訓練を見てやる」

そう言われた炭治郎は目を点にする。

「え、と？」

「しのぶに訓練を見てやれって頼頼まれたから、稽古つけてやるって言うてるの。つつても少し助言する程度しかやれること無いんだけど」

「そ、そうなんです！ありがとうございます！お願いします！」

受け入れたのか、思考を放棄したのかはわからないが、炭治郎は遠夜に見てもらおうことを受け入れた。

「さて、じゃあ早速……」

「あ、あの無道さん」

「ん？」

稽古の話を始めようとした遠夜の言葉を遮るように炭治郎は声を出した。

「どした」

「あの……この前、いや、二年前に俺と禰豆子を守ってくれてありがとうございました」
ああ、そのことかと遠夜は苦笑する。

炭治郎からしたら助けられたことなのかもしれないが、遠夜にとつて炭治郎達が生きようが死のうがどうでも良かった。義勇の意思に従ったに過ぎない。だから礼を言われるような謂れは無かった。

「よせよ。お前らを助けたのは正直成り行きだ。富岡さんが助けるつて言ったから助けた。それだけだ。お前達が死のうが生きようが、どっちでも良かったんだ俺は」

「そうかもしれない。でも、御館様の屋敷で無道さんは俺と禰豆子を庇ってくれました。そのことにお礼を言うべきだと思っただけです」

「自分の意思じゃねーとはいえ、助けた命だ。死なれると寝覚めが悪いし、助けた以上責

任があるからな」

そう言つて遠夜はバツが悪そうに頭をかいた。炭治郎は本当に心から遠夜に感謝をしているが、遠夜からしたらそんな感謝を向けられるようなことをした覚えはない。成り行きで助けることになった。本当にそれだけだったから。

「……ま、そんな程度だ。だから感謝はしなくていい」

「はい！勝手に感謝してますから大丈夫です！」

「……………頭硬いなこいつ」

「よく言われます！」

褒めてねーよ、と呆れながら遠夜は呟くと炭治郎に向き直る。

「で、少年。三人娘から話は聞いたか？」

「はい。全集中の呼吸を四六時中行うことが身体能力を高める秘訣だと聞きました」

「そう、全集中・常中。これができるできないでは身体能力に天地ほどの差がでる。少年がカナヲに勝てないのは、これできてないから。今の少年じゃ一生かかってもカナヲを捕まえるなんてことはできない」

「うう……」

「だが常中を習得すればカナヲを捕まえることもできるだろう。お前たちの呼吸を使わない状態での身体能力にそこまで差はない」

「そうなんですね」

「じゃ、やってみ………と行ってできるもんでもねーか」

呼吸は肺で行う。そして人の肉体は簡単に強くはならない。日々の鍛錬で少しずつ強くしていくものだ。やれといつて簡単にできるものではない。

「少年のことだ。試すくらいはしてみたんだろ？」

「はい………でも、全集中の呼吸を長時間やろうとすると死になります………心臓耳から飛び出すかと思いましたが………」

「だろうな。はじめは誰でもそんなもんだ。で、少年はこの常中を習得するにはどうすればいいと思うよ」

「………呼吸を長時間使えないつてことは、肺が弱いつてことです。だから、肺を強くします」

炭治郎の答えに遠夜は満足げに口角を歪める。

「概ね正解。だが実際のところどういう修行をするんだ」

「俺に水の呼吸を教えてくださいました鱗滝さんの修行をやりませう。そのままはできないんで、代用の修行もあるでしょうけど………」

「ん、それでいい。ただ今までよりも肺を意識してやると効果が大きくなる。意思するとしなないではかなり差があるからな」

あとこれ、と言いなながら遠夜は懐から瓢箪を出して炭治郎に投げ渡した。

「……瓢箪？」

「そ。それを息吹き込んで壊せ」

「……は☒この硬いのを☒」

「おう。その瓢箪、特別製だから普通の瓢箪よりも硬いから生半可な呼吸じゃ壊れんぞ」

「……………」

「今カナヲがどのくらいの大きさ壊してるかはしのぶに聞け。俺が壊せるのは……」

そう言って遠夜は奥から巨大な瓢箪を転がしてきた。大きさは、炭治郎の身長と大差ないほどのものだった。

「こんくらい。カナヲもこれに近いくらいの大きさは壊せるだろうよ」

「でっか！頑張ろ！」

「思ったよりちゃんと言導してますね」

庭を走り回る炭治郎を蝶屋敷の屋根の上から眺める遠夜の背後から声がかけられる。言わずもがな、しのぶだった。

「皮肉か？」

「本心です」

「皮肉なのは否定しないのかよ」

遠夜は苦笑しながらそう答えた。

事実、しのぶの言葉は継子である夕霧の指導は雲海に任せきりのクセに炭治郎の指導はちゃんとやることに對する皮肉であった。

「夕霧の指導もしてるよ。ただ、御影山は遠いから頻繁に指導できないだけだ。それに、夕霧はまだ影の呼吸の型を習得する以前の段階だ。基礎力を身につけてる状態じゃそこまで指導することはねーよ」

「特殊な呼吸らしいですからね。詳細はわかりませんが」

「大事なものは型よりも氣だからな。変であることに変わりはねえ。ま、夕霧は氣の才能はあるから、来年には型の修行に入れるだろう」

それまでに全部終わってればいいんだがな、と最後に遠夜は付け足した。

「……………そうね」

しのぶはそれだけ答えると修行に励む炭治郎に視線を移した。そんなしのぶを見て、遠夜は口を歪める。

しのぶが遠夜の真意に気づくことはなかった。

炭治郎が遠夜の指導の下、修行を開始してから数日。

炭治郎の身体は確実に強化されていた。怪我をする前よりも動けるし、体力も確実に回復してきていた。

遠夜の指導は、炭治郎が知っている時の遠夜とは打って変わり非常に的確なものだった。走り込みをする際は肺を意識しながらも深く息をするなど短期間で確実に効果のあるものだった。炭治郎が知っている遠夜の人物像は飄々としていて掴み所がなく、他人を煽ることばかりするといったものだったため、炭治郎からしたら意外だった。こんなにも真剣に、かつ的確な指導をする人には見えなかったからだ。

その勢いで伊之助と善逸にも指導をしてくれないかと炭治郎が頼んだところ「やる気ねー塵につける指導はねえ」

と一蹴されてしまった。

仕方なく炭治郎は一人で修行を行っている。

現在、炭治郎は昼に酷使した肺を休ませると同時に指先まで空気を巡らせることを意識しながら瞑想をしていた。

（瞑想で集中力を上げる……これは鱗滝さんも無道さんも効果があるって言っていた！）

そこでふと炭治郎は遠夜のことを考える。

（いつも手拭いで目を覆っているけど、あれはなんのためにやっているのだろう。というか、よく考えたら俺は無道さんのこと、なにも知らない……）

炭治郎は無道遠夜という存在について、ほぼなにも知らないことを思い出す。自分を助けてくれた柱であるということはわかっているが、それ以外はなにも知らない。遠夜自身があまり自身のことを語ろうとしないのもあるが、それ込みでも恩人のことをあまりにも知らなさすぎる。

（それに、無道さんからは感情の匂いがしない）

鼻がよく効く炭治郎は匂いから感情を読み取ることができると言える。だが遠夜からは彼自

身の匂いはしても感情の匂いは全くしない。今まで多数の人間に会ってきたが、感情の匂いがしない人間は初めてだった。

(無道さんのことを知れば、なにかわかるかもしれない)

そう考えて炭治郎は更に集中力を増し、意識の海に落ちていく。

そして深く集中したせいか、近くにきていた気配に気がつかなかった。

「もしもし」

「はいっ!」

かけられた声に反応すると、美しい女の顔が目の前にあった。

「わっ!」

「頑張ってますね」

「……………」

声をかけていたのはしのぶだった。

しのぶは触れるくらい炭治郎に顔を近づけていた。美人の顔がすぐ側にあつたため

炭治郎は固まる。

「お友達二人はどこかへ行ってしまったのに……」

そう言うとしのぶは顔を遠ざけ、炭治郎の隣に腰を下ろした。

「一人で寂しくありませんか?」

「いえ！できるようになったら二人に教えてあげられるので！」

「君は心が綺麗ですね」

「っ……」

美人に笑顔で褒められて照れてしまった炭治郎はうまく言葉を返すことができずしのぶから視線をそらした。

「あの、どうして俺たちをここに連れてきてくれたんですか？」

数瞬間の沈黙の後、炭治郎は疑問に思っていたことをしのぶに聞いた。

「禰豆子さんの存在は鬼殺隊の公認になりましたし、君達は怪我也酷かったですからねえ。それに、君には私の夢を託そうかと思ひまして」

「夢……？」

「ええ。鬼と仲良くする夢。君ならきつとできますから」

そう言って笑うしのぶからは、なぜか笑顔とは真逆の匂いが感じられた。

「……怒ってます？」

「！」

「なんだかいつも怒っている匂いがして……笑顔だけ……」

そう言われたしのぶは目を伏せた。炭治郎が言っていることは、その通りだったからだ。

しのぶは内心でいつも怒っていた。敬愛していた姉が殺された日から、絶えることなく怒りの感情が胸の内に燻っていた。

「私の姉はとても優しい人だった。死ぬ間際ですら、鬼を哀れんでいた。でも、私はそうは思えない。人を殺しておいて可哀想？ そんな馬鹿な話はないです」

だがそれが姉の意思ならば、引き継がねばならない。哀れな鬼を斬らなくてもいいよ
うなことにできるならば、考え続けなければならない。そう思いながら日々を過ごして
きた。

だからしのぶは、姉が好きだと言ってくれた笑顔を貼りつけて、姉の意思を引き継い
できた。

「……でも、少し疲れまして」

鬼は嘘ばかり言う。人間だった頃とは打って変わり、理性を無くして保身の為に平気
で人を騙す。

「……ちよつと、うんざりしてしまいましたね。君が頑張ってくれていると思うと、気持
ちが楽になります」

「……………」

炭治郎は答えることができなかった。

「全集中の呼吸が止まっていますよ」

「あつー！」

「ぶぶ」

素直な反応をする炭治郎にしのぶは顔を綻ばせる。

(どこかの問題児とは大違いね)

これくらい素直なら可愛げもあるのに、としのぶは思った。

「……あ、あのー！」

「はい、なんですか？」

ずっと聞き役に徹していた炭治郎が唐突にしのぶに言葉を発した。それにわずかに驚きながらもしのぶは返事をする。

「無道さんについて、少し聞いてもいいですか？」

提示された疑問に内心驚き、目を丸くする。まさか炭治郎から遠夜の話題が出されるとは思ってなかったのだろう。

「遠夜について？」

「はい。俺、無道さんに助けてもらったのに無道さんのことなにも知らないのよ」

「…そうですか。いいですよ。なにから聞きますか？あ、聞く時も全集中の呼吸は続けてくださいね？」

「はいー！じゃあ……無道さんって、どんな人ですか？」

炭治郎は少し考えた後、しのぶにそう聞いた。何から知りたいかと聞かれても知らないことが多すぎるため抽象的な質問をした。

「そうですね、一言でいえば問題児ですかね」

「ええ☒問題児なんですか☒」

「それはもう！命令無視、独断先行、柱合会議もすつぽかす！とんだ問題児ですよ」

「ええ……」

「そのくせしつかりそれらに理由をつけてくるんです。しかも正当性のある理由を。だから責めるに責められないんです。そのことについて触れると、煽るような口調で反論してくる。だから柱の面々からは嫌われています」

「……………」

聞かなければ良かったと、炭治郎は少しだけ思った。遠夜の話を始めからしのぶの怒りの匂いは少し強くなった。もしかしたら、その遠夜の後始末をしのぶがしているのかもしれない。

「それに……」

「?」

「現実主義なところがありませんね。希望的観測をしないようにしているせいで、少し無理をする癖がありました。加えてそれを周囲に悟らせないようにするんです」

「え……」

「簡単にいえば、いじっぱりです。他人に弱味を見せたくないでしょう」

少しだけ、悲しそうな顔をしながらしのぶはそう言った。

「……しのぶさんは、無道さんのことが大切なんですネ」

「なっ！」

「え？」

純粹無垢な表情で首を傾げる炭治郎にしのぶは僅かに頭を痛める。多分、炭治郎はなにも悪いことを言った自覚は無い。仕方ないといえば仕方ない。炭治郎は恐ろしく純粹故に言葉に裏はない。だから邪推してしまうしのぶは己の心を少し恨んだ。

「しのぶさんが無道さんのこと話してる時、怒ってる匂いが強くなりましたけど、同時に親愛の匂いも嗅ぎとれたんです」

「……本当になんでもわかる鼻ですネ」

「へへ」

得意げに笑う炭治郎を見て心が暖かくなるのをしのぶは感じた。

「……そうかもしれませんね」

もう、身内と言えるような存在は遠夜しかいない。無論、カナヲやアオイ、なほ、すみ、きよも大切な妹だと思っっている。しかし付き合いの長さや年齢を考えても同じ目線

でいてくれるのは、もう遠夜しかない。そのことをしのぶは今自覚した。

「もう少し、素直なら良かったんですけどね」

そう言つてしのぶは空を見上げた。

「無道さんの話、もつと聞いてもいいですか？」

「ええ、たくさんお話しますよ」

「……なんか気合入つてませんか？」

それからしのぶは炭治郎に遠夜のことを色々話し、炭治郎はそれを呼吸を続けながらも聞いていく。

平和な夜は更けていく。

*

一週間後

産屋敷亭

「よくきてくれたね、遠夜」

縁側に座り、月明かりを浴びながら穏やかな笑みを遠夜に向けるのは、当主・産屋敷輝哉。

「いえ」

「待たせてすまなかつたね。相手は国に準ずる機関だから政府非公認である我々が下手な手段に出るわけにはいかなかった」

「承知しております。つまり、任務の準備が整ったと」

「うん。遠夜の準備が整い次第、潜入に向かってほしい。補佐として二人、遠夜につけるから色々任せるといい」

「はい」

「概要はこの資料にまとめておいたよ。目を通しておいてね」

「承知」

あまねに渡された資料を受け取ると、遠夜はそれを懐に入れた。

「無事で帰ってきてね」

「……善処します」

苦笑を浮かべながら遠夜は産屋敷亭を後にした。

蝶屋敷に戻ると、炭治郎が屋根の上で瞑想をしていた。

「……ほんつと、真面目だな」

『絶』を行い、身体から溢れる氣を完全に無にし、足音を殺して炭治郎の背後に立った。

「おう少年」

「うわあ！」

氣配を絶ち、足音をほぼ完全に消して背後から声をかけたため全く気づかなかった炭治郎は驚いて声をあげてしまった。

「む、無道さん！」

「くく、どうしたそんな声出して」

「氣配を消して背後から声をかけないで下さい！」

「あまりにも気づかないから、面白そうだと思つてな」

くつくつと笑う遠夜に炭治郎は困つたようにため息をつく。しのぶが言つたようにやることは悪戯つ子とさして変わらない。

そんな炭治郎を見て遠夜は口元を歪める。

「常中、できてんな」

「え、ああ。無道さんの指導のおかげです」

「そうかい」

遠夜は炭治郎の隣に腰を下ろした。

「しっかしこんな早く常中ができるようになるたあな」

「無道さんはどれくらいかかったんですか？」

「一月半」

「え」

「才能ねーとこんなもんだよ。お前は才能ある方だから一月弱で習得できたんだ」

「……俺は、昔から頑張ることしかできなかったんです。だからがんばりました！」

「お前はほんつと純粹な」

苦笑を浮かべながら遠夜は炭治郎の頭を乱暴に撫でる。

「わ、わ」

口元から苦笑を消し、遠夜は真面目な口調でこう言った。

「少年、これからお前にはきつと色々な苦難が降りかかる。もしかしたら『もう辞めてしまいたい』と思うこともあるかもしれん。でもな、絶対に諦めるな。足を止めるな。絶望していい。泣いていい。悔やんでいい。でも、絶対に諦めるな。それがお前の力にな

る」

普段の飄々とした態度とは異なり真面目な雰囲気の遠夜に炭治郎は面食らったような顔をしたが、すぐに力強く頷いた。

「はい」

炭治郎のその一言だけで遠夜は満足した。きつと、この少年はなにも諦めない。そうわかったから。

遠夜は炭治郎の頭から手を離し、座り直した。

「明後日からはしのぶに少し修行見てもらえ」

「え……出陣ですか？」

「ああ。ちよいと大きな任務だな。死ぬかもしれない」

「……………」

「んな顔すんな。鬼殺隊じゃ、よくあることだ」

それに、お前はもう心配無さそうだからな、と言おうとしてやめた。もしかしたら、今後重荷になる言葉かもしれないと考えて言うことを躊躇った。

「…………この前、しのぶさんとこんな感じで話しました」

「へえ」

珍しい。そう思った。あまりしのぶは隊士に深入りしようとはしない性格だった。

故に隊士とこのように話すのはそうない。

「しのぶさんは無道さんのこと、大切に思っています。だから、しのぶさんのためにも、俺のためにも、必ず生きて帰ってきてください」

炭治郎の真っ直ぐな目に見つめられて遠夜は僅かに嗤う。

「約束はしねえが、まあ善処するよ」

「あと、あまりしのぶさんを困らせるようなことしちやダメですよ」

「ほっとけ。親戚かお前は」

苦い顔をしながら吐き捨てるように言い、最後にじやあな、と告げて遠夜は姿を消した。

やはり、遠夜からは感情の匂いがしなかった。

*

「全集中・常中は言葉の通り、全集中の呼吸を四六時中やることで身体能力を格段に上げ

る技術です。柱は皆行なっている技術でして、これができるのとはできないのでは大きく身体能力が異なります」

翌日道場に顔を出すと、しのぶが見たことのない二人に教鞭を取っているところだった。気配自体は前から感じ取っていたが、二人は一度も道場に顔を出さなかったため遠夜と顔を合わせることはこれが初だった。尤も、伊之助の方は那田蜘蛛山で会っているが。

「あー無道さん！」

「えー誰この目隠しの人！絶対やばい人でしょ！いやああああー！」

「煩えなこいつ」

「……………」

「それに比べて、お前は静かだな猪頭」

以前と打って変わり静かな伊之助を不思議そうに見ていた遠夜だが、しのぶの言葉を感じ出した。

（……確か、カナヲに負け続けてへソ曲げたんだけか）

それを思い出した瞬間、遠夜は非常に悪い笑みを浮かべた。

しのぶは笑顔で見ているが、炭治郎はなんとなく察して目を逸らした。

「あれ、というかお前いたのか？」

「……………あ？」

「俺、一ヶ月弱ここにいたけど、お前一回も道場来なかったじゃねえか」

「……………」

「なんで来なかつたんだ？……………あ！もしかして」

そこで一度言葉を切ると、俯きがちな伊之助の顔を覗き込み、酷く嘲るような笑みを浮かべながらこう言った。

「もしかして、負け続けて不貞腐れるようは雑魚だったのか？」

「ああ☒」

「違うか？カナヲに負け続けた挙句訓練から逃げ出したんじゃないのか？え？」

「ぐっ……………」

「くく、あーあーなんだよ。俺に勝負挑んでくるくらいだから常中程度できてると思ってたんだが……………」

「……………」

炭治郎はこの時の遠夜を心底楽しそうだったと語る。

「あつれええええ？もしかして、できないのかあ？この程度もできないのかなあ？おやおやあ？俺を倒すとかほざいてたのに、できないのかなああああ？」

善逸はこの時の遠夜のことを悪魔か何かだと思った。

「……………」

「あつ……本当にできないの？ああ……ごめんな……こんな基礎中の基礎もできてないよ
うな塵チリだとは思ってなかったんだ……そうだよな、お前みたいな雑魚に基礎中の基礎で
すら求める俺が間違っていたよ……すまん」

その一言に伊之助は完全にキレた。

「ああああ□でできるつってんだろ！ふざけたこと抜かしてんじゃねーぞクソ手拭いがあ
ーぶつ殺すぞー！」

「よーしじやあ今から四時間全集中やれよ。できるなら余裕だよなあ？」

「やってやんよ！見てろよ！」

「んじゃあとよろしくしのぶ」

「はい」

「おい！逃げんな！見てろつってんだろ！」

叫ぶ伊之助を放置して遠夜は嘲笑を浮かべながら道場を出て行った。

——

「……さて」

蝶屋敷の外に出ると、門の所に二人の男が立っていた。

一人は六尺（約180cm）以上はあるであろう糸目の大音。

もう一人はそこまで身長はないが、体付きは良く顔に傷痕がある若い男だ。炭治郎とそう変わらない年齢だろう。

門の所にはアオイがおり、二人の対応をしていたが遠夜に気づくと遠夜に近寄ってきた。

「影柱様、御館様からの使者だそうです。影柱様に……」

「知ってるよ。アオイ、下がっていいぞ」

「はい」

それだけ言つてアオイは屋敷内に戻つて行つた。

「話は聞いているな？」

「はつ。黒条総合病院への潜入、そこに巢食う鬼の排除だと伺っております」

大男の返答に遠夜は頷く。

「多分、下弦の上位か上弦がいる。隠はなにも手掛かりが掴めないが、まず間違いないるだろうな」

「手掛かりが掴めないのに、なぜいると断言できる」

傷痕だらけの若い男はそう遠夜に僅かに突っかかる。

「まず、鬼かどうかはわからないがあの場合で黒い噂がある。火のないところに煙は立たぬって言うだろう。その時点でなにかあるんだよ。加えてそこで『なにも手掛かりが出てこない』ってとこだ」

「なにも出てこないなら、それは白じやないのか?」

「いいや、本当になにもないならそもそも噂すら立たん。噂があるのになにも出てこないってことは、それを隠すのが凄まじく上手いってことだ。なにか隠す必要のあるものがある可能性は高い。さらにもう一つ。そこまで上手く隠せるとなると、人間一人でできるものとは思えない。人は必ず痕跡を残す。それすらも隠せるとなると、血鬼術の可能性も出てくる」

「……そういうことか」

「そゆこと。おっと、そういや名前聞いてなかったな。お前たちは俺の任務の手伝いをしてくれるんだろ?」

「私は黒磐巖鉄くろいわがんでつと申します。岩柱、悲鳴嶼行冥様の弟子です。階級は甲」

「へえ……」

道理で、と遠夜は考える。黒磐は纏う氣が悲鳴嶼のそれと似ていた。無論彼に氣を扱

う能力はない。だが見えなくとも修練を積みめば纏う氣は洗練される。その洗練された氣が悲鳴嶼のそれと似ているのは教えたのが悲鳴嶼だからだろう。

「継子ではないんだな」

「私の扱う型は岩の呼吸から派生したものです。なので継子と名乗るのは少し違うかと」

「なるほどね。で、お前は？」

遠夜は傷痕だらけの若い男に顔を向ける。

「不死川玄弥です……」

「不死川……？」

聞き覚えのある名字に手拭いをズラして顔を見る。その顔はどこか知っている男のものと同じか似ていた。

「……風柱の？」

「……はい」

「へえ。兄弟揃って鬼狩りかい。それに急に敬語になったな」

「さつきまでは、ちゃんと尊敬に足る人物なのかわからなかつたんです。聞いた話ただとどうも破天荒なだけな人だったので」

「まーなー」

否定する気はない。というかできない自覚がある。

「でも、今のでちゃんと考えて行動できる人なのがありました」

「へえ？ 考えて行動できる人なのか、尊敬できるのは」

「はい。受け売りですけど、俺はそれに納得したので……」

つくづく兄弟だな、と遠夜は思った。実弥も似たような思考をしている。普段は憎しみに任せたような行動に思えるが、よく見ると合理的思考に基づいて行動している。そしてそういう行動できる人の話なら実弥は耳を貸す。

「……概要は頭に入ってるか？」

「はい。房総にある黒条総合病院への侵入、鬼の痕跡を探り、鬼の排除ですね」

「そ。隠の連中が一般人に模して潜入する。だが夜中の捜査は隠じゃできん。だから俺らは夜に潜入して、鬼の痕跡を探る。いいな」

「はこ」

「はこ」

「最低限の気配の消し方と、足音や移動時の音の抑え方を教えてやる。これはそんな難しくないので数時間あればできる」

「お願いします」

遠夜は頷くと二人を自らの屋敷に招き、隠密行動の基礎を叩き込んだ。

その後、基礎ができているかを確認するため、蝶屋敷の中を誰にも見つからずに一周して戻ってくるという泥棒紛いのことをやらせ、二人は誰にも見つからずに帰ってこれたが、しのぶには気配で悟られてしまっていた。

そしてそれをやらせたことがバレた遠夜と静かに激昂するしのぶの追いかけてこが始まり、それを見た炭治郎達がドン引きしたのはまた別の話。

目に映るのは異形の空間。

自分のすぐ横で血溜まりが形成される。

慟哭と悲鳴。

肉と骨が碎ける音。

残るのは残骸。

その残骸は、数秒前まで同胞だったもの。

いや、同胞というのも違うかもしれない。別に仲間意識はなかったし、関わることもほとんど無かった。

だから死んでも何も感じない。

そう、何も。

「お前はなにか、私の役に立つか？」

周囲のかつての同胞……いや、鬼だったものを血肉の塊に変えた女がそう聞いてくる。

横でのたうち回る男を横目に見る。先ほど女の血をふんだんに与えられてその激痛に耐えているのだろう。

なにも感じない。どうでもいい。

「そうですね……」

正直、女の求めるできる成果を上げられるかどうかはわからない。

「まあ、やれるだけのことはやりますかねえ」

それしか言えない。多分この答えはお気に召さないだろう。

女は表情を変えない。

「ほう？他の者の有様を見てもそう言えるのか？」

「この命は元より貴方様のもので。生かすも殺すも、持ち主である貴方様が決めればいい。道具に心は要らない。そもそも私は、自らの生き死ににそんなに興味はない」

嘘を答えたところで女には通用しない。なら嘘偽りなく答えればいい。それで死んだらそれまでだ。

心残りはあるが、所詮その程度の人生だったということだろう。

「ほう……」

女は目を細めて見てくる。

首に衝撃。そちらを見ると大きな針のようなものが刺さっており、そこから何か流れ込んでくる。

激痛

「気に入った。私の血を分けてやる」

凄まじい痛み

内側から身体をぐちゃぐちゃにされているような感覚だ。

だが同時にその痛みが自らの身体の底から新たななる力を呼び起こす感覚がする。

「お前たちがこの血の量に耐えられたのなら、更なる力に目覚めるだろう。そして私の役に立て」

そう言つて女は琵琶の音と共に襖の奥に消えていく。

酷い暴論だ。理不尽極まり無いことしか女は言わなかった。気に入った奴ですら死んでもいい扱いだ。

それでも何も感じない。

「はっ……」

赫い瞳がいつの間にか放り出されていた夜の空を映す。

瞳の左眼は三つの勾玉のような模様。

右眼には『下弐』という文字。

下弦の弐の鬼、月詠は夜闇の中で一人嗤った。

やはりなにも感じなかった。

捌

一定のリズムで伝わってくる振動を感じながら目隠しした顔を窓の外に向ける。

「……………」

前に座る大男と、傷だらけの少年は物珍しそうに周囲を見ている。両者共に見た目の割に子供のような態度を見せるため少し違和感があったが、本来なら年相応と言うべきなのかもしれない。

「お前ら、汽車は初めてか？」

目隠しの男、遠夜は二人にそう問うた。

「ええ、初めてです。今までの任務では徒歩で可能な距離でしたので」

「お、俺もです」

「そうかい」

「無論存在は認知しておりましたが、こうして実際に乗るのは初めてです」

「そいつぁいい。今後乗るかもしれないねえからな。慣れておけ。人によっては、気分が悪くなる奴もいるとか聞くしな」

「影柱様は、初めて乗ったのはいつですか？」

「ん、俺か」

玄弥の言葉に遠夜は腕を組む。

脳裏に浮かぶのは自分と少し似た顔立ちの少年と、荘厳な顔立ちの中年程度の男性。そして窓から見える広大な海。

その光景が脳裏を過ぎるが口に出すことはしない。

「さて、いつだったかな」

肩を竦めて遠夜はそう言った。

巖鉄と玄弥は首を傾げたが、遠夜はそれ以上答えることはなかった。

「割と、覚えてるものだな」

目隠しを上げ、僅かに見える夜の海を見ながら遠夜は小声で呟いた。

遠夜の呟きは汽車の汽笛にかき消された。

捌

「……よく食うなあお前ら」

席に座りながら車内販売されていた弁当をかき込む二人を前に遠夜はそう呟く。

「はっ！す、すみません」

夢中で食べていた巖鉄は我に帰り恥ずかしそうに頭をかく。

「いやいいって。どんどん食え。どうだ、車内販売っていつでも割と馬鹿にできないだろ」

「…はい。正直大したことないって思っていました」

箸を置いた玄弥がそう答える。

「くく、そうだよな。俺らが普段持つてる携帯食料と大差ないくらいに思っても仕方ないかもな」

「……しかし、奢って頂かなくても」

「いーのいーの。大した額じゃねーしこれからお前らには存分に働いてもらうから」

「はあ…」

「それに、お前らみたいな育ち盛りは食った分だけ強くなるからな」
「それは影柱様もでは？」

「おいおい、俺はもう二十歳だ。これ以上育つことはねーよ。まーその分お前らよりも身体はできてる。身体能力は多分今くらいが全盛期だろうよ」

人間の身体能力は二十歳から二十二歳と言われている。巖鉄は十八歳で玄弥に至ってはそれよりもさらに下であるため身体の回復は若さ故に早い、筋肉が出来上がっていないためまだ身体は弱い部分もある。

「お前らはこれからよ。焦らず着実に力をつけていけ。特に玄弥」
「え」

「なーに焦ってんのかしらんが、人間は一朝一夕では強くならん。焦ってもかえって身体を痛めるだけだ」

「で、でも……俺は……」

「お前が呼吸を使えないのは聞いた。でも使えないなら使えないりの戦い方がある。それはこれから見つけていけ」

「……でも」

「お前がなにをして鬼を狩ってきたかは知っている」

「なーなんで……」

「一応言っておくが、誰も告げ口なんぞしてねーからな。隠の連中も、悲鳴嶋さんも、しのぶも」

「じゃあ、どうやって……」

「心配」

「……………」

それきり玄弥は黙り込む。

巖鉄は何のことを話しているかはわかっていないようだが、下手に詮索するようなことはしなかった。玄弥にとってあまりいい話ではないことを感じ取ったのだろう。

「ま、俺がどうこう言うことじゃねえか」

「……………」

「好きにやるといい。お前が後悔しないようにな」

なにも言わない巖鉄は悲鳴嶋の継子であるため、同じく悲鳴嶋の弟子である玄弥のこととは知っていたのかもしれないが、そこは遠夜の知るよしもない。

「ふう」

食べ終わった弁当箱を畳み、箸を置く。その頃には二人は三つも弁当を平らげている。

「ご馳走様でした」

「ご、ご馳走様でした」

「腹は膨れたか？」

「お陰様で」

「そうか」

そういうと遠夜は懐から懐中時計を取り出し、目隠しを少しずらして時間を見た。

「目的地までまだ時間はある。今後は夜活動することも増えるから今のうちに寝ておけ」

時計を懐に戻しながらそう言った。

「え、でも」

「これからかなり働いてもらう。少しでも体力を温存してもらう必要がある。悪いことは言わんから寝とけ」

「影柱様は……」

「俺も少し寝る。隠も二人乗ってるから目的地の駅に着く前に起こしてもらおうように言っておくわ」

「……じゃあ、少し失礼して」

そういうと巖鉄は腕を組んで目を閉じた。

玄弥は少し迷っていたが、食後の満腹感から徐々に眠気が襲ってきて数分後には寝息

を立て始めた。

二人が眠ったことを確認すると遠夜は席を立った。

「……後藤」

「はいはい、わかっていますよ」

同行している隠（一般人に擬態）の後藤にそう一言伝えると遠夜は竹刀袋から刀を取り出し、羽織で隠れるように腰に携えた。

「ちゃんと帰ってこいよ？ お前さんがいないとこの任務始まんからな」

「いやあ、案外あの二人だけでどうにかなるかもしれんぞ？」

「冗談は程々にしておけよ。隠の俺でもわかる。まだあの二人の実力はお前さんに遠く及ばない。二人ともめっちゃ強いよ？ でも、お前ほどじゃない。相手が十二鬼月であるなら、お前がいなきや殺せんよ」

「なんだ、今日はやけに素直だな」

「死なれたら俺も困るんだよ」

「そうかい。んじゃ、せいぜい死なないように頑張るわ」

「……目標は最後尾の車両だ」

「へーい」

ひらひらと手を振りながら歩いていく遠夜の後ろ姿を後藤はじつと見ていた。

なぜかいつもよりその背中中は小さく見えた。

――

最後尾から2番目の車両の引き戸を開ける。汽車は依然として走り続けているため開けた瞬間肌を刺すような風が身体に叩きつけられる。

「よっ、と」

扉の出っ張りを利用して車両の屋根に登る。車両の振動と風を強く足に感じた。

「足場が不安定だねえ」

羽織に隠した刀を踵にする。そして自らが纏う氣を練り上げ、足元の車両にいる一人の女に向けて殺気を放った。

「出てこいよ、かくれんぼでは既に負けてんだ。さつさと次の遊びにしやれ込もうじゃねえか」

気配から女が席を立つのがわかる。

ここで女が少しでも他の客に手を出そうとするなら、窓を突き破って直ぐ様頸を飛ばす準備はできている。

女は他の客に手を出す素振りは見せず、車両から出る。そしてそのまま屋根にいる遠夜の元へ飛んだ。

着地した女は和服の女だった。女はなにも言わず遠夜をじつと見つめる。

「あまりおしゃべりは好きじゃねえんだ。単刀直入に聞こう。お前は鬼か？」

遠夜はこの女が汽車に乗る前から存在に気付いていた。常に円で気配を感知しているため、この女の気配が明らかに人間と異なるものであることがわかったからだ。

しかし感じ取った気配は鬼のものとは違うものだった。人とも鬼とも言えない気配を持つ女を警戒して、後藤にその存在を伝えて所在を探ってもらっていた。

同行している二人に存在を伝えなかつた主な理由としては、まず鬼であるという保証ができないこと。鬼だと断定して斬ることもできるし、なんなら二人は遠夜が命じれば斬るだろう。しかし気配が異なるとはいえ、鬼ではない存在を斬ってしまうことは許されることではない。それは紛うことなく殺人である。鬼を斬るのが鬼殺隊であり、人を斬ることをしてはならない。まず鬼であることを確認が欲しかった。

もう一つは、二人は隠密行動や演技が苦手であるといった理由だった。しかも二人とも戦闘は些か派手であり、この状況で派手に動いては他の客が半狂乱になり事態が面倒なことになりかねない。実力は確かなところだが、この移動中の汽車という点では二人に行動されるとより面倒になると考えた。伝えることすらしなかつたのは、遠夜が席を

立つことになにかを察し、落ち着かない様子にあの二人がなるととても目立つと考えたからだ。

『……………ほう、まさかここで会うとはな』

「おいおい無視か？」

『お前一人か？』

「いいや、そんな訳ないだろ？」

『……………そうか、お前は一人ではないのだな』

「あ？」

『くるなら来い、鬼狩り。俺を見つけれられたなら相手してやる』

それだけ言うと女性は倒れた。

「……………」

感じ取れる気配はやはり鬼とも人も異なる。いくなれば二つを混ぜ合わせたかのような気配が女性からはする。

（人が八割、鬼が二割つてとこかね）

恐らくこの女性はなにかしら鬼によつて身体を弄られている。遠隔操作できる窓のような存在だろうか。

「……………とりあえず、保護しておくか」

そう考えた遠夜は隠の後藤を呼びにいった。

*

「あー、やつと着いた」

「汽車から降りると遠夜は伸びをした。その際、骨や関節が音を立て、固まった部分が解される。」

「結構かかりましたね」

「まーな。少し距離ある場所だから仕方ねえ」

「わあ……」

「玄弥は駅から見える広大な海に目を奪われていた。」

「海を見るのは初めてか？」

「あ、はい。汽車からも見えましたけど、ここまで大きくは見えなかったんで」

「……そうか。んじゃ、飯食いにいこうぜ」

「ちよ、影柱様！任務は☒」

「かてえこと言うなよ黒磐あ。せつかく海の幸がうまいとこに來たんだ。そんならい
いだろ」

「しかし……」

「わーつたよ。今から潜入先の下見にいくぞ。それでいいな」

「はい」

「は、はい」

思つたよりも簡単に遠夜が折れたことに少しだけ2人は驚きながらも素直に従つた。
「んじやいくか。少し歩くが、まあそんなに時間はかからんだろう。今は真つ昼間だし、
鬼はでてこねえはずだ。病院の方に話を通して中を調べんぞ」

「承知」

「了解です」

「ではご案内します」

——

「ここが……」

「はい。黒条総合病院です」

聳え立つ巨大な建物に玄弥と巖鉄は息を飲む。今まで見てきた建物とは異なり、煉瓦によつて構成された建物は現在の日本ではかなり珍しい。首都である東京方面ならばこのような建物も多いだろうが、今現在日本に存在している建物はほとんど江戸時代のものとの差がない。そのようなものばかり見てきた彼らには目の前の病院は非常に物珍しいものだった。

「すごい……」

「煉瓦造りの建物はまだ珍しいからな。加えてここは外科だけでなく内科もやつてるから、こんだけでかくなつたんだらうよ」

「詳しいですね」

「資料に書いてあつたぜ？端っこの方だから見落としても仕方ねえだらうしさほど重要な情報じゃねえ。さて、後藤。潜入は？」

「すぐにも可能です。しかし潜入なのに病院側に話を通していいのですか？」

「言われた通りの話を通したんだらう？」

「ええ、まあ……とりあえず探偵的な組織で人探ししていると偽つて情報収集したいという旨を伝えておきました」

「ん、十分。というわけで巖鉄、玄弥。お前らで院長のところにいけ」

「ええ」

「お、俺らで☒」

「そそ。ほらいけ。さつさと」

「い、いや！なぜ我々で☒」

「俺は俺で調べることがある。そんでそれはお前らにはできん調査だ。だからできるところを振ったまよ」

遠夜にしかできない。そういう類のなにかがあることは巖鉄は察していた。この影柱は他の柱と比較して存在感はやや希薄であり、なおかつ実力でも一步劣るだろうことは巖鉄にも理解できていた。まだ未熟である自分が勝るとは思わないが、正直他の柱と比較したら絶望的なほどの差は感じられない。だが、それ以外の何かがこの影柱にあることも同時に理解できた。

そこであつて怪我をして蝶屋敷で世話になつた際、蟲柱の胡蝶しのぶの話を思い出した。

『自らの実力が劣っているのならば頭を使えばその差は縮まります。才能が乏しいながらもそうやって柱にまで登り詰めた人もいるのです。だから頭を使うことを辞めてはいけませんよ』

もしかしたらしのぶの言つた人物は遠夜のことなのかもしれない。

（この人は、多分御館様並みに頭が良い。頭の良さの方面は大分異なるだろうし、なにが

目的かはわからないが、今はこの人の言うことを信じてみるしかない)

そう考えた巖鉄は不承不承といった様子ではあるが遠夜の申し出を受け入れた。

「んじゃ、よろしくー」

それだけ言うのと遠夜は姿を消した。

正直、この手の仕事は得意ではないが玄弥と隠の後藤と共に乗り切るしかあるまいと腹を括り、病院へと足を向けた。

――

「院長先生、お客様です」

「通せ」

病院の看護師に連れられて巖鉄、玄弥、後藤は院長の元へと赴いた。服は予め用意されていた一般的な服に着替えたためあまり目立つような服装はしていない。

そしてそこにいたのは、灰色の髪をした青年だった。年齢は悲鳴嶋と大差ないだろう。

「ようこそ、黒条総合病院へ。私が院長の黒条月慈です」

青年は巖鉄達にそう名乗った。

身長は巖鉄よりも低いが、それでもそここの高身長であることがわかる。顔は比較的整っているが平凡な顔立ちをしていて、その瞳は冷徹な光を宿していた。

(……う、あれ、この人……)

玄弥は月慈のことを見るとなぜか違和感を感じた。

(……俺、どつかでこの人に会ったことがある、のか?)

その違和感は既視感からくるものだった。会ったことなどないはずの月慈になぜか玄弥は既視感を覚えた。

「お聴きした話ですと、人探しをしているとか」

「はい。我々は警察に準ずる組織の者です。ここ最近、この付近で人が失踪していると通報がありました。この付近で人が失踪している以外の情報が無く警察もお手上げだったそうです。そこで我々に白羽の矢が立ち、調査のために聞き込みをしているところですよ」

無論、今巖鉄が述べたことは嘘八百である。予め後藤が通しておいた話に合わせて述べているに過ぎない。

ただ完全な嘘というわけでもなく、この付近で行方不明になっている人間がいるということは事実である。そのため調べればそのような事実が出てくることも折り込み済みだ。

「なるほど」

「そういったお話は聞かれたことはありますか？」

「小耳に挟む程度ですが、知っています」

「良かった。そこで今この周辺すべての人になにか手掛かりがないか聞き込みをしているのです」

「……ふむ、私個人で知っていることはあまりありませんが、職員の中でなら知っている人もいるかもしれません。なので明日またお越し下さい。職員に話は通しておきますので知っている者はここに呼んでおきます」

「お心遣い、痛み入ります」

「その様子ですと現状、なにも掴めていないのですか？」

「お恥ずかしながらまだなにも。調査を開始したのが数日前なのですが、めぼしいものはなにも見つかっておりません」

「そうですか。なにかお力になれることがあれば言ってください。可能な限り助力します」

「ありがとうございます」

翌日面会の予約を入れて二人は院長室を後にした。

その二人の後ろ姿を見て月慈は目を閉じた。

「ふう……」

「お、お疲れ様です。巖鉄さん」

「ああ」

嘘を並べて人を探るということは慣れないためか、病院を後にした巖鉄は非常に疲れたため息をついた。

「水です」

「ありがとう、いただくよ」

玄弥の差し出した水筒を受け取り、巖鉄はそれを喉を鳴らして飲んだ。

「ふう、ありがとう」

「はい」

「玄弥、あの院長さんどう思った？」

「どう、とは？」

「なにか違和感を感じたか？」

違和感、と言われるほどのものは感じられなかったが、感じたことは確かにあった。

「感じた、といえれば感じたんですかね……」

「む、どうした。煮え切らない言い方だが」

「いや、ちよつと俺もよくわかつてなくて……」

「まあいい。で、どう感じた」

「……その、誰かに似てると」

少し迷った末、玄弥は思ったことをそのまま伝えた。

「似てる？」

「はい……誰かに似てると思いました」

「ふむ……」

「でも、その、誰に似てるのかは……」

玄弥は院長である月慈に出会った時、たしかにそう思ったのだ。あの銀灰色の瞳を思い出すと今もそう思う。

しかし誰に似ているのかはわからない。月慈の顔は今まで会ってきた誰にも似ていないように思える。しかし、それでも思うのだ。似ていると。

「似ている、か」

「あの、俺の直感なんでそんなアテにしなくても」

「いや、直感というのは大事だ。本能的にそう感じているということだからな。無論外

れる時も多々あるだろうが、それでも思考する要素としては十分だ」

「……そうですか。あ、そういうえば巖鉄さんはどう思ったんですか？」

「ん、俺か。そうだな……」

第一印象は、冷たいといった印象だった。無論初めて会った人間をいきなり冷たい性格だと言っているのではなく、雰囲気の話だ。

「雰囲気は、どこか冷たく人間味が薄い感じがした。今日の会話だけでは正直あまりわからんがな」

「そうですね」

「だが、あの人は鬼じゃない」

玄弥は巖鉄の言葉に目を丸くした。

「なんでそう言い切れるんですか？」

「院長室を見ただろう？あの部屋、日光が差し込むような配置になっている。もし月慈さんが鬼なら、そんなことはしないだろう」

「たしかに……」

「加えて、話していた時にあの人自身に日光が当たっていたのにその場所は焼けることなく健在だった。故に彼は鬼ではないの言える」

鬼は日光に弱い。日光に当たった瞬間、そこからたちまち焼けて崩れていく。なのに

月慈は日光に当たったというのに全くその様子はなかった。つまり、月慈は鬼ではないと断ずるには十分な理由だった。

「となると……従業員の誰かだと考えるのが妥当か」

「そうですね」

「とりあえず今は影柱様の帰還を待とう」

――

遠夜が戻ってきた時には日が暮れ初めていた。

「悪いな、随分待たせたみたいだ」

「大丈夫です。それで、調査の方は？」

「飯でも食いながら話そう。移動すんぞ」

二人が遠夜に着いていくと、そこは海辺の民宿だった。

「この周辺にちようにどいい藤の花の家がなくてな。仕方ねーから宿とった」

「ああ……なるほど」

「随分辺境の地だからな。なくても仕方ない。それに、ここは飯がうまいらしいんだ」

「なんならそれが目的ですね？」

「まあな。まさかそれも駄目なんぞ言わんだろ？」

「言いませんよ」

「よしよし。んじや飯食いながら話そう。腹減っちゃまった」

——

「ふーん、なるほどねえ」

海鮮丼を頬張りながら遠夜は二人の話を聞き終えた。

「黒磐の話はいい情報だ。とりあえずあの病院の上が鬼じゃねえならあの病院全体で黒ってことじゃないのがわかった」

「はい。鬼は日光を浴びればそこからたちまち崩れていく。例えそれは血鬼術であつたとしても灰になる。だから院長の黒条月慈さんは鬼ではないはずだ」

「ま、そこから鬼探すとすると……ちと面倒だが。まあ候補が一人減つただけよしとするか。それで玄弥の話だが……」

「い、いや。俺の話はそんな大したことでは……」

「いやいや、そういう直感は大事よ。しかし誰かに似てる、か」

「さすがにお前の関わった人間のことなんぞわからんからなあ……とぼやきながら遠

夜は箸を置いた。

「んー……そこは玄弥に頑張ってる思い出してもらおうしかねえかなあ」

「ですよね」

「ま、気負わずにいけ。院長が鬼でないなら、院長の素性はそんな重要じゃなくなる。気にはなるけどな」

「はい」

「影柱様は、なにを調べてたんですか？」

「あの病院の間取り」

「間取り、ですか」

それがなんの役に立つのか、と言いたげな雰囲気は遠夜は読み取った。

「病院で人が消えてるんだろ？まあ正確には病院に関わった人間というべきだが、それも大差ないだろ。そんで消えた人間はどこに行ったかって問題になる」

「それは……鬼に……」

「食われた、といたいんだろ？それは間違ってる。だが、その捕食はどこで行われた？」

「……………？」

「ん、わからんか。じゃあ捕食された人間はどうなる？」

「……死にます」

「そらそうだ。で、その食われた痕跡はどうなる?」

「あつ!」

「お、玄弥。わかったか」

「捕食されたらその痕跡が残る。でも今回の調査は人が消えてるのであつて捕食された痕跡は見つかっていない」

「正解」

人が死ぬならば、なにかしらの形で形跡が残る。捕食したとなれば尚更だろう。形跡は血痕や死体などなど色々あるだろうが、形跡がなにもないというのはやはりおかしい。無論血鬼術によつて跡形もなく消されたという線はあるが、隠がなんの情報も得られないところを見るとそんな高火力の血鬼術を使用してくるとは考えづらい。

(考えられるとしたら幻惑系の隠蔽型血鬼術か、空間系の血鬼術を使うと考えるのが妥当だろう。多分、前者かな)

遠夜が円を使つて病院の間取りを探ったところ、いくつか不審な空間が存在した。その空間を血鬼術で隠蔽しているのなら納得がいく。

「よし……腹は膨れたか?」

「あ、はい」

「大丈夫です」

「これからあの病院に潜入するぞ」

――

「夜になると途端に薄気味悪くなるねえ」

夜闇に佇む病院を前に遠夜がそう呟いた。

「雰囲気、昼と比べると随分違いますね」

「ちよつと気味が悪いです」

「よーくわかるよ。さて、さっさと入ろう。入り口からは当然入らんから……裏口から入ろう」

「しかし、裏口も鍵がかかっているのでは？」

「南京錠だから簡単に開けられる」

そういつて袖口から針金のようなものを取り出し、鍵穴をいじくり回す始めた。すると南京錠はすぐに開いた。

「開いた！」

「よし。んじゃ、忍び込むぞ……と言いたいが」

「?」

「お前から目立ち過ぎるんだよなあ。隠密行動が慣れてないのは仕方ないけど、巖鉄はでけえし、玄弥は巖ついでから」

やはり遠夜から見て二人は忍び込むことには恐ろしく向いていないように見える。玄弥はともかく、巖鉄は特に向いてないだろう。

深夜とはいえ、夜勤で病院に残っている看護師はいる。明日以降に再び聞き込みがこの病院に来ることを考えると、巖鉄と玄弥は今見つかると思わぬことになりかねない。

「……………否定できませんね」

「そう、ですね……………」

「ん……………あ、そうだ。ならこの場所を調べておいてくれねーか?」

そう言つて遠夜は二人に紙を渡した。そこには住所のようなものが書かれていた。

「……………これは?」

「ここ最近、一家丸ごと失踪した家」

「えっ」

「一家丸ごと?」

「そ。隠の情報曰く、一家丸ごと失踪したらしい。昼間にそこまでみておきたかつたんだが、時間なくてな。なら今のうちにお前らに見てきてもらつた方がいい」

「承知しました。必ずやり遂げてみせます」

「ん、じゃあよろしく」

そういうと遠夜は裏口から病院内部へと侵入していった。

「玄弥、この家屋の調査は俺が行く。だから玄弥はここで隠と共に病院を見張っていはくれないか」

「え、俺も行きますよ」

「いや、家屋の調査程度なら俺一人で大丈夫だ。だが影柱様が潜入、そして鬼と接触した時に誰かしら援護がいた方がいい」

「なら……」

「だが俺は身体がでかすぎる故に身を隠す術がない。この裏口もいつ誰が来るかわからない。見つければ明日以降の調査に支障をきたす。だからここで影柱様の帰還を待て。ついでに隠と連携して夜中に入りにしている存在を見張れ。夜勤帰りの看護師が多いだろうが、その中に怪しい存在が混ざっている可能性もある。だからそれを確認しておくのだ」

「なるほど…わかりました」

「念のため言っておくが、断じてお前が足手まといになりそうだから置いていくのではないぞ。呼吸が使えないからといって、お前が弱いというわけではない。お前の戦い方

は異例ではあるが、それがお前の才能であることを忘れるな」

巖鉄は、玄弥が一瞬思ってしまったことを的確に言い当て、そして巖鉄自身が思っていることを嘘偽りなく真つ直ぐ伝えた。

確かに玄弥は呼吸が使えず戦力としては少々劣る。だが玄弥には玄弥なりの才能と武器がある。あまり褒められたものではないかもしれないが、巖鉄としてはそれが立派な武器であることを認めている。だからこそ、玄弥が足手まといではないことを伝えた。

「……はい。ありがとうございます」

「よし。では頼むぞ。だが気を付けろ。待機とはいっても、どこでなにがあるかわからんからな」

「はい」

安心したように巖鉄は微笑むと刀を腰に携えて歩いていった。

「……………」

一人になると玄弥は裏口が見え、なおかつ姿が隠せる場所を探した。病院は周囲が鉄格子で囲まれているためあまり身を隠せるような場所は目に入らない。仕方ないため付近に植えられていた木を登り生茂る葉の中に姿を隠した。

(とりあえずここなら簡単には見つからないよな)

時刻は深夜であり、なおかつ裏口から出てわざわざこの木の場所付近まで近づかなければ玄弥の姿は確認できない。だから簡単には見つからないと玄弥は考えた。

(でも、なんだろう)

鬼の気配はしない。だがなぜかはわからないが嫌な予感がする。

(ここにいちや、いけない気がする)

冷や汗をかきながら、玄弥はそう思った。

――

「……………」が、影柱様の示した場所か」

目の前に建つ家屋を見据え腰の刀に手を置く。目の前の家屋からは人の気配は全くせず、ただ静かに佇んでいる。

(人の気配はしない。調べるためにも一度入るしか無さそうだ)

人様の家屋に無断で入るのは気が引けるが、仕方ないことだと腹を括り家屋に侵入する。

「……………中にも、人はいないな」

相変わらず人の気配はしない。

とりあえず全ての部屋を見てみたが、人はやはりいなかった。

(やはり人はいないか)

居間に入りそこにあつたちやぶ台に手を触れる。

(埃は溜まつていない。つまり、この家屋が無人になったのはつい最近ということか)

隠の話では二週間前まではこの家屋に家族が住んでいたらしい。しかしある日唐突に一家丸ごと失踪したのだとか。

(普通に考えれば、鬼に喰われたのだろう。しかし仮にそうだとしたらこの家屋はあまりにも綺麗すぎる。争った形跡が一切無い。留守にしているだけと言われれば信じてしまうほどにまで綺麗な状態だ)

仮に鬼に喰われたのだとしたら血痕などの形跡が残る。なのにそれは一切無い。家具も荒らされた形跡は無い。

(確かにこれは手を焼きそうだ。今までの鬼とは確実に違う)

今までの鬼はなにかしらの形跡を確実に残した。被害者の血痕然り、周囲の傷跡や争った形跡などが残されていたのにこの家屋には何も無い。だからこそ、おかしい。一家丸ごと失踪してここまで綺麗なことなどありはしない。

(……だがなにも手掛かりがない。一度別の場所も……)

がたん

なにかが開く音がして咄嗟に刀に手を掛けそちらを見る。それなりの時間暗がりにいたため目が慣れていたため音がした扉の全貌を見ることができた。

そこにいたのは

「にゃー」

「……………」

猫だった。

「なんだ猫か」

驚いて損したと言わんばかりに巖鉄は刀から手を離して猫を抱き抱え、そのまま外に出た。

「次の場所にいくとするか」

「にゃー」

「ん、またな」

猫をその場に下ろして巖鉄は歩いていった。

その後ろ姿を、瞳が紅く染まった猫が見ていた。

*

「つと……」

遠夜は巡回をしている看護師からうまく身を隠し、やり過ごす。

侵入した遠夜は自身の円で調べた間取りの謎な空間を目指して病院内で音を殺して移動していた。

できるだけ音が出ないように草履は脱ぎ、足袋の状態で移動している。本来、夜目が効く遠夜は目隠しを外すのだが、潜入という現場である以上気配が重要だと考えより気配を強く感じる事ができる目隠しの状態で動いていた。

(地下への扉は……あそこか)

絶により気配を消しながら目的である地下への扉を見つけた遠夜はその扉へと近寄り、扉を引いたが当然鍵がかかっている。

(この鍵は……さすがに針金じゃ開けられないな。鍵をちよいと拝借するかね)

そう考え、遠夜は看護師達のいる受付付近まで行き、看護師が一時的にいなくなった瞬間を狙って予め調べておいた鍵入れから鍵を拝借した。

(思ったより簡単だったな)

少々拍子抜けしながらも遠夜は鍵を使って地下への扉を開いた。重い扉をできるだけ音を立てないように開きながら中へと滑り込み、扉を閉めた。円で感知できる範囲には看護師はいなかったため恐らく扉が開いたことに気づいている者はいない。

扉の先には階段が続いており、地下へと入れるようになっていた。そしてその先は見取り図の通りなら霊安室となっているはずだ。

階段を降り、扉に手を掛ける。霊安室自体には鍵はかけられておらず重苦しい音をしながら扉が開いた。

地下故に空気はひんやりとしており、どこか物寂しい。

「さて……ここまでは見取り図の通りだが」

遠夜は昼間に円を使うことで地下に霊安室よりもさらに下に謎の空間が存在していることを知った。公開している見取り図にも存在していないため、この空間は鬼と関係があると疑いがかけられている以上非常に怪しい。

「……………ふうむ」

鬼の気配は下の空間からはしない。そもそも下の空間へ降りるための手段が不明だ。だが不意に冷たい風がわずかに遠夜の頬を撫でたのを感じる。

「……………風」

円を霊安室全体に広げると、壁にわずかな隙間があるのが確認できた。その隙間はよ

く見ると人一人が倒れるほどの大きさの穴に蓋をしているような構造になっているのが確認できる。

「これだな」

すぐにでもこの穴の調査をしたいところだが、一つ問題があった。

取手のような場所は確認できないため、この蓋を取り外すことができないうのだ。日輪刀で切り裂くことは、恐らく可能だがこの蓋を斬るとなるとそれなりの力がある。現状、この場で大きな音を出すことは悪手であると判断した遠夜は仕方なくこの場の調査を後回しにし、霊安室から出ようと扉に手をかけた。

（視線……見られてるな）

どこからかははっきりしないが、確実に見られている。そう思えるほど強い視線を向けられているのどこから見られているのかはわからない。

（これ以上は、今は無理かな）

そう判断して遠夜は霊安室の扉に手をかけた。そして振り返らずに口を開く。

「またくるよ」

そう言つて遠夜は霊安室を後にした。

その様子を暗い部屋の中から紅い瞳をした男が見ていた。

その紅い瞳には

『下式』

という文字が刻まれていた。

玖

静かな夜だった。

宿の近くにある浜辺の岩の上で座禅を組みながら遠夜は瞑想していた。普段とは異なり、目隠しは外しており青味がかかった黒い瞳は海を映していた。

付近を色々調べたが、あの病院の霊安室の空間以外にそれらしき痕跡は残されていなかった。やはりあの病院の霊安室を調べる必要があるだろう。

「しかし、あそこまででかくなつてるとはねえ」

『かつての姿』を思い出しながらそう呟き、ここ数日で得られた情報を整理する。

先日再び巖鉄がああ病院を探りをいれたが、どうやらあそこの人間はほぼ白だと思つていいだろうという結論になった。なにより働いている職員全員が日光に当たつていゝる様を3人の張り込みによつて確認している。

唯一院長のみが日光の出ている時間に出動していなかったが、院長室は日光が入るようになっていゝるし、院長が日光に当たる場所に移動している様を遠夜も遠くから確認している。

鬼である以上、日光に当たるといゝる行為は自殺行為に等しい。故に日光に当たること

ができる表にでてきた院長及び職員はほぼ確実に鬼ではない。

ならば血鬼術か、とも考えられるがこの線も弱い。血鬼術は結局鬼の血から発動する術であるため日光が当たれば灰になる。少なくとも血鬼術で完全に操作された集団ではないことは確かだろう。そもそもあれだけの人数を同時に操作することなどいくら鬼といえどもそう易々とできることではあるまい。

ここまで色々とう鬼ではない証拠が揃うとやはり鬼は関係ないのではないかと思えるが、遠夜が霊安室で感じた視線と違和感は恐らく血鬼術が関係している。無論根拠は無い。完全に直感であるため論理的思考には程遠い。だがそれでもあれは鬼の気配のように思えてならない。

そもそもここに向かう際に遭遇した女、あれは完全に血鬼術によって操作されていたものだった。加えて女の口から『鬼狩り』という言葉が出た以上ほぼ間違いなく鬼はいる。

なのに尻尾を掴むことができない。

未だかつてこんな鬼はいなかった。ここまで情報を掴ませない鬼など上弦の鬼、または鬼舞辻無惨くらいだろう。

明日はあの謎の空間に玄弥と巖鉄を引き連れて潜入だというのに情報が全くと言っていいほど無い。こんな見切り発車で作戦を執行したことなど無い。だがこれ以上

放つて置いていいものではないように思えてならない。

「ヤキが回ったかねえ、俺も」

そう呟きながら座禪を解く。今までの遠夜ならば不確かな情報だけで乗り込むようなことはしなかった。

目隠しの手拭いをつけ、後ろを振り返りながら言った。

「よお、そんなとこで見てねえでこつちこいよ。別に取って食ったりはしねえから」

遠夜の目隠しに隠された視線の先にいたのは玄弥だった。一瞬驚いたように目を開いたが、すぐに遠夜の隣に来て座った。

「バレてたんですね」

そう言って少し恥ずかしそうに玄弥は笑った。

「さすがに柱の目は誤魔化せませんね」

「いやいや、悪くなかったぞ」

「え、そうですね？」

「ああ、まだ荒削りだが教えたことはちゃんと実践できてるようだしな。一般人相手なら気づかれないだろうよ」

「へへ……ありがとうございます」

そう言って笑う玄弥は歳相応の少年の顔だった。傷が多く人相も兄の実弥と同じで

あまり良いとは言えないから誤解されがちだが、玄弥もまだ成人すらしていない少年。幼さがあつて当然だ。

そんな玄弥の頭をわしわしと撫でる。

「わ、わ」

「ちゃんとやりやできんじやねえか。なーんで蝶屋敷の時にやんなかつたんだよ。おかげでしのぶにどやされたじやねえか」

「あの時は……まだうまくできなくて。すみません」

「くく……まあそう畏るな。いいって」

そう言つて遠夜は一度言葉を切つた。

「緊張してるだろ」

「っ」

遠夜は塞がれた視界を海に向けながらそう玄弥に言つた。

「ま、そうなるわな。なにしろ十二鬼月の可能性が高いところに明日は殴り込みだ」

「……俺、呼吸も使えなくて弱いからみんなの役に立てるのかなって考えたら、眠れなくて」

「んー、そこはそんな大事じゃないかな」

「え？」

「まずは生き残ることを第一に考えな。死ななければとりあえずいい」

「死ななければ、いい」

「そ。生きてさえいれば、それだけでいいんだって。怖がるのも最初は仕方ない」

「無道さんは、怖くないんですか？」

「んー？怖くない、と言ったら嘘かな。でもまあ大したことないよ」

「……強いんですね、羨ましいです」

「いやいや、俺は鬼は怖くないけど怖いものくらいあるし強くねーよ？」

「無道さんが怖がるものってなんですか？」

「得体の知れないものと完全にキレたしのぶ」

後者に関してはどう考えても遠夜の普段の行いのせいだが、前者については玄弥はよくわからなかった。鬼は怖くないというのに得体の知れないものは怖いと言う。玄弥は遠夜にとつてその線引きがイマイチ理解できなかった。

「お？わかつてない感じか？」

「得体の知れないものが怖いって…考えたことなかったんで、ちよつと想像つかないです」

「そうか、まあそうかもな。これは昔、ある人に言われた言葉なんだが、人を恐怖させる条件って三つあるんよ。無論対象が怪物や概念であること前提だがな」

「条件つて……」

「一つ、怪物は言葉を発してはいけない。二つ、怪物は正体不明でなければならぬ。三つ、怪物は不死身でなければ意味が無い。これが人を恐怖させるための条件。これを聞いた時すげー納得してさ。今まで怖いと思つたものは大体これに当てはまつてたから」

「正体不明……」

「そう。鬼は鬼でも得体の知れない能力持つやつとかいるだろ。そういうやつ見ると、俺は怖いと思う。一つ目の条件は大体満たす奴はいないけど、二つ目は割と人間でもいる。それこそこの言葉を教えてくれた人も結局正体不明だったし」

その時のことを遠夜は今でも思い出せる。御影山で修行している時に出会つた女性だ。この国の人間としては珍しく赤毛の髪の毛をしており、かなり美人だった。兄である日永と知り合いだったらしく、人形師を名乗つていたが兄自身も彼女の詳しいことは知らないらしかつた。

「ま、それ以来怖いと思えるものは減つたかな。その分怖いやつにはとことん恐怖を感じるようになったが」

「その恐怖をどう消してるんですか？」

「恐怖つてのは火みたいなものだ。うまく使えばこちらの利益になるが、下手にでかくすれば身を滅ぼす。だから消すことはしてない。恐怖は捨てるな。俺やお前みたいに」

弱い奴ほど、うまく扱える恐怖は武器になる」

尤も、ある程度制御できるならの話だがな、と最後に付け加えた。

「……俺に、できるでしようか」

不安げに呟く玄弥に遠夜は言った。

「素質はあるよ。だからそれはお前次第だな。死にたくなければ死ぬ気で制御しろ」

素質はある。そう言われたが玄弥はいまいちその言葉を信じていることができなかった。なにしろ自分には才能がない。兄のように単身で鬼と戦えるような勇気も技量も持ち合わせていないのだから。

「自分が弱い自覚がある奴の方が、恐怖の制御はうまいんだ。だからお前ならできるよ」

ここ数日で玄弥はわかったことがある。

この無道遠夜という男は、できることはちゃんとできると言うし、できないことはできないときっぱり言う。できるかどうかが五分五分の場合はその旨を伝える。そしてその言葉は決して偽らない。だからこそこの玄弥に向けられた『できる』という言葉は信憑性が非常に高いものであることがわかる。

「それに、お前に死なれると俺が不死川さんに殺される。だからできてもらわないと困るわ」

実弥の名前を出すと玄弥の顔が少し曇る。

玄弥は鬼殺隊に入隊してからまだ兄である実弥と顔を合わせていない。実弥が柱であり、非常に忙しいことに加え玄弥自身も修行と任務がある。故に容易に顔を合わせる機会を作ることができない。

「兄貴……」

この様子を見る限り、予想通りではあるが玄弥はまだ兄である実弥には会えていないらしい。

「まだ、不死川さんとは会えてないのか」

「……はい」

「ま、柱は忙しいしねえ。仕方ないかもしれんな」

「……」

「気長に待て。いつか会える。そんな時は今より強くなつて兄貴を驚かせてやれ」

「……はい」

遠夜は不死川兄弟になにがあつたかは知っている。陽明とよく会う都合上、今の柱の身の上話もある程度知ってしまった。無論陽明がペラペラとなにも考えず話したわけではない。陽明としても共に戦う者がどのような思いでここにいるのかを知っておいた方がいいという考え方の元に話した。

「大丈夫だつて。少なくともお前らはちゃんと生きて帰してやるから」

そう言つて遠夜は岩から降り、姿を消した。

残された玄弥は波の音を聞きながら空を見上げた。

磯の匂いはどこか濁っているように感じられた。

*

翌日

深夜

「さて、準備はいいなお前ら」

遠夜の言葉に玄弥、巖鉄は力強く頷く。

「潜入先は霊安室。そこにある謎の空間の調査だ。霊安室の鍵はすでに複製してある。職員に気づかれないように潜入、そして調査だ。帰りは最悪見つかつていいが、行きに見つかるのはまずい。だから潜入順路を途中で変更する可能性もある。あとはお前らの気配遮断がどれくらいできるかだ。なにか質問は？」

玄弥は大丈夫そうだが、巖鉄は少し不安そうな様子がみれる。

「なにかあるか？ 黒磐」

「……影柱様、本当に調査する必要があるのですか？」

「なんだ、面倒臭くなつたか？」

「いえ、決してそうではありません。しかし、この病院の職員達は全員日光に当たつてゐるのを確認しています。ここ数日、近辺で消えた人間もおりません。職員たちは全員と話しましたが、鬼の気配を纏う者はいませんでした。これほど鬼に関連する情報が無い状況であつても調査するのですか？」

「ああ」

「なぜですか？」

「勘だ。具体的無い根拠はねえ。だからお前らが付き合う義理もねえ。ぶつちやけ俺が見つけたあの謎の空間以外怪しさもない。だがやる必要があると俺は思つてる。嫌ならやめて構わん。もちろん報告もしねえ。好きにしろ」

「……ここまで来たんです。やらないわけにはいきません。影柱様がやるなら、私も同行します」

納得はしていないようだが、意思は固そうだった。

そんな巖鉄の様子に遠夜は満足げに頷き、絶を行い裏口の扉を開いた。

「うし、んじや行きますか」

夜闇に紛れた潜入が始まった。

「……静かですね」

潜入してから数分、遠夜達は順調に霊安室へと向かっていた。

だがあまりにも静かで物音もほとんどしない状況に玄弥はそう呟いた。

「深夜の病院だ。騒がしい方がおかしいがな」

「それもそうですね」

巖鉄の言うように深夜の病院が騒がしくなることなど急患の患者がいる時くらいだろうし、そう毎日急患がいるはずもない。

「これなら容易に霊安室まで辿り着けそうですね……影柱様？」

少々肩透かしではあったが、順調に目的地まで進めていることに安堵した巖鉄がそこぼしたが、すぐに遠夜の様子が変であることに気がついた。いつもより雰囲気がい。そう感じた。

「……」

「影柱様、どうかなさいましたか？」

「ん、ああいや……」

どうも煮え切らない答えが返ってくる。なにか懸念すべきことがあるのだろうか、それを言われなければ理解はできない。

「……進むか」

「はっ」

しかし遠夜はなにも言わなかった。少々訝しげに思えたが、遠夜を信用している巖鉄と玄弥はそのまま従った。

――

霊安室

潜入してその後特に大きな障害もなく霊安室へと辿り着いた。

「無事潜入できましたね」

「うむ、大きな障害もなくて良かった」

二人は少し安堵しているが、本番はこれからである。この先は鬼の領域。少し判断を違えば、待つものは死のみ。

それを二人とも理解しているためか、安堵した雰囲気はすぐに締め直した。

「影柱様」

「……ああ。巖鉄、ここだ」

先日潜入した際に遠夜が見つけた謎の空間への入り口と思われる場所。分厚い石の壁によって閉じられたそれは人の力で動かすには些か大きすぎる。

「俺がやってもいいが、これは俺よりもお前向きだ」

「はっ。お任せを」

巖鉄は前に出て、遠夜は後ろに下がる。

巖鉄が深く息を吸い、刀に手を掛ける。

その瞬間、巖鉄の周囲の空気が酷く重くなったように感じた。

(へえ……優秀たあ聞いていたが、これほどとはな)

正直、精神面の幼さが残る巖鉄が柱候補に上がるほどの実力があるという話は半信半疑だった。実際実力は纏う気で高いことは理解していたが、これほど覇気のある人物だとは想定していなかった。

「いいねえ」

巖鉄の放つ覇気の強さに遠夜は密かに口元を歪める。

「黒鉄の呼吸、壱ノ型」

「斬鉄劍」

影の呼吸の型である『絶影』に匹敵する速度で放たれた斬撃は、石の扉を切り裂いた。そして崩れた石扉の向こうには、やはり通路があった。覗いてみると、その先に明かりが見える。

「やるねえ。岩の呼吸の派生だったか？」

「日輪刀の色からそのように区分されていますが、本来は柳生一族の劍術を基にした型です」

「そうか、お前柳生一族の分家出身だったな」

「ええ、まあ」

「いいじゃないじゃない。こんだけの実力なら俺いらんやね？」

「冗談もほどほどに。私にはまだ十二鬼月を倒せる程の実力はありません」

「かてえなあ。ま、いいけど」

普段と比較すれば随分硬いが、それでもこれから戦いに行く人間にしてはやたら軽

い。本当にこれから戦いに行くのだろうかと少し疑ってしまふ。

「さて…」

だがそれもすぐに消え去る。

「いくぞで」

纏う気配が一気に鋭いものとなり、刀に手を掛けて歩き出した。

「はっ」

「はい」

それを感じ取った玄弥と巖鉄は気を引き締めて遠夜へ続いた。

――

「……へえ」

通路の先には、無機質な石でできた巨大な部屋が続いていた。明かりはないはずだが、不思議と部屋は明るい。そして部屋には、無数の分婉台。

「大当たりか」

「地下に…こんな巨大な施設が」

「すげえ…なんだこりゃ」

「氣い引き締めろ。いるぞ」

遠夜が貸しから刀を鞘ごと外すとほぼ同時に空間が歪み、そこから人形のなにかがでてきた。

（空間操作系の血鬼術か。まあ予想はしていたが…）

「…これは」

「鬼……ですか？」

それは目が虚になった人だった。鬼の気配はするが、どちらかと言えば人の気配に近い。

「違う。まだ人だ。悪趣味だな」

「ど、どういうことですか？」

「説明は後だ。いいか、こいつらはまだ人だ。殺すな。だが怪我はさせていい。巖鉄は峰打ちでも加減しろ。お前の力だと峰打ちでも殺しかねない」

「やり辛いが…承知！」

「玄弥、お前は普段やつてる事はここではするな。お前の能力だけでどうにかしろ」

「は、はい」

「さて、さっさと終わらせて真打ちを引き摺り出してやらあ」

遠夜は走り出し、二人もそれに続いた。

「これで、終わり」

玄弥が最後の一人の鳩尾に拳を叩き込み、気絶させる。襲ってきた鬼擬きは身体能力が少し高い程度の身体能力で、血鬼術を使うわけでもなかったため呼吸を使えない玄弥であつても容易に無力化できた。

「玄弥、大丈夫か」

「大丈夫です巖鉄さん」

「良かった。こちらでも無力化できた。数は少々多かつたが、個々は大した強さではなかつたからな」

「……この人達は」

「わからない。ただ、普通の人間でも鬼でもなかつた」

「じゃあ……」

「恐らく、血鬼術で操作されていた人間……だろう」

「だろうな。正しくは、人間というか死体だな」

巖鉄の言葉を遠夜は肯定しながらも倒れた人間の一人を転がし、顔を見せた。その目は白濁しており、顔色からは生氣を感じられない。死体そのものだった。

「ただ、操作する数を多くしすぎたのか、随分とお粗末だったがな」

そう煽るようにいいながら遠夜は倒れている人達を部屋の端に転がした。あまりにもぞんざいな扱いではあるが、付近に十二鬼月と思われる鬼がいるのだから正直そちらにあまり構っていられる余裕がないのも確か。故に巖鉄は遠夜を咎めることはしなかった。

「そろそろ出てきたらどうだ。いい加減ツラくらい見せてくれないんじゃねえか？ お互い初見でもねえんだし」

遠夜がそう言葉を発すると、空間が歪み、そこから一人の長身の男が現れた。

それはこの病院の院長、黒条月慈だった。

「なっ！」

「院長☒」

「いや、だが……貴方は……」

巖鉄が取り乱すのも無理はない。なにしろ巖鉄は月慈が日光を浴びる瞬間を目撃している。鬼は日光に触れると途端に灰になる。故に、日光を浴びて平然としていた月慈は鬼では無い。そう確信を得ていた。なのに今月慈はこの空間に忽然と現れた。明らか

かに血鬼術を使用していた。

つまり月慈は鬼ということになる。なにより、月慈は右目に『下二』と記されている。十二鬼月であることは、明白だった。

「やつぱり、あんたが鬼か」

だが遠夜は取り乱さない。そしてまるで予想していたかのような言葉を発した。

「ほう？俺が鬼だと予想していたのか。お前は一度も俺と会っていないはずだが？」

月慈はそう淡々と遠夜に告げた。

その話す姿を見て、玄弥は再び違和感を感じる。

(……やつぱり、似てる。誰かと……誰だ？誰なんだ？)

誰かに似ているという感覚は以前よりも強い。そしてそれが誰なのかももう少しで分かりそうな気がしてならない。なのにあと一歩足りない。そんなもどかしさを玄弥は感じていた。

「資料見た時からそんな気はしてたよ。院長があんたの時点だな」

「ふむ、ここに来るのがお前でなければもう少し時間は稼げたかもしれないな。そもそも情報を探まれた時点で潮時だったのかもしれないが。しかし、まさかお前が来るとはな」

「はっ！因果なものだな」

「全くだ。お前との再会がこんな形になるとは。実に嘆かわしい」

「思ってもねえことを言ってるじゃねえ。昔からその無駄な言葉の多さは変わらねえな」

「お前も、部下の様子を見る限り言葉足らずな癖は治っていないようだな」

まるで旧知の存在かのように話す二人を見て巖鉄は混乱していた。柱である遠夜がまさか十二鬼月と知り合いだったというのか。互いに互いの過去を知っているかのような口振りは、まるで『再開した仲の悪い兄弟』のようだった。

そして玄弥は、その二人の会話を見て、感じていた違和感の正体に気がついた。

「まさか……」

「気づいたか、その少年」

「っ！」

「お前の予想は当たりだよ、玄弥」

玄弥は遠夜の言葉から自分の直感が確信に変わるのがわかった。

「俺の今の名は、月詠だ。よろしく頼むぞ、鬼狩り共」

巖鉄は背中から冷や汗が流れるのを感じながら、遠夜の背中を見る。予想すらしていなかった事実が脳裏に通り、信じられない様子で遠夜を見た。

「そしてお前達二人の前に立っているその目隠しをした男」

遠夜は月慈——月詠の言葉を聞きながら目隠しを解き、目を露わにした。

そこにあつた目は、月詠の紅い瞳とは色は異なるが形は良く似ており、目を含めた顔は二人ともどことなく似通っていた。

「そいつの本名は」

——黒条月久

巖鉄は目を見開いた。素顔を晒した遠夜の横顔は、目の前に立つ月詠と名乗る鬼と良く似ていた。

「真正正銘、遠夜そいつは俺の血を分けた兄弟だ」

——

「兄弟……影柱様と?」

「無道さん……」

見たところ、遠夜と比較して月慈——月詠はあまり歳は離れているようには見えな
い。しかし鬼は歳を取らないため見た目からの年齢は予測できない。

「まさか十二鬼月にまでなつてるとはな、兄貴」

「お前こそ、まさか鬼狩りの頂点である柱になつていているとはな。平凡なお前がそれほどの実力をつけているとは思わなんだ」

「……………」

「どうした月久、鬼狩りなのだろうか？俺を殺さなくていいのか？」

「その名前は捨てたよ」

「ほう、だが些末な問題よ。お前が今何と名乗つていようが俺にとつてお前はいつまでも弟である月久なのだから」

遠夜の刀を握る手に力が籠る。

「どうだ？お前も鬼になつてみないか？」

「なるわけねーだろ死ね」

「くく…足らず口もだが、減らず口も変わらないとはな。安心した」

無表情のままだが、遠夜はわずかに目を細めた。

「……………なんで鬼になつた、兄貴」

「ん？」

「なぜ、お前は鬼になることを許容した。月慈」

「聞くまでもないことを聞くな。昔のお前ならばそんなわかりきったことは聞かなかつ

たぞ

「あ？」

「鬼は人間を遥かに超越した存在だ。そのような高位の存在になり、そのことについて研究することになぜ抵抗を持つ？」

まるで至極真つ当なことだとしても言うように月詠は言った。

「人を喰らう化け物がか？」

「人間とて、動物を喰らう。動物から見れば人間は同族を喰らう化け物だろう。食物連鎖の頂点が人間ではなく、鬼という存在になったに過ぎん」

「……………」

「なにより鬼という存在は興味深い。強靱な肉体の代償とでも言うように日光に当てられれば焼かれて死ぬ。どのような仕組みになっているのか是非とも解明したい」

「研究狂が」

「間違いではないな」

月詠は無表情のまま肩を竦める。

「普段はどうやって生きてんだ。血鬼術でも日光は防げないはずだが？」

「そ、そうだ！私は確かに月慈さんが日光に当たったのを見ました。鬼ならばあの時点で……」

「ああ、そのことか。そこのお前の部下二人は欺けたようだな。なに、難しいことではない。鬼の肉体も血鬼術も直接日光を当てなければ消えることはない」

「……そうか、つまりお前は『死体』に血鬼術をかけて操作していたんだな」

「その通りだ。なんだ、少しは頭が使えるようになったのだな」

確かに、血鬼術が直接日光を浴びたりしなければ日光の下で活動することもできるだろう。列車で遭遇した女も、先程多数出てきた人間も恐らくはそれによるものだろう。

「で、では私と玄弥が出会ったのは……」

「ま、十中八九顔を似せた死体だろう」

「ズ」明察

そう言つて僅かに口元を歪めて嗤う月詠は、やはり遠夜の顔と少し似ている。そう玄弥は感じた。

「さて、もういいだろう。そろそろ始めよう」

月詠は白衣のポケットから短剣を取り出した。その短剣は僅かに蒼い光を放っている。

「お前達は鬼狩り、そして俺は鬼だ。ならやることは決まってる」

「おいおい、俺としてはまだ聞きたいことがあるんだが？」

「聞きたければ聞けばいい。俺の血鬼術を乗り切ったら、答えてやろう」

月詠が短剣を構えると、月詠の左目が僅かに光を発する。

「来るぞ」

「はっ」

「はい！」

「まずは小手調べだ」

血鬼術 神威

空間が歪み、その歪みから大量の刃が出現し、遠夜達に襲い掛かる。

「巖鉄」

「承知！」

黒鉄の呼吸・参ノ型 斬鎧ざんがい

巖鉄の放つ下段斬撃は石造りの床を切り裂き、巖鉄が斬られた床を踏みつけることで石の壁を巖鉄と玄弥の前に作り出した。壁は放たれた刃の雨を悉く防ぎ、巖鉄と玄弥を守った。

遠夜は『円』を己の最も得意とする範囲に広げ、円の有効範囲内に入った刃を叩き落としながら虚空に迫る。

飛び上がり、一閃。

藍色の刃は淡く光る短剣によってその進行を阻まれ、月詠の頸には届かない。

「ほう、いい一撃だ」

「喧しい」

「相変わらず素直に賛美を受け取ることができんのか」

「……お前、いつ鬼になった」

「お前が我が家を去ってからだな。正確には10年前だ」

空間の揺らぎを感じ、遠夜は短剣を弾き距離を取る。

「10年？ たった10年で十二鬼月になるだど？」

今まで見てきた十二鬼月はそこそ長い時間をかけて力をつけて十二鬼月に至っていったらしい。それだけ多くの人を喰らったというのだから、そこに至るのも理解でき

る。だが月詠は他の鬼と比較しても確実に短い期間で十二鬼月に至っている。それだけ多くの人を短期間で喰らい続けたといえればそれだけだが、それほどまで多くの被害が出ていたら鬼殺隊の方でなにかしら情報を受け取るだろう。なのに実際情報が出回り始めたのはつい最近。短期間で大勢の人々を喰らった線は薄い。

「そんなに大勢の人々を食ったか」

「喰いはした。だがお前が想像しているほど数は多くなかろう」

少人数でありながら爆発的に鬼の力を伸ばす方法として考えられるものは二つ。

一つは、鬼の始祖である鬼舞辻無惨の血を摂取すること。それにより鬼は力を伸ばすことができるだろう。

そしてもう一つは……

「……稀血か」

「ふむ、凡庸の域は出ないがやはりお前は頭の回転はいいな。そこだけは評価できる」

稀血。それは希少な血故に稀血と呼ばれる血であり、鬼にとっては非常に効率良く力を伸ばすことができる血である。

月詠はその稀血の人間を喰らったのだろう。それも一人や二人ではなく、大勢。

稀血はその名の通り人の中でも低確率で出現する血であるため見つけるのは容易ではないはず。だがそれを月詠は多数見つけ出し、喰らったのだろう。

「稀血は一人喰うだけで五十以上の人間を喰らったのと同年以上の力が手に入る。それを繰り返し返せばどうなるかはわかるだろう」

「堕ちたな、兄貴」

「ふむ、この俺を堕ちたと表すか。興味深いな。かつてとは違い、人としての感情が戻ってきたようだ。さては、拾われた先で良き人間に囲まれたのだろう。喜ばしい」

「思ってもねえことをほざくな外道」

吐き捨てるように言いながら遠夜は刀を平晴眼に構えると目にも留まらぬ速さで月詠に迫る。

影の呼吸 参ノ型 無辺

一呼吸のうちに放たれた無数の斬撃が月詠を襲う。

しかし斬撃は全て、歪んだ空間によつて軌道を変化させられ月詠に届くことはなかった。

「いい技だ。しかし、当たらねばどうということはない」

「いけ」

「むっ？」

遠夜の眩きを虚空は理解できなかったが、すぐにその意味を知ることになる。

突如鳴り響く銃声。

先ほど巖鉄が作り上げた石壁に隠れながら玄弥が放った南蛮銃の発砲音。それが音の正体。

「陽動、悪くない」

放たれた銃弾が眼前に迫るのを『見ながら』月詠はそうつぶやいた。

血鬼術 神威

銃弾は歪められた空間に吸い込まれて消えた。

「……へえ」

「あれは……」

（空間系血鬼術か……予想通りだな。見たところ、物の出し入れして物を飛ばしたり、空間を歪めて軌道を変化させるのが主な使い方かね。いや、物だけじゃなくて『人間』そのものも別空間に飛ばせそうだな。なんなら身体の一部だけ飛ばすとかもできそうだな。こいつは、結構厄介。ここまで厄介なのはしのぶとやり合った影使いの鬼以来かね）

あの時の鬼は複数を相手にする戦闘に慣れておらず、なおかつ遠夜がすぐに血鬼術の仕組みを看破できたためそれほど苦労はしなかった。しかし今回は仕組みがわかったからといってどうにかなるような相手ではない。

（こちらの優位は……数。うまく二人を使うしかねえか）

「影柱様、いかがしますか」

「……前衛は俺、巖鉄は中間で上手くやれ。玄弥、お前は唯一の射程持ちだ。隙をみつけ

てガンガン撃て」

「承知」

「了解、です」

「今の指針さえ守れば良い。あとは好きに動け。合わせる」

「はっ」

「はい」

「いくぞ」

前衛である遠夜が先頭を歩き、巖鉄はそれに続いた。玄弥は南蛮銃の射程範囲内に留まりながらも銃弾を再装填し、隙を狙う。

「さて」

再び空間が歪み大量の刃が二人を襲う。

「お任せを！」

黒鉄の呼吸 肆ノ型 黒刃一掃

巖鉄が放った十字の斬撃は刃の雨を十字に斬り裂き、道を切り開く。

「いい技持ってんじゃん」

「ふむ、これはどうだ」

迫り来る遠夜の目の前の空間が歪む。それは遠夜を飲み込むかのように歪みは広

がっついていく。

「影柱様！」

「わーってるよ」

影の呼吸 式ノ型 影法師

「む」

遠夜の姿がブレたと思った瞬間、月詠は空間を抉り取った。しかし手応えはない。現にその場にいたはずの遠夜はいない。

それと同時に周囲には無数の影法師が乱立した。それは僅かな時間その場に留まると消えるものだが、すぐに新たな影法師ができる。

「これは……」

「遅い」

月詠が視覚で遠夜を見つけることを瞬時に諦め気配を感知することに切り替えた瞬間、背後から遠夜が鋭い一撃を放つ。

その一撃は確かに月詠の頸を捉えた軌道を描いて放たれた。

「っっ」

だがその手応えの無さに遠夜は瞬時に背後に飛んで距離を取り、巖鉄の横に着地する。

「今の……」

「影柱様？」

「氣い抜くな。こいつあ、予想以上にやべえ」

「と、いいますと？」

「今の一撃、手応えが全く無かった」

「全く？」

「空振りでもしたかのようだった」

現に、月詠の頸は落ちておらず、頸は繋がったまま。

「さて、どういう絡繰かねえこれ」

「幻覚、ですかね」

「それはねえ」

「根拠は」

「俺もお前も氣の流れが乱れてねえ。多分こう言ってもわからんだろうから、理解しなくっていい。だが納得しろ」

「承知」

(…しかし、これは参ったな)

なにしろ攻撃が当たらないならば倒しようがない。先の一撃は確実に頸を捉えた軌

道だった。鋭さも申し分ない。だがそれを無効化されたなら、こちらの攻撃全てが通じない可能性すらある。

(だが、血鬼術も万能じゃない。どこかに必ず穴がある)

「…巖鉄、さつき俺が前衛とか言ったそばから悪いが、前衛頼む。少し考える必要がありそうだ」

「御意」

「玄弥、お前も前に出る。だが出過ぎるな。当て逃げを繰り返せ」

「はい」

「動きは合わせてやるから好きに動きな。だがあまり攻撃には参加できん。防御主体で俺は動く。奴を観察したい」

「はっ」

言葉と共に巖鉄は前に出る。

「話は終わったか？」

「律儀に待つとはな」

「なに、あの凡才のお前が努力でどれほど俺に近づけたか興味がある。すぐに殺しては、惜しい」

「まるでいつでも殺せるみたいない草だな」

「その通りだ、愚か『だった』弟よ。ここは俺の空間だ。殺すことなど容易い」

空間が歪み、そこから吐き出されたのは巨大な岩。その巨大な岩が速度をもつて遠夜達に向けて放たれた。

「お任せを」

黒鉄の呼吸 壱ノ型 斬鉄剣

居合の要領で放たれた一撃は岩の中心を捉え、真つ二つにし、二つに分けられた岩は遠夜の横に転がった。

「目の前に集中しな。露払い俺と玄弥でやる」

「承知」

「玄弥、できるな」

「はい」

「ん、よし」

「いくぞ」

「いいぞ、その意気だ」

突如、背後から声が聞こえそちらに反応する前に玄弥が吹き飛ばされる。

「は？」

「呆けてる暇はないぞ」

「ちっ！」

振り下ろされた短剣を日輪刀で防ぐ。

「ふむ、反応は悪くないな」

「おいおい、俺は瞬きすらしてねえぞ」

「空間系の血鬼術だとお前が分析してただろう」

短剣の纏う光が紅く染まる。

まずいと思った時には、もう遅かった。

血鬼術 神威・発

衝撃波が短剣から発せられ、遠夜の全身に叩きつけられる。

「ぼっ！」

咄嗟に受け身は取ったが、全身の複数箇所骨が嫌な音を立てる。折れてはいないよ
うだが、十全に機能はしない可能性が高い。

「影柱様！」

「馬鹿！敵から目を離すな！」

「遅い」

再び紅い光と共に巖鉄は吹き飛ばされ、壁に叩きつけられた。

「ごっつー……ぐう」

「……ほう、全員気を失わないか。思ったより頑丈だな」

「んだ……今の」

「俺の血鬼術だ。向こうの空間をこう……押し出すようにするとできる。空間を操ると色々できる。こんなことも」

そういうと月詠は視線を玄弥に向けた。

すると倒れ伏していた玄弥は一気に月詠に向けて引き寄せられ、頭を掴まれた状態で持ち上げられた。

「がっ！」

「引力と斥力と言えば想像しやすいか？空間操作を応用するとこんなこともできる」

「て、めえ」

「……ふむ、さすが鬼殺隊。普通の人間よりも頑……」

そこで月詠の言葉が止まる。止まった理由は、玄弥が頭を掴む手に噛み付いてその肉をそのまま飲み込んだからだった。

「なに？」

「がああ！」

鬼の肉を摂取。それは通常の人間にはあり得ないこと。なぜなら鬼の肉など食らうものならそのまま鬼に成り果てるか、毒として身体に回り死に至るからだ。鬼殺隊ならばその程度のことは想像は容易いだろう。

しかしそれを玄弥は覆した。玄弥は呼吸の才能は無いが、特殊な消化器官を持ち合わせているため鬼の肉を摂取しても鬼になることはなく、一時的に鬼と同等の身体能力を発揮できる体質の持ち主だった。

（兄が兄なら、弟も弟だな。どうなってんだか不死川家は）

「うがあああ！」

「む」

発揮された鬼の身体能力により月詠の拘束から離れる。

「ほう」

「食らえや！」

放たれた南蛮銃の弾丸は歪められた空間が弾丸の起動を変え、玄弥に向けて返される。

「なっ！」

「空間系の能力は便利だな。こんなこともできる」

玄弥に向かって速度を上げて返された弾丸は真つ直ぐ向かっていった。

だが弾丸は玄弥に着弾される前に遠夜の刀によって斬り裂かれた。

「いい腕だ」

「うるせえ」

「賛辞は素直に受け取れ。だが、一手間違えたな」

「はあ？」

「お前は一体なにを調査してきた。愚かなままか？」

その瞬間、遠夜は背後から衝撃を感じる。脇腹辺りに熱を感じ、それは徐々に痛みへと変わっていった。

「む、道さ、ん」

「玄弥！なにをしている！」

迫り上がってくる血を感じる。

脇腹は刀によって貫かれており、その刀は玄弥が握っていた。

「ああ……くそ。読み間違えたか」

「俺は確かに空間操作を行う血鬼術を扱う。しかしな、あのお方がしているように、鬼の血には『対象を操作することがある程度可能な力』が秘められている」

「ぐ、があー！」

玄弥を押し、腹に刺さった刀を抜く。呼吸で瞬時に止血を施すが、呼吸だけでは止められないほどの傷となつていたため持つていた布を傷口に押し当ててゐる。

「あのお方が血によつて我々を監視、引いては操作している。俺はそれに着目してな。さすがに俺の血では鬼を操作することはできん。なんなら生きてる人間すら難しかった。だが死体であれば可能でな。俺の細胞を対象の脳に直接埋め込むことで死体を一時的に蘇らせ俺の配下とできることがわかつた」

「普段、表に出ていんのは……」

「そう、死体を操作しているにすぎん。この操作の良いところはいくつかあつてな。まず日光に当てても問題ないことだ。あくまで俺の細胞が操作しているのは死体の脳であり、日光に当たつてゐるのは死体の肉体のみ。ある程度防腐処置さえしてしまえば数ヶ月は保つ。背格好さえにゐる死体さえあれば顔を変えればそれで代用は効く。なかなかいいだろう」

脳さえ乗つ取れば、その肉体を動かすことは容易ということを月詠は言つた。

現にここはくる前に会つた女は後に調べてみると死体であることがわかつた。さらには先程の大量の人間。あれも結局死体だったということだ。空間操作系の血鬼術であつたため操作系能力のことが霞んでしまつていた。

(間抜けか俺は)

「無道、さん」

玄弥は苦しそうにしているが、自我は保てている。つまりこれは、月詠が無理矢理四肢のみを操作したということだろう。

すぐにでも塞ぐ必要のある傷だが、目の前に鬼がある以上簡単にはできない。玄弥が咄嗟に抵抗したためか、幸い内臓は傷ついていない。

「お、俺……俺!」

「お前じゃねえ。俺が……しくじった」

正直、仮に万全の状態だったとしてもあの月詠を倒せる保証はない。なにしろあの月詠の血鬼術が想像以上に強力であり、弱点がわからない。なにかしらあるのだろうが、現段階では不明。巖鉄ならば単独で月詠を倒すことができるかもしれない。加えて特異性の高い血鬼術故に影の呼吸との相性は悪い。

そう考えたところで、遠夜は立ち上がる。

「玄弥、立てるか」

「え……」

「まだやれるか」

普段見ることができなかった遠夜の瞳に見つめられ、玄弥は奥歯を噛みしめ立ち上

がった。月詠の操作は完全ではないらしく、気を保っていれば抗うことができるらしい。

「まだ、やれます!」

「よし。巖鉄と連携してやるぞ。俺が死ぬ前に」

出血量はすぐに止血したためあまり多くないが、長引けば止血も無意味になり、失血死する可能性が高くなる。

「巖鉄、全力で攻めろ。補佐は、してやる」

「……………はっ!」

わずかに躊躇う態度を見せたが、巖鉄はすかさず月詠に向かっていった。同時に遠夜も姿を消し、月詠に向かっていく。

「全力…ならば!」

黒鉄の呼吸 伍ノ型 殲刀

振るわれた刀は巨大な鉄の棒を振り回したような衝撃が広範囲を襲う。

「おお!」

(風の呼吸に似た技だな。弱い鬼ならあれだけで上半身が吹き飛びそうだ)

「む」

月詠の身体が後ろに飛ばされる。

「……」

すかさず巖鉄は月詠に近寄り、体勢を立て直される前に刀を振るった。

黒鉄の呼吸 壱ノ型 斬鉄剣

すれ違い様に放たれた斬撃は確かに月詠の頸を捉えた。しかし、遠夜の時同様手応えはなく、月詠の頸は落ちていない。

「惜しいな」

「むうー！」

突如、月詠の頭上に影がかかる。

影の呼吸 参ノ型 無刃

無数の斬撃が月詠を襲うが、案の定手応えは無い。そして遠夜の背後から玄弥が銃弾を放つが、銃弾すらもすり抜けた。

だがそれでも構わず巖鉄と遠夜、そして玄弥は攻撃を続けた。型を使わない攻撃も多数組み込んで攻撃を月詠が受けていない時間を少しでも減らすようにとにかく攻撃を続けた。

だが人の身体はすぐに限界が来る。休息といえるような時間は無く、ひたすら全力で攻撃を続けるなど全集中・常中で強化した肉体であろうと数分も経てば息は切れ、四肢は鉛のように重くなってくる。

(きつつ、いな。でも、予想は当たりだな)

遠夜の月詠に対する血鬼術の予想は当たりだった。

遠夜の玄弥と巖鉄に対するとにかく攻めろという命令は『月詠の攻撃をすり抜ける血鬼術が発動している間は月詠は攻撃も移動もできない』という予想を裏付けるためのものだった。

「ぬうあー！」

黒鉄の呼吸 陸ノ型 赫刃・熱鋼斬

全集中の呼吸によって強化された身体能力で刀を全力で握り、刀は僅かに赫く染まる。その刀からは熱が感じられ、明らかに先ほどまでの刀とは性質が異なるものとなる。その赫く染まった型で月詠を正中線で斬り裂こうと振り下ろす。

「ちっ」

「むー！」

しかしその刀は月詠の持つ短剣によって防がれる。触れ合う刀と短剣は火花を散らし、そして月詠の短剣の刃が僅かに欠ける。

巖鉄の刀を弾き、月詠は距離を取った。それとほぼ同時に巖鉄の刀の色は普段の黒味がかった灰色に戻る。

(制限時間もあるようだ。多分、再度使用するまで時間もいるんだろうが、無いに等し

いと考えるべきか)

「玄弥!」

「む」

「があああ!」

背後から突如現れた玄弥が月詠を全力で蹴り飛ばす。玄弥の日輪刀は鬼の頸を切ることはできる。しかし玄弥は剣の才能はない。加えて刀は鬼が強く警戒している。故に確実に攻撃を当てることのできる体術を当てにいった。ただの体術と侮るなかれ。効果は普段よりも薄いとはいえ今の玄弥の身体能力は鬼そのもの。下弦の式である月詠の行動を阻害するには十分だった。

「無道さん、巖鉄さん!」

「よくやった。巖鉄、奥義」

「承知。参ります」

巖鉄は刀を瞬時に収め、全身の力を刀に凝縮する。

「我が心は不動」

動かざる身体に反して心は自由

無念無想の極地

黒鉄の呼吸 奥義 剣術無双・劍禪一如

影の呼吸 肆ノ型 絶影

放たれる二つの斬撃は月詠の頸を捉え、そして切り飛ばした。

「……まさか、これほどとはな」

はずだった。

「おいおい、どうなってやがる」

「馬鹿な！」

巖鉄、遠夜両者の刀は月詠の目の前で止まっていた。振り切ることでできておら

ず、どんなに力を入れて前に押ししても刀は動かない。

「これを使うことになるとはな」

「なに、しやがった」

「奥の手だよ」

まずい、と思つた時にはもう遅かつた。

月詠の短剣が紅く光り、巖鉄は吹き飛ばされ玄弥に受け止められたが、衝撃波が直撃したため肋骨が折れる音がした。

「巖鉄さん！」

「ごっ……ごっ、うう……か、影柱様！」

「やっべ」

刀を引こうとしたが、びくともしない。それどころか身体も動くことができない。

「おいおいおいおい、どーなってるんだ」

「終わりだ」

月詠は短剣を顔面に向けて振り下ろそうとした。

「無道さん！」

だがそれを阻むべく玄弥は南蛮銃を撃つた。

「邪魔だ」

再び短剣が紅く光り、銃弾を弾き飛ばし、玄弥諸共吹き飛ばした。

その瞬間、僅かに身体を拘束していた圧力が緩み、なお近づいてくる短剣から逃れるべく身体を捻った。

しかし完全に逃れる事はできず、月詠の短剣は遠夜の左眼を抉った。

「か、げ柱様っ」

「無道さん！」

鋭い痛みと熱。そして半分闇に覆われた視界。加えて新たな傷を受けた瞬間、腹部の止血が疎かになり傷が開いた。

一気に血を失ったことにより身体の力が入らなくなる。刀でどうにか身体を支えたが、もう戦えるような力は残っていない。

遠夜は宇髄のように身体的に恵まれていない。故に出血が重なれば数刻も経てば失血死する。

(……無理だな、これは)

柱に至ったとはいえ、遠夜は柱の中での実力は下位の方である。以前戦闘した下弦の参はしのぶがいたからこそ余裕を残して勝てた。だが今は満身創痍であり、戦力となる二人も疲弊し、傷を負っている。

なにより戦力としてはこの場では一番である遠夜が致命傷。即座に討伐が不可能だ

と判断し、遠夜は二人に指令を出す。

「逃げる。色々しくじり過ぎた」

「な……」

「無道さん、は」

「俺はもうダメだ。失血し過ぎた、長くは保たん」

「しかし」

「早くしろ。時間くらいは稼いでやる」

「無道、さん」

「行け」

「……………」

「早くしろ！死んだら終わりなんだぞ！」

「っ！」

その言葉に巖鉄は折れた肋骨を押さえながら、玄弥の手を引き地下室から出た。終始玄弥は遠夜の名前を呼んでいたが、南蛮銃の弾が底をつき、僅かに操作能力の影響が残っている玄弥は戦力としては数えることは厳しい。巖鉄は負傷し、普段の動きはできない。撤退しかないという判断は妥当だろう。

「なるほど、部下を助けるために身体を張るか。殊勝な心掛けだ。だが、虫の息のお前で

どこまで俺をこの場に留められるかな？」

「そう、長くは保たんだろうよ。なにしろ……俺とあんたの相性は最悪。六つある影の呼吸のうち五つしか使えない俺にしては上出来だろうよ」

煉獄程の実力が俺にあれば話は別だがな、と心の中で付け加える。

元より遠夜は身体能力に関しては巖鉄と同等程度であり、剣技は柱としてはやや未熟である。今までは持ち前の頭脳を武器に鬼を屠ってきたが、その遠夜以上の頭脳を持つ鬼が相手では状況は不利。加えて相手の血鬼術は影の呼吸と相性が悪い。

(結局、ことうなるか)

諦めに近い感情が湧き上がってくる。終ぞ、遠夜は兄である月慈にも日永にも届かなかった。

「……憐れな弟よ、せめて一息で終わらせてやろう」

血塗れになりながらも刀を構える遠夜に、月詠はそう告げた。

「……悪いな、少年」

遠夜の言葉は誰にも届かなかった。

——

「随分と長く足掻いたな」

倒れ伏す遠夜に月詠はそういった。

遠夜は月詠をこの場に留め、巖鉄と玄弥が逃げるための時間を稼いだ。月詠の見立てでは数分もしないうちに遠夜は力尽きると踏んでいたが、実際遠夜は一時間近くも一人でこの場に月詠を留まらせた。満身創痍の身体を無理矢理動かし、殺せなくとも全ての力で時間を稼ぐことに心身を注いだ遠夜は、少なくとも月詠が対面した人間の中で最も強い人間だった。

だが限界が来たのか、遠夜は倒れ伏し、呼吸も浅い。手に持っていた刀も今は傍らに転がっている。

「……そういえば、鬼狩り…柱の素体を得るのは初めてだな。どうせこのままでは死ぬ。ならば最期に役に立ててやろう」

月詠は遠夜を抱き抱え、分娩台に乗せた。

そして自らの左眼を眼軸ごと抜き取った。抜き取られた眼球は即座に再生し、何事もなかったように機能も回復した。

「今まで鬼の肉体を移植した者は皆死んだ。血ですら耐えられん者が多いのだから肉体を移植すればほとんど死ぬなんてわかりきったことだ。だが、通常の人間よりも遥かに強い肉体を持つ柱。さて、結果はどうなる。鬼と化するのか、死ぬのか。それとも……？」

そう言いながら月詠は空間操作を行いながら遠夜の左眼に残った潰れた眼球を取り出した。通常なら耐えられる痛みではないが、瀕死と遠夜はもはや痛覚すらない。

そこへ先程抜き取った月詠自身の眼球を遠夜に移植した。本来、このように粗雑な移植（しかも眼球という繊細な器官）で移植は成立しないが、移植する器官が鬼の肉体という異例。再生能力が非常に高い鬼の肉体を移植すると移植先に癒着しようとする働きがあることを月詠は知っていた。

埋め込まれた眼球は即座に遠夜の肉体に癒着しようと蠢く。

「がっー！」

激痛。瀕死の遠夜に癒着するために移植された月詠の眼球が遠夜の肉体を取り込もうと侵食を始める。

「さあどうなる」

「ぐ、あがうあー！があああああー！」

身体が内側から侵食されていくような感覚。

それは徐々に広がっていく。

「づ、あああ」

ほとんど意識の無かった遠夜の意識は瞬間的に無理矢理覚醒させられ、大量の血を吐く。

だが感じたことのない激痛が全身を駆け巡り、傍らにいる月詠のことなど気にする余裕など無い。

抗えない侵食する感覚。

徐々に消えていく視界。

脳裏に過ぎるのは、三人の人間の姿。

兄、日永

義姉、胡蝶カナエ

そして—————

三人の姿が消えていく。

手を伸ばしても届かない。

「ま……て……。まだ……ま、だ！まだ、俺、は！」

三人の顔が闇に吞まれそうになる。

消えていく

消えていく

やめろ

まだ

まだ、僕は

「……………」

血を吐きながら遠夜は声にならない声で叫ぶ。

この瞬間、無道遠夜という人間は死んだ。

諦める
抗う

どうする？

拾

命辛々逃げ切った巖鉄は烏を使い鬼殺隊に知らせを飛ばした。

その知らせはすぐに産屋敷輝哉に伝えられ、柱全員にも通達された。

通達された内容は『影柱の敗走』

これを受けて産屋敷輝哉は最も距離的に近かった伊黒小芭内にあるものを持たせて件の病院である黒条総合病院に向かわせた。

だが最も距離的に近かったとはいえ、伊黒が現場に到着するまでに半日ほどかかってしまった。

(敗北するにしても、なぜこのような辺境の地なのだあの目隠し男)

急ぎ現場へと急行する伊黒は内心苛立ちを募らせていた。

苛立ちが距離が遠く、移動が面倒であることも原因ではあるが、柱である遠夜が下弦の式に負けたという事実が苛立ちが抑えられない。

遠夜は、柱の中でも実力は低い。しかしその能力は決して低くない。柱だからといっ

てなんでもできるわけではないが、できないなりにやろうとしている姿勢は伊黒なりに好感が持てた。伊黒自身も悲鳴鳴や宇髄、煉獄と比較して筋力が少なく、力を行使した戦い方はできない。それを技術で埋めてきたため、遠夜の戦い方はよく理解できる。それをわかっているからこそ下弦の鬼に負けたという事実が信じられない。

伊黒本人からすれば遠夜のことは嫌いであつた。新参者の癖に柱合会議はサボる、お館様への足りない敬意、そしてなによりこちらを見透かすかのような飄々とした態度。全てが気に入らない。

『俺はあんたほど強くない。あんたがいうように、俺は柱はしらに居ていいような器じゃねえんだ』

そう言つて皮肉げに口元を歪める遠夜に苛立ちを覚えたことを思い出す。

「馬鹿め。俺が気に入らんのはお前自身であるだけで、お前の実力だけは俺は認めていたぞ」

苛立ちを含んだ眩きは誰の耳にも届かない。

――

伊黒が件の病院に到着した時にはすでに日は頂上に登っていた。

「蛇柱様……！」

「状況は？」

「隠の協力の下、従業員全員を病院から出し、患者につきましては付近の診療所や宿屋に協力してもらい保護してもらいました」

「いいだろう。それで？」

「……」

「無道は」

「……影柱様は、私と玄弥を逃すために殿に……」

「最後、奴はどういう状況だった」

「え？」

「確認できた最後の奴の状況を話せ」

「……影柱様は、脇腹に刀を突き刺され、左眼を潰されて重傷。失血も重なり……生存は絶望的。そう巖鉄が言おうとしたところを伊黒は遮った。

「生きている」

「え？」

予想外の言葉に巖鉄は呆けた声が出る。

「奴は生きている。しぶとさだけなら、柱でも随一だ」

現に遠夜はかつて任務で一週間程行方不明になったことがある。任務を終えた後運悪く嵐が来て行方不明になってしまった。遠夜の鳥も嵐で怪我を負い、飛ぶことができず遠夜自身も土砂崩れから逃れる際に足を負傷し、迂闊に移動することができないような状況に陥っていた。加えて土砂崩れから逃れる際に必死に逃げていたため現在位置を把握することができなかった。

現在位置もわからず足は負傷し、鳥も飛べない。さらには周囲は崩れた山々であり、水はあるが食料はない。そんな状況だった。

産屋敷はすぐに隠を捜索に出そうとしたが、道が崩れて簡単には進めない。産屋敷の鳥の尽力があつてしても発見に一週間もかかるような場所であつても、遠夜は生き延び、数日後には機能回復訓練を行うまでのしぶとさを見せた。

さらには複数の鬼との戦闘続きで常人ならば既に失血死しているような傷を負つても呼吸と応急処置、更には『氣』とかいうよくわからない能力の応用を行い、二山超えて藤の花の家まで辿り着いたという逸話もある。伊黒達柱はそれを知っているからこそ、遠夜が簡単には死なないという認識を持っている。

「しぶとさだけだがな。奴の実力は未熟の一言に尽きる。別に俺は奴がどうなろうと知ったことではない」

それでも、と伊黒は付け加える。

「あいつが死ぬことで、困る事は残念ながらある」

それがなにかは言わなかったが、巖鉄はそれが酷く深い言葉に聞こえた。

「ではいく。お前はここで待て」

「いえ、私も行かせてください」

「未熟者がいたところで足手まといになるだけだ」

伊黒は躊躇なく巖鉄の言葉を切り裂く。ここで下手に連れていくと足手まといになるどころか伊黒自身にも危険が降りかかる可能性がある。それをわかっているからこそ、伊黒は連れて行くことを拒否した。

「私のことは、お守り頂かなくて結構です。わかっております。私は、まだ十二鬼月を屠れるほどの実力はない。しかしただ死に行く気もありません。この命を懸けて蛇柱様が頸を落とせるように尽力し、そして影柱様をお救いします」

巖鉄は伊黒にそう言った。

伊黒は巖鉄の目を見た。その目は金剛石のように硬い意思が宿っており、ここでさらに拒否しても勝手についていくと態度で示していた。

(……これ以上の問答は時間の無駄か)

半ば諦めに近いが、伊黒はそこで巖鉄の同行を認めた。

「だがお前が死にかけていても俺は助けない。助ける気はない。死ぬ覚悟はしておけ」

「はい、承知しております」

「巖鉄さん！」

巖鉄が伊黒の後に続こうとしたところで背後から玄弥が声を上げる。

「あ、あの…俺も…」

「駄目だ。お前は絶対についてくるな」

巖鉄に懇願しようとした玄弥の言動を切り裂くように伊黒が遮る。

事実、先の戦いで遠夜に深手を負わせている。それが玄弥にとつて唯一の戦闘手段であつたとしても、それが操られるという結果になるのならいい方がい。伊黒はそう判断した。仮に操られるという事実がなくなるとも実力的に連れていけるようなものではない。遠夜を上回っている以上、敵の鬼は今までの下弦と比べてかなり高いものとなっている。さらには血鬼術の特異性を考えると、玄弥の実力で連れていける余裕はない。

「っ…」

「お前の実力で連れていける余裕はない。下手したらこちらが死ぬ」

「……………」

「それに、お前に死なれたら俺が不死川に恨まれる」

「！」

不死川に弟がいることを伊黒は知っていた。そして、敢えて弟に会おうとしていない

ことも。

そこで下手に連れて行き死ぬようなことになっては不死川に合わせる顔がなくなるという思いもあつたが、なにより厄介な能力を持つ鬼相手に操作される危険性のある玄弥を連れて行くことは利点があまりにも少ない。

「お前は弱い」

「……」

「だから今は耐えろ。己の弱さを自覚しろ」

その言葉に玄弥は目を見開く。伊黒の言葉は、玄弥にとって大きな意味があつた。

悲鳴嶋の元で修行する際、よく悲鳴嶋に言われた。『己の弱さを自覚することが、強くなるための第一歩である』と。伊黒がそれを把握していたかはわからない。だが、この場で玄弥を下がらせるには最も効果的な言葉を伊黒は使った。

「…御武運を」

「ふん」

「ああ、必ず無道さんを連れて帰ってくる」

「…お願います」

巖鉄は頷き、伊黒の元へと歩き出そうとしたが、すぐ目の前に伊黒がいたことに驚き立ち止まる。

「…おい、お前」

「え、あ、はい」

くるなど言われて跳ね除けられたばかりなのに声がかけて、若干玄弥は戸惑う。

「確か、日輪刀と同じ玉鋼で作られた南蛮銃を持っていたな」

——

「蛇柱様」

霊安室の扉の前まで来て巖鉄が伊黒に声をかける。

「怖気ついたなら帰れ」

「いえ、そうではなく」

「ならなんだ」

苛立ちを隠さず言葉を発する伊黒に若干気遅れするが、それをなんとか抑えて巖鉄は声をあげた。

「影柱様は…生きておられるのでしょうか」

「ふん、さつきは生きていたと言ったが、死んでいる可能性も大いにある。どちらにして

も奴がこの先で戦力にならんことは確かだろう。そもそもお前らの話から、今回の鬼は空間操作系の血鬼術らしい。なら既にこの場にいない可能性すらある」

「…そうですか」

「隠の連中がこの霊安室を見張っていたが、報告では鬼に動きはないらしい。つまり奴は逃げたか、または逃げる手段を持っているかだ」

能力的に後者の方だろうがな、と最後に伊黒は忌々しげに付け加えた。

伊黒は今まで無数の鬼を屠ってきたが、空間操作系の血鬼術を使う鬼はあまりいなかった。

だが、空間操作系の能力を使う鬼は総じて頭がいいか勘がいい。なぜそうなのかはわからないが、己の能力の使い方は得てして上手い者が多い。それら全てを屠ってはきたが、少なくとも伊黒では思いつかないような空間の使い方をする鬼はいた。尤も、片手で事足りる程度の数でしかないが。

今回の報告にある鬼の能力は非常に厄介な能力を持っている。衝撃波による攻撃、攻撃の無効化、瞬間移動、そして敵の固定。伊黒でなくとも苦戦を強いられるであろう能力だ。

だが放置するわけにはいかない。

十二鬼月である以上、放置すれば大勢の人間が死ぬ。

「いくぞ」

「はっ」

伊黒の言葉と共に巖鉄は霊安室へと足を踏み入れた。

*

「ふむ、新手か」

霊安室の更に奥へと進むと、白衣の男が居た。紛うことなき巖鉄達が敗北した黒条月慈だった。

「貴様が鬼だな？」

「そういう君は、見たところ柱か。まさか俺のために二人も柱を投入するとはな」
「殺す」

「ああもう少し待ってくれ。今貴重な実験の記録をしている最中なんだ」
「知るか」

蛇の呼吸 壱ノ型 委蛇斬り

「まったく…」

しなる斬撃を見ながら月慈…月詠は呆れたようなため息を吐く。

しなる伊黒の斬撃は月詠の肉体を透過し、さらに続く巖鉄の追撃も透過した。

「俺の能力をその巨漢から聞いているはずなのに、馬鹿正直に正面から来るか。少々失望した。だがその心意気は買おう。俺の弟にはなかったものだ」

蛇の呼吸 参ノ型 罅締め

蛇が対象を締め付けるような斬撃を伊黒は放つが、それも月詠の身体を透過した。

(…なるほど、本当に透過しているな。切った感触がない。だが黒磐の話では透過している間は移動ができないとのことだった。だが一度わざわざ空間固定の能力で二人を止めたことを鑑みると…透過能力の制約は移動制限だけではないな)

本当に透過能力の制約が移動制限だけなら攻撃を透過させた後の隙がある時に空間を固定した方がいい。その方が反撃の危険性は低くなるし、何より確実だ。

(だがその制約がわからん。それさえわかれば突破口は見えるが、逆に言えばそれがわからないうちは攻撃は無意味)

「考え事はいいが、こちらが待つ道理は無いぞ」

空間が歪み、そこから岩の礫が無数に降り注ぐ。

「ちっ」

「お任せを」

黒鉄の呼吸 伍ノ型 殲刀

前に出た巖鉄の刀が石の礫を弾き飛ばした。

「面倒だ」

「能力がかなり厄介です。しかし…」

「透過にも限界がある。加えて、空間固定には大きな制約があるのだろう。だが…」

人手が足りない。巖鉄からの話と今の戦闘で伊黒は一つの仮説を立てたが、それを行うには最低でも巖鉄程度に戦える人間がもう一人必要であった。

「黒磐」

「はい」

「時間を稼げ。奴を起こす」

「奴…?」

「やれ」

「承知」

伊黒が横に飛ぶと同時に巖鉄は月詠に向かっていった。

「まあ待て。今重大な実験中なんだ」

「黙れ！」

「話を聞け、これはお前達にとっても大事なことだぞ？」

「なに？」

「鬼に、鬼を増やすことはできない。一部例外を除いてな」
(一部……？無惨のことか)

巖鉄の考えを遮るように月詠は続ける。

「その例外が問題だ」

振り下ろされる刀を回避しながら、月詠は手元の紙になにかを書いている。

(透過しない？何故だ？何故わざわざ回避する)

「その例外……珠世あんなにできたのだ。俺にできないことなどあるまい。あの女がどれほどかかったかは知らんが、頭脳だけならば俺の方が上だろう。経験で劣るならばそれを頭脳で補うまで」

紙からふと視線上げ、なお攻撃を続ける巖鉄の刀を月詠の短剣が受け止める。

「やはり、人間とはいえ鬼殺隊。膂力は凄まじいな」

神威・発

「むー！」

短剣が紅く光り、それを察知した巖鉄は即座にその場を離れる。

眼前を衝撃波のようなものが通り過ぎるのがわかる。

「色々実験を行ったため、わかることが多くなった。この前の実験は惜しかったのだが、どうやら被検体に素質がなかったようだな。だが今回は……」

そこで月詠はふと伊黒がいないことを思い出す。

視線を巡らせようとすると、巖鉄の刀が振り下ろされる。

黒鉄の呼吸 壺ノ型 斬鉄剣

「邪魔だ」

神威・発

「ぐっ！」

衝撃が直撃したが、先程と比べて威力は低い。吹き飛ばされはしたが、すぐに体勢を立て直した。

月詠は分婉台に寝かせられている遠夜の方を見る。そこには縞模様の羽織を着た柱が迫っていた。月詠としては実験途中の被検体を弄られることは避けたい。

「触れるな」

再び衝撃波が放たれるが、伊黒はそれを刀で切り裂く。

「なに？」

「やはりな」

血鬼術は日光に触れると消滅する。故に、日輪刀で切り裂くことで無効化できるものも存在する。必ず斬れるわけではないが、それでも斬ることで無力化できるものも存在する。月詠の本気の神威・発なら斬っても恐らく完全に無力化することはできなかった

だろうが、今は伊黒の側に被検体となつてゐる遠夜がいる。そのため被検体が被害を受けないように威力を抑えた。故に無力化できた。

「ちっ」

「余所見する余裕があるか！」

「ある」

巖鉄の動きが止まる。空間が固定され、巖鉄は指一本動かすことすらできない状態にされる。

(……だ！)

伊黒は巖鉄の動きが止まったのを確認すると、懐から玄弥の南蛮銃を取り出し、放つた。非力な伊黒はその反動に僅かにのけぞつたが、放たれた銃弾は真つ直ぐ月詠に向かう。そしてすぐに遠夜に駆け寄り、産屋敷から託されていたあるものを取り出す。

「触れるなといった筈だ！」

血鬼術 神威

空間が歪み、銃弾は異空間へと消える。

その隙に伊黒は手に持った針の短い注射器を遠夜の腕に突き刺し、中身を注入した。

「実験中の被検体に余計なことを……」

伊黒を異空間に飛ばそうと血鬼術を発動しようとした瞬間、背後の気配が動く。

「おおー！」

「なに☒」

振り下ろされた巖鉄の刀を短剣が受け止める。

(ちっ…縞羽織の柱に気を取られて空間固定が緩んだか)

視線のみを遠夜と伊黒の方に向ける。なにを注入したかは知らないが、大方肉体を活性化させるものだろう。遠夜の気配が大きくなるのがわかる。

「無道！起きろー！」

伊黒が顔を叩きながら声を出す、遠夜の反応は無い。

いや、正確には薄い。指が微かに動いたが、起きる気配は無い。それに舌打ちをしなからなのお伊黒は遠夜を起こすために奮闘する。

「早く起きろ馬鹿がー！」

苛立ちの募る伊黒は傍らに転がる遠夜の刀を遠夜の顔のすぐ側に突き刺す。

「無道遠夜ー！」

伊黒が遠夜の名前を呼ぶ。

その瞬間、遠夜は目を開いた。

目を開けると、そこは何もない黒い空間だった。

「……………」

どうなったかを思い出そうとして、そして月詠に負けたことを思い出す。最後の方は失血により意識が朦朧としていたため記憶があやふやだが、少なくとも月詠の頸を切断した記憶はない。

「そうか、俺は…兄貴に」

ではなぜ意識があるのかを不思議に思う。死んだのなら夢ではない。ならばここはあの世なのだろうかと考えた。

「あーあ、死んだのか俺」

そう言って再び目を閉じる。普段巻いてる目隠しが無い。意識だけの空間なのにも関わらず、自身が普段肌身離さず装備している目隠しがないのは少し違和感があった。しばしそうしていたが、相変わらずなにも聞こえない。ただ静寂が流れるだけだった。

だがそこで声が聞こえてきた。

『月久』

かつての名を呼ばれて遠夜は目を開く。

「誰だ」

『誰、と聞くか。そうだな、誰でもないと答えるのが正解か』

遠夜は目を細める。そこには確かになにかがいる。しかし、その姿は見えない。

この謎の人物の口調は兄である月慈に似ているが、どこか異なる。

「……ここはなんだ」

『知る必要はない。ただ身体を明け渡せばいい。それだけだ』

「あ？」

身体を明け渡せ。そう言った。

つまりこの謎の声は自分に乗っ取ろうとしているということだろう。だがこの言葉から自身はまだ死んでいないことの証明にもなる。まだ生きている身体だからこそ、この存在は自分に乗っ取ろうとしてきているのだから。

「まるで寄生虫だな」

『なんとでも言え。だが大人しく明け渡せば、それだけで力が手に入るぞ？お前が渴望してやまなかつた二人の兄に追いつくことなど、実に容易い。お前にとつても悪い話ではないだろう』

(…：そうか、この声は…：俺の身体に侵入してきた『鬼の細胞』そのものか)

ぼんやりとだが、月慈になにかされたことを思い出す。それがなにかはわからないが、月慈のことだからなにか実験でもしたのだろうと遠夜は判断した。おおよそ鬼の細胞を移植でもしてのだろう。

「お前がなにかは知らん。とりあえず消えろ」

『そもいかない。この身体の所有権を得るまではな』

「渡す気はない。失せろ」

『武器もなにもないこの現状でどこまで抵抗できるのだ？お前のような凡人が』

凡人。

その言葉は遠夜が自らに言い続けてきた言葉。

天才とは異なり、必要以上の努力をして漸く『ある程度』の領域に達することができ、そしてそれ以上になることができない存在。

その言葉に遠夜は口を噤む。

『お前の実の兄はお前以上の頭脳があつた。学問的な意味でも、戦略的な意味でもお前は実の兄を超えることはできない。そして義理の兄。あれこそ真の天才だろう。視力という生まれながらの代償、と考えれば相応かもしれないが、視力以上のものを手にしていた。たとえ兄の真似事をして視力を封じて過ぎたとはいえ、それが手に入るわけではない。お前が持つものであるの二人を超えるなど不可能だ』

「……」

なにも言い返さない遠夜に『声』は矢継ぎ早に捲し立てる。

『持つもので超えられないならどうする？それ以上の存在になればいい。ただそれだけだ。なにを迷う必要がある？』

それはまるで天から差し伸べられた救いの手のように聞こえた。

心の奥底で燻り続けていた黒い感情を、この『声』は理解している。

それは劣等感から来る『嫉妬』

心の闇など誰でも抱えている。その闇が最も強くなる感情が遠夜の場合『嫉妬』だというだけ。

この声は、それを言い当てた。

『お前はずっと満たされない』

「！」

『人間である限り満たされない』

「……だから鬼になれ、ってか？」

『そうだ。自らが満たされる手段が目の前にある。拒む理由などなからう。空っぽなお前は、この手を取れば満たされる』

遠夜はずっと満たされなかった。

生まれた環境での扱いは悪く、愛情を注がれることはなかった。

そして日永に拾われてからも、日永と比べられる日々。無論正面から比較する人間はいなかった。だが人は同じ環境にいる存在を無意識に比較してしまう。悪意があらうがなからうが、そういう人間が大半である。

比較され続け、そして常に下に見られてきた。

別になににおいても一番になりたかったわけではない。

ただ、誰かに褒めてほしくて、認めてほしかった。

自分が自分である確固たる証明がほしかった。

それは、名前の無い遠夜だからこそ抱く感情だった。

二人の兄に追いつきたかったのも、そんな子供らしい理由だ。

二人に追いつけば、何か『得られる』のではないかと思つたからだ。

ただ自分はそれを簡単に諦められるほど聞き分けがよく無く、理性で考えられるクセに、理性よりも感情で動いてしまう。

それがどうしよもなく愚かに思えて、そしてそれを隠すために皮肉屋な仮面を被り、弱い自分を隠そうとする自分がさらに愚かに思えて仕方がなかった。

そんな己が満たされる日など来ないことくらいわかる。

足りない

足りない

努力が足りない

才能が足りない

なにもかも足りない

『お前は弱い』

その通りだと思う。

弱いからこそ、その弱さを隠すために修行に励んだ。強くなるためではなく、隠すために。

その時点で追いつけるわけがなかったのだ。

自分で必死に隠そうとしてきた事実を遠慮なく突きつけられて自嘲する。ハナから目的が違っているのだ。追いつけるわけがない。

所詮、自分がやってきたことは強い人がやってきたことを真似ているに過ぎない。真似てるだけでその強さが手に入るわけでもないのに、どうすればいいかわからなくてただ真似をした。

仮にそれで強くなったとしても、それは所詮『偽物』の強さ。

『手を取れ。こちらへ来い。そして本当の強さを手に入れろ』

そう言つて暗闇から手が差し出される。

青白い手だ。鬼のそれとよく似ている。

「……………」

きつと、この手を取れば強くなる。ある意味求めていた強さが手に入るのだろう。それの一つの選択だ。

だが、手を伸ばすことができない。

『才能が無い？ 無いなら無いなりにやれることがあるはずよ。私は諦めない』

勝気な口調の鋭い目つきをした少女の言葉が脳裏を過ぎる。

彼女は、優しい。いや、優しすぎた。両親や姉の望み通り一人の少女として生きていくこともできたはずだ。だが彼女の優しすぎる心の光は、同時に闇を生み出した。鬼への憎しみという闇を。

彼女は家族が心の底から好きだった。心の底から愛することができた。だからこそ、それを奪われてその心に影をもたらした。そしてその影は姉を奪われたことによりさらに深くなる。心の闇の根源は彼女の優しさが起点であるなど、皮肉な話だ。

その憎しみを鬼に対してぶつけることだけをできるのならできればどんなに楽だっただろうか。ただでさえ、彼女は才能が無く鬼の頸を切れない。殺すには毒という方法しかなかった。なのにただ憎しみをぶつけるのではなく、姉が理想としていた『鬼と仲良く』という思想を彼女はさらに背負い込んだ。

そうしてからの彼女を、自分はかつて『つまらない』と評した。

結局それも自らの弱さを隠しただけなのだろう。なんて愚かなのか。ここまですることはや笑えてくる。今までの自分はどこまでも道化のそれだった。

(…あれ、おかしいな。名前が思い出せない)

その少女の顔は思い出せるのに、名前だけどうしても思い出せない。精神世界での影響なのか、はたまた別の理由か。

『人間など皆愚かだ。そんな人間性のにしがみつくとよりも、鬼になりより高位の存在になる方が優れているだろう』

「……かもな」

『そうだろう？お前は選べる者だろうか？人間など皆無意味なものにすぎり、そして執着し、常に人と比べなければ己を保つことすらできんのだから』

「そんなもんだろ」

『なに?』

「聞こえなかったか? そんなもんだろ? つつたんだよ」

『どういうことだ?』

「人間は、醜い。どうしよもなくな。誰かと比較して優越感を得たり、つまんねえことにこだわったり、劣等感からしよもねえ意地張つたりとどーしよもねえ。でもそんなもんだろ、人間なんて。どいつもこいつもどーしよもねえ。無論俺を含めてな」

『ならばそれを超越すれば』

「でもな」

声を遮り、遠夜は続ける。

「でも、案外捨てたもんじゃねえんだ」

例えば、姉を亡くしてから一切弱音も涙も見せないで姉の代わりになろうとしている『少女』の在り方。姉にはなれない。それがわかつていながらも最愛の姉の遺した理想と、姉を殺した鬼への憎しみという相反する意思を宿しながらも、それでも『少女』は懸命に、そして全力で生きている。その生き様が例えその姉の望みとは異なるものであつたとしても、『少女』は『自分』を封じ込めて生きる。

それを自分は『つまらない』と評した。それは、その生き方がとても美しく、そして

自分には届かないものだとかわかったからだ。どう足掻いても自分では『少女』のようにいきることはできない。

簡単な話、羨ましかつたんだ。

その在り方が

その美しい生き様が

自分にはできない。そんな相反する意思を同時に宿しながらもそれを貫き通すなど、自分には多分できない。

「その美しさを見たらさ、人間もまだまだ捨てたもんじゃないって今思えたんだ」

『道化でしかないお前にそんな生き方はできん』

「そうだ、無理だ。そんな生き方はできねえ。最初はなからんなもん求めちやいねえ。だが鬼になるくらいなら、死んでいい。そこまで生きることには執着しちやいない。お前みたいな臆病者と一緒にすんな、鬼舞辻無惨」

声は答えない。だが明らかに雰囲気が変わった。

正直、この語りかけてくる声が鬼舞辻無惨である保証はない。兄の月慈である可能性も否定できないが、なんとなく遠夜はこの声が無惨であると感じた。根拠はないが、なぜかそう思えた。

尤も、遠夜のこの感覚的推理は外れていた。

本来、下弦の鬼に鬼を勧誘する権限は無い。故に月詠に鬼を増やす権利は無い。だから月詠が肉体の一部を遠夜の肉体に移植したからといって遠夜が鬼になることは無い。ただの毒として肉体を蝕むだけである。

今現在遠夜に精神世界で語りかけてくるこの声は鬼舞辻無惨の血、そのものであった。遠夜に埋め込まれた眼球は、月慈にとって血鬼術の要となる部位である。そのため新たに注入された無惨の血は、色濃く眼球に影響を与えた。その結果、無惨の意識（無惨本体にとつて無意識ではあるが）と月詠の意識が統合し紛れ込むという事態が起き、さらにそれが遠夜に埋め込まれるという異例の事態が起こることによって現在の現状へと至った。簡単な話、この『声』は無惨とめ月詠とも言えない『鬼』としての意識そのものである。

「そもそもな、なんで鬼になれば満たされるなんて断言できんだ？ 鬼も所詮人間が基となっただけの変異生物だろ？ なら結局中身は人間と同じだろ」

『貴様…』

「結局人間は最後まで満たされない。悔いなく死ぬことはない。虚しく思えるかもな。でもな、生命とはいつか終わるものだ。生きるとは死ぬこと、生命とは苦しみを積み上

げる巡礼。だから生命は満たされることはなくとも、それは決して死と断絶のものではないって、誰かが言ってたかな」

誰が言っていたかは、わからない。兄である日永だった気もするし、赤髪の人形師だった気もする。

言われた当時はよくわからなかったが、今ならよくわかる。死に直面した今だからこそ。

『限りある生命に価値などない。真に価値のあるものは、不変のものだ。なにも変わらないものこそ至高である』

「そんなもん生命じゃねえ。お前、今はまだ日光で死ぬんだよな？なら忠告だ。それより先には行かねえ方がいい。日光でも死ななくなったらお前はいいよ生命として数えられる存在じゃなくなる」

『黙れ。変わるものに価値など無い。そんなものはいつか塵芥になって終わる。いつか消えるとわかっているものになんの価値がある』

「それがわからねえお前とこれ以上話す気はない。そもそもわかってたらこんなことにならんか」

思えば、ずっとわかってたのだと思う。それを認めるのが怖かったのだろう。認めた

ら、兄達のようにはなれなくなると思っていたから。

だがいぎ認めてみたらどうだろう。今まで燻っていたものがとても楽になった気がした。この『声』を臆病者呼ばわりしたのに、自分もそれと同等以上に臆病者だなんて皮肉な話である。

「所詮偽物でも、俺は俺が積み上げてきたものを信じる。それしかねえんだから。ちやんと『心の闇』に向き合うよ」

がしがしと頭をかきながら『声』に背を向ける。

鬼の元凶ともいえる存在（擬似的なものではあるが）に己の心について気づかさされるなど柱として本来ならあつてはならないのだろうが、そうなってしまったからには仕方がない。己の未熟さが招いた結果だ。

『ごいへいへい』

「んー、戻る？ どうすればいいかはわからんが。あれ？ ここもしかしてお前の血鬼術？」
『お前は私を殺さねば戻れはしない。血鬼術ではないが、ここは私がお前を乗つとるために創り出した』

「乗つとるため、ね」

なるほど、と呟くと遠夜は『声』に向き直る。

「なら、逆も可能なわけだ」

そう言いながら遠夜は声に向かって歩みを進める。

『…なに?』

「お前が俺を乗つとるための空間なら、俺がお前を屈服させて消すことも可能なわけだ」
そこから遠夜は『声』に近づきながらつらつらと話し始める。

「乗つ取るためにわざわざ精神世界なんか作ってんだ。つまり、乗つ取るためには心を折る必要があるってことか」

『なにを…仮にそうだとしても、既にお前の肉体に私は根付いている。除去などできんぞ』

「ならお前をぶちのめせば、俺の意思に反することはしなくなりそうだな」

口を三日月のような弧を描きながら遠夜は声に迫る。

「せめて、今どちらが上かは分からせた方がいいな」

暗闇に手を突き出し、中から黒い何かを引き摺り出した。

『人間のお前に、鬼の肉体を抑え込めるわけがないだろう』

「玄弥がやってる。できないなら俺は死ぬだけだ」

『ど、どうやって抑え込むというのだ』

「お前らがよくやってることだよ。残念ながらこれしか今は思いつかん。これが『人間として』間違つた選択だとしても、生きて戻るためなら俺は手段は厭わない。鬼じやなければなんでもいい」

遠夜は、その黒いなかを思い切り叩きつけ、そして覆いかぶさつた。

『お前にそんな力は！』

「知るかよ、死ね」

未だに喋る黒い何かを殴りつけ、手で引き裂く。

何度も何度も。

血のようなものが飛び散るが、知るかと言わんばかりに手を動かす。

遂になにも言わなくなった黒い何かを、遠夜はそのまま咀嚼した。

「まっず」

作られた精神世界はひび割れるように壊れていった。

遠夜の左眼が、紅く染まつた。

「ようやくお目覚めか。無駄に時間をかけさせてくれたな」

伊黒は傍らに立つ男に忌々しげに吐き捨てる。

「随分と寝坊したみたいだ」

飄々と返す男に伊黒は更に視線を鋭くした。

「闘えるのだろうか。闘えないなら今ここで殺す」

「おいおい寝起きにいきなり殺すはねえだろ」

「どうなんだ。お前と無駄に話す時間は無い」

「へいへい。ま、闘えるよ。傷は全く回復はしてねえけど、数分はいつも通りの動きができるだろうよ」

床に刺さる刀を抜きながら男はそう答えた。

「ならば俺の指示通りに動け。下手な行動はするな。死ぬぞ」

「また死ぬのは勘弁して欲しいねえ」

「そろそろその無駄に軽い口を閉じろ、無道」

男、無道遠夜は口元を歪めながら刀を肩に担いだ。

「相変わらずなこって」

飄々としているが身体は割と限界なのがわかる。立っているのもやつとだろう。全身の傷は血は止まっているようだが、回復は当然していない。

左眼は抉られた痕が痛々しく残り血塗れであり、左眼周辺は青白い痣のようなものが出ているのがわかる。

そしてその左眼の瞳の色は右眼とは異なり、鬼のような真紅に染まっていた。だが鬼のような獣の双眸ではなく、人間の瞳の形状をしていた。

「お前は今どういう状態だ」

立ち上がった遠夜に月詠が問いかける。

「お前は鬼に成ったのか？それとも人のままか？」

「さあ？だが人間を見て食欲はわかねえなあ」

「……なるほど、人のままか」

興味深そうに月詠は目を細め遠夜を見る。そして眼前の巖鉄に目を向けると、次の瞬間には遠夜の目の前に移動していた。

「…なるほど、確かに人間のようなだな。とりあえずは」

「近えよ」

刀を振るうと再び月詠は瞬間移動し、多数ある分娩台の一つの近くに移動した。

「…おい」

「ん」

「どういう状態かは知らんが、起きた以上役に立つてもらおうぞ」

「はいよ。どこまで保つかは知らんがな」

「…これがないかは知らんが、お前に使えと御館様に言われた。勝手に使え」

そう言つて伊黒は注射器を遠夜に投げて寄越した。

それを見て遠夜はわずかに細める。

「へえ、じゃあありがたく」

「ならやるぞ。いいな」

「ああ」

伊黒は月詠に向かい、遠夜は横から回り込むように迫る。

月詠に迫る瞬間、伊黒は指文字で断片的ではあるがあることを伝えた。

「指文字か」

「黙れ」

蛇の呼吸 弍ノ型 狭頭の毒牙

影の呼吸 肆ノ型 絶影

「…ほう、動けるか。これは…」

月詠は二人の攻撃を透過させ、無効化する。

「ふんー！」

背後から迫る巖鉄の攻撃を空間転移を行うことで回避。

だがそこにすかさず伊黒の攻撃が襲う。月詠は伊黒に視線を向け、伊黒の攻撃を透過した。

遠夜が背後から気配を消して不意打ちの如く迫る。だが衝撃波で攻撃に移ることを防ぎ、遠夜に距離を取らせた。

(やはり、か)

「つとと」

「休むな、攻撃を続けろ」

「人使いが荒いねえ」

全身が軋むのを感じながら遠夜は走り、刀をかつて兄であったものに振るう。防がれ、透過され、いなされる。そのやりとりをしているうちにあることに気がつく。

(…兄貴の気が見えない。隠してるのか?)

鬼は基本的に人間が基となっているもの故に鬼にも気は存在する。使い熟せていようがいまいが存在はしてしまう。

だが絶を行うように、隠すことはできる。意図的かどうかはわからないが、月詠が氣

を隠していることは確かだろう。

(なら……)

目に氣を集中し、凝を行う。

だがそれでも月詠の氣は見えなかった。

(絶? いや、戦闘中に絶を行うのは不意打ちの時だけ。伊黒の攻撃も俺の攻撃も氣配は限界まで消している。なのに感知される……まさか?)

遠夜は一つの仮説を立てた。

この仮説が正しければ、伊黒の仮説と合わせて月詠の血鬼術の攻略に近づくと考えられる。

加えて、意識が戻ってから氣になっていたことを試すいい機会かもしれない。

「伊黒、黒磐」

衝撃波を回避し隣に着地した伊黒は遠夜に視線だけ向けて続きを促す。

巖鉄は遠夜の傍に駆け寄る。

「ちと考えがある」

――

「話は終わったか？」

伊黒と巖鉄に作戦を伝え終わったところで月詠はそう問うた。

「ああ」

「ふむ、どんな作戦を立てたかは知らんが、その身体でどこまで闘える」

「本来ならそろそろ限界だろうよ。でもまあもう少し動かないとまずいんでな」

そう言つて遠夜は懐から伊黒に渡された注射器を取り出し、自らに注射した。

「……なるほど、そういうものか」

「察しが良すぎるのも考え物だな、兄貴」

「闘うことを考えればそれが最善だろう。医師として言わせてもらえば、勧めはしない

がな」

「なーにが医師としてだ、化け物」

「無道」

「わかつてるよ」

伊黒に釘を刺され遠夜は刀を構える。

そして目にも留まらぬ速さで月詠に迫る。

「…ほう、それほどとは」

遠夜の刀は透過され、空を切る。

「伊黒、黒磐」

「俺に命令するな」

「御意！」

影の呼吸 参ノ型 無辺

蛇の呼吸 壹ノ型 委蛇斬り

黒鉄の呼吸 壹ノ型 斬鉄剣

困むように同時に放たれた攻撃を確認して、月詠は透過は不可能と判断し空間転移を行おうと血鬼術を発動させようとする。

違和感

(……)

己の失策に気付き、咄嗟に自らに衝撃波を放つことでどうにか直撃は回避したが、伊黒の刀が月詠の左腕を奪った。

「……これは」

再生する左腕を見ながら月詠は遠夜に視線を向ける。

「なにをした、月久」

「あんたの血鬼術の制約を利用したまでだ」

「……ほう、気がついていたか」

「あんたの血鬼術の制約は、二つある。透過に限り三つかもしれんが」

月詠の血鬼術、神威は二つの制約がある。

通常の神威は自ら、または対象となる物体が月詠の『感知範囲内』であり、かつ視認している対象にしか使用できないという制約があった。血鬼術によつて形成された異空間に収納されているものと自分自身であれば後者の制約は無効となるが、対象を異空間に引き摺り込むためには視認している必要がある。

「視認の制約は伊黒くらい頭が回る奴ならすぐにわかるだろうよ。だが感知範囲の制約は、多分俺でなきや無理だ」

「感知範囲？」

「俺は普段、目隠しで視覚を封じているのにもかかわらず戦闘まで行える。なぜか？悲鳴嶋さんのように音で判断できる程俺の聴覚は良くない。じゃあなにで周囲の状況を理解しているか。影の呼吸の流派では『氣』と呼ばれるものだ」

「氣、だと？」

「どんなものか理解する必要はない。とりあえずこれを身体に纏い応用することで周囲の状況を完全に掌握することができるとてことをわかれ。そしてそれをお前も使っているんだらう？ 兄貴」

「氣、と呼ばれるものであることは今初めて知ったが、その通りだ」

月詠は遠夜と同じ『氣』の高等技術である『円』を今いる地下空間全体に張り巡らせていた。故に、感知範囲はこの地下空間全体に及ぶため血鬼術の有効範囲はこの空間全域であった。

「だがその感知範囲領域を瞬間的でも失くしたら、お前の血鬼術は使用できなくなる」「理屈はわかる。どうやった、それが問題だ」

「知ってるか？より濃い円を張り巡らせて中に別の人間が円を行うと、その範囲は感知できなくなるんだぜ？」

遠夜が行なったのは、斬りかかる瞬間に遠夜が円を広げ、そこに月詠を巻き込むことで感知範囲の制約を発動させ、空間転移による瞬間移動を不可能にしたことだった。

「なるほどな」

「透過の制約はそこに移動不可が追加される。空間固定は視認の制約が無い代わりに多分お前に負担がかなりかかるんだろ。だから多様しない。鬼の肉体も無限に回復できるわけでもないからな」

「いい考察だ。そしてその考察は正解だ。頭は鈍っていないようだな」

（ま、これがわかったところでそれを警戒してもう寄せないだろうよ）

手の内が知られた以上、それを警戒するのは自明の理。当たり前といえは当たり前である。

「伊黒」

「なんだ」

「お前の策で行く。だが俺の身体は保ってあと五分だ。全力の動きはそれ以上は無理だ」

「……なら畳み掛けるぞ」

「ああ。でもただ攻めるだけじゃダメだ。もう俺らの戦い方は知られている。だから変則的に行く」

「変則的？」

「お前らは通常通りにやれ」

「俺が、別の呼吸を使う」

――

「む」

三方向に分かれて向かってくる遠夜達を見て月詠は内心で警戒度を上げる。

(ばらけるか、虚空対策としては当たり前のものか。だが全員の戦闘様式は確認した。月久の瞬間的な感知領域拡大も警戒していれば恐るるに足らない。なにより月久は死に体。数分粘れば倒れる)

遠夜達はそれぞれ戦闘様式が異なるが、月詠の制約を利用するにおいて最も重要な要素が欠けている。

それは速度。

無論全員鬼殺隊故に一般人と比較してかなり速い方ではある。しかし呼吸の型において速度を重視した呼吸は、今いる者達の中にはない。少なくとも月詠が感知できないほどの速度を持つ者はいなかった。

故に、常に距離を保ち続ければ自ずと勝利は近づく。

(縞羽織の男は絡め手の斬撃だが、速度はそれほどない。月久も斬撃の速度は大したものだ、奴自身はさほど速度は無い。巨漢は威力特化。恐るるに足らん)

そう考えたところで遠夜に視線を向ける。距離はさほど無いが、この距離ならば空間転移で即座に反撃が可能だろうと月詠は考えた。

だがここで違和感。

鬼殺隊は『呼吸』を使用することで身体能力を爆発的に上げる。その呼吸音は、使用する呼吸によって異なる。

先ほどまでの遠夜の呼吸音と、今の呼吸音が異なるものとなっている。先ほどまでは隙間風が吹き抜けるかのような音だったが、今はまるで蒸気が吹き出しているかのような呼吸音になっている。

(これ、は?)

嫌な予感がした。

そしてその予感の中する。

風の呼吸 壺ノ型 塵旋風・削ぎ

強烈な風を纏いながら先程よりも遥かに速い速度で突撃してくる遠夜に反応が遅れ、完全に回避しきれず月詠の右腕が削られた。

続け様に伊黒、黒磐の攻撃が放たれるがそれを空間転移で回避し、血鬼術の衝撃波を多数放つ。

それを確認した遠夜は呼吸を変える。

水の呼吸 参ノ型 流流舞い

流れる水の如き足運びで衝撃波を受け流しながらも月詠に迫る。

その際、回避しきれず衝撃を刀で受け、刀の鍔が割れた。

「もう、いっちょよ」

水の呼吸 式ノ型 水車

衝撃波を回避しつつ、縦回転の広範囲の斬撃で月詠に攻撃をしかける。寸前で回避されたが、月詠の余裕を奪うには十分だった。

影の呼吸 伍ノ型 月影・初太刀

式撃

参刀

肆刃

伍突

最初の三連撃から放たれる続け様の攻撃は頸には至らないものの的確に月詠の身体を削っていった。

「いっしょ…」

さらに連撃を加えようとしたところで空間が歪み、多数の刃物が遠夜達に向けて放たれる。

伊黒は巖鉄の斬撃によって作り出された岩の壁に身を隠し、刃をやり過ごす。

『心を燃やせ。それが我らの力になる!』

炎のような髪を携える男の後ろ姿を思い出しながら、更に遠夜は呼吸を変える。

炎の呼吸 肆ノ型 盛炎のうねり

遠夜は烈火の如き斬撃でその刃の雨を打ち払う。

「影柱様は、多数の呼吸を使えるのですか…?」

その様を息を飲む様子で見えていた巖鉄は伊黒にそう問うた。本来、自らが使用する呼吸以外の型を使う者はいない。なぜなら十全に力を発揮できないからだ。鬼という身

体能力が遥かに格上の存在に対して出し惜しみなどする余裕は本来無い。そこでわざわざ合わない型を使用する意味は無い。

「…普通はできません。だが奴は人真似が異様な程上手かった。だから合わない呼吸でもある程度使いこなせる」

「そんなことが…」

「刃の雨が止んだ。行くぞ」

「は、はい」

遠夜は、昔から人真似が上手かった。それ故か、型はほとんどすぐに真似ることができた。例えそれが別の呼吸の型であっても。

だが所詮は合わないものを無理やり真似ているに過ぎない。よって威力は極めた者と比較して多く見積もっても七割、加えて肉体への不可も大きい。さらに今のよう多数の呼吸を続け様に使用するのは、限界を超えた肉体に更に負荷をかける。活動限界までの時間を縮めることに他ならない。

だから今すぐにでも決める必要があった。

それを伊黒は理解していた。だからその負担を減らすために、即座に攻撃に移った。

伊黒が立てた案は至極単純。

全員で絶え間なく攻撃を続けること。

月詠の血鬼術の制約を利用する以上、当然の策ではある。

しかし月詠は非常に頭が良いためこちらの攻撃の癖を理解してしまう可能性があり、それを見破られると非常に厄介だった。

それを考慮した遠夜は見真似でできるようになった他の呼吸を利用することでこちらの呼吸を分析される前に倒すことを考えた。

(想像以上にきついな……今にも血を吐きそうだ。比較的負担の少ない水の呼吸ならともかく、攻撃力の高い炎と風はきつい。身体が元より限界に近いこともあるし、保つてあと三分つてとこか)

悲鳴をあげる全身に鞭打ち、多数の呼吸を使い分ける。

「くっ」

「余裕なくなってきたんじゃねえか？ 兄貴」

「それはお前だろう、月久」

「おお！」

「死ね」

黒鉄の呼吸 伍ノ型 殲刀

蛇の呼吸 参ノ型 罅締め

同時に放たれる異なる斬撃が更に月詠の余裕を奪う。

「邪魔、だ！」

血鬼術 神威・発

全方位に放たれた衝撃波を防ぎきれず巖鉄は弾き飛ばされる。伊黒は刀で上手く受け流したが、衝撃を殺し切れず膝をつく。

(これ受けたら死ぬな)

そう感じた遠夜は咄嗟に下がるが、ここで完全に下がっては奪えた余裕が戻ってしまふ。そして遠夜の肉体はこれ以上長引けば、動かなくなる。

ここで決めるしかない。

そう判断した遠夜は衝撃波を刀でいなし、足に最後の力を込める。

「黒磐あ！」

巖鉄に呼びかけた。

呼びかけの意味を瞬時に理解した巖鉄は傍にある壁として利用していた岩を斬り裂き、蹴り飛ばすことで礫として月詠に飛ばした。

血鬼術 神威

その礫は歪められた空間により吸収され、消えていった。

だが空間に飲み込まれずそのまま月詠の横を通り過ぎようとした岩塊の影に潜んだ伊黒がそこから姿を現し、攻撃をしかける。

蛇の呼吸 弐ノ型 狭頭の毒牙

「ちいー！」

咄嗟に空間転移で回避する。

だがそこには既に遠夜が迫っていた。

『鬼の事情なんて知るかア。鬼は皆殺しにすればいいんだよオ』

傷だらけの男の言葉が脳裏に過ぎる。

風の呼吸 壱ノ型 塵旋風・削ぎ

「な」

強烈な風を纏いながら放たれた遠夜の袈裟斬りが月詠の身体を斬り裂くが咄嗟に背後に飛んだ月詠は頸を落とされることだけは免れた。

(はやく、空間転移を…)

空間転移を行うために血鬼術を発動しようとする。

だがその瞬間、遠夜は自らの氣を広げ、その円の範囲内に月詠を入れることで瞬間的に月詠の感知範囲を完全に無くした。

「い、っー」

転移できないことを瞬時に理解した月詠は衝撃波で遠夜を飛ばそうと前方にいてあろう遠夜に意識を集中しようとした。

「させるか」

膝をついたまま伊黒は懐から南蛮銃を取り出し、月詠に放つ。その銃弾が月詠の頭蓋骨を砕き、血鬼術を中断させる。殺せはしないが、時間は稼げる。

ならば直接叩くまでと短剣を取り出し眼前に迫るであろう遠夜に向けて視線を戻した。

だが目の前に遠夜はいなかった。

そして気づけば胴体が袈裟斬りされていた。

その事実には思考が一瞬停止した月詠は視界に影が落ちることがわかる。

そして次の瞬間、二度の斬撃が月詠の身体を襲った。

一度目の斬撃は月詠の胴体を斬り裂き、そして二度目の斬撃は月詠の頸を飛ばした。

影の呼吸 漆ノ型 影落とし

遠夜が考案し、そして他の呼吸の足運びを利用することで辿り着いた遠夜だけの型。

その型は、過去の兄達の真似のみをしてきた自らの在り方を、そして『黒条月久』と
いうかつての自分とともに遠夜はかつて兄であった鬼を屠った。

――

「……ぐ、う」

月詠の頸を飛ばしたことを確認すると、遠夜は血を吐き倒れ込んだ。それを巖鉄が済んでのところで受け止める。

「影柱様！」

「……わり」

「無茶しすぎです」

「無茶しなきや、勝てん」

仮にも柱の実力を持つ遠夜が一度は敗北する程の鬼。それを屠れただけ無茶をする価値はあったと遠夜は考え、そして伊黒や巖鉄も同意見だったが、素直に認めるにしては遠夜は肉体を酷使しすぎた。小言を言われても反論はできないだろう。

巖鉄の肩を借りながら崩れ始めた頸に視線を向ける。

「…兄貴」

「いくつか、聞きたい」

死に際であっても態度を変えない兄、黒条月慈であった鬼を感情のこもらない目で遠夜は見て、続きを促させた。仮にも血を分けた兄。最後の言葉を聞きたかった。

「最後のあの攻撃、あれはどうやって俺の視界から消えた」

「…人間の視線ってのは、上と下には移動しづらい。それを利用してお前の視界から外

れただけだ」

古武術に『膝抜き』と呼ばれる技術がある。膝の力を滑らかに抜くことで予備動作を消すことができるものであり、それを近接で行われると視界から消えたようにも見える程になる。遠夜はこれを水の呼吸の要領で行い、意識が僅かに伊黒に向いた瞬間を見計らい、さらに瞬間的に絶を行いながら月詠を飛び越えることで月詠の視界と意識から完全に消えて背後に回り込んだ。

「なるほど、人としての特性を利用したわけか。その特性を知っていれば、回避できたかもしれない」

「……かもな」

「ふむ、他人の力を借りたとはいえ、初めてお前に負けたな」

「……ああ」

「だが、思いの外悪い気はしない。寧ろ清々しいまであるな」

清々しい、と言っているのに相変わらず表情は無表情であるためとてもそうは見えないのだが。

「…兄貴……いや、月慈」

「ほう、お前に名前を呼ばれるのもしや初めてか？」

「かも、な。俺、あんたに憧れてた」

「そうか」

「でも、あんたはもう俺の憧れじゃないらしい」

「……」

「俺は、あんた達にはなれねえ」

肉親としての兄、そして義兄としての兄の二人に向けた言葉だった。

もう、その憧れはいらない。

自分は自分だ。一人で歩いていける。

その思いを込めた言葉だった。

「ふん、言うようになったな。いいだろう。どの道俺はここまでだ。あとはお前の眼となり、この先のお前を地獄で見ているやろう」

切られた頸はもう半分も残っていない。なのにいつも同じ態度をする兄にわずかに呆れる。自分も大概人でなしだが、この兄程ではないだろうと遠夜は思った。

「ああそうだ、最後に」

残された数字が刻まれた右眼が崩れ始めたところで月慈は最後の言葉を口にする。

「その左眼、上手く使え。わかっているのだろう？」

「…ああ」

短く答えると月慈は目を閉じた。

そしてそれ以上何も言うことはなく、月慈は完全に消滅した。

「…最後まで人間味のねえ人だったな」

終わったことを自覚した瞬間、薬が切れて感じなくさせていた疲労や激痛が一気に戻り、止まっていた血も出血し始めた。

「影柱様！」

「すぐに応急処置だ」

「はい！」

巖鉄が遠夜を抱えて出口に向かいつつ、伊黒が手早く傷を塞ぎ処置を行う。

遠くなる意識の中、二人ではない声が確かに聞こえた。

その選択は本当に間違いじゃなかったか？

誰かが脳裏で嗤った。

その声の真意はわからない。そしてその答えも、今はわからない。

だがその声を聞きながら遠夜は目を閉じる。

(次に目を覚ますことがあるのなら、その時は覚悟しておいた方がいいかもな)
漸く名前を思い出せた少女の姿を脳裏に浮かべながら、遠夜の意識は闇に落ちていっ
た。

拾壹

どこまでも広がる青空の下に遠夜はいた。床は鏡のような水面であり、自分自身と青空を写し出して広がっている。足を動かすと波紋が広がった。

何もない場所から声が聞こえる。

『その憧れ呪いはもういらないうって?』

ああ、俺はもう一人で歩ける。

『そうかい。だがな、人の心つてのはそう簡単には変わらないさ』

だろうな。

『それはお前として例外じゃねえ。心その闇れと向き合った程度で乗り越えたつもりか?』

……。

『馬鹿言え、その程度で乗り換えられるようなもんじゃねえよ。特にお前みたいに闇が深い奴はなあ』

そうか。

『俺はもう一人で歩いていける。自分のこの言葉を忘れんな。いつでも闇はお前を飲み込みにいくぞ』

…善処しよう。

『ははは！この後に及んでそんな弱気かてめえ！あーあー、先が思いやられるなあ！』

うるせえ。もう消えろや。

『とっころじよ』

まだなんかあんのか。そもそもお前誰だ。

『んなことは知らなくていい。些末な問題だ』

割と重要だろ。なんで意識無い中で知らねー奴と話したんだ俺は。

『はっ！知るかよ。ところで、そろそろ起きなくていいのか？』

あ？

『怖くい奴が、待ちくたびれそうだぜ？』

世界が暗転した。

――

目を開けると、割と見覚えのある天井だった。

「……蝶、屋敷……か？」

多分そうだろう。ベッドや物の配置が見覚えがあるし、なにより藤の花の匂いがする。

「……」

視線を巡らせ周囲を見渡す。自分以外に人間は見られない。どうやら個室で寝かされていたらしい。

左目に痛みや違和感も特に無い。とりあえず月詠の眼球は存外ちゃんと眼球として機能しているようだ。

だが元は鬼の肉体。故に必ず障害は出てくるはず。今は包帯が巻かれているため視

界に關してはまだわからないが、何にしても詳しく聞かなければならぬだろう。

「ふー……」

息を吐き出す。脇腹の傷は縫われて塞がってはいるが、包帯が巻かれている以上完治はしてない。

「…そんな時間経ってない、よな」

最後の記憶は月詠が消えた映像。

「あれから、どんくらい時間経ってる」

眠っていたため、日付感覚が完全に失われている。時計はあるため時刻はわかるが、日付に關しては全くわからない。少なくとも、眠っていたのは一日二日ではないだろう。関節が固まり身体が動かしづらいのがそれを物語っている。

時計に目をやると時刻は深夜の四時。まだ日も登っていない時刻だった。この時刻では恐らくアオイや三人娘達も眠っている。下手に起こすのは忍びないため物音を立てずに起き上がる。

傍らに置いてあった水差しで湯呑みに水を注ぎ、一気に飲む。冷たい水が食道を通り胃に到達するのがわかる。

ゆつくりとベッドから降り、吊るされている点滴を取り、病室を出た。

縁側に座り、まだ日が登っていない空を見上げた。

音がしない。静かな夜だった。

こんなに静かな夜でも、今もどこかで鬼は人を襲い、食らっている。

「……………」

月慈の最後の顔を思い出す。いつも無表情でなにを考えているのかはわからない兄の顔。その顔は頸を切られた時、驚愕に歪みながらもどこか晴れやかだった。感情がないものだと思っていたが、やはり兄も人間だったというところだろう。

しかし、なぜ最後に晴れやかな表情をしていたのか。それがわからない。散々凡才だと見下してきた弟に負けたとなると、自尊心の強い月慈のことだ。屈辱を覚えると思っていたのだが。

「……………最後まで、あいつのことはわからなかったな」

そう呟いたところで背後に気配を感じた。

「起きたんですね」

「よお、仕事終わりか？しのぶ」

そこには蝶屋敷の主人、胡蝶しのぶがいた。

「身体はどうですか？」

「病み上がりだ。違和感だらけだが、特段痛みはねえ」

「そうですか」

「俺、どんくらい寝てた？」

「二週間ほどでしょうか」

「随分と寝坊したものだ」

あれから二週間も寝ていたらしい。ここまで長く昏睡したことは初だったため少々変な感覚がする。

「俺の身体、どうなってる？」

一番気になることを聞いた。なにしろ鬼の肉体を埋め込まれたのだ。通常のままであるはずがない。

「…そうですね、色々検査はしなくてはなりません」

そこでしのぶは一度言葉を切る。

「結果から言うと、貴方は人間です」

「…ま、そうよな」

なにしろ人間であるしのぶを目の前にしても食欲は沸かない。それに鬼ならば、この腹の傷はもう癒えてるはずだ。

「左眼そのものは鬼の細胞だと思われるものです。人間のものとは異なります」

「あー…ま、そうよな」

元はといえば鬼の肉体。人間のものとは異なるのは自明。

「左眼の周辺の痣ですが…」

「痣？」

「はい。その左眼、周辺が青白い痣のようになってます。まるで鬼の肌のような色になってます」

「はあ」

起きてから数分しか経っていないため鏡を見ていない。故に左眼がどうなっているのかを確認する手段がないためそうなっていることがわからなかった。

「見た目に関してはあると自分でどうなっているか確認してください。目蓋の傷はほとんど塞がっていますが、あまり弄らないようにした方がいいです。傷が開くので」

「りよーかい」

渡された手鏡を受け取り、左眼の包帯を取る。視界に不調はなさそうだが、違和感

ある。鏡を見ると、目蓋は抉れたような傷がある。月慈に刺された時のものだろう。

そして目蓋を開くと、鬼のような紅い瞳が見えた。だが獣のような瞳の形はしておらず、形状は人間のそれだった。

「へえ、色は鬼そのものじゃん」

「明日以降、検査を行います。鬼の肉体を埋め込まれた人間なんて前例がありません。どんな後遺症がでるかわかりません」

「だろ。多分、日光浴びたら崩れ落ちるだろうよ」

なんとなく、そんな気がしている。この目は元はと言えば鬼のもの。ならば人間の肉体に癒着したからといって日光に耐性を得るわけではない。

「やはり、ですか」

「確証はない。でもそんな気がする」

一度珠世に見てもらった方がいいかもしれない。人間はともかく、鬼については珠世の方が遥かに詳しいだろう。

「とりあえず、異常ナシってことで良いんだな？」

「はい。怪我が治れば普段通りでしょう。運動できるように次第、機能回復訓練です」

「はいはい」

そう言つて遠夜は立ち上がり、草履を履いて庭に出る。

しのぶは上手く隠しているようだが、声色が若干低い。悲しみを孕んでいるような声をしている。

「……俺が寝ている間になんか変わったことは？」

「……そうですね。無限列車にて、煉獄さん、炭治郎くん、善逸くん、伊之助くんが下弦の一を撃破。列車は脱線するほどの事態になりましたが、煉獄さんの機転で乗客は無事でした」

「さすが。で？まだあんだろ、その様子だと」

しのぶは内心でこういう時の遠夜は素直に凄いと思えた。なにしろこちらが意図せず出てきた感情の僅かな機微を読み取ることができなのだ。多分、これは対象が自分ではなくともわかるのだらうなとしのぶは内心で考えた。

「こういう時は、他人の気持ちが変わるのでね」

「はっ、まるで俺が人の気持ちが変わらないとも言いたいような言い草だなオイ」

「違うんですか？」

「んなことはどーでもいい。で？」

「……その後、上弦の参が襲撃。煉獄さんが対抗しましたが……」

「………そうか」

「上弦の参は日の出と共に逃亡。三人はかなり重傷を負いましたが、無事です。煉獄さんは……亡くなられました」

「……………なるほど、な」

遠夜は空を見上げた。

煉獄とは、それほど長い付き合いではない。そもそも遠夜自身が柱の中では甘露寺とほぼ同時期になったため、柱としては新参者になる。加えて柱はいつも忙しい。他の柱と関わるのは基本合同任務の時や柱合会議の時くらいである。そのくせ遠夜は柱合会議をすつぽかしたりするため他の柱との関係はかなり薄い。

煉獄は、その熱い精神と面倒見の良さから遠夜を度々稽古や鍛錬に誘うことをしていた。故に、比較的關係は良好ではあった。

「……そうか」

「……………」

「暑苦しい人だったが、いい人だったよ。惜しい人を亡くした」

普段は飄々として他人を小馬鹿にしたような態度を取ることが多い遠夜だが、今はそんな態度を少しも見せず、空を見上げる瞳は悲しみの光を宿していた。

「……もう一度、話したかった」

「……………そうですね」

暫しの沈黙が流れる。

「そういや、俺の目隠しは？」

普段視界を封じている手拭いがないことに遠夜は気がついた。手拭いを外す時もあるためそこまで違和感はないが、この左眼のことを考えると今後日中に外すことはできない。抉れた目蓋を隠す上でも目隠しは必要となってくる。

「戦闘でポロポロになってしまいました。その旨を伝えたら雲海さんが新しく染めた手拭いを下さりましたよ」

「へえ」

渡された手拭いを受け取ると、その手拭いは僅かに加工されているのがわかった。留め金が付いている。

「なんか加工されてね？」

「鳴海さんからです。貴方の頭の大きさに合わせて好きなようにきつさを調節できるようにしてあります」

「ふーん…」

試しに付けてみると、結んで視界を塞いでいた時よりも楽な上に取り外しも解くより簡単であるため遠夜としては嬉しい加工だった。

「いいね、使いやすい。どーも」

「感謝は鳴海さんに。私は渡しただけですから」

「へえ？」

含みのある笑いにしのぶは顔をしかめる。

「なんですか？」

「いやあ？別にいい？」

「……言いたいことがあるならばつきり言ったらどうです？」

いつもの笑顔だが、額には青筋が浮かんでいる。これはかなり苛立っている証拠だろう。

「いくら鳴海さんでも、俺の頭の大ききなんてわからんだろ」

「……だからなんですか」

「多分、目隠しの案を出したのは鳴海さんだろう。でも実際に作ったのはお前だろ」

「なぜそう思うのですか？」

「まーさつきも言ったが、鳴海さんでも俺の頭の大ききなんて覚えてないだろうということ。それと、指に藍色が僅かに残ってる。確かに無道家の藍色は指につきやすいくらい濃い色だが、あくまでそれは製作されて一週間程度のもの。それに、ちよいと触つただけで染みつくものでも無い。それこそ、その布に手を加えるようなことでもしない限りはな」

實際、しのぶの指には僅かに藍色が残っていた。よく見なければわからないほどののだが、普段からよく見ていた遠夜には一目瞭然なのだろう。

「あと、この留め金を縫い付けた時の縫い方。お前のクセが出てるぞ」

「あら、まさかそんなわかりやすいクセがあるなんて思いもしませんでした」

「まー嘘なんだが」

その言葉にしのぶは再び青筋を浮かべる。それを見て遠夜は楽しげに笑った。

「おー怖」

「そろそろ寝てください。私も休息に入ります。貴方の検査等で明日以降は忙しくなります。それに怪我だって全く治っていないのですから」

「わーったよ。大人しくしてる」

遠夜とて、この怪我で下手に動く気はない。さすがにそこはしのぶの言うことを素直に聞くことにした。

「では」

「しのぶ」

立ち去ろうとしたところで呼び止められ、遠夜に視線を向ける。遠夜は縁側に座り、目隠しをした顔を庭に向けたまま話始めた。

「前に、お前のことをつまらないと言ったな」

「……ええ」

姉が好きだと言っていた笑顔を、姉のように貼り付けた顔。本心を押さえ込み、姉の夢を背負って歩く覚悟と己の怒りで板挟みになった成れの果ての笑顔を、遠夜はかつてまらないと言った。

「また悪口でも言うんですか?」

「いや。お前、凄いわ」

「…は?」

予想外の言葉にその後の言葉が出てこない。

「凄い生き方してるよ、お前。俺にはできん。仮に間違っていたとしても、その生き方はやろうと思っても俺にはできない。それができるお前が羨ましくて、俺はつまらないって言った。悪かった」

「……」

きつと、しのぶの今の生き方を誰しもが『間違っている』と言うだろう。姉も、日永も、悲鳴嶋も、甘露寺も、両親も。でもしのぶはこう生きることが望んだ。自分を殺してでも、姉の意思を継ぎ、鬼を滅ぼす道を選んだ。鬼を滅ぼす道は間違っていない。だがその過程で姉の意思のために己を殺すことは正しいと言えるのか。恐らく大体が否と答えるだろう。そんなのは亡霊に等しい行いだ。

今の言葉から遠夜はそれが間違いであるとは思っている。だが、それを選ぶことできた自分のことを、認めてくれた。さらには過去の自分の言葉が嫉妬からくるものだと打ち明け、そして謝罪した。これらの事実を受けきれず、しのぶは数瞬硬直する。

「…なにか、ありましたか？」

本当は凄く嬉しいことなのに、己を殺し続けたしのぶはそれを伝えることはできなかった。

「ああ、あった。だから俺は言うべきだと思った。俺のためにも」

なにがあつたかは語らないが、きつと遠夜にとつてとても大事なことが起こつたのだろう。この場で語らないということはまだ語りたくないのか、それとも語る気が最初から無いのかのどちらかだろう。

「そうですか。ではこれからは素直に生きてくださいね」

「保証しかねる。んな簡単に変わるわけねーだろ」

「問題児ですねえ。では、お休みなさい」

「ん」

顔を庭にむけたまま手をひらひらと振る遠夜を尻目に、しのぶは自室へと足をむけた。

そして自室に入ると同時に、しのぶは静かに涙を一筋流した。

これまで、しのぶの功績を認める人間は多々いたが、生き方について認めてくれた人はいなかった。しのぶとて、今の生き方は誰も望まないことだとわかっている。だがそれでも辞めるわけにはいかない。そう言い聞かせてきた。

だが遠夜は生き方を認めてくれた。その事実が感情が抑えきれず、僅かに溢れた感情が一筋の涙となり、しのぶの頬を伝った。

「……普段からもう少し素直になればいいのに」

それは遠夜に向けられた言葉か、それとも己へと向けた言葉か。

*

翌日から検査続きだった。

肉体のあらゆる反射を確認したり、左眼周辺で異常が無いかを調べたりした。純粹に傷の治療も行っていたため、検査のみで二週間ほどが経過した。

その間に炭治郎、善逸、伊之助の三人は退院し任務に戻っていった。太陽のように暖かい性格の炭治郎は、恩人である煉獄が亡くなり少々落ち込んでいるように見えたが、煉獄の意思を継ぐためにも前を向いて歩くことを決意したらしい。

この一週間は検査があり、三人が中々騒がしかったのもあり、蝶屋敷は賑やかだった。しかし三人が先日退院したため蝶屋敷はどこか静かだった。

「機能回復訓練はまだできんか」

「もう少しですね。傷は塞がってますが、完治はしてないので。軽い運動程度なら大丈夫だとは思いますが、そこはしのぶ様に確認してください」

遠夜の腕に巻かれた包帯を取りながらアオイはそう答えた。

腕の傷は完治したようで、傷痕は薄らと残っているが違和感はない。問題は左眼と腹の傷だろう。目に關しては珠世に見てもらうまではなにもわからないだろうと踏んでいるが、腹の傷は結構深いものだった。塞がってはいるが、やはり完治するまではあまり無理はできないだろう。

「これくらいなら自宅療養でもよくね？」

「駄目です」

「あっはい」

鋭い目つきでアオイに睨まれ、目隠しをした顔を逸らしながら僅かに冷や汗をかく。

(そーいうとこだけしのぶに似てきやがって…)

「あと、無道様の刀ですが」

「ん、ああ。作り直してもらってんだろ?」

「はい。刃こぼれが酷く、鐔も壊れてしまったので」

刃こぼれに関してでは月慈の血鬼術を無理矢理受けたら、異なる呼吸を使ったりしたからだろう。鐔は気がつかなかった。

「明日、こちらに届けられるそうです」

「そうかい。連絡ごーも」

「ではこれから新たに怪我人が来るので、失礼します」

蝶屋敷は医療施設故に多数の隊員が怪我をすると訪れる。鬼殺隊員は常に死と隣り合わせの日常を送っているため蝶屋敷に怪我人がいないことはあまりない。だが今は遠夜以外に入院している人間はいない。

「ほー、なんて名前だ?」

遠夜の言葉を聞いたアオイは目を丸くする。

「え」

「んだよ」

「そんなことを気にするなんて珍しいですね」

「暇なんぞな。手伝えることがあれば言え」

「柱にそんな雑用は…」

「まともに鍛錬もできねーならせめて少しは身体動かさせろや。暇で死ぬぞ俺」

基本遠夜はじつとしていることができない。隠密行動等の静かにすることが必要な場面ならともかく、日常では基本何かしているため暇なこの状況は遠夜にとつてはかなり退屈だった。

「なるほど、そういう方でしたね」

「含みのある言い方だなオイ」

「ところで名前ですが」

「無視か」

「確か、獺岳…という名前だったと思います」

「へえ、呼吸は？」

「そこまでは」

「ふーん」

「なにを企んでいるんですか」

「なにも？」

悪い笑顔をしていたからこれはなにかするなどアオイは確信したが、さすがに怪我人

相手に無茶なことはしないでだろうと踏んで呆れたようなため息をついて病室を後にした。

——

治療を一通り終えた獺岳は病室に通された。清潔感があり、綺麗にされている病室だった。他にもベッドがあるが、今は獺岳以外に人はいない。

「では、こちらのベッドをお使いください。なにかあればお申し付けください。こちらで対処します」

「ああ」

アオイの言葉に素っ気なく返すが、アオイは嫌な顔一つせずに頭を下げて作業に戻っていた。

獺岳は与えられたベッドに腰掛けると、大きく息を吐いた。今回の任務で相手した鬼は強かったが、獺岳の実力があれば特に大きな怪我をすることなく倒せる相手だった。しかしその鬼が最後に自爆したことにより無駄な怪我を負わされ結果として蝶屋敷で診て貰うことになった。

「ちっ」

その事実には苛々した。

雷の呼吸の継承権を持つている獺岳ならば、あの程度の鬼ならばここまでにはならない。そうわかつていたのにここまで傷を負わされた事実には納得がかなかつた。特別であるはずの自分が、こんな醜態を晒したという事実が、獺岳にとっては耐えがたいものだった。

「くそっ」

「苛ついてんな」

「っ」

先ほどまで誰もいなかったはずの扉に目隠しをした男が立っていた。

「誰だお前」

「なんだなんだ、やけに刺々しいなあ。なんか、嫌なことでもあったか？」

「誰だと聞いてんだよ」

「仮にも俺上官なんだがなあ。ま、いいか」

目隠しをした男は病室に入ると獺岳に近づいていく。

「俺は無道遠夜。影柱だ」

「は、柱……？」

「そ。お前の、お前らの上司」

「…す、すみませんでした」

「いーよ。知らなかっただけみたいだし」

そう言うのと遠夜は獺岳の前に椅子を持ってきて座った。

「ん、『見た感じ』そんな怪我は酷くなさそうだな」

「…見えるのか?」

「いや? お前の言う『見える』ではない。まー言うならば感じる?」

「……?」

「わかんなくていい。どーせ理解しようとしても無理だから」

その言葉に、獺岳は苛立ちを募らせる。特別な自分が『できない』と言われることに、

獺岳は納得ができない質だからだ。

「ちっ」

「お、また舌打ち? 不満だらけかお前」

「で、なんだよ。何の用だ」

「上司にその口調かよ。いいけどさ、どーせ末席者だし」

そもそもつい最近負けたばかりの未熟者だからなと内心で苦笑しつつ、遠夜は言葉を

繋げる。

「お前、なんの呼吸使ってるの?」

「は？なんでそんな…」

「いいから」

「…雷」

「ほー！珍しいな。雷の呼吸って使ってるやつあんま見たことないんだ。丁度いい。ちよつと付き合え」

「はあ？」

「見たところ、動けないほどの重傷ってわけでもないんだろ？テキトーでいいから型見せてくれや」

「なんで俺が…」

「いーから」

獺岳としては面倒なことこの上ないが、仮にも相手は柱。今まで見てきた柱と比較して覇気も威厳もないが、今の自分よりは強いことがわかる。それに遠夜も言ったが、仮にも上司。下手に騒ぎを起こすよりもとりあえず従う方が得策だと獺岳は考えた。

「…仮にも怪我してるんで、無理はできない」

「いいよ、見ただけだから。手合わせは今度な」

道場に獺岳を連れて行き、木刀を渡して雷の呼吸の型を見せてもらった。

式ノ型 稲魂

参ノ型 聚蚊成雷

肆ノ型 遠雷

伍ノ型 熱界雷

陸ノ型 電轟雷轟

雷の呼吸の使い手は善逸しか会ったことがなかったためこうして間近で型を見られるのはありがたかった。左目は目隠ししたまま右目のみで型を目に焼き付ける。腕の角度、息遣い、足運びを記憶し、頭の中で反芻する。

(へえ、いい腕じゃん。なにが不満なのかねえ)

かなりいい腕を持っているのにも関わらず、獺岳からは常に不機嫌な気配がする。初めは遠夜に嫌々型を見せられているからだと思っていたが、どうも違う。

(もつとこう、根本的な問題な感じするな)

具体的なことはわからない。だが、獺岳という人間の根本的な所に問題があるような気がする。

「おい、全部見せたぞ」

「ん」

「あんたが見せろって言ったんだろ」

「まだ一つ見せてなくね？」

「っ」

「壺ノ型、やってないだろ」

そう言い放つと獺岳は殺気とも思えるほど鋭い視線を遠夜に向けた。

（あれ、これ触れちゃいけないやつだったか）

「ちっ」

「できないのか」

本来、この獺岳の雰囲気からこの話題にはこれ以上触れないようにするのが通常だろう。だが遠夜は基本他人の心を知った上でそこに触れて行く性格の悪さがある。

「なるほど」

「……………」

「じゃあ、雷の呼吸の継承権はどーなってんだ？」

「…………俺と、もう一人の二人で継承していくように言われた」

どう見ても全く獺岳は納得していないし、不満しか無さそうな態度を見せる。かなり苛立っているようだ。

「不満そうだな」

「当たり前だろ！この俺が、あんなカスと共同で後継だと納得できるか！」

「でもできないんだろ？」

「うるせえ！」

「呼吸を途絶えさせないためにも、できないことはできる奴に任せりやいいじゃん」

「黙れ！あんなカスと同列に俺を評価するな！あの爺！俺があれだけ尽くしてやった」

空気が揺れる。

次の瞬間、獺岳の喉は遠夜によって掴まれていた。

遠夜の発する圧力に獺岳は口を閉じる。

「それ以上、自分を育ててくれた恩人を悪く言うな。見苦しいぞ」

「っ……」

「お前の師も色々考えた結果そうなったんだろ。お前がどう考えてるのなんか知らんが、そういう結果にならざるを得ない状況にさせた自分を恨め」

その言葉に獺岳は我を忘れた。相手が柱であることも忘れて掴みかかり、激昂した。

「てめえ、もう一回言ってみろ！」

「なんだ、難聴か？その歳で耳が遠くなるのは中々だな」

掴みかかられてもなお、飄々とした態度を崩さない遠夜を見て更に獺岳は頭に血を昇らせる。

「ああ☒」

「だって、できなかつたんだろ？なら二人で継承させるしかないじゃん？それにさ、お前こそ努力したの？」

「は？」

「だからさ、壱ノ型が使えるようになるための努力はしたのかって」

無論遠夜とて獺岳が努力していないなどとかけらも思っていない。今見せてもらった型は洗練されていた。そこから獺岳が努力を怠っていないことくらいはわかる。

獺岳自身も努力している自覚はあったし、その努力の甲斐もあり力が付いていつてる自覚もあった。だがそれでも壱ノ型だけは使えなかった。

「舐めてんのか☒」

「いや」

「努力したに決まってるんだろ！」

「死ぬ直前までしたか？」

遠夜の言葉がわからず獺岳は呆けた声をだした。

「は？」

「死ぬ直前まで、それのみをできるようにするまで没頭したのか？生活の全てをそれとできるようにするために費やしたか？できる奴から教えを乞うたか？できるようにするために、できることは全てやったと断言しきれるか？」

「つ……」

「お前が努力することは今の型見りやわかる。だがな、継承権に関して不満があるなら、それを覆せるようにするために最善かつ最大限の努力をしたとお前言い切れるのか？」

獺岳は目を伏せる。

獺岳は、修行時代に努力は惜しまなかつた。壺ノ型ができるようになるために師匠に教えを乞い、付き合ってもらつたりもした。それでもできなかった型は、弟弟子の善逸はあつさりできるようになった。尤も、善逸はそれ以外の型はできずに壺ノ型のみを極める道を選んだ。

雷の呼吸は壺ノ型が基本であり、そして真髄となる型である。故に善逸の壺ノ型を極めるといふ道はある意味本当の意味で雷の呼吸を極める道だと言える。壺ノ型の完成度に関しては、善逸は師匠を超えている。そのため獺岳の師匠は善逸にも話を聞くことを勧めてきた。

だが獺岳はそれをしなかった。

獺岳は善逸を見下していた。修行中も泣きべそをかき、直ぐに逃げ出すような弟子を下に見て、そして馬鹿にしていた。そして常に自分の方が上であり、特別だと思っていた。元々高慢かつ傲慢な性格は善逸を下に見ることでさらに膨れ上り、高すぎる自尊心が善逸から教えを乞うという選択肢を許さなかった。だから遠夜の『できる奴から教えを乞うたか』という言葉に獺岳は反論できなかった。

遠夜はそれを見抜いていた。だからこそ教えを乞うたかどうか聞き、そしてそれが凶星だとすぐにわかった。

「逆に、お前はその弟弟子に自分ができる型についてなにか教えたか？」

「この俺がなんであんなカスの面倒を見なきゃなんねえ！俺は特別だ！あんなカスにやるもんなんかねえよ！」

なおも激昂する獺岳に遠夜は声をわずかに低くする。

「お前、なんでも自分が特別じゃないと気が済まねえのか」

「俺は特別だ！俺は、俺のことを正當に評価できない奴なんぞに恩義は感じない！」

なおも激昂し捲し立てる獺岳を遠夜はつまらなさそうに見る。

(こいつは、人から貰うことしか知らないのか)

恐らく、この獺岳という青年は育ってきた環境が劣悪なものだったのだろう。自らで

生み出し、そして他人に与えるという余裕がない生活を送ってきたのだらうと遠夜は考えた。故に他人に与えるという行為そのものの意味を理解しておらず、貫うことのみ執着している。

「で、正当な評価って？」

それを聴くと獺岳の言葉が止まる。

「ほら、言えよ。お前の言う正当な評価ってどんなんだ？」

「何が言いたい」

「正当に評価して欲しいとか言ってたんだ。どう評価されれば満足だったんだ？」

道場の壁に立て掛けてある木刀を取り、くるくると手で弄びながらつまらなさそうに遠夜は問いかける。

「…俺は」

「……………」

「俺は、雷の呼吸唯一の正当な後継者だ！特別な俺が、あんなに尽くしてやったんだ！当然だらうが！」

「なるほど。だが実際は二人か」

「あんなカスと同列に組み込むじゃねえ！」

激昂した獺岳はそのまま遠夜に木刀で切り掛かってきた。

「やれやれ、運動の許可は出てないんだがなあ」

次の瞬間、獺岳の視界から遠夜が消えた。

「は？」

呆けた声を出した直後、獺岳の視界に影が落ちる。

咄嗟に上へ視線を動かしたが、次の瞬間背後からの衝撃に耐えられず前に倒れ込む。

影の呼吸　漆ノ型　影落とし

先日、兄の月慈を屠った型であり、遠夜が過去と決別するきつかけを作った型。

「まー落ち着け」

気がつけば獺岳の手から木刀が取られていた。

その事実には獺岳は遠夜が柱であることが本当であると確信した。獺岳は遠夜のことを舐めていた。なにしろ今まで会ってきた実力者と比べて覇気も威厳も一切感じられなかったからだ。獺岳は自身が力をつければつけるほど他者との力量差がよりはつきりわかるようになっていたが、遠夜は明らかに自分よりも下に思えた。だから礼節を欠いた態度を取っていたが、今の動きで遠夜が自分よりも遥かに強いことを認識した。

「気持ちにはわかるよ。できないってのは、きついよな」

「柱のあんたに……」

「わかるよ」

獺岳の言葉は遮られた。

「俺も、型のうち一つが使えない」

「え……柱なのに？」

「柱なのにだ。どーしてもできん。いやな、俺の育手は俺の兄だったんだが……その兄が天才でなあ。あの人が創り出した型だけどーしてもできなかつた。今も、な」

それに準ずるものはできるが、日永の完成度と比較するとできないに等しい程度のものだ。

「それでもまあ、なんとかやっていけるし、柱にもなれる。だからさ、できないことをそんなに重く考えんな。できることでやっていこうや」

遠夜と獺岳は、どこか似ていた。

両者とも、『己から生み出すことができない』者達だった。

遠夜は兄の真似し、ひたすら兄のできたことをできるようにすることを言い、獺岳は己が特別であると信じ、他者からあらゆるものを欲しがった。

だが遠夜は月慈との戦いで己はどこまでいっても二人の兄にはなれないことを悟り、そしてこれからは兄という幻影を追うのではなく自分の身一つで歩いて行くことを誓った。そして自分が与えられるものが、兄の真似ではなく、己から生み出したものとなれるように努力していくのだと、自らの肝に銘じた。

真似したものを他者に与えることしかできない者は、自身が自身であるといえる確固たるものがないのに等しいのだ。

獺岳は遠夜同様かなり根深いところに問題がある。生まれ育った環境がそうしたため、一概に獺岳の性格だけの問題では無いが、このまま行けばどこかで道を踏み外す。遠夜にはそう思えた。

だがこういうものは自分で気が付かねば意味がない。他人が諭すことも効果はあるが、所詮一過性のもの。心には届かない。だから遠夜は獺岳に気づいて欲しかった。

人に与えられない者はいずれ人から何も貰えなくなる。

欲しがるだけの奴は結局、己が何も持っていないのと同じだということに。

「人はよ、同じ人間なんて一人としていねーんだ。誰もが特別なんだよ。誰かの特別で

あつたとしても、他の大多数の人間からしたら、お前もお前が忌避した有象無象だ。それに、人は一人じやいきていけん。必ず誰かの力を借りて生きてんだ。だからさ、その面倒くせえ拘りなんぞ捨てちまえ。疲れるだけだぞ」

「……………」

「もー少し、他人に目を向けて見ろ。その上で自分を見つめ直せ。人は一人じや生きていけない。だから近くにいる奴に何かしら返すなりしておけ。欲しがるばつかじや、いつかなにも貰えなくなる。それがわからないうちは、お前はいつまで経つてもそのままだ」

遠夜は目隠しに覆われた目を獺岳に向けてそう言った。その言葉には重みと真剣さが含まれており、先程までの飄々とした態度とは打って変わっていた。

「…黙れ。俺は特別だ。あんなカスとは違う」

そう言い放ち獺岳は道場を去った。

残された遠夜は木刀を道場の壁に立て掛け、そして寝転んだ。

「…特別、ねえ」

あそこまで頑なだと、獺岳を変えられるのは彼に近しい人間だけだろう。例の師匠か、または彼の弟子か。

「そもそも、俺みたいなの出来損ないに『導く』なんて烏滸がましいか」

塞がれた視界はなにも映さない。

日永のように、他人を理解し、そして導くなど誰でもできることではない。少なくとも遠夜には向いていない。

『一人で歩いていけるんじゃないやなかつたのか？』

声が聞こえた気がした。

染み付いた劣等感呪は簡単には消えてくれないらしい。これからも向き合いながら少しずつ解いていくしか無いのだろう。

獺岳のことについても、日永ならどうにかできたのだろうか。

そう考えても意味など無い。だが、たくさんの人を導き変えてきた日永なら、とどうしても考えてしまう。

あそこまで膨れ上がり、生きているだけで他人を傷付けかねない程の危うさを持つ獺岳が今後道を踏み外すようなこともあり得る。過去に鬼狩りでありながら鬼となった剣士がいたということを黒雨に聞いたことがある。獺岳が圧倒的強者に対してどういう態度を取るかわからないが、もし獺岳が敵わない程の鬼と遭遇し、そして逃亡すらも叶わないとなった時、彼がどういう行動を起こすかはわからない。だが、跪き、助けを

乞い、結果として鬼になるという可能性もあの性格では大いにあり得る。

獺岳の実力は決して低く無い。寧ろ現存する隊員の中ではかなり高い方だろう。それが鬼と化した場合…

「いや、やめよ」

このようなことを考えるのは獺岳の名誉を毀損するのと同義だ。彼がどんなに高慢な性格だとしても、今の彼は立派な鬼殺隊員として鬼を狩り、市民を守っている。そんなことを考えてはいけないと遠夜はその考えを振り払った。

しかし遠夜の予感は的中した。

遠夜がそのことを知るのは、ずっと先の話である。

『お前が見捨てたんだぜ？後悔すんなよ？』

声が脳裏で嗤った気がした。

拾貳

遠夜が目覚めて一月近くが経過した。

機能回復訓練も可能となり、鈍った身体を叩き直しながらも左目の検査が続けられ、ようやく退院の許可が出て明日には退院することになった。

深夜、誰もが寝静まった時間を見計らい遠夜は庭に出て目隠しを外す。

紅く染まった瞳が月を映し出す。

「……………」

目蓋の傷は痛々しく残っているが、もう痛みはない。目を開く際に若干違和感があったが、その違和感も既に慣れた。

存外この鬼の左目はちゃんと眼球として機能しているようで特別視覚に違和感はない。それどころか左目は視力が非常によく、正常な視覚を持つ人間よりもよくものが見えた。やはり鬼の肉体故に人よりも能力は高いらしい。

『うまく使え』

だが月慈が最後に言った『うまく使う』とはこのことではないだろう。動体視力も上

がっているため、見切りの能力は上がっているだろうが恐らくあの男はただあるものを『使う』とは言わない。自らの意思で動かして初めて『使う』と表現するだろう。仮にも共に暮らした兄。現在生きている存在の中では月慈のことを最も理解していると言っても過言ではない。

「…使う、ね」

確証はない。だがあの兄が言うことだ。可能性はある。

月慈は確信があることでなければ命令口調では言わないだろうと判断した。

全身の氣を整え、そして左目に集める。やり方がこれで合っているかはわからないが、残念ながら今の遠夜にはこれ以外やり方を思いつかない。

頭に思い浮かべるのは、あの空間を抉るような歪み。

この術がなんとという名前かは知っている。

あとは言霊と共にそれを実現するのみ。

「っ…」

左目がなにかを吸い上げる感覚がする。

氣だけではない。恐らく今この目は血液を吸い上げている。本来なら鬼の血を吸い上げ、そこから血鬼術を発しているのだろうが今は遠夜の人間の血を吸い上げている。人の血から術が出るわけがないが、恐らくそれは氣を吸い上げることで代用しているのだろうと結論付けた。

「ぐつ、う」

鋭い痛みと共に眼前の焦点が合った部分が歪み始める。

これを進めていけば月慈の血鬼術ができるのだろう。だが痛みは更に増していき、ビキビキと嫌な音を立て始める。

それを耐え切り、空間が完全に収束し弾けたようになる。

「っー」

術が完了したとわかった瞬間、今までとは比べ物にならないほどの痛みが走り思わず目を閉じる。そして生暖かい液体が頬を伝うのを感じる。それを拭うと手のひらが赤く染まっていた。負担をかけ過ぎた故か、血涙が流れていた。

「当たり前だが、そんな都合のいいもんじゃねえな」

想像以上に氣を吸われたのもあるが、それ以上に血液を持つていかれることが厳し

い。鬼ならば体内の血液程度すぐに補充できるだろうが、人間ではそうはいかない。下手に使い過ぎれば傷を負っていなくとも失血死しかねない。

慣れてないことも要因の一つではあるだろうが、慣れないうちに乱発すれば間違いない。遠夜は命を削る。削るにとどまればまだマシだろう。最悪、負担が大き過ぎて命に關わる可能性すらある。

「慣れ云々で済めばいいがなあ」

元はといえば鬼の肉体。人間が扱うには過ぎた産物だろう。そもそも慣れることができる代物なのかどうかすらわからない。

なんにしても明日には退院できる。その後早めに珠世の場所に伺うべきだろうと遠夜は判断した。愈史郎が色々と嫌な顔しそうだが、こちらとしてもいくら面倒だとしても愈史郎の顔色を気にしている場合ではない。

「あーくそ、面倒だ」

流れ出た血を拭い、目隠しを着ける。

痛みは徐々に引いていくのがわかるが、肉体にかかる倦怠感は寧ろ少しずつ増えているのがわかる。

血鬼術。人の身で扱うには些か重すぎる代物。

扱えれば、遠夜は鬼殺隊にとって非常に強力な武器となるだろう。

だがその反面、それを十全に扱えるか、扱えたとしてどの程度の危険性が潜んでいるか、さらにはそれを克服できたとしても、それをよく思わない者達との衝突の可能性もある。

現状ではただ眼球として作用する程度の認識だが、せつかくあるものを無下にすることは遠夜には無い。例え命を削るとしても、やれる可能性があるのであるのなら、必ずモノにする。そして、あの鬼を殺す。日永とカナエを殺した鬼を、必ず。

「寝よ」

過去に誓った思いを再確認したところで、これ以上ここにいてしのぶに見つかったりしたら面倒だと判断し、肉体の倦怠感も相まって寝ることにした。

草履を脱ぎ、廊下上がったところでこちらを見る人物に気がつく。

栗花落カナヲ。しのぶの継子であり、胡蝶カナエと同じ花の呼吸を使う少女。

「……よお」

「……………今の」

「ちっ……見てたのかよ」

遠夜が気配を探ることを怠ったのもあるが、それ以上にカナヲが気配を消すことが上手くなっていたため、遠夜は術を使う場面をカナヲに見られていた。術に集中していたのもあるだろうが、遠夜が想像していた以上にカナヲが成長している証拠だろう。

「師範には……」

「言うな。言ったところでどうにもならん。止められて終わりだ」

「……………」

「不服か？」

「…わかりません」

カナヲは素直に言った。

本当にわからなかった。遠夜とカナヲの関係はそれほど深くない。昔は遠夜はよく蝶屋敷にいたが、日永とカナエが亡くなってからは用事がある時以外は寄り付かなくなっていた。元々そんなに関わっていたわけでもないため、日永の死後はどことなく疎遠になっていた。時々稽古や手合わせはしていたが、逆に言えばその程度しか関わりがない。

簡単な話、どう接していけばいいかわからないのだ。

しのぶを心配させないで欲しいという思いはあるが、それを自分が言っても聞かないだろうし、これで下手に口出しして二人の関係が悪くなるのは見たくなかった。

だから、どう言えいいのか迷った結果、カナヲはわからないと答えた。

「お前がどう思うか、思っているかは知らん。だがどうしたいかわかんねーなら、黙つてろ」

「……はこ」

遠夜の言葉は冷たく、そして淡々としたものだった。そんな遠夜の言葉にカナヲは素直に頷くことしかできなかった。

そしてそれだけ言うのと遠夜は足早に去っていった。

「……………」

その後ろ姿を見て、カナヲはどう言うべきだったのかを考えたが、一晩考えてもその答えは出なかった。

*

「……ふむ」

翌朝、昨日負担をかけた左目の調子を見ていたが、特段変化はないように思える。一晩休んだためか、最後に感じていた倦怠感も抜けている。

「とりあえず、問題ないか」

身体の調子が悪くないことを確認し、遠夜は起き上がり身支度を整える。シャツとズボンを身につけ、詰襟は畳まれたままにして羽織を肩にかける。

身支度を一通り整えたところでアオイが病室に入ってきた。

「無道様」

「ん、なに？」

「お客様です。刀鍛冶の里から」

「お、漸くか。通せ」

それだけ言うとアオイが背後の人物に病室に入るよう促した。アオイはそのまま仕事へと戻っていき、病室にはひよつとこのお面を付けた遠夜と同程度の身体の男が残された。

「どーも、鉄俵さん」

男は、鉄俵鋼桜。遠夜の担当の刀鍛冶の男である。日永の担当もしていた男であり、刀鍛冶としての腕は高いが、どうにもクセのある刀を造る傾向にあったため、現在では遠夜以外は担当していない。

「……………」

そしてクセがあるのは刀だけでなく性格もだった。とにかく無口でなにが言いたいかわからない時がある。

相変わらずか、と遠夜が内心で苦笑したところで鉄俵は背負った箱を下ろし、その箱を開けて遠夜に差し出した。中には刀が入っており、その刀は前の刀と同じ濃紺の鞘と同じ色の柄をしていた。唯一前の刀と異なるのは鍔が無い点だった。

「……………」

「はいはい抜けばいいんだろ」

ひよっとこのお面をしているため表情はわからないが、目線をじつと向けてくる鉄俵の意思を汲み取り刀を手にした。

刀を抜くと、鋼色が深い藍色へと変わっていく。何度見てもどういう仕組みなのかわからないが、遠夜はこの色が気に入っているため特に気にはならない。

遠夜の日輪刀は水や風、炎の呼吸を使う剣士の刀と比べて若干刃が分厚い。理由としては影の呼吸は他の呼吸と比較して防御に回るのが多いことが挙げられる。元より防御寄りの型故に刀としての耐久性も高いにこしたことはない。だが分厚すぎて速度が落ちるのも良くないため、色々と試行錯誤を重ねた結果現在の厚さになった。

「……………」

「ん、不満は無いですよ。今回もどーも」

無言で刀の調子を伺ってくる鉄俵に苦笑しながら刀を鞘にしまう。

「そーいや鐔はどーしたんすか？前のは割れたんですけど」

遠夜は疑問を口にした。

本来、鬼殺隊の刀は皆それぞれ異なる形と鐔を刀につける。だが遠夜の刀には今鐔がない。この理由を鉄俵に聞いた。

「……この刀は、私の打った刀の中で最高と断言できるほどの出来だ」

この場に来て初めて発した言葉はとても低く、威厳のある声だった。数度しか聞いたことないが、この声を聴くとどこことなく背筋が伸びる思いになるのはなぜだろうか。

「そいつは、随分と良いものを」

確かに出来は非常に良いものだった。普段からいい出来ではあるが、普段以上に見た目も感触もいい。

「……お前の兄、日永の刀も含めて、私の生涯で最高の刀だ。今の私にこれ以上の刀は造れぬ」

「へえ」

確かに、刀そのものから感じる気配のようなものには前に使っていた刀と比較しても遥かに良いものであるとわかる。刀匠全盛期の戦国時代であってもこの刀は業物として扱われるだろう。それほどまでの刀に何故鏢を造らなかったのか。遠夜はそれが気になった。

「……最高の刀である以上、鏢も私の満足がいくものにしたかった。だが、できなかった。それだけだ」

「……なるほど」

鏢は刀同士の戦いで鏢迫り合いになった際、手を守るための役割があるため、剣士同

士の戦いでは比較的重要なことになる。しかし鬼殺隊が相手にするのはあくまで鬼。刀を使う鬼がいけないとは限らないが、だがそれでも鏢としての重要度は下がるだろう。

「じゃ、いいっすわ。もしできたら持ってきてくれれば」

「……………」

無言の鉄俵に若干呆れながらも、最後に遠夜は聞いた。

「この刀、銘は？」

鬼殺隊の刀に基本銘はない。しかしこの鉄俵は毎回刀に銘を打っていた。理由としては、先祖代々彼の家族は売った刀に銘を付けることで一本一本の刀と正面から向き合うためだとかなんとか。

ちなみに日永の最後の刀の銘は『白夜』、遠夜の前の刀の銘は『日陰』。

「……………」
『鏡影』きやうえい

「鏡影、ね。いいじゃん。どーも」

どういう意図で付けたのかは毎回聞いても語らないため聞かないが、響きが悪くないため遠夜はその銘を心に刻んだ。

話が済むとすぐに支度を整えて、風のような速さで鉄俵は去っていった。

「…鏡の影、ね」

刀をわずかに抜き、『悪鬼滅殺』の文字を見ながら遠夜は呟いた。

鉄俵は知ってか知らぬか、今の遠夜にとって必要である『向き合う』ことを彷彿とさせる『鏡』の文字を刀の銘に入れた。

「…先見の明ってか？ 鬼殺隊には化け物みたいな年寄りしかいねえのかよ」
苦笑と共に言葉を吐くと、刀を収めた。

日光を受けて『鏡影』は鈍く輝いた。

――

ベッドの掃除も済ませ、詰襟を適当に羽織った遠夜は退院の準備を済ませた。しのは任務でないが、退院の許可は得ているためアオイに挨拶を済ませれば問題ないだろうと考えた。

「さて、アオイは…」

気配からアオイを探そうとしたところ、存外近くに気配があつたためそちらに足を向ける。

部屋を覗くと、アオイは洗濯カゴを抱えて庭に向かうところだった。

「アオイ」

「無道様。退院なされるのですね」

「世話になったな」

「いえ。仕事です。あまり無茶なさらないようにしてくださいね」

「善処はする。保証はせん」

相変わらず素直な物言いでできない遠夜に若干呆れつつ、アオイは頭を下げ、庭に歩を向けた。

だがそこで三人娘の一人のなほが近寄ってきた。

「アオイ様！」

「なほ、どうしました？」

「えっと、お客様なのですが」

「お客様？しのぶ様は今は……」

「いえ、無道様に」

突如呼ばれた自分の名に僅かに驚愕しつつもなほに塞がれた目を向ける。

「俺？」

「はい」

遠夜は顎に手を当てる。

誰かが見舞いに来るとは思えない。仮に雲海や鳴海が来るとしたら必ず連絡を入れ

るだろうし、夕霧が来るとしてもなにかしらの形でやはり連絡が来るだろう。

他の柱の面々が来るとは思えない。柱は基本忙しく常に任務に出ている状態に近い。仮に暇があつたとしても、遠夜は他の柱との関係は良くない。故に見舞いに来るとは考えづらい。

刀鍛冶の鉄俵は先程帰つた。何か忘れ物がありもう一度訪ねて来るのなら、なほが客と表現することはないだろう。

「誰だ？」

誰も思い当たる人物が居らず、遠夜はなほにその人物を聞いた。そしてその答えは、意外な人物だった。

「不死川玄弥様です」

——

「よお、また会えたな」

蝶屋敷の縁側に玄弥を通し、なほに淹れてもらった茶をすすする。

玄弥は俯きがちで落ち着かない様子だった。

「で、なんか用か？わざわざ訪ねて来るってことは、なんかあんだろ？」

遠夜がそう切り出すのが、玄弥は口をもごもごさせるだけで話し始めない。一向に話し始めない玄弥に痺れを切らし、遠夜は湯呑みを盆の上に置き、話し始める。

「大方、俺の傷に責任を感じてつてところか」

「……！」

「凶星か？わつかりやすいなあ」

くつくつと笑う遠夜に目を向けて玄弥は話し始める。

「……すみません、無道さん。俺が、俺が弱いばかりに……無道さんがいらぬ怪我を……」

「いいって。そもそもあの闘いは、俺が読み逃したのが悪い」

「でも……」

「だから」

遠夜は玄弥の頭を乱暴に撫でる。

「いいって。鬼殺隊が怪我するなんて常だし、そもそも俺が悪いんだから」

そして苦い表情をしながら視線を逸らした。

「……まあ、白状するとただな……あの時、動揺してたんだ」

「え？」

玄弥の中で遠夜は、常に飄々としており、現にあの下弦の式を前にしてもその態度を

崩したようには見えなかった。だからその独白に少なからず驚いた。

「仮にもさ、血を分けた兄貴だ。しかも俺があの家から捨てられて十年以上経つてるとはいえさ、そんな簡単に十二鬼月になれるとは思わないじゃん？だからさ、その…処理しきれなかった」

遠夜が玄弥、巖鉄と分かれて調べていたのは従業員全員の身辺調査と間取りの調査だった。黒条総合病院は遠夜が月久としていた時と比べてかなり大きくなっていったため間取りを調べる必要があった。

だがそれ以上に月慈が鬼かどうかを真つ先に調べたいという思いがあった。かつて憧れ、そして心底妬んだ兄が鬼なのか否か。それだけは知りたかったのだ。

結果として、月慈が鬼だとわかったのは突入前日だった。尤も、それも半信半疑だったため、遠夜としては心の中では月慈が鬼であつて欲しくないという思いがあった。

どんなに妬ましくとも、憧れた存在だった。

だから、本音を言えば殺したくなかったのだ。

だが殺さねばならない存在と成り果てた兄を目の前に、遠夜の思考は鈍り、そして一度敗れた。

「ほんと、俺が柱でいいのかねえ。こーんな間抜けが」

「…無道さんは、間抜けじゃないです」

玄弥の言葉に遠夜は僅かに驚く。玄弥がそんなことを言うとは思いもしなかったからだ。

「へえ」

「俺も、兄貴が鬼になったりして、それを目の前にしたら…多分なにもできなくなる。炭治郎みたいに、あそこまですぐに身体を張れるようなことをできる自信はありません」

「……」

「大事な人が鬼になる…どんな形でもそれはきつと、すごく辛いことです」

言葉は拙い。だがそれでも精一杯伝えようとしているのがよくわかる。そんな玄弥の背中を軽く叩き、遠夜は立ち上がる。

「そういうもんか」

「はい、きつと」

「……ありがとうな」

「い、いえ」

笑う玄弥の顔は、年相応の少年の笑顔だった。塞がれた視界で遠夜がそれを見ることは叶わなかったが、つられて遠夜も笑った。

「じゃ、いくわ。見舞いありがとうさん。死なない程度に頑張れよ」

「あ、はい」

「黒磐にもよろしくな〜」

そう言つて遠夜は去つていった。

その背中はどこか小さく見えた。

*

「アオイさん!」

任務帰り、遠夜の見舞いをしようとして炭治郎は蝶屋敷に立ち寄つた。

「炭治郎さん、どうなさいましたか」

「無道さんは、今どこにいますか? お見舞いに来たんです」

「無道様なら先程退院されて帰られました」

「ええ☒」

炭治郎は間が悪く、遠夜が去つた数時間後に蝶屋敷に訪れていた。

「そつか…間が悪かつたか…でも、元気になつてくれてよかつた」

「なにか言伝があればお聴きしますが」

「大丈夫。自分で伝えますから」

目的の人物がいらないのなら仕方ない。せつかくきたが、特に用事はないため拠点に戻ろうと炭治郎は踵を返そうとした。

「ごめんください」

その瞬間、声が響く。

炭治郎が振り返ると、そこには帽子を深く被り、羽織を羽織った甚平姿の男がいた。そして炭治郎はこの男に見覚えがあつた。産屋敷亭で情報屋と名乗っていた男だ。

「陽明様、どうなさいました」

「神崎サン、しのぶサンから頼まれていた薬剤の資料を取り寄せたのでお届けしに来ました」

「ありがとうございます。生憎、しのぶ様は留守ですので私が渡しておきます」

「お願いしますね」

陽明が懐から冊子を取り出してアオイに渡すと、陽明は炭治郎に目を向けた。

「竈門炭治郎サン、ですね？」

「あ、はい」

目の前の若干胡散臭い話し方をする男に声をかけられ、若干警戒する。

「柱合会議以来ツスね。ほとんどははじめましてかな？」

「あの時、鱗滝さんの手紙を読んでもくれた…」

「はい。おっと、まだ名乗ってませんでしたね。あつしは陽明黒雨。しがたい情報屋です」

「情報屋？」

「情報つてのは、時に命に関わるほど重要になる。だから色々な情報を集めて売り捌くのがあつしの仕事です。今はお館様専属といった形にさせてもらってます。今後お見知りおきを」

陽明からは悪意の匂いは感じない。そもそもこの前助けてくれた人をよく知りもしないのに警戒するのは失礼だと判断して炭治郎は警戒を解く。

「俺は、竈門炭治郎です。この前は助けていただきありがとうございます」

「いえいえ、仕事ですから」

「それでも俺と禰豆子は助かりました。本当にありがとうございます」

「…君は心が綺麗ツスね」

陽明は炭治郎の頭を撫でながらそう言った。

「俺にできることがあればなんでも言ってくください！力になります！」

アオイはその言葉を聞くとギョツとした。

なにせ陽明は『できるけど、相当しんどいこと』か『有益な情報を聞き出す』意外で

人にものを頼むことはしないことで有名だったからだ。現にしのぶも陽明に頼まれごとをして珍しく昔のしのぶが表に出てくるほど消耗して帰還した事例がある。それだけでなくカナエが生きていた時、陽明の頼み事はきつくせにこちらに見返りがほとんどないと日永にぼやいていたことがしのぶの口から語られていた。無論きついだけあり、見返りはあるのだが、それは個人としてではなく陽明本人、または鬼殺隊としての益が大きい。鬼殺隊としての益ならば文句は何もないがさすがに陽明本人のみの益のために無駄にきつい頼み事をされるのはたまったものではない。

それがわかった上で断ることはできるのだが、この男は巧妙に恩を着せてくるため断りづらくなる。なまじ頭の回る偏屈者ほど厄介な者はいないのかもしれない。

「おや、いいんスカ？」

「はい！助けてもらった恩を返したいんです！」

こういう時、炭治郎の真つ直ぐな部分が短所に思えてしまう。陽明のように巧妙な手口を使うほぼ詐欺師紛いの男からしたらこんな真つ直ぐな少年などいいカモなのだから。

炭治郎は頭が固い。故にアオイがなにを言っても多分聞かないだろう。

だが次に陽明から出た言葉は意外なものだった。

「じゃあ、君の話を聞かせてください。それでチャラにしましょう」

「なにを企んでいるんですか？」

たまたま屋敷にいたカナヲと炭治郎が話しているのを遠くから見ている陽明にアオイはそう問いかけた。

「いいえ？なににも？」

「……………」

ジト目で睨んでくるアオイに陽明は苦笑いした。

「アオイサン、あつしをなんだと思ってるんスカ」

「詐欺師紛いの情報屋」

「はは……こいつは手厳しい」

まるで心外だともいうように帽子を被り直しながら陽明は炭治郎に目を向けた。

「日頃の行いからしたらそう見えても仕方ないかもしれないツスね」

「腕は確かだそうですね、しのぶ様や無道様から出る貴方の話はロクなものがありませんから」

「やれやれ…酷いなあ」

くつくつと笑う陽明をジト目で睨むアオイの視線に耐えきれなくなったのか、陽明は真剣な顔をする。

「鬼舞辻は、炭治郎サン『個人』に対して追手を出すようなことをした。つまり、奴と炭治郎サンの間には何かしらの因縁があります。今まで奴は個人に対して追手を出すようなことはしてきませんでした。その因縁を解き明かせばきつと奴に近づける」

「…本人が気付くものなんじゃないんですか？ 本人がわからないなら…」

「炭治郎サン本人ではなく、『鬼舞辻』側の因縁だと思います。奴個人として、炭治郎サンに何かあるのでしょうか」

アオイとしてはよくわからなかったが、陽明は無意味なことはしない。別段理不尽なことをさせられているわけでもないし、ここはやりたいようにやらせればいいだろうとアオイは考えた。

「よくわかりませんが、お好きにどうぞ」

「ええ。では」

陽明はアオイに頭を下げると駆け寄ってきた炭治郎の下は足を向けた。

場所は変わって、陽明が行きつけの茶屋へと炭治郎はやってきた。

「お好きなものを頼んでいいっすよ。ここはあつしの奢りです」

茶を啜りながら陽明は炭治郎にそう言った。

「いえ、お構いなく」

「んーあつしがいいって言ってるから頼めばいいのに。ま、そこは好きどうぞ」

陽明はそのまま店員に団子を頼んだ。

そしてその団子が届いたところで話を切り出した。

「じゃあ、君のお話を聞かせてほしいんすけど」

「俺の話、って言われましたも…」

「まー、これだけ言われても困りますよね。とりあえず、君の家族について教えてくれま

すか」

「はい！俺の家族は……」

嬉しそうに、そして時折寂しそうに家族のことを語る炭治郎の言葉を陽明は最後まで

真剣に聞いた。

この少年は、この年若い年齢でありながら様々な苦行を乗り越えてきた。だがそれでもまだ戦う事を選んだ。その決意は、きつと簡単にはできない。加えて彼は妹を人間に

戻すための手掛かりも見つけなければならぬ。

「……頑張ってきたんですね」

「いえ、まだまだです。俺が強ければきつと煉獄さんは……」

「かもしれない。でも、君が繋いでもらったその命を無駄だとは思ってはいけませんよ」

「……はい。わかっています」

「よろしい」

一区切りがついたところで、陽明は団子を頬張る。

「……そういえば、一つ気になる事があったんすけど」

「なんですか？」

「その下弦の伍と戦った時の呼吸……水の呼吸ではないんすか」

「あ、はい。うちの家に代々伝わる神楽でして」

「神楽……」

「はい。ヒノカミ神楽ってご存知ですか？」

「ヒノカミ神楽……いえ、すいませんが」

「そうですか……」

あからさまに落ち込む炭治郎に対して陽明は顎に手を当てて真剣な顔をしている。

「その神楽についてももう少し教えてもらえますか」
「は、」

ヒノカミ神楽は、竈門家の長男が代々受け継いでいく神楽だという。その舞は年の始まりにその一年の安全と健康を願い、ヒノカミ様に日没から日の出まで繰り返す舞を捧げるといったものらしい。

(ヒノカミ……炭治郎サンの家は炭焼きの家。ならこのヒノカミは火の神？いや、彼の耳飾りから察するにこの場合は『日の神』と考えるのが妥当か)

この神楽は耳飾りと共に受け継いでいくものらしい。見たところ、随分古いが手入れがされており未だに清潔感が保たれている。

「炭治郎サンの話ですと、『耳飾りと神楽を受け継ぐのは、ヒノカミ様との約束』ということですね？」

「はい。父にそう教えられました」

「約束、ね」

携帯している筆と情報をまとめる冊子で炭治郎の言葉を纏めていく。

(約束……神として崇める存在相手に約束というのものなにか違和感がある。どちらかといえば神が相手だと『捧げる』が一般的だ。なのにそこであえて『約束だから受け継ぐ』という形で伝えてきている。もしかしたら……このヒノカミ様とやらは……)

「あ、あの…陽明さん？」

「ああすいません。考え込んでしまった」

そこで陽明は一度筆を置き、炭治郎に向き直る。

「炭治郎サン、まだなんとも言えませんが…このヒノカミ神楽は多分全集中の呼吸を使つたものだと思います」

「そ、そうなんですか？」

「断言はできません。しかし炭治郎サンの話を聞く限りその可能性は大いにあるかと」

そもそも神楽という名目の舞であるのにも関わらず剣を振るうことを想定したような型である時点でおかしいのだ。神楽自体は舞という名目であるため基本は『舞踊』、つまりは踊りに起因するものだ。剣を持って舞う舞踊も存在するが、ここまで『戦う事』を想定して作られる舞踊などそうないだろう。

加えて炭治郎はこのヒノカミ神楽で水の呼吸以上の威力の攻撃を出したという。つまり単純に考えれば炭治郎は水の呼吸以上にヒノカミ神楽の適正が高いという事だろう。どんなに威力の高い型であっても適正がなければその力は十全に発揮できない。

「…炭治郎サン、確か貴方の刀の色は」

「黒、ですね」

「黒い刀の持ち主がなんで出世できないと言われてるかわかりますか？」

「え……不吉な色だから、とか？」

「黒い刀の持ち主の身体に合った呼吸が存在しないからっス」

日輪刀の色は不思議なことに持ち主に合わせて色が変わる。その色は持ち主に合う呼吸の色へと変化する。

「それくらいは知ってますよね？」

「はい。日輪刀をもらう時に教わりました」

「例えば炭治郎サンの兄弟子、富岡サン。彼は水の呼吸が最も適した呼吸であることを示す『水色』。煉獄サンなら炎の呼吸が適した色の『赤色』などですね」

「その中でも、黒は……」

「基礎となる呼吸以外の派生した呼吸を含めた全ての呼吸が適した身体ではない、という指標っスね」

「……じゃあ、俺に」

適した呼吸はないのか、と言おうとした炭治郎の言葉を陽明が指を立てて遮る。

「ですが炭治郎サンは、ヒノカミ神楽の呼吸で下弦の鬼を追い詰めた。水の呼吸ではできなかつたことが、ヒノカミ神楽ではできた。これは大きなことっス」

「でも、俺はヒノカミ神楽を使った後全然動けなくて……それに、あの時は禰豆子の力もあつたから」

「おそらく動けなくなつたのは単純に体力の問題でしょう。仮に適した身体だつたとしても、それを扱うための身体ができていなければ十全に扱うことはできませんから」

「水の呼吸は使えたのに……そうなんですね」

「この後ちよいと用事があるんで無理っすけど、近いうちに型を見せてもらえますか？水の呼吸とヒノカミ神楽の呼吸で比べて見ればどちらが適しているかわかると思いますが」

「見ただけでわかるんですか？」

「これでもかつて柱だつたんでね。見る目はあるかと」

怪我して引退したんすけどね、と陽明は付け加えて皮肉げに笑つた。

「それに、君はいい情報ものをくれた。ちよつと返してもらいすぎなんでお釣りっす」

「そんな！俺は、父が残してくれたこの神楽に興味を持つていただいてすごく嬉しかつたです」

煉獄だけでなくしのぶにもヒノカミ神楽のことを聞いたが、誰も知らないと答えた。陽明自身も知りはしなかつたが、それでも炭治郎としては家族の絆であるヒノカミ神楽に興味を持つてもらつたのは嬉しかつたのだ。

「君のそのヒノカミ神楽、あつしの方で少し調べてみます。少し、心当たりがあるんで」「なにか知つてる人に心当たりがあるんですか？」

「人の縁つてのは、大事なんスよ。人は皆、何を知っていて、何を知らないか結構わかってないんス。それに、当人にとつては価値のない情報でも自分にとつては有益な情報だつたりもする。そういうもんス」

炭治郎はよくわからない顔をしているが、陽明はそんな炭治郎を見て笑いながら言った。

「何かわかつたらお伝えします。君は目の前のことに集中してください」

帽子を被り直し、会計を済ませて陽明は茶屋から去つていった。

「不思議な人だつたなあ」

残された炭治郎は一人そう呟いた。

陽明からは常に楽しそうな匂いがしていた。そしてその楽しそうな匂いは炭治郎のヒノカミ神楽の話を書く時、より一層強くなった。きっと彼は未知との遭遇を楽しんでいる人なのだろう。

「でも、なんでだろう」

その楽しそうな匂いの中に、本当に微かではあるのだが、悲しみの匂いがしていたのだ。それは炭治郎と出会った時からずっとしていた。

「今度、会つたら聞いてみよう」

そう考えて炭治郎は残りの茶を飲み干した。

一方、茶屋から出た陽明は鏝鳥を呼び出した。

「いやあ、思いの外いい話が聞けました」

「カアー！お前が楽しそうナ顔ヲしてる時ハ大体ロクでもナイ事ばかりダ！」

「酷いっスね〜…間違つてないんスけど」

陽明の帽子に止まる鳥は他の隊員の持つ鳥よりも若干流暢に喋りながら陽明のことを貶す。それに対して陽明は苦笑しながらも筆を走らせた。

「ダガ、今回ハ本当にいい事ガ聞けたようダナ」

「お、わかります？」

「フン！何年ノ付き合いダト思つてイル」

自慢げに胸を張る鳥の足首に書き終えた文を結びつけ、陽明は行先を伝える。

「御館様に直接渡してください。返事は……まあ言わなくてもすぐ返つてくるか」

「カアー！任せロ！」

そう言つて鳥は飛び去った。

帽子を押さえながら陽明は仕込み杖を肩に担ぐ。

「さて、あつしも忙しくなるな」

鳥の飛び去った空を見上げながら陽明は呟く。

陽明が書いた文にはこう書かれていた。

『鬼殺隊が呼吸を使い始めた時期と、その後壊滅させられるくらい弱くなった時期の記録を拝見したいです。理由はお会いした際にお話しいたします。何卒、よろしくお願ひ申し上げます。』

「あつしよりも、炭治郎サンの方が忙しくなりそうですね。きつと彼はこれから鬼殺隊にとって歴史的瞬間に立ち会う。頑張ってほしいっすね」

帽子を深く被り直し、陽明は雑踏の中に姿を消した。

拾参

「お待ちしました」

月が出ていない夜、珠世は自らの家を訪れた男にそう言った。

この家は愈史郎の血鬼術により隠されているため、人が訪れることはそうない。産屋敷のように一部その存在を認知する者はいるが、拠点を転々とする珠世の居場所を把握している者は側近の愈史郎を除けば誰もいない。

現在の拠点もつい先日に移したばかり。それを訪れることができる者は卓越した索敵能力を持つ者、または移動してからこの場所に来たことのある者に限られる。

「…チツ」

「こちらとしても来たくはなかったんだがな。贅沢は言つてられん」

「貴様！ 珠世様を目の前に来たくは無かっただと☒ならば帰れ！ こちらは貴様なんぞに…」

「愈史郎」

珠世の言葉に遮られ愈史郎は口を閉じる。しかし依然として鋭い視線は男に向けられている。

「あまり長く滞在すると側近の苛立ちが臨界点突破しそうなので、手早く済ませましよう」

「検査結果は出てます。すぐにご説明しますね」

「ありがたい、お願いします」

男……無道遠夜は目隠しを取ると、珠世と愈史郎に続き屋敷へと足を踏み入れた。

——

「とりあえずこれで検査結果を書物に纏めました」

封筒を遠夜に手渡しながら珠世はそう言った。

「すみません、俺自身の私情にも付き合ってもらってるのにこんなことまで」

目隠し外し、遠夜は頭を下げる。

「全くだ！お前のような馬の骨に珠世様の貴重な時間を割かせるな！」

「申し訳ない」

普段の私情だけでなく、余計なことにまで珠世を巻き込んでいることを少なからず申し訳ないと思っていた。故に愈史郎が喚き立てる言葉も否定することができず甘んじて受け入れた。

しおらしい態度をする遠夜に愈史郎は訝しげだが、それ以上なにも言うことはなかった。

「愈史郎、そのあたりに。ではその眼球についてですが」

遠夜は封筒から書類を取り出しながら珠世の話に耳を傾けた。

「貴方の眼球は鬼のものと同様です。聞いたお話では血鬼術を扱えるようなので、それは間違いありません」

「でしようね」

「しかし眼球としての機能は通常の人間と大差ないでしょう。多少動体視力が良くなったりはするかも知れませんが、基本は人間のもの変わりません」

遠夜は現在の日常生活において、日中は目隠しを外すことが無い。故に不便は感じないが、視覚から太陽を感じる事ができなくなるのは少し寂しく思えた。

「ここからが問題です」

珠世の空気が変わった。

「その鬼の眼球ですが、少しずつ無道さんのことを侵食しています」

「侵食？」

「はい。鬼の肉体の一部は徐々に無道さんの肉体を人ではなく鬼のそれにしようと侵食をしています。しかし鬼を増やすことは無惨にしかできないことなので、完全に侵食さ

れても恐らく鬼になることはありません」

「でも問題があるんですよね」

「…はい。予想ではありますが、日光を浴びることができない肉体になります。鬼のように灰になるかはわかりませんが、少なからず害はあるかと」

「…なるほど、ね」

なんとなくそんな気はしていた。目覚めた時に左目周辺に現れていた青白い痣のようなものは鬼の肌と色が似ている。今はその部分が日光に触れてもなにも起こらないが、今後その状態が続くとは断言できない。

そしてこの痣が恐らく侵食の度合いを示すものなのだろう。この痣が広がるほど、侵食が進行していることを示すと考えていいだろうと遠夜は考えた。

「侵食は眼球を起点に起こっています。侵食の速度自体は非常に遅いですが、それでも同じ速度で侵食が進むとは限りません」

「侵食を止めることは…」

「現状では止める術は無いです。血鬼止めがもしかしたら多少効果があるかもしれませんが、
んが、確証は…」

現状では侵食を止める術は無いらしい。とりあえずは問題無いからこれでいいかと遠夜は納得した。

「あと、血鬼術についてです」

「ん」

「血鬼術はその名の通り鬼の血を媒介として発動する術です。ですが無道さんは当然鬼ではありません。故に血鬼術を使う媒介が本来なら無い」

「でもこの目があるから使えた」

「はい。無道さん自身がお話してくださった血を吸われる感覚。血鬼術を行う時に代償として無道さんの血液をその眼球が吸収しているのだと考えられます」

「……だよねえ」

正確には吸収されるのは氣も含まれるが、これについては氣の使い手しかわからないだろうと言わなかった。

だがやはり鬼の血の代替として遠夜の血が吸われているのは間違いなかった。

「あまり使い過ぎると、失血死しかねんな」

「それだけではないです」

「ん」

「わかっているのではないですか？本来人間では扱えないものを扱っているのです。相應の代償が必要だと」

「……多用すれば、死ぬか」

「血鬼術は人の身で行うにはあまりにも過ぎたものです。恐らく、使うたびに命を削ります」

血鬼術を使ったのは以前カナヲに見られた時の他に数回。片手で事足りる程度の回数だが、連続で使ったことはなかった。肉体に負荷がかかるため連続使用は余程のことが無い限りやらないようにするとは決めていた。それに命を削ることもあり得ることだと思っていたため、さほど驚かなかった。むしろ当然だろう。

「…あんま使わないようにする」

「…本来なら、絶対に使わないようにしていただきたいのですが、そう言っても使うのでしょうか？」

「必要にかられば、ね」

数回使用したおかげでなんとか戦闘中でも扱えそうな程度には慣れたため、必要なら使う。遠夜はそう決めていた。

尤も、血鬼術を使わねばならぬほどの強さを持つ鬼は恐らく上弦の鬼程の力を持つ鬼を相手にした時だけだろう。それほどの相手を前にして使い慣れない血鬼術を使っても勝てると思えない。せいぜい不意打ちが限界だろう。

「…：…使う使わないの判断は私ではできません。なので無道さん自身で判断してください」

「言われずとも勝手にやりますよ」

「あともう一つ」

「おっと、まだあるんすか」

「これは推測の域はでませんが、それでも良ければ」

「お願いします」

「恐らく、血鬼術を使うたびにその左目の視力は低下します」

「あー…」

合点はいく。

血鬼術を使用するのは凄まじく目に負担がかかる。鬼の肉体ならば即座に再生するため結果的に負担にはならないかもしれないが、人の身ではそうもいかない。負担は蓄積され、肉体にいずれ致命的な欠陥を齎すだろう。

「…最終的には」

「失明、か」

「そう考えられます」

しのぶも言っていたが、能力値のみで見れば月慈の目は鬼のそれだが、今の基礎となつているのは人間。故に鬼のように再生はできない。

つまり負荷をかけ続け、その先に待つものは負荷に耐えきれず失明ということだ。

「…面倒なものを植え付けられたもんだ」

「こうして人として活動できること自体かなり異例かと。鬼の肉体を植え付けられたら普通は生きていられません」

（…そういうえば、兄貴も成功例は無いとか言ってたっけか）

遠夜が今こうして普通に生きていられるのは柱として鍛え上げた肉体と精神があり、なにより幸運だったことに尽きるのだろう。

「…なんにしても、あんま使わないようにしますわ」

「そうしてください。効果があるかはわかりませんが、血鬼止めを使って調合した薬を処方します。定期的に飲んでください。侵食が遅れると思います」

「…何から何まですいません」

「いえ、日永さんには大変お世話になったので」

「お前には世話になってないがな！日永に感謝しろ！」

「…そうします」

遠夜が目を伏せると珠世は遠夜の肩に手を置いた。

「仮に日永さんがいなくても、私は貴方に力を貸していました。なのでお兄さんと自分を比較して、卑下するようなことはしないでくださいね」

「お気遣い、痛み入ります」

遠夜は立ち上がり、頭を下げる。

その後、血鬼止めを使った薬の注意事項を幾つか伝えると遠夜は帰っていった。珠世の拠点の敷地から出ると遠夜は姿を消し、気配もすぐに感じられ無くなった。

「珠世様」

「どうしました」

愈史郎の血鬼術の効果範囲内に入ると愈史郎は珠世に問いかけた。

「無道遠夜にあそこまで肩入れするのは何故ですか」

「肩入れ…そうね」

産屋敷の使いである影柱であることを加味しても、珠世は遠夜に対して大きく肩入れしていると言える。珠世自身その自覚はあったため驚くようなことはしないが、暫し目を伏せ、考える。

「…我々は一度、日永さんに助けられている。それなのに私たちは彼になにも返せなかった」

「…そう、ですね」

「代わりに遠夜さんの力になろうとしている節があります。でもそれ以上に、彼のような人は誰かが『見ていなくて』いつか消えてしまうのです」

「……………」

「鬼殺隊でも彼のことを気にかける人はいるでしょう。しかし彼はそれを自覚していない……いや、彼の気質的に遠ざけようとしてしまう。それ故か、彼はいつも孤独と闘っている」

「…天邪鬼め」

「そういう悲しい人。だから私はせめて、彼に消えてほしくないから彼に肩入れするの
でしょう」

「……………」

愈史郎はそれ以上なにも言うことなく、自分の作業へと戻っていった。

残された珠世は、一人月の出ていない空を見上げた。

*

数日後

御影山

無道亭道場で遠夜と夕霧が組み手をしていた。

「うわー！」

遠夜の掌底により夕霧が体勢を崩し倒れる。

遠夜は追撃することなく、倒れた夕霧に手を貸して立たせると言った。

「…よし、(ハハ)まで」

「あ、ありがとう…(ござい)ました」

息も絶え絶えになっている夕霧を前に遠夜はそう告げる。

夕霧は着実に力をつけ、とうとう円と識をモノにしたと言っていたのでそれを確かめるべく組み手を行った。夕霧は木刀、遠夜は素手で行ったが、結果は夕霧が一方的に攻撃を受けることになり手も足も出なかった。

だが以前とは異なり、完全では無いにしろ夕霧は確実に遠夜の攻撃に反応できるようになっており、防げた攻撃も多々あった。加えて夕霧は敢えて途中から自らの視界を封じる縛りも設けたが、その縛りを設けた後の方がより攻撃に反応できるようになっていた。

「確かに円と識をモノにしているな」

「どうにかですけどね」

「現時点でそこまで円と識ができれば上出来だ。今なら最終選抜にも通るだろうよ」
「でもまだなんですよね」

「ああ。これから型の修行に入る。壱ノ型『無間舞踊』ができるようになったら最終選抜に向かうことを許可する」

影の呼吸において壱ノ型『無間舞踊』は真髄にして奥義。敵のあらゆる攻撃を見切り、舞うように回避しながら確実に返し技で相手の呼吸を乱し、呼吸も体幹も崩れたところでトドメを刺す型である。型と言ってはいるが、実質型らしい型ではなく、敵の攻撃次第では身体の動きは大きく異なる。故に、円の範囲外の対象にも識を行えるようになる必要があるが、夕霧は円を非常に得意としているため円の範囲が広い。この広さならば円の外の対象に識が使える必要はないと判断した遠夜は、円と識をモノにし次第呼吸の指導に入るようにした。

「じゃ、とりあえずこれ」

そう言つて渡されたのは目隠し。遠夜がつけているのと似ているため、鳴海お手製のものだろう。

「修行の時は必ずつけろ。視界に頼る必要がなくなるくらい識を使いこなせ」

「識の修行でこれ付けてましたけど」

「それは四六時中だろ。これからは修行の時以外は外せ」

「どうしてですか？」

「見れるものは見れるうちに見とけ」

それだけ言つて遠夜は道場から去つていった。

「どういう意味だろう」

夕霧がその真意を知ることはない。

――

退院した後、しばらくは担当地域の警備のみだったため遠夜は一度御影山に戻り、夕霧の指導を行っていた。

本格的に呼吸の指導に入ると、基礎をしっかりと身につけていた夕霧は瞬く間に実力を伸ばしていった。型そのものはまだ壱ノ型を学んでいる最中だが、それも既に形になりつつある。

「相手の気配をより強く読め！必ず攻撃には意思がある！」

「はい！」

夕霧は木刀で遠夜の攻撃を必死に防ぐ。舞うように回避と防御を繰り返す夕霧に対して遠夜は掌底や蹴りを繰り返して防御と回避の合間に出来る僅かな隙に的確に攻撃を与えていく。

遠夜の攻撃に対して返し技で対応しようと夕霧が突き出した突き攻撃は、身体を軸とせずすることで遠夜は回避し、体幹が崩れたところを蹴りで木刀を弾き飛ばす。

「しまっ」

突き出された遠夜の拳は夕霧の顔の前で止まる。

「……」

「一本」

「……はあ、また負けた」

袖で汗を拭いながら夕霧は立ち上がる。

遠夜は木刀を拾い上げて夕霧に投げて寄越す。

「飲み込みが随分早い。この分なら次の最終選抜には余裕で間に合うだろうな」

「ありがとうございます。師匠の教えのおかげです」

「真面目だな」

夕霧の指導を始めて約2年。夕霧の成長は目覚ましいものだった。

元より本能的に絶を習得していたため、氣の修行はそこまで大変ではなかったが、体

力作りがなかなかうまくいかず全集中の呼吸の習得に少々時間がかかった。だがそれも習得できたため、型の指導を始めた。

既に識を習得した夕霧は壱ノ型をモノにしつつあり、遠夜の攻撃に対しても的確に防御と回避を行なってきた。まだ甘い部分も多数あるが、それでも習い始めたばかりにしては非常に高い熟練度に達していた。

「あとは円の外の対象に識が使えるようになれば完璧だな。それ以外はひたすら組み手だ」

「わかりました」

「んじゃ、ちと休憩…」

休憩しようと言おうとしたところで、遠夜の鎧鳥が道場の外で騒ぎ始める。

「……どうした」

道場外に出て鳥を腕に留まらせる。

『カァー！宇髄天元カラ救援依頼ダァー！』

「天元さんが？状況は」

『宇髄天元ノ嫁ガ行方不明ー！竈門炭治郎達モ同行シテイルガ敵ノ情報ガ得ラレズ苦戦ー！』

「…へえ、元忍のあの人が情報収集に苦戦するとは珍しい。わかった、すぐ向かうと伝え

ろ。場所はどこだ」

『カーア！案内スルカラ早く準備シロー！』

「へいへい」

相変わらず口うるさい鳥に少々うんざりしながらも道場に戻ると夕霧が瞑想をしていた。

「あ、師匠。どうしましたか」

「出陣。しばらく識と壱ノ型、あとは常中の修行に費やせ。俺はすぐに出る」

「はい！お気をつけて！」

部屋に戻り身支度を整え、刀を手取る。

そして部屋から出たところには雲海がいた。

「雲海さん……」

「出陣だね」

「はい」

「……気をつけて行ってくるんだよ。君も、私からすれば大事な息子なんだ」

「……お心遣い、痛み入ります」

頭を下げると遠夜は雲海の隣を通り抜けていった。

「……皆、どうして行ってしまおうんだろうね」

雲海は遠夜が通り過ぎていった廊下を見つめる。

そこに遠夜の姿は既に無い。

*

烏の案内の元、天元がいる遊郭まで走る。

御影山からさほど距離のない場所にある遊郭だったため、半日程度でたどり着けた。烏から状況を聞きながらの移動を行うことで、到着から行動までの時間を短縮させることにした。

烏から聞いた状況はあまり芳しくなかった。

現場には宇髓の他に炭治郎、善逸、伊之助の三人が潜伏しているらしい。なんでも鬼がいるという疑惑がある遊郭に宇髓の嫁達を潜入させたところ、連絡が途絶えたとか。そこで炭治郎達にも手伝って嫁達の搜索をしていたとか。

(天元さんの嫁も、確か元忍だったな。一般人と比較すりやかなり戦える方だと思うが……)

それでもダメだったということは、相手は鬼である可能性は大いにあるだろう。そし

てその後の足取りを天元ですら辿れないほど残さないところを見ると、十二鬼月だと考えるのが妥当だ。

遠夜に救援依頼が来た理由は、十二鬼月の上弦である可能性があったからだという理由と、相手の尻尾が全く掴めないため索敵と情報収集が得意である遠夜が最適だと考えたからだという。

(兄貴から受けた傷で暫く安静にさせられてたし、左目の様子見とか試運転で結構任務と離れてたしな。鈍っちゃいないがさて、どこまで力になれるかねえ)

目的地が近づいてきたことが鳥から伝えられ、腰に挿していた鏢のない刀を竹刀袋に入れて担ぐと共に遠夜は神経を整えて遊郭へと潜入した。

――

「派手に早かったな、無道」

「貴方が俺を頼るなんて珍しいんでね。嬉しくて舞い上がっちゃったのよ」

「面白くもねえ地味な冗談は止めろ。後で何を請求されるか考えただけでゾツとする」

「俺、あんたに何か請求したりしたこと無いんですけど?」

「お前の性格の悪さは知ってる。どうせ口くなことにならん事くらいわかる」

音もなく背後から現れた遠夜に天元は平然と皮肉で返した。

遊郭の無数に建ち並ぶ通りの路地裏で遠夜は天元と合流する。

一通り皮肉を言い合つたところで遠夜は天元に向き直り状況を確認する。

「で？状況は？」

「地味に良くねえ。俺の嫁が潜入していた店に炭治郎達を潜入させたが、一向に足取りが掴めん」

「あらら」

「鬼の気配はするが、場所が地味にはつきりしない。こんだけ派手に気配はするのに、だ。近いようで、遠くに感じる。そんなのが四六時中だ」

「気配は確かに強いですねえ。遊郭全体を覆つてる感じだ」

「そこでお前だ。索敵と情報収集はお手の物だろう。俺も情報収集はしてるが、監視しながらだとそれも中途半端だな。隠に頼むことも考えたが、戦闘になった時のことを考えると戦える奴がいた方がいい」

「この前下弦相手に死にかけて俺を呼びますか」

「お前の戦い方が相性の良し悪しが大きく寄与することくらい把握している。でもお前が柱に任命されるくらい強いことも俺は派手に知っている。卑下するのは自由だが、現時点でそれ以下の奴のことも考えて発言しろ」

それ以下の奴、というのは恐らく炭治郎達の事だろう。現時点ではまだ遠夜の方が戦闘能力は高いだろうが、炭治郎達は将来遠夜を超える存在になる。天元も遠夜もそれを理解しているが、三人はまだ経験値が不足しているため柱と並べるほど強くは無い。無論大いに戦力にはなるが、それでも劣ることは本人達も理解している。故に先程の遠夜の発言は遠夜本人だけでなく炭治郎達をも卑下した言葉になる。だから天元は現時点でそれ以下の奴のことも考えろと発言した。

「悪かった。さすがに無神経すぎた」

「本人達は聞いてねえし、あいつらはそんなこと気にするタマじやないだろうがな。だがその日永と比べて己を卑下する癖はそろそろやめた方がいい。自分の価値も落としかねんぞ」

「…呪いみたいなものでね。簡単には治りませんわ」

「気持ちにはわからんでもないがな。日永は、才能としては強すぎた」

遠夜はその言葉を肯定も否定もしなかった。

「さて、俺はそろそろ行きますわ。情報は得られ次第共有しますんで」

「随分早い動き出しだな。最初は索敵するかと思つたが」

「索敵は軽くしてみました。上手く気配を隠してる。流石に多少は場所を絞らないと探せるものも探さなくなるんでね」

「アテはあんののか」

「表で噂すら出てないなら、裏を知る人に聞きます」

それじゃ、とだけ言つて遠夜は姿を消した。

残された天元は己が出来ることを、と考へて搜索に乗り出した。

――

「どーも」

遊郭の街の入り口の門に小さく存在する小屋に遠夜は訪れた。

「どうした兄ちゃん、ここには男しかいねえぞ。花街に来てんだ、男と絡みに来たんでもあるめえ」

屈強な男達が小屋の中でちよつとした賭博のようなものをしていゝ中、最奥にいた比較的細身で小柄な男が煙草を吹かしながら遠夜に鋭い目つきで問いかける。

「そりやもちろん。俺だつて相手にすんなら別嬪の方がいいんでね」

「目が見えないようだが、その様子だと道に迷つたつてわけでも無さそうじゃねえか。なんだあ、どつかで諍いでもあつたか」

「諍い、ね。まあでかい視点で見りやそうかもしれん。いやなに、ちよいとこの街につい

て知りたくてね」

「おいあんちゃん、この街のこと知りたいなら尋ねる場所間違ってるぞ？ わざわざ番屋のところに来てなにを知らうってんだ」

入り口の傍らにいた顔に傷がある男が嘲笑混じりにそう言う。

そんな男の態度に気分を害する様子もなく、遠夜はなおも飄々と続ける。

「ここ最近、不可解なことが起こってるんじゃない？ 足抜けがやたら多かったり、不可解な死人が出たりとか」

奥にいる男の眉が動く。

「兄ちゃん、何者だ。この街の人間ならともかく、余所者のお前さんがそれを知ってるのはちと変じゃねえか」

「なに、その原因排除が俺の仕事でね。表の連中が知ってるのは事故死があったという事実程度だ。そこでそういう事件の類を処理してるあんたらに話を聞いたらなって」

「……………兄ちゃん、何者だ」

「んー？ んー…ただの盲目の小僧だよ」

「舐めてんのか小僧」

入り口の傍らにいた男が短刀を遠夜の首元に向ける。

それでも遠夜は態度を崩さず顔を男に向ける。

「おいおい勘弁してくれよ。そんなもん向けられたら怖くて動けねえよ」

「小僧……」

「よせ、そこまですておけ」

奥の男がそう言うのと、遠夜に短刀を向けていた男は下がり、短刀をしまった。

「さて……落ち着いたところで話をしようじゃないか、兄ちゃん」

「話が早くて助かるよ」

「まずは、名前だな。俺はこの花街の番屋を取り仕切ってる源信ってんだ。お前さん、名

前は」

「無道遠夜」

「無道か。さて無道、お前さんはなにが知りたくてここに来た」

「さつきも言ったが、この街で不可解なことが起こってんだらう。その原因となるも

のの排除だ」

「へえ……確かにお前さんの言う通り、今この街では色々やべえことが起きてる。そ

の原因がわからないうちに、うちの若え連中が消された。何人もだ」

源信は憂うように目を伏せて拳を握った。

「現場を見たが、ありや人ができる所業じゃねえ。なんだ、怪異かなんかいんのかこの街

は」

「強ち間違つてはいないかな」

「ほう……」

「源信さん、ここは取引といきませんか」

「取引？」

「ええ。俺はこの一件を終わらせる、あんたはこの一件を終わらせるための情報を俺に寄越す。どうだい、悪い話じゃないだろう」

源信の雰囲気が変わる。

先程までの張り詰めた雰囲気から更に厳しい気配となり、刺すような殺気が感じられる。

「あまり調子に乗るな、小僧」

源信は懐から取り出した小刀を投げる。小刀は遠夜の頬を掠め、壁に突き刺さる。

「お前がこの事態を解決できるつてのなら、こちらとしても歓迎だ。俺らじゃどうしようもないからな。だがな、何事にも筋を通さなきゃならん。お前が何を知り、何ができるかは知らねえが、取引だつてんならまず持ちかけたお前さんがこちらを交渉の要となる事前知識を寄越しな。お前がどう解決するのかはわからんがな、その結果この街が壊滅しましたじゃ話にならねえんだ。だからまず俺達に誠意と手段を提示しろ」

「なるほど、そいつは道理だ。あんたらにとつてこの街全体が仕事場になってんだ。事

態を解決して街が無くなるくらいなら騙し騙しでも街が存続してくれた方がいいわな」
羽織に隠された刀を鞘ごと腰から抜き、床に置くと同時に遠夜は地面に腰を下ろす。
「じゃあまず、件の原因について」

――

「……なるほど、その鬼つてのがこの街にいて、そいつが色々とやんちゃしてやがんのか」

源信は煙管を弄びながら遠夜に目を向ける。

「そういうこと」

「その鬼をさっさと見つけて殺せばいいと」

「この街にいてることしかわかってないから、そう簡単にはいかないけど」

「……そんで、居場所を探るために俺らの情報が欲しいと」

遠夜は肩を竦めるだけして肯定も否定もしなかった。

源信は顎を撫でながら遠夜に目を向けて言う。

「その鬼を探して殺す手段はどうする」

「探す手段についてはある程度の場所が絞れば相手に悟られずに特定できる」

「ならばしらみ潰しに探せばいいんじゃないのか」

「この街広いでしょ？下手に探し回ればそれを悟られて不意打ちを喰らいかねないんでね」

「…ふん、探した後はどうする」

「できれば穏便に暗殺でもしたいが、相手はかなりの手練れだ。こちらも街も無傷とはいかんだろう」

「お前さん、かなり強いだろう。さつき刀を向けられても微動だにしなかった。ただ者じゃねえことくらいわかる。そんなあんたですら、命懸けになると」

「なるね。むしろ事態が解決した時に生きてる確率の方が低いだろうよ」

その言葉に源信はため息を吐く。

周囲の男達もわずかに騒めきだし、事態の深刻さを理解し始めた。

「チツ、やべえ案件だとは思っちゃいたがここまでたあ思ってたなかった」

「どう？力を貸してくれるかい？」

「……一つ条件がある」

「なんなりと」

「その鬼の場所がわかったら俺らにも知らせろ。鬼殺しには加われんが周辺の人間の避難くらいは俺らが呼びかけりやできる」

「願つてもない。こちらとしても一般人は巻き込みたくないんでね。それに周囲に下手に人がいない方がこちらもやりやすい」

「交渉成立だ」

源信が差し出した手を遠夜はしっかりと握る。

手を離すと源信は煙管を遠夜に向けて、不敵な笑みを浮かべた。

「さて、今度はこちらが筋を通す番だな。なにが知りたい」

「ここ最近で死人が出た事件、あとはあんたらから見ても不可解だと思える事件全部の詳細」

「はっ！全部とききたか！いいぜ、そのかわり俺に喋らせんだ。しっかりと活用しやがれ！」

「情報次第だな」

「ケツ、食えねえ奴だ。まあいい。死人に関しては、ほんの数日前にあったな。ありやあ、京極屋だったな。その女将が2階から落ちて死んじまった」

「それだけだと別段変な話には思えないなあ」

「まあな。だが、俺が妙だと思つたのは死体の損傷具体よ。お前さんも街を見たならわかるだろうが、ここいらの建物は大した高くねえ。2階から落ちたとしても死ぬことはそうねえ。ま、打ちどころが悪けりゃ話は別だがな」

実際花街の建物は全体的に標高が低い。故に落ちたとしても骨折程度で済むのが大

半だろう。無論源信が言ったように打ちどころが悪ければ亡くなる事例もあるが、それは稀だ。

「亡くなった女将の遺体はひでえもんでな。かなりの高さから落とされたようにしか見えん」

「そんな高い建物、この辺りには無いはずだが」

「そ。だから不可解だつてんだ。それに京極屋はその女将の葬儀すらロクなできず今も平常にやつてんだ。どう考えてもおかしいだろうよ」

「なるほど、ね」

葬儀すら行われないうのは流石に違和感が大きい。女将ということはその店の中でも立場は上の方だろう。店を運営していくためには必要な存在を葬儀すら行わないのはどう考えてもおかしい。

「聞いたたけじゃその京極屋つてのが真っ黒って印象だな」

「そう考えても仕方ないが、こういう異変は他の店でもあつてな。最近はやたら足抜けが多い。本来なら足抜けなんぞ短期間で何回もあるもんじゃねえ。なのに最近はこの様だ」

「……死人は、ここ最近では京極屋だけか？」

「いや、表沙汰にはなつてねえが他にも何人か死んでる。うちの下つ端から遊女までな。」

だがそんな数は多くねえ。こいつに纏めて……つと、すまねえ。お前さんは目が……
「いや、見えないわけじゃない。見せてくれ」

目が見えないわけではないのに目隠しをしている遠夜を訝しむ様子はあつたが、源信が寄越した紙の束には死人の名前と現場の状況が書かれていた。目隠しをずらしてそれに目を通していく。

「……死んだ人間にあんま共通点は無いな」

「だからこつちも困つてんだ。つたく、こんな面倒にや関わらないが一番なんだがなあ」
番屋という立场上放置もできないが、下手に藪を突けば全滅しかねない。相手が鬼ならば、鬼殺隊でない彼らが下手に動けばそうなることは自明だろう。

（たしか京極屋は……天元さんの嫁さんが潜入してるとこだったな。つてことは、誰かしら今も潜入してるんだろう）

天元の話と源信の話を纏めると限りなく京極屋が黒い。だが天元が詳しいことがわかっていない時点で京極屋には深く探りを入れられない状況であることがわかる。

「うん、早めに動いた方が良さそうだ」

「なんかわかつたかい」

「予測の域は出ないけどな。最後に京極屋についてももう少し教えてくれるかい」

「やっぱ京極屋か」

「本命じゃなくとも、本命に近づくと何かはあるだろうよ」

「…そうかい。京極屋についてだったな。あそこにはこの花街で二人いる花魁の一人がいる。名を蕨姫花魁。数回、遠目に見ただけだがありやあ別嬪だ。花魁になるだけある」

「へえ」

「ちつとは興味あるような返事しろや小僧が。で、この蕨姫だが…どうやら癩癩持ちらしくてな。恐ろしく別嬪だが、色々黒い噂は絶えねえ。いじめ、嫌がらせ、果てには暴力と」

「俺は遊郭の事情には詳しくないが、そんなんで花魁が務まるのか？とても客が寄り付くような噂じゃないが」

「そんな噂があつてもなお会いたいと思えるほど別嬪なのさ。それにあの花魁が稼いだ額は計り知れねえ。京極屋はあの花魁のおかげで成り立っていると云つても過言じゃねえのさ。あんまこういう事言いたかねえが、あの花魁以外にまともに逆取れる遊女もいないんでな」

「ふむ…なら黒い噂があつても解雇できんわな」

「あーでもあれだな、最近ちよいといいい女が入つてたな。名前は忘れたが、ありやなかなか上等だった」

最近というと、それはやはり天元の嫁の一人だろう。連絡が取れない以上どういう状況かはわからないが、無事ではない。

それがわかっているから天元は遠夜を呼びつけた。

「いい話が聞けたよ」

名前のでた全ての店の位置と名前を記録し、懐から錢袋を取り出してある程度まともな額を置いた。

「おいおい、金を要求した覚えはねえぞ」

「まーそう言いなさんな。だいぶ助かったんでね、それで新しく人でも雇ったらどうだい」

「……けつ、本当に食えない小僧だな」

「んじゃ、そちらも『頼んだ』よ」

それだけ言つて遠夜は去つていった。

「頭、あんな小僧にいいように言われてていいんですかい」

男の一人が源信にそう告げる。

遠夜は男達から見ても明らかに歳下かつ余所者。なのにあそこまで大きな態度をされると例え彼らが番屋じゃなくともあまり良い気はしないだろう。

「いいんだよ。あのテの奴は言動こそふざけちゃいるが仕事はする。俺らだけでどうす

ることもできないなら、多少ふざけた野郎でも喜んで手エ貸してやらあ」
「……しかし」

「それに、あいつの方が余程危険な目に遭うんだ。態度くらい、大目に見てやるさ」
源信は立ち上がると控えていた男達に向き直る。

「今から京極屋周辺の話付けにいくぞ。避難はまだだが、せめて話だけでも通しておか
にやいざ避難する時に混乱するだけだ。手分けしていくぞ、いいな」

『承知』

「行け」

源信の言葉と共に男達は小屋から出ていき、各々店に向かつていった。

「やれることはやる。あとは頼んだぜ、無道遠夜」

煙草を吹かしながら源信は源信で仕事へと向かった。

*

「首尾はどうだ」

夜になり遊郭が賑わいだしたところで、遠夜は天元と合流した。

「だいぶ絞り込めたかな。天元さんの嫁さんが潜入してる店は色々噂が絶えん。嫁さ

んそのものがどうなったかまではまだなんとも言えないが、なんにしてもは無事では無さそうだ」

「……そうだな」

顔を顰める天元を横目に目隠しを外す遠夜。

「……最近、足抜けが増えてるみたいだね。それだけ聞いたら何とも思わんが、どうやら足抜けつてのはそうそうあることじゃないらしい。だから番屋の連中もよく覚えてるみたいだ」

「続けろ」

「一番変なのは足抜けした遊女のことを店側が把握してないことだな。店側としても遊女がどれくらい稼いでいるかは把握してる。なにせ遊女は大体借金の返済を目的としてるからな。下手に足抜けして逃げ出してみろ。残された家族が取り立てられて不幸になることくらい目に見える。そもそも遊女つてのは借金を返すために身を売る覚悟があつて初めてなるものだ。例外はいるだろうがな」

「だろうな」

「だが変なのが、『足抜けする必要のないくらい稼いでいる遊女』の方が多く失踪している事だ。もう少しで借金返し終わるくらいの奴も消えているらしい」

「…それは、派手におかしなことだな」

「そ。だから今起きてるのは足抜けに見せかけた何かつてことがわかつたくらいですかね」

その後も遠夜は続ける。

消えている遊女は皆この遊郭で才覚や美貌を認められた遊女ばかりなのだという。そしてその遊女達は消える直前まで普通に仕事をしていたのに、次の日の朝には消えていたのだという。

遊郭である程度話に上がるような遊女が足抜けの必要など無いのにもかかわらず、このような失踪が続いているため番屋もお手上げ状態。足抜けだとして身元を追っているが全く掴めず、挙げ句の果てには下っ端がバラバラにされた。

「結構なやり手だね。これは上弦がいると見ていいんじゃない？」

「気配のぼかし方が派手に上手い。これは下弦でできるようなものじゃねえ。俺は初めから上弦だと睨んでたよ」

「さつすが。元忍は違いますな」

「で？居場所の目星はついてるのか？」

普段見せない目を細めながら遠夜は告げる。

「ときと屋か京極屋のどちらかだろう。そこにはこの街の花魁がいる。有名かつ美人な人から消えてるのにこの街屈指の美人が消えてないならそれは疑われるでしょ」

「どちらとも俺の嫁が潜入したとこ、か」

「ま、多分京極屋だろうけどね」

「根拠は？」

「あそこの花魁、黒い噂しかない。叩けば叩くほど埃が出てくる。周囲の人間に対して散々な当たり方してるみたいだから。」

対してときと屋は人格者だの優しいだのそういう話しか無い。基本人間を見下してる鬼がそんな人間に優しいとも思えん。超絶演技派って可能性もあるけど、もう片方が埃まみれならほぼ決まりですよ」

「そこは調べたのか」

「調べたいのは山々ですけど、下手に探りを入れてこちらの存在に気づかれるのも良くないかなって。一度軽く探りを入れたかったけど、なんの準備もないうちに動くのは悪手かなって。ちゃんと連携した上で行動しないと二度手間になるうえに犠牲が増える」

天元は遠夜の話聞きながら頭の中で情報を整理し、今後の方針を組み立てる。

現在潜入してる炭治郎、善逸、伊之助の三人の話を聞く限り鬼らしい情報は得られていない。潜入したてで仕事をこなす事で手一杯な部分もあるだろうが、それを抜きにしても鬼は姿を隠すのが上手い。

色々噂に出る京極屋とときと屋に潜入させていた嫁から連絡は途絶えた以上、この

二つの店に何かがあるとは思ったが、内部事情は街の人からは聞けず、店の人間は口を閉ざしてしまつたため探れなかつたが、遠夜が色々情報を集めてきたおかげで京極屋にほぼ当たりをつけていいことが確定した。

だが仮に京極屋に乗り込むとして、あの三人を連れて行くかどうかで天元は悩む。あの三人は才能があり、このまま経験を積めば柱に至れるほどの才覚を秘めていると天元は考えている。だがまだ上弦と戦えるほどの実力は無い。それほどの才能を持つ者をこのままみすみす死地に連れて行つていいのだろうか、と。

「…とりあえず、あの三人は帰らせる」

数瞬間悩んだ後、天元はそう判断した。

「へえ」

「俺らでも危ねえ相手だ。あいつらをみすみす死なせるわけにはいかねえ」

元々天元の任務であり、あの三人は半ば巻き込まれる形でこの任務に参加している。わざわざ危険な目に遭わせる必要はないと天元は考えた。

そんな天元の言葉に遠夜は皮肉げに笑う。

「…なんだ、地味に腹立つなその笑い。なんか文句あんのか」

「いや、あんたの判断に従うさ。別段文句も無いしね。でもわざわざ気い使うなんて、案外優しいよね天元さん」

「お前に言われても嬉しくねえよ」

「いやさ、返す事には反対しないけど、それを素直に聞く連中だと思う？伊之助は猪突猛進馬鹿だし、善逸は女性が危険なら怖がりながらも戦う。加えて炭治郎は超絶お人好し。絶対ごねると思うけど」

「む……」

そう言われるとそう思える。実際あの三人は形は違うが皆お人好しだ。故に人が危険な時に見捨てられるような心は持っていない。それがわかるため天元は遠夜の言葉に口をつぐむ。

「ま、次に連絡きた時に言ってみたらどうですかい。どーせ、反発するだろうけど」

「だが危険だ」

「そんなのあいつらもわかってて来てるでしょうに。ま、好きにしてください。俺はどちらでもいい」

天元がどう返すかを悩んでいると、遠夜は天元に向き直り言った。

「一応言っておきますが、俺としてはあいつらにはいて欲しい。きつと助けになるから」

「……………」

「んじゃ、もうちよい調べてきますわ」

そう言つて遠夜は姿を消す。

一人になつた天元は空を見上げた。半月が空で輝いており、遊郭の光が星の光を見えなくさせる。

「お前、そんな目をしてたんだな。無道」

ずっと目隠しをしていたため、天元は遠夜の目を見るのが初めてだった。正直もつと濁つた目をしているのかと思いきや、思いの外澄んだ瞳をしており、少しだけ驚いた。

だがそれ以上に抉られた痕が残る左目の紅い瞳に目が行つた。鬼と同じ色だったが、それが人の目であることはわかつた。

「…チツ」

何故かはわからないが、遠夜のあの目が異様に腹立たしく思えて天元は一人舌打ちをした。